

小原遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 8 —

1991. 3

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

題字：永礼達造津山市長

小原遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 8 —

1991. 3

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

序

小原遺跡は津山中核工業団地造成に伴い発掘調査された遺跡であります。

本工業団地の調査では開発と保存に対し、かなり糺余曲折がございましたが、お陰様で調査も無事終了し、報告書の刊行も順調に行われて來ております。本書はその第8集にあたる報告書であります。54haもの広大な敷地内には約10haにも及ぶ遺跡が存在し、4年もの歳月をかけて調査を行いました。結局、1古墳を緑地公園として保存し、他はすべて記録保存措置を講ずることになりました。そして、現在では本工業団地の工場誘地も順調に進み、新しく津山の中核的な役割を担って來ております。

本遺跡では、弥生時代の集落、古墳、窯址といったいくつかの時代の遺構が重複して検出されております。中でも弥生時代の集落につきましては、ほぼ全容が明らかとなり、美作地方の土器研究、集落研究に貴重な資料を提供してくれるものと確信いたしております。

ここにささやかではございますが情報をいちはやく公表したいという立場から報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大なるご協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成3年3月31日

津山市教育委員会

教育長 萩原賢二

例　　言

1. 本書は津山中核工業団地造成に伴う小原遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡がある。これを第1～9集までの9冊の報告書にまとめて刊行中で、現在までに5冊が刊行済である。本書は第6冊目で、津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告第8集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山市教育委員会文化課主事行田裕美、保田義治、小郷利幸、事務員木村祐子が担当した。
1. 本書は執筆は行田裕美、小郷利幸、木村祐子が担当した。分担は次のとおりである。
I, II, III 2(1)・(2)・(4), III 3(1)の住居址 1～3・建物址 1, III 3(2)の 1～3 号墳・土壙墓 1・2, IV 1(1), IV 2(1)………行田 III 1, III 4(1)・(2), IV 1(2)………木村 III 2(3), III 3(1)の住居址 4・段状遺構 1・2, III 3(2) 4号墳, III 3(3), III 4(3), IV 2(2)………小郷
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 遺物整理には、杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子、岩本えり子、家元博子の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センターに保管している。
1. 本書には挿図等に遺構の略称を用いている。略称名は次のとおりである。
S H：住居址、S B：建物址、S T：段状遺構、S G：土壙墓、S K：土壙、S D：溝
S A：柵列、S O：窯址、S X：配石遺構
1. A地区のコンタ図に、0、-1、-2の数字がある。これは標高を移動する前の仮原点であり、0が141.715mを表わす。

本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地内の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	小原遺跡	9
1	位置と立地	9
2	調査の経過	9
(1)	調査に至る経過	9
(2)	A地区の調査経過	9
(3)	B地区の調査経過	9
(4)	調査体制	12
3	A地区的調査の記録	12
(1)	弥生時代	12
(2)	古墳時代	18
(3)	その他	32
4	B地区的調査の記録	37
(1)	弥生時代	37
(2)	古墳時代	116
(3)	その他	117
IV	まとめ	125
1	弥生時代	
(1)	A地区の弥生時代集落の時期について	125
(2)	B地区の弥生時代集落と時期について	125
2	古墳時代	
(1)	古墳の築造時期と若干の考察	134
(2)	窯址及び鉄滓出土の土壙墓について	137

挿図目次

第1図 津山市位置図	1	第31図 2号墳出土遺物	25
第2図 津山中核工業団地位置図	2	第32図 2号墳第2主体部平面・断面図	26
第3図 第I・II期工事区分図	2	第33図 2号墳第3主体部平面・断面図	27
第4図 周知の遺跡分布図	2	第34図 3号墳平面・断面図	27
第5図 調査前航空写真	3	第35図 3号墳出土遺物	27
第6図 トレンチ設定状況航空写真	3	第36図 3号墳主体部平面・断面図	28
第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図	4	第37図 4号墳平面・断面図	29
第8図 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要 遺跡分布図	7	第38図 4号墳出土遺物	29
第9図 小原遺跡地形測量図及びグリッド設 定図	10	第39図 土壙墓1平面・断面図	29
第10図 A地区遺構配置図	11	第40図 土壙墓2平面・断面図	30
第11図 住居址1平面・断面図	13	第41図 土壙墓2出土遺物	31
第12図 住居址1出土遺物	14	第42図 窯址窯内検出状況平面・断面図	33
第13図 住居址2、建物址1平面・断面図	14	第43図 窯址平面・断面図	34
第14図 住居址2出土遺物	15	第44図 窯址土層断面図	35
第15図 住居址3平面・断面図	15	第45図 窯址煙道平面・断面図	35
第16図 住居址3出土遺物	16	第46図 窯址出土遺物	36
第17図 住居址4平面・断面図	16	第47図 土壙1・2平面・断面図	36
第18図 住居址4出土遺物	17	第48図 B地区遺構配置図	38
第19図 段状遺構1平面・断面図	17	第49図 住居址1平面・断面図	39
第20図 段状遺構2平面・断面図	18	第50図 住居址1出土土器	40
第21図 1・2号墳調査前地形測量図	18	第51図 住居址2・3平面・断面図	42
第22図 1～4号墳位置図	19	第52図 住居址2出土土器	43
第23図 1号墳平面・断面図	20	第53図 住居址2出土石器	43
第24図 1号墳第1主体部平面・断面図	21	第54図 住居址3出土土器(1)	45
第25図 1号墳第1主体部平面図	22	第55図 住居址3出土土器(2)	46
第26図 1号墳第2主体部平面・断面図	22	第56図 住居址3出土石器	46
第27図 1号墳出土遺物	23	第57図 住居址4平面・断面図	48
第28図 2号墳平面・断面図	24	第58図 住居址4出土土器	49
第29図 2号墳第1主体部出土遺物	24	第59図 住居址5平面・断面図	50
第30図 2号墳第1主体部平面・断面図	25	第60図 住居址5出土土器(1)	51
		第61図 住居址5出土土器(2)	52
		第62図 住居址5出土石器	53

第63図	住居址 6 平面・断面図	55	第99図	段状遺構12出土土器	78
第64図	住居址 6 出土土器	56	第100図	段状遺構13、土壤 5 平面・断面図	79
第65図	住居址 6 出土石器	56	第101図	段状遺構13出土土器	79
第66図	住居址 7 平面・断面図	57	第102図	段状遺構14・15、土壤 7 平面・断面図	80
第67図	住居址 7 出土土器	58	第103図	段状遺構14出土土器	80
第68図	住居址 7 出土石器	58	第104図	段状遺構15出土土器	81
第69図	住居址 8 平面・断面図	59	第105図	段状遺構16平面・断面図	81
第70図	住居址 8 出土土器	59	第106図	段状遺構16出土土器	81
第71図	出土鉄器	59	第107図	段状遺構17平面・断面図	82
第72図	住居址 9 平面・断面図	61	第108図	段状遺構17出土土器	82
第73図	住居址 9 出土土器(1)	62	第109図	段状遺構18平面・断面図	82
第74図	住居址 9 出土土器(2)	63	第110図	段状遺構18出土土器	83
第75図	住居址 9 出土石器	64	第111図	段状遺構19、土壤14平面・断面図	84
第76図	住居址10平面・断面図	65	第112図	段状遺構19出土土器(1)	85
第77図	住居址10出土土器	66	第113図	段状遺構19出土土器(2)	86
第78図	住居址10出土石器	66	第114図	段状遺構20平面・断面図	87
第79図	住居址11平面・断面図	67	第115図	段状遺構21平面・断面図	87
第80図	住居址11出土土器	67	第116図	段状遺構21出土土器	87
第81図	住居址12平面・断面図	68	第117図	段状遺構22平面・断面図	88
第82図	住居址12出土土器	69	第118図	段状遺構23平面・断面図	88
第83図	住居址12出土石器	69	第119図	段状遺構23出土土器	88
第84図	段状遺構 1 平面・断面図	70	第120図	段状遺構24平面・断面図	89
第85図	段状遺構 1 出土土器	70	第121図	段状遺構24出土土器	90
第86図	段状遺構 2 平面・断面図	71	第122図	段状遺構25平面・断面図	91
第87図	段状遺構 2 出土土器	71	第123図	段状遺構25出土土器	91
第88図	段状遺構 3 平面・断面図	72	第124図	段状遺構26平面・断面図	91
第89図	段状遺構 3 出土土器	72	第125図	段状遺構27平面・断面図	92
第90図	段状遺構 4 ~ 8 平面・断面図	73	第126図	段状遺構27出土土器	93
第91図	段状遺構 4 出土土器	75	第127図	段状遺構28平面・断面図	93
第92図	段状遺構 6 出土土器	76	第128図	段状遺構29平面・断面図	94
第93図	段状遺構 8 出土土器	76	第129図	段状遺構29出土土器	94
第94図	段状遺構 9 平面・断面図	77	第130図	建物址 1、柵列状遺構 2 平面・断面図	95
第95図	段状遺構 9 出土土器	77	第131図	建物址 2 平面・断面図	95
第96図	段状遺構10平面・断面図	77	第132図	建物址 3 平面・断面図	96
第97図	段状遺構11平面・断面図	78	第133図	建物址 3 出土土器	96
第98図	段状遺構12、溝状遺構 1 平面・断面図	78	第134図	土壤墓 1 平面・断面図	96

第135図 土壙墓1出土土器	96	第165図 柵列状遺構5平面・断面図	112
第136図 土壙墓2平面・断面図	97	第166図 柵列状遺構6平面・断面図	112
第137図 土壙墓2出土土器	98	第167図 柵列状遺構出土土器	113
第138図 土壙1平面・断面図	99	第168図 溝状遺構1出土土器	113
第139図 土壙1出土土器	98	第170図 遺構に伴わない土器(1)	114
第140図 土壙2平面・断面図	99	第171図 遺構に伴わない土器(2)	115
第141図 土壙2出土土器	98	第172図 遺構に伴わない石器	116
第142図 土壙3平面・断面図	100	第173図 土壙墓3平面・断面図	117
第143図 土壙3出土土器	101	第174図 土壙墓3出土土器	117
第144図 土壙4平面・断面図	102	第175図 窯址1窯内検出状況平面図及び煙道 断面図	118
第145図 土壙4出土土器	103	第176図 窯址1平面・断面図	119
第146図 土壙5出土土器	104	第177図 窯址1土層断面図	120
第147図 土壙6平面・断面図	105	第178図 窯址1煙道平面・断面図	120
第148図 土壙6出土土器	105	第179図 窯址1出土遺物	121
第149図 土壙7出土土器	106	第180図 窯址2周辺地形測量図	121
第150図 土壙8平面・断面図	106	第181図 窯址2窯内検出状況平面・断面図 及び土層断面図	122
第151図 土壙8出土土器	107	第182図 窯址2平面・断面図	123
第152図 土壙9平面・断面図	108	第183図 窯2出土遺物	123
第153図 土壙9出土土器	108	第184図 配石遺構平面・断面図	124
第154図 土壙10平面・断面図	109	第185図 土壙15平面・断面図	124
第155図 土壙10出土土器	109	第186図 B地区I・II期弥生土器分類図	126
第156図 土壙11平面・断面図	109	第187図 住居址2・3切り合い状況図	128
第157図 土壙11出土土器	110	第188図 住居址5・6位置関係図	128
第158図 土壙12平面・断面図	110	第189図 B地区住居変遷図	129
第159図 土壙12出土土器	110	第190図 B地区集落時期別配置図(1)	130
第160図 土壙13平面・断面図	111	第191図 B地区集落時期別配置図(2)	131
第161図 土壙13出土土器	111	第192図 B地区集落時期別配置図(3)	132
第162図 柵列状遺構1平面・断面図	111	第193図 小原1~3号墳と周辺古墳分布図	135
第163図 柵列状遺構3平面・断面図	112		
第164図 柵列状遺構4平面・断面図	112		

表 目 次

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表	6
第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表	8
第3表 小原1~3号墳と周辺古墳比較対照表	135

図版目次

- 図版1－1 1号墳調査前風景（西から）
2 住居址1（南から）
- 図版2－1 住居址2（南東から）
2 住居址3（南西から）
- 図版3－1 住居址3（西から）
2 段状遺構1（南東から）
- 図版4－1 段状遺構2（南東から）
2 1～3号墳全景（北西から）
- 図版5－1 1号墳第1主体部（南から）
2 1号墳第1主体部（西から）
- 図版6－1 1号墳第2主体部遺物出土状況（南から）
2 2号墳第1主体部（西から）
- 図版7－1 2号墳第2主体部（西から）
2 2号墳第2主体部（北から）
- 図版8－1 3号墳第3主体部（東から）
2 3号墳（東から）
- 図版9－1 3号墳主体部（南から）
2 3号墳主体部（東から）
- 図版10－1 3号墳周溝遺物出土状態（北西から）
2 4号墳（南東から）
- 図版11－1 4号墳周溝遺物出土状態（南西から）
2 土壙墓2（東から）
- 図版12－1 土壙墓1（北から）
2 窯址（西から）
- 図版13－1 窯址（西から）
2 窯址天井壁出土状態（北から）
- 図版14－1 窯址天井壁出土状態（北から）
2 窯址（西から）
- 図版15－1 窯址煙道部から焚き口方向を望む
2 鉄滓出土状態（西から）
- 図版16－1 土壙1（南西から）
2 土壙2（南西から）
- 図版16－3 調査風景
- 図版17 A地区出土遺物(1)
- 図版18 A地区出土遺物(2)
- 図版19 A地区出土遺物(3)
- 図版20－1 住居址1（西から）
2 住居址2・3（西から）
- 図版21－1 住居址4（西から）
2 住居址5（北東から）
- 図版22－1 住居址6（東から）
2 住居址7（東から）
- 図版23－1 住居址8（北から）
2 住居址9（北から）
- 図版24－1 住居址10（北東から）
2 住居址11（西から）
- 図版25－1 住居址12（北東から）
2 建物址1、柵列状遺構2（南東から）
- 図版26－1 建物址2（東から）
2 建物址3（北から）
- 図版27－1 段状遺構1～3（南東から）
2 段状遺構4～8（南から）
- 図版28－1 段状遺構12、溝状遺構1（南東から）
2 段状遺構13、土壙5（北西から）
- 図版29－1 段状遺構14・15、土壙7（西から）
2 段状遺構18（西から）
- 図版30－1 段状遺構19（南から）
2 段状遺構19・20（北から）
- 図版31－1 段状遺構23・24、土壙10（北から）
2 段状遺構25（北から）
- 図版32－1 段状遺構27（北から）
2 段状遺構29（北東から）
- 図版33－1 土壙墓2（東から）
2 土壙1（南東から）

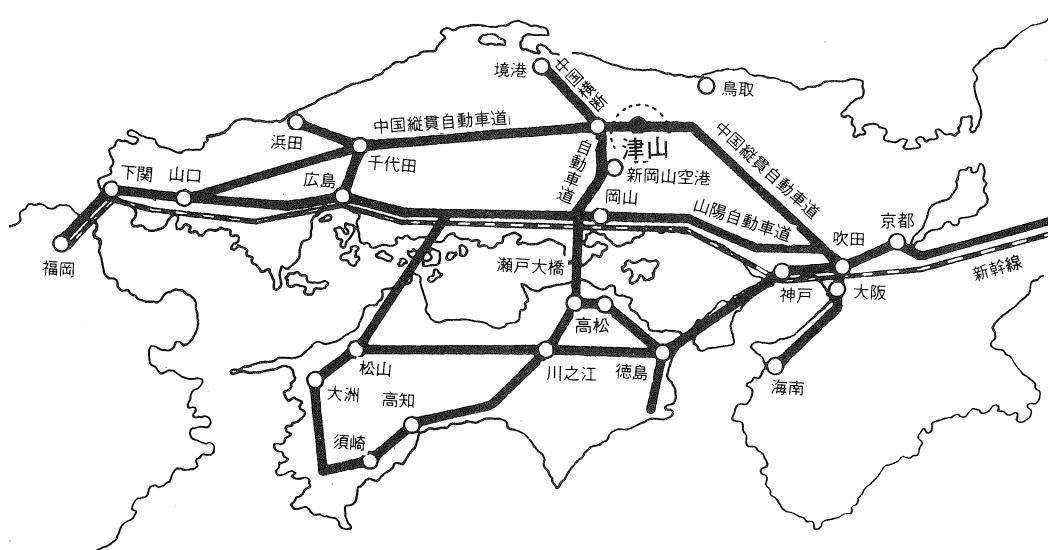
- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 図版34- 1 土壙 2 (南東から) | 図版40- 2 窯址 1 (西から) |
| 2 土壙 3・4・5 (東から) | 図版41- 1 窯址 1 (南から) |
| 図版35- 1 土壙 3 (南西から) | 2 窯址 1 煙道部 (東から) |
| 2 土壙 4 (南西から) | 図版42- 1 窯址 1 天井壁・炭出土状態 (東から) |
| 図版36- 1 土壙 6 (西から) | 2 窯址 2 (西から) |
| 2 土壙 8 (北から) | 図版43- 1 窯址 2 (西から) |
| 図版37- 1 土壙11 (西から) | 2 窯址 2 (東から) |
| 2 土壙12 (北から) | 図版44 B地区出土遺物(1) |
| 図版38- 1 土壙14 (北から) | 図版45 B地区出土遺物(2) |
| 2 土壙15 (北西から) | 図版46 B地区出土遺物(3) |
| 3 柵列状遺構 5・6 (北西から) | 図版47 B地区出土遺物(4) |
| 図版39- 1 土壙墓 3 (南から) | 図版48 B地区出土遺物(5) |
| 2 土壙墓 3 遺物出土状態 (西から) | 図版49 B地区出土遺物(6) |
| 図版40- 1 窯址 1 (東から) | |

I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の完成と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業再配置政策の本旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独自で対応することを決定し、



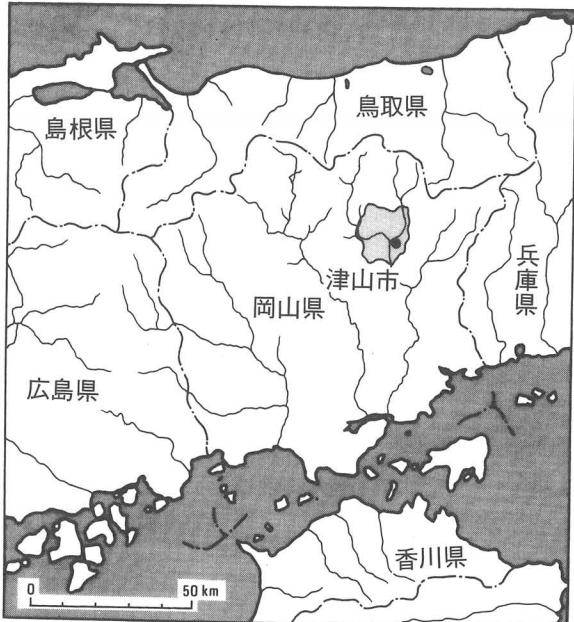
第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかつた地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなった。

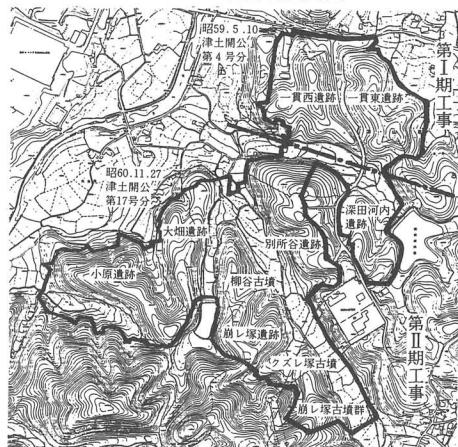
2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津工開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階（第3図）の第Ⅰ期工事部分約123,000m²に相当するものである。これを受け津山市教育委員会では地形的にみて、周知の遺跡（第4図）以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレンチを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日～7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がることが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

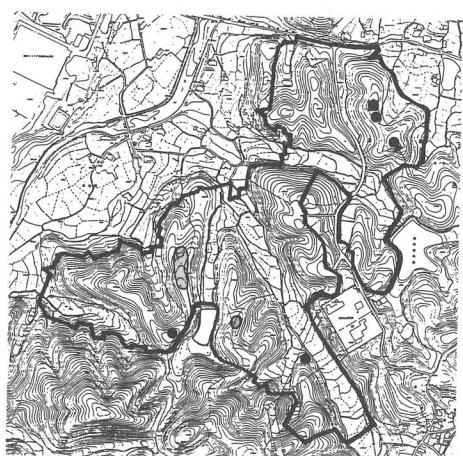
第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山市中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000m²である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることになった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真（北から）



第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畑遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

II 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）、方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畑遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 ($S = 1 : 10,000$)

に円墳4基（クズレ塚古墳、大畠1・2号墳、小原1号墳）を発見した。しかし、その後のトレンチによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

1 一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状遺構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状遺構、廐滓捨て場等がある。製鉄炉は後世の畠地造成のため遺存していなかった。

2 一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状遺構等により構成される。貯蔵穴は47基、土壙墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状遺構等がある。

3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状遺構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状遺構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状遺構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形堅穴住居状遺構1軒、建物址9棟、段状遺構等により構成される。奈良時代の段状遺構からは鐵滓が出土している。

5 崩レ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註1）。横穴式石室を主体部に持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礫群と共に縄文土器23点が出土した。

7 崩レ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窯状遺構3基よりなる。弥生時代中期の集落は

住居址3軒、長方形住居状遺構1軒、段状遺構等より構成される。

8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

9 大畠遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連遺構等によりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。他に土壙墓も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窯状遺構1基がある。

10 小原遺跡

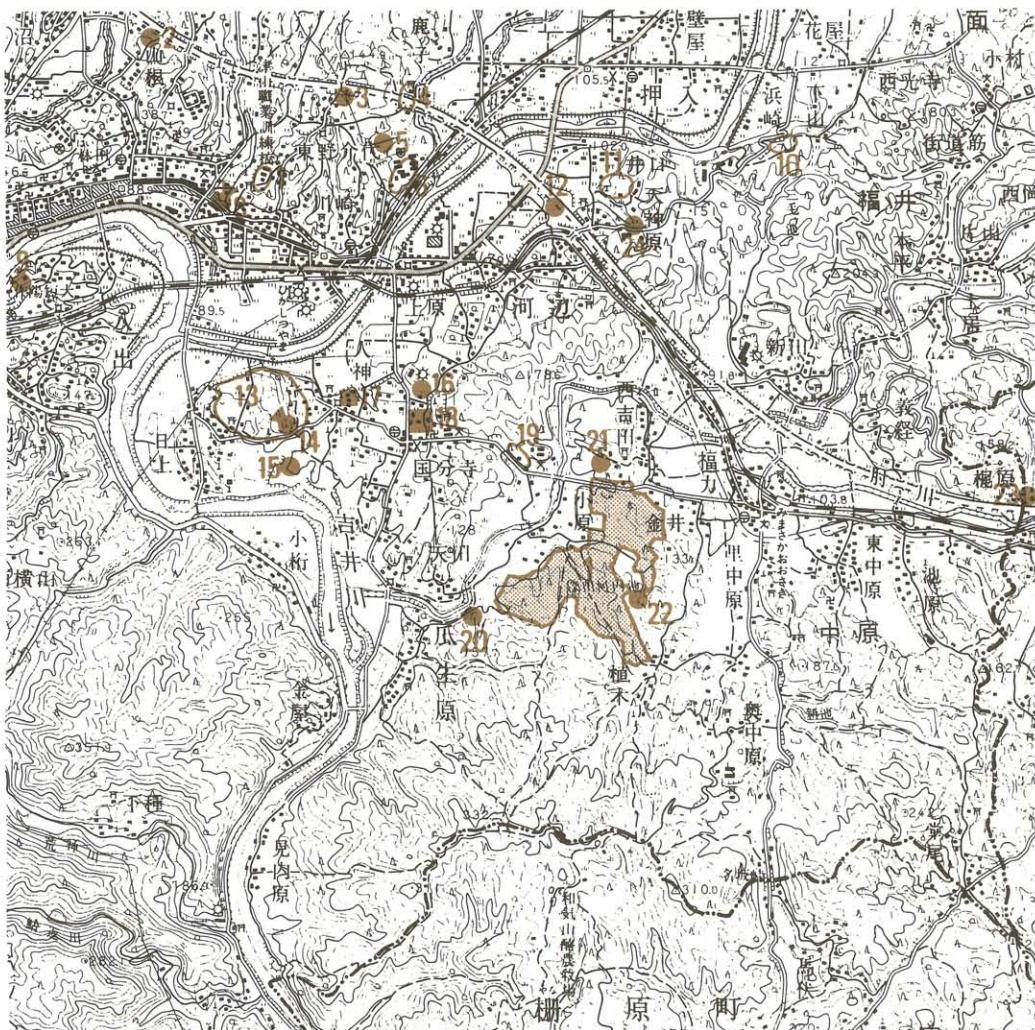
弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窯状遺構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴、段状遺構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壙、3号墳は石蓋土壙を主体部にもつ。4号墳は周溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製塩土器が伴出している。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定年度
1	一貫西遺跡	22,000m ²	S59 S61 11/26～5/26	行田 裕美	平成元年度(既刊) 津山中核工業団地埋文化財発掘調査報告3
2	一貫東遺跡	20,000m ²	S60 S61 3/7～12/2	湊 哲夫	平成3年度 9
3	深田河内遺跡	3,300m ²	S61 2/24～4/23、5/21～7/30	行田 裕美	昭和63年度(既刊) 2
4	別所谷遺跡	9,400m ²	S61 7/26～10/23	行田 裕美	平成4年度 6
5	崩レ塚古墳群	1,400m ²	S62 8/28～10/19	小郷 利幸	平成元年度(既刊)
6	クズレ塚古墳	200m ²	S62 8/4～11/6	小郷 利幸	4
7	崩レ塚遺跡	5,100m ²	S62 S63 10/7～1/30	保田 義治	平成元年度(既刊) 5
8	柳谷古墳	100m ²	S62 10/9～11/12	保田 義治	平成62年度(既刊) 1
9	大畠遺跡	18,000m ²	S61 10/24～12/23、S62 10/10～12/12 S62 4/1～10/6、S63 1/26～3/31	行田 裕美 小郷 利幸 保田 義治	平成4年度 7
10	小原遺跡	12,000m ²	S61 10/24～S62 4/4、S62 7/13～8/3 S62 10/6～S63 5/8	行田 裕美 小郷 利幸 木村 祐子	平成2年度 8

2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図 ($S = 1 : 25,000$)

- | | | |
|------------------|------------|-----------|
| 1 津山中核工業団地造成地内遺跡 | 2 野介代遺跡 | 3 押入西遺跡 |
| 4 押入飯網神社古墳群 | 5 狐塚遺跡 | 6 能満寺古墳群 |
| 7 六ツ塚古墳群 | 8 玉琳大塚古墳 | 9 視山遺跡 |
| 10 三毛ヶ池古墳群 | 11 車塚古墳群 | 12 天神原遺跡 |
| 13 故山古墳群 | 14 天王山古墳 | 15 和田古墳 |
| 16 飯塚古墳 | 17 美作国分尼寺跡 | 18 美作国分寺跡 |
| 19 長畠山古墳群 | 20 隠里古墳群 | 21 西吉田遺跡 |
| 22 金井別所遺跡 | 23 梶原遺跡 | 24 岡田遺跡 |

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内において最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上畠山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作国分寺、同国分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(註1) 渡辺健治「津山市植木ケズレ塚陶棺古墳」『古代吉備』第7集 1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡	
2. 野介代遺跡	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
3. 押入西遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4. 押入飯網神社古墳群	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯網神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973年
5. 狐塚遺跡	河本 清『狐塚遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集1974年
6. 能満寺古墳群	今井 堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代1972年
7. 六ツ塚古墳群	今井 堯『六ツ塚古墳群調査略報』津山市文化財調査略報3 1962年「六ツ塚古墳群」津山市文化財調査略報No 4 今井 堯『六ツ塚1号墳調査略報』津山市文化財調査略報7 1966年近藤義郎「岡山県津山市六ツ塚古墳群」『日本考古学年報15』1967年
8. 玉琳大塚古墳	今井 堯「津山市川崎玉琳大塚調査報告」津山市文化財調査略報第1集1960年
9. 観山遺跡	湊 哲夫『八出観山遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集1977年
10. 三毛ヶ池古墳群	
11. 車塚古墳群	「井口車塚古墳」『津山の文化財』1983年
12. 天神原遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』1975年
13. 畠山古墳群	「日上畠山古墳群」津山市埋蔵文化財調査略報No 4 今井 堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本4』中国・四国1970年「日上天王山古墳と畠山古墳群」『津山の文化財』1983年「日上天王山古墳と畠山古墳群」『津山の文化財』1983年
14. 天王山古墳	行田裕美『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集1981年
15. 和田古墳	「国分寺飯塚古墳」『津山の文化財』1983年
16. 飯塚古墳	湊 哲夫『美作国分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年
17. 美作国分尼寺跡	湊 哲夫・安川豊史・行田裕美『美作国分寺跡発掘調査報告』1980年
18. 美作国分寺跡	河本 清「美作考古学の現状と課題」『古代吉備』第2集1971年 今井 堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代1972年
19. 長畠山古墳群	渡辺健治「美作隠里箱石棺調査報告」『古代吉備』第2集1971年
20. 隠里古墳群	行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年
21. 西吉田遺跡	行田裕美・保田義治・小郷利幸『金井別所遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集1988年
22. 金井別所遺跡	田中 満・井上 弘『梶原遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1971年
23. 梶原遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊
24. 岡田遺跡	

III 小原遺跡

1 位置と立地

小原遺跡は津山市瓜生原980番地他に所在する。柵原町との行政区画を分かつ和気山から北へ樹枝状に派生した尾根は北に進むにつれ、より複雑な様相を呈している。すなわち尾根単位にさらに小支谷が乱方向に入り込み、独立丘陵状に呈すものが点在している。この丘陵一帯の西側は吉井川の支流である広戸川が南流し、沖積地が開けている。小原遺跡はこの広戸川を眼下に見下ろす西端の丘陵上に位置する。平野部との比高差は約40～50mを測る。

2 調査の経過

(1) 調査に至る経過

小原遺跡のうち、周知の遺跡は1号墳だけであった。1号墳の地形測量時に2号墳を確認し、古墳2基の遺跡として調査を開始した。表土除去作業中、弥生時代の住居址の存在が認められ、古墳以外にも弥生時代の集落が丘陵全域に拡がることが予測された。このため、バックホーを借り上げ表土剥ぎを実施した結果、遺跡は丘陵の中央部を除き、東側頂部の古墳の立地する地点と西側部分の地点の2ヶ所に立地することが判明した。前者をA地区、後者をB地区と呼称し調査を実施した。

(2) A地区の調査結果

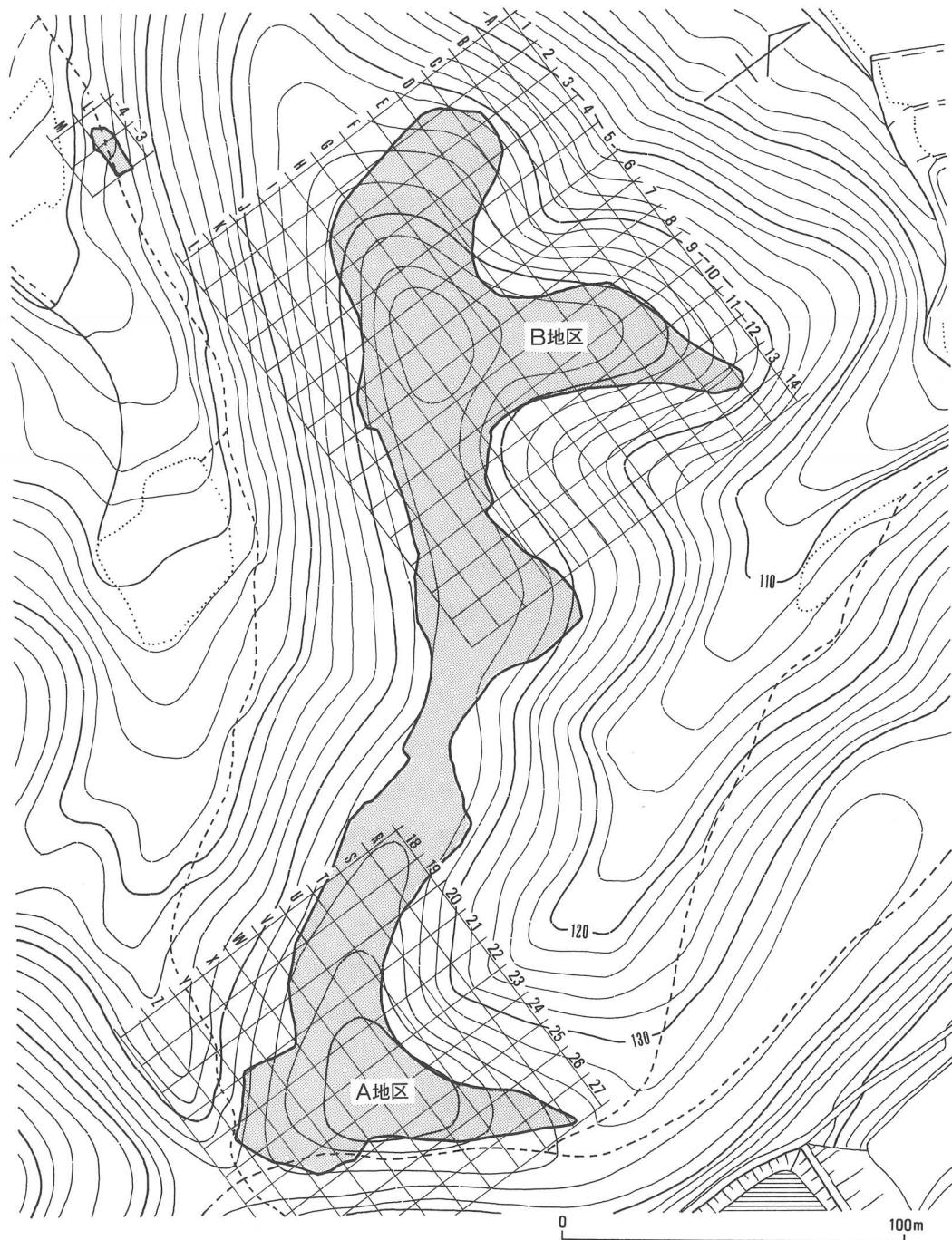
昭和61年12月24日から1号墳の地形測量を開始した。この時、前述のように西側にわずかな高まりを確認した。これが2号墳である。3・4号墳は盛土は全くなく確認するすべもなかつた。1・2号墳の表土を除去していく過程で3号墳、弥生時代の住居址、窯址等の存在が明らかとなり、昭和62年2月27、28日の両日バックホーを借り上げ全域の表土剥ぎを実施した。この結果、古墳3基、住居址3軒、窯址1基他が検出された。3月30日には窯址の実測を残して他の調査を終了した。3月31日から北接する大畠遺跡の調査を開始した。4月1日より、保田義治・小郷利幸が調査員として配属になり、4月14日まで窯址の実測を担当し、この範囲の調査を終了した。

工事の工程上、7月11日まで大畠遺跡の調査を継続したが、7月13日から再び小原遺跡の調査を開始した。新たに4号墳、住居址、段状遺構等が確認され、8月3日にはA地区の全ての調査を終了した。

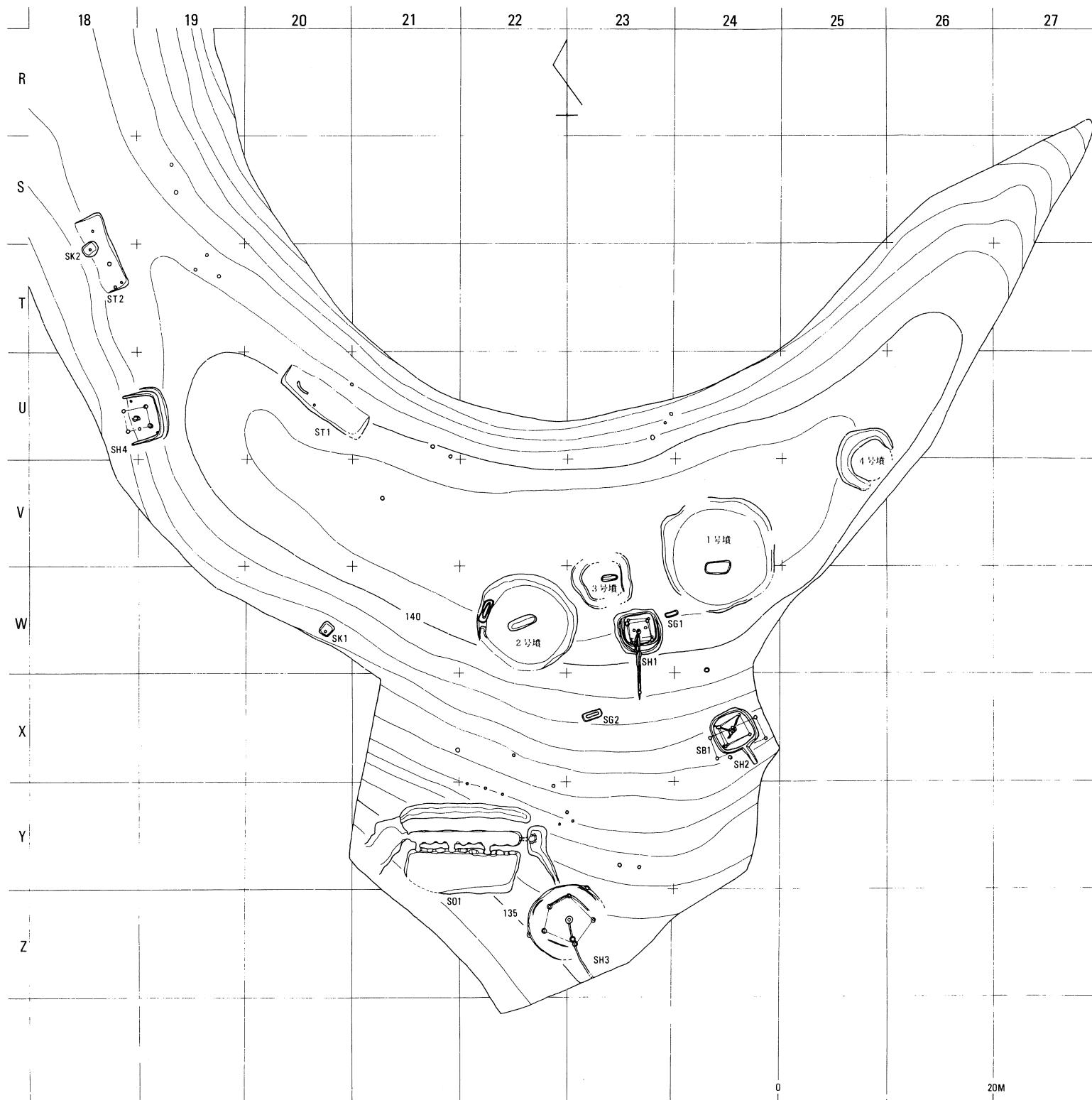
(3) B地区の調査経過

11月5日から着手した。あらかじめバックホーにより表土剥ぎを済ませておいたので、直接

遺構検出作業からはいることができた。11月10日からは大畠遺跡で工事用仮設道路造成中発見された窯址の調査も並行して行った。B地区の調査は丘陵の頂部から西側の先端部にかけて、10mのグリッド単位に進めていった。この結果、弥生時代の住居址、段状遺構、建物址、貯蔵穴等が検出され、かなりの規模の集落遺跡であることが確認された。昭和63年1月25日、西側



第9図 小原遺跡地形測量図及びグリッド設定図



第10図 A地区遺構配置図 ($S = 1 : 500$)

調査区外でやはり工事用仮設道路造成中に窯址（S O 2）が発見された。工事の工程上、先にこの窯址の調査を行い、再び弥生時代集落遺構の調査を継続した。3月30日からは調査区内の窯址（S O 1）の調査を開始し、5月8日には、小原遺跡の全調査を終了した。

本調査の終了をもって、津山中核工業団地内の全ての調査が終了した。

(4) 調査体制

発掘調査は津市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津市教育委員会 教育長 福島祐一（～H 1. 6. 30）

　　〃 萩原賢二（H 1. 7. 1～）

教育次長 藤田公男

文化課長 内田康雄（～S 63. 3. 31）

　　〃 須江尚志（S 63. 4. 1～）

文化係長 枝山三千穂

調査担当 主事 行田裕美

　　〃 保田義治（S 61. 4. 1～、職名は現職）

　　〃 小郷利幸（　　〃 　　〃 ）

事務員 木村祐子（S 63. 4. 1～、　　〃 ）

整理員 杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子

発掘作業員 稲垣光男、竜門安三、安藤敬子、稻垣幹子、神崎きみ江、衣笠宇多江、片山久子、小林篤子、下山章子、藤嶋雪子、下山艶子、竜門和子、小原正己、森康、藤島喜一、藤嶋律美、赤坂寅夫、稻谷正一、下山政夫、安藤猛、玉田昌伸、池口隆広、小林稔代、稻谷美恵、下山よし子、芦田露子、安藤栄、仁木康治

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げる次第である。

中山敏史、中山俊紀、鎌木義昌、亀田修一、稻田孝司、岡本東三、秀島貞康、伊藤晃、光永真一、白石純、近藤義郎、河本清、山本悦世、石坂俊郎、松岡かおり、船津昭雄、水内昌康、小谷善守、大沢正巳、吉田晶、安川豊史、田中清美、草原孝典

3 A地区の調査の記録

A地区は窯址と陥し穴と考えられている土壙を除くと弥生時代と古墳時代に大別される。弥生時代の遺構には住居址、建物址があることから、小規模ではあるが集落遺跡である。古墳時代は集落に関する遺構は全くなく、墳墓遺跡である。

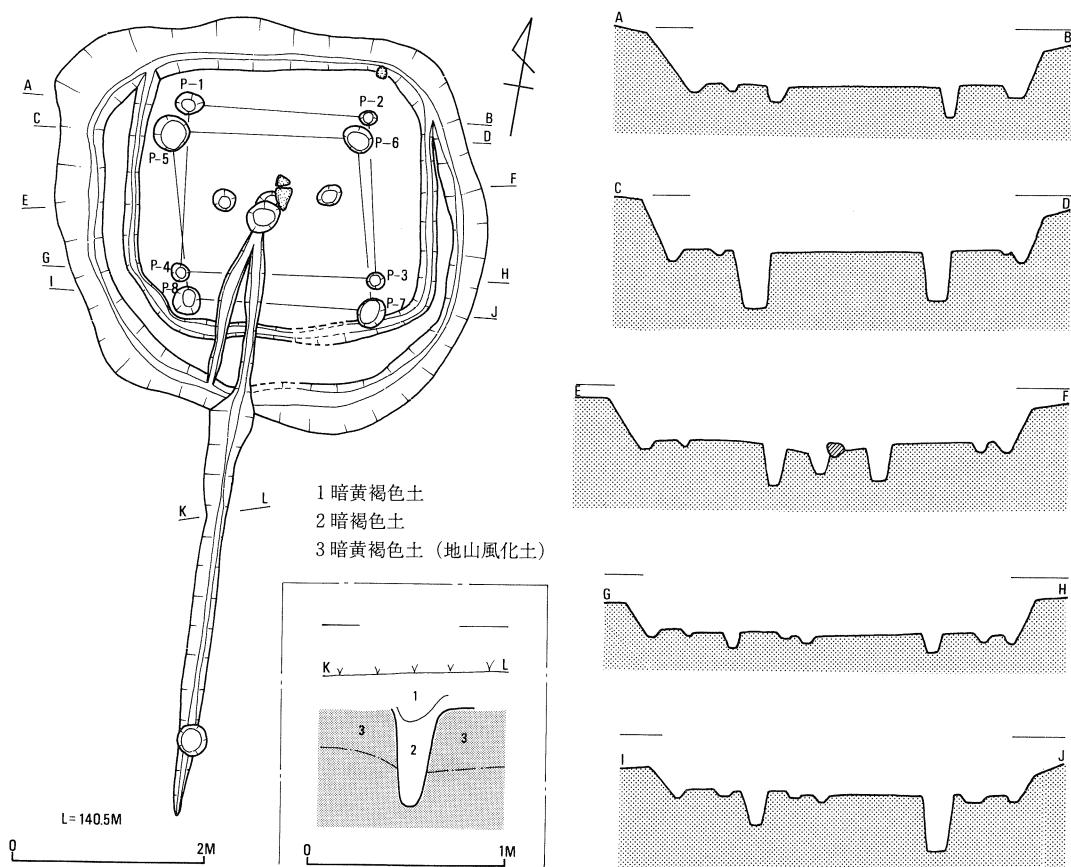
以下、各時期ごとに概略を述べることにする。

(1) 弥生時代

住居址 1 (第11・12図)

丘陵頂部のやや南寄りに位置する。一度拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居はP-1～P-4の4本柱で床面の東西辺約3m、南北辺2.7mを測る隅丸方形プランを呈す。中心部には深さ20cmを測る中央穴が位置する。さらに、中央穴の東西には深さ約40cmを測る小柱穴が検出された。中央穴から南方向に床溝が認められるが、住居外へは延びず、壁体溝でとまっている。住居の拡張は北壁だけを共有し、東、西、南の3方向に行われている。やはり4本柱でP-5～P-8が相当する。平面形は不整円形を呈する。床面の中央部には拡張前の中央穴を切って、新たに中央穴が位置する。中央穴からは南方向に床溝が走り、さらに住居外へと長く延びている。たまたま現地表面からの深さを知ることができた。70cmを測る深いものである。

遺物は埋土中より若干量が出土しただけである。第12図にあげたものが図示できるものすべてである。1は甕形土器口縁部である。端面には3条の凹線文がめぐる。2は高杯形土器脚部である。外面には横方向に櫛描直線文をめぐらせた後、等間隔に縦方向の櫛描直線文を施すことにより加飾している。

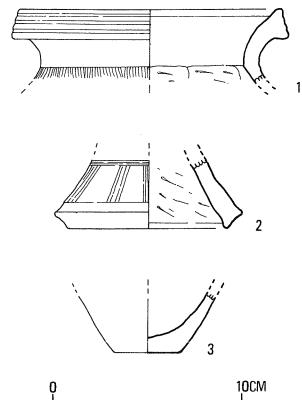


第11図 住居址 1 平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

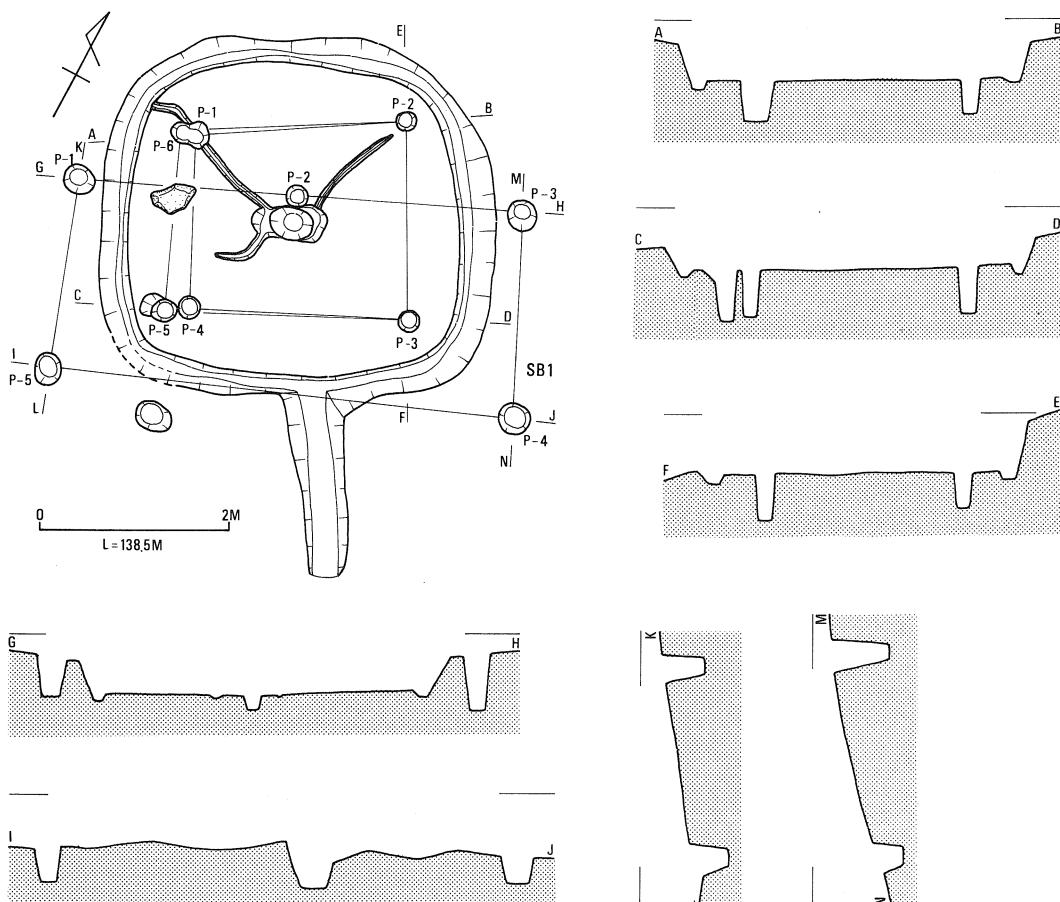
住居址 2 (第13・14図)

丘陵南斜面調査区の東端に位置する。隅丸方形の4本柱住居であり、P-1～P-4が相当する。P-1、P-4の柱だけが取り替えられており、P-5、P-6に新設されている。1辺3.2～3.5mを測る床面の中央部には中央穴が位置する。中央穴は二段に掘り込まれており、埋土は黒色を呈した粘質の灰層である。住居の斜面下位側には壁体溝から住居外へ溝が延びている。床面には中央穴から3方向に非常に浅い床溝が認められた。本住居に建物址1が重複して位置するが、新旧関係は住居の方が新しい。

遺物としては、弥生土器が若干量出土した。第14図が図示できるもののすべてである。1～4は甕形土器口縁部である。1・2・4のように口縁端面に凹線文をもつものと、3のようにもたないものの両者が認められる。端部についても上下に拡張するもの、上方だけのもの等がある。6～7は高杯形土器脚部である。7・8は杯部との間を円盤で充填するのに対し、6は



第12図 住居址 1 出土遺物

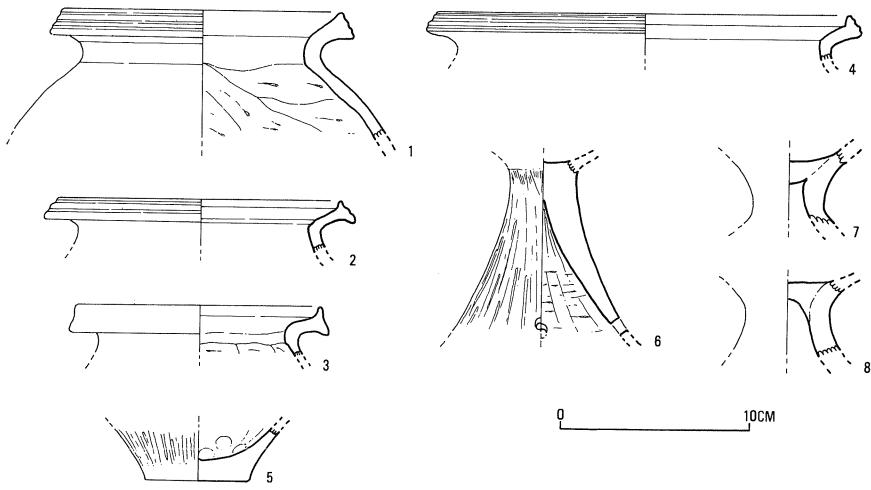


第13図 住居址 2、建物址 1 平面・断面図 (S = 1 : 80)

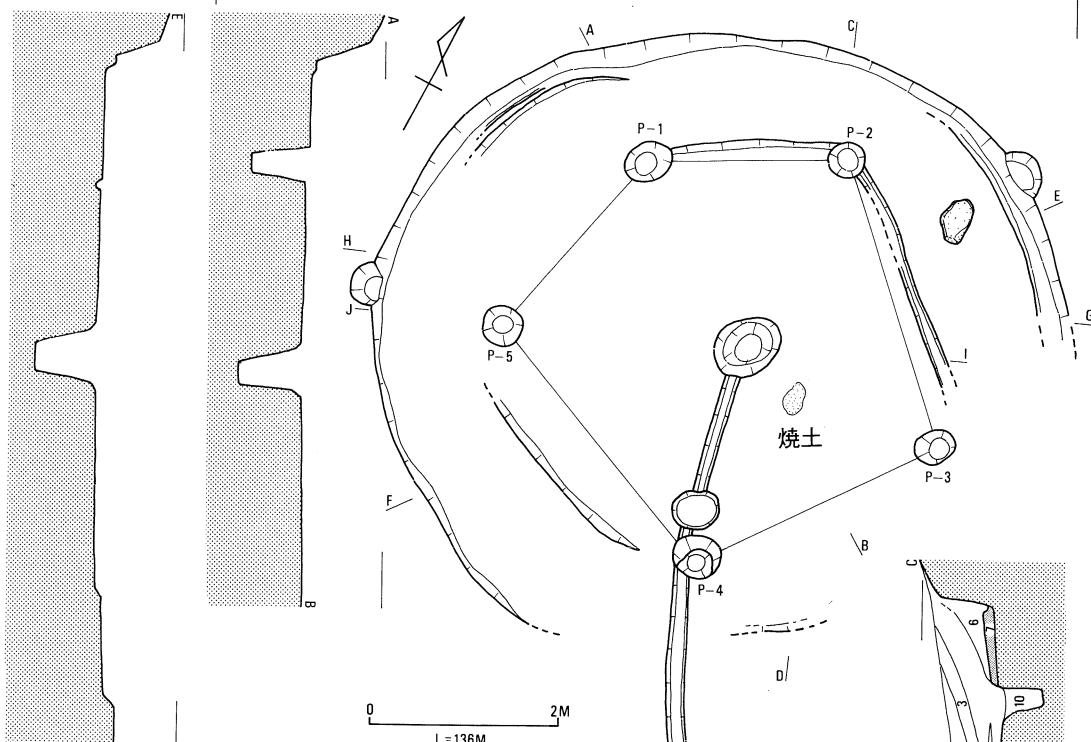
その手法は用
いす、杯部と
脚部の接合に
より行われて
いる。

**住居址 3 (第
15・16図)**

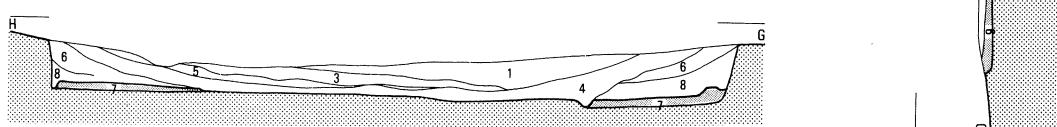
丘陵南斜面
最下位に位置
する。5本柱
で径6~6.5



第14図 住居址 2 出土遺物



- | | |
|--------|-------------|
| 1 暗褐色土 | 6 暗黄褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 7 黄褐色土(ベッド) |
| 3 黄褐色土 | 8 暗黄褐色土 |
| 4 黑色土 | 9 黑褐色土(ベッド) |
| 5 黑褐色土 | 10 暗黄褐色土 |



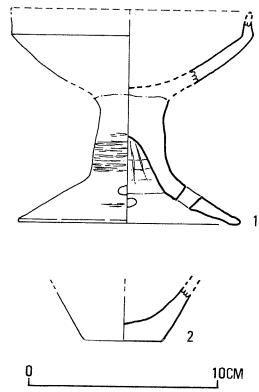
第15図 住居址 3 平面・断面図 (S = 1 : 80)

mを測る円形の大形住居である。中央穴を中心に放射状にP-1～P-5の柱穴を配し、柱穴を結んだ線から壁体溝へかけては一段高くなつたいわゆるベッド状を呈している。ベッドの高さは床面から約10cmと低く、盛土によって形成されている。中央穴から南方向に床溝が延び、さらに住居外へと連なっている。

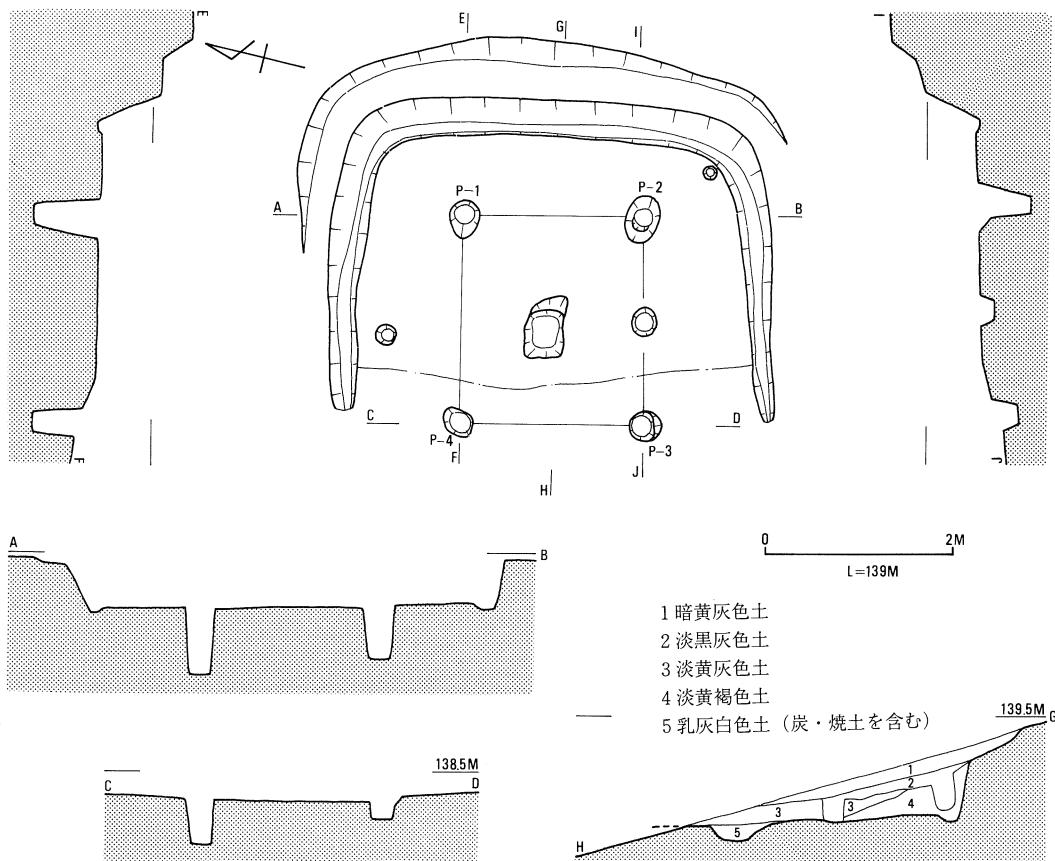
遺物は若干量の弥生土器が出土しただけである。第16図に図示した高杯形土器と壺形土器か甕形土器の底部の他は細片である。

住居址4（第17・18図）

住居址1～3とは西側に少し離れてU-18・19区の南西斜面に単独で位置する。一辺4.6cmの隅丸方形プランを呈するが、斜面下位側の辺は一部流出している。斜面上方には幅60cmの平坦面が付設されている。床面には壁に沿って壁体溝が「コ」の字形にめぐる。主柱穴は4本でP-1～P-4が相当し、ほぼ等間隔に各コーナーに配されている。深さは30～70cmを測る。中央穴は長方形状を呈し、埋土には炭粒や焼土が認められた。深さは20cmを測り、断面はゆるやかなU字形である。住居址埋土上層の土層断面では柱穴痕2個を検



第16図 住居址3出土遺物



第17図 住居址4平面・断面図 (S = 1 : 80)

出した。さらに、この層からは鉄滓が出土していることから住居廃棄後に別遺構が存在したものと考えられる。

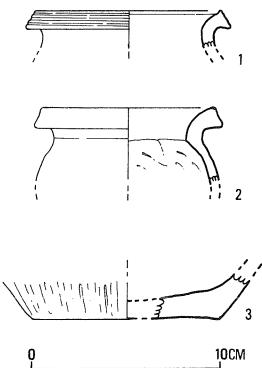
遺物としては若干量の弥生土器が出土しただけである。第18図に図示したものがそれである。1・2は小型の鉢形土器か台付鉢形土器の口縁部である。1は上下に拡張した口縁端面に凹線文がめぐる。外面には一部煤の付着が認められる。2の内面頸部下位はヘラ削りが施されている。3は壺形土器か甕形土器の底部である。

建物址1（第13図）

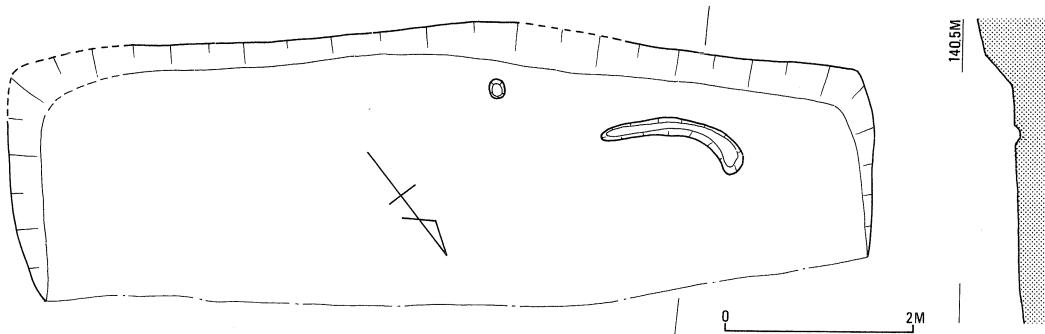
住居址2と重複して位置する。新旧関係は住居址2の方が新しい。梁間1間、桁行2間の建物である。南桁行中央柱穴は住居に切られ検出できなかった。梁間P-1～P-5の心々距離は2m、P-3～P-4は2.2m、桁行P-1～P-3は4.7m、P-4～P-5は5mをそれぞれ測る。各柱穴からの出土遺物はなかった。

段状遺構1（第19図）

U-20・21区北斜面に位置する。丘陵斜面を長さ約9m、幅約3mにわたり削平し、平坦面を形成している。壁に沿った溝や柱穴などは認められなかったが、壁から少し離れて長さ約1.5mの弧状の溝が検出された。埋土は上下2層で、上層は淡黒灰色、下層は乳灰白色で弥生土器片が若干量出土した。



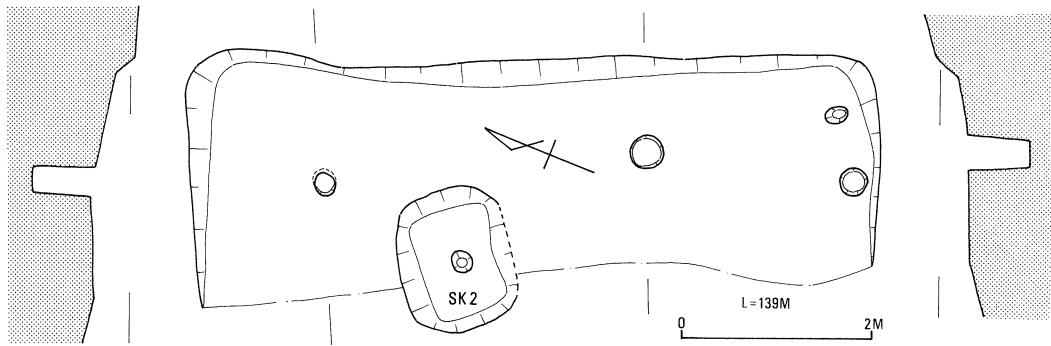
第18図 住居址4出土遺物



第19図 段状遺構1平面・断面図 (S=1:80)

段状遺構2（第20図）

丘陵南西斜面S・T-18区に位置する。丘陵斜面を削平し、長さ7.2m、幅2.4mを測る平坦面を形成している。壁に沿った溝は認められなかったが、床面にピットが4ヶ所検出された。埋土は上下2層で上層は淡黒灰色、下層は乳灰白色を呈す。下層から弥生土器片若干量が出土した。床面のやや北寄りに土壙2が重複して検出された。これは陥し穴と考えられている遺構で本遺構に先行するものと考えられる。



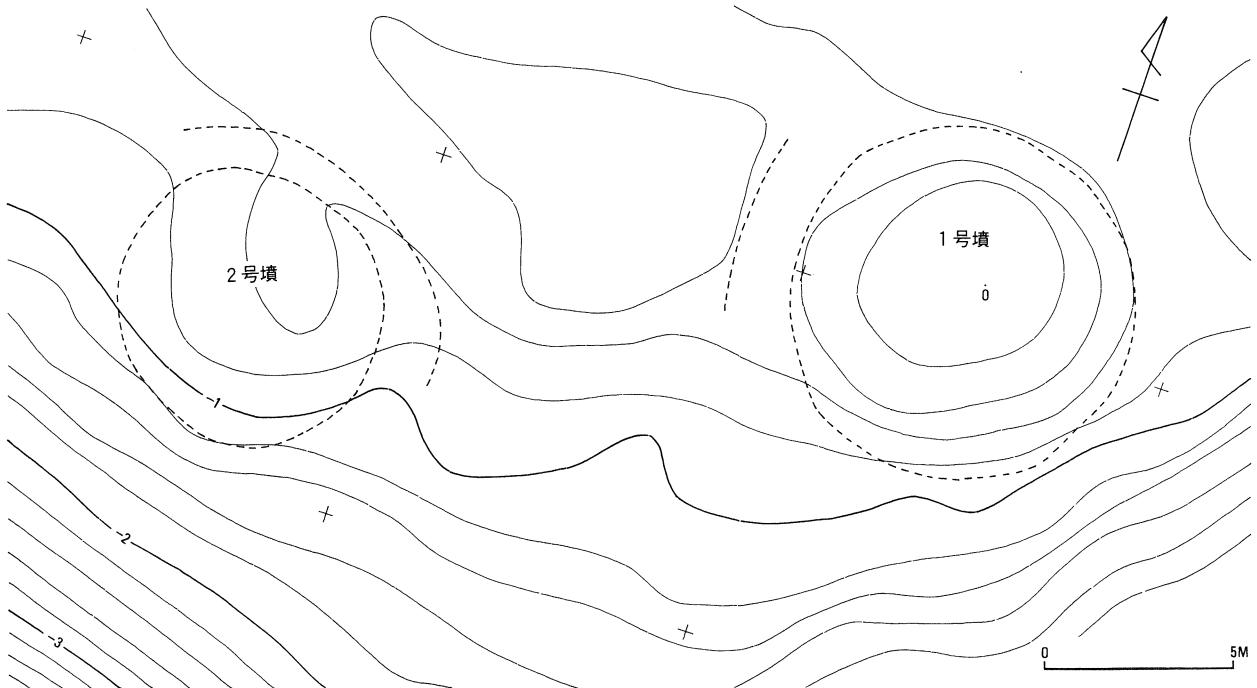
第20図 段状遺構 2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

(2) 古墳時代

前述したようにA地区の周知の遺跡は1号墳だけであった。しかし、現況地形測量作業の際、西側にわずかな高まりを確認したので(第21図)、古墳を想定して調査区を設定したところ、果して、古墳と判明し2号墳と命名した。さらに、1号墳と2号墳との間に3号墳の存在を確認した。最終的にバックホーで弥生集落の調査のため表土剥ぎを実施した際に、4号墳を検出し、計4基の古墳の存在が明らかになった(第22図)。

1号墳(第23~27図)

4基の古墳群中、最も規模の大きいものである。径9m、中央部での旧地表面からの高さ40cmを測る円墳である。非常に盛土の小規模な古墳である。古墳の周囲には浅い溝状の凹みがめ



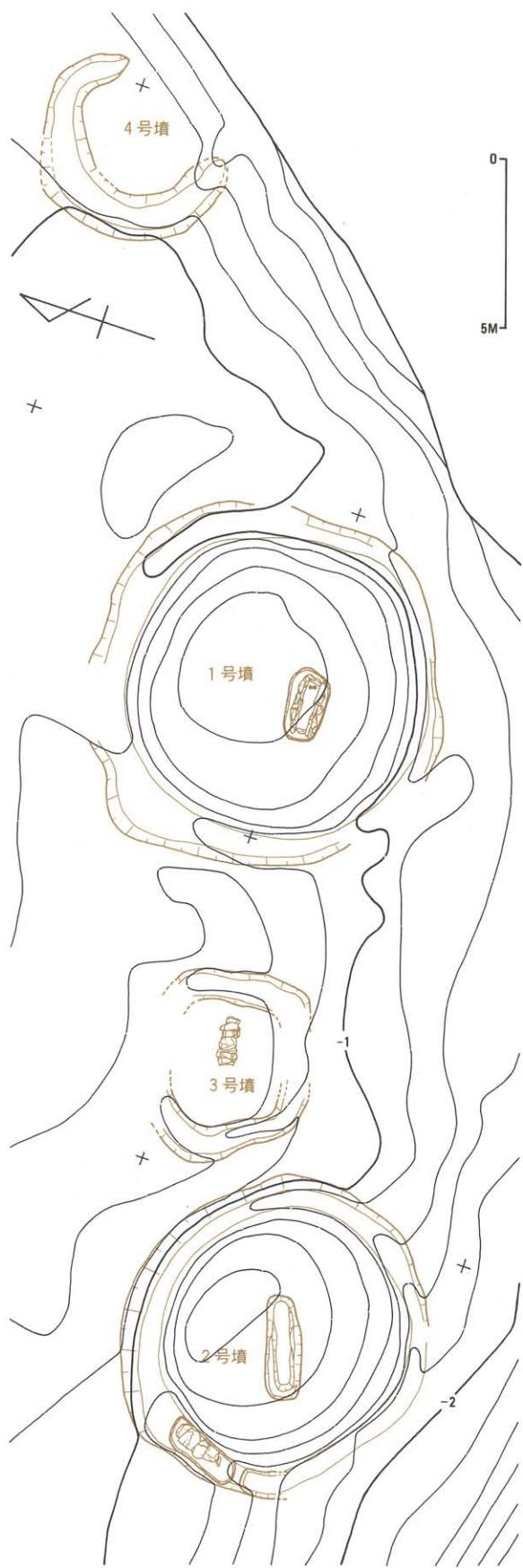
第21図 1・2号墳調査前地形測量図 ($S = 1 : 200$)

ぐるが、周溝といえるものではない。墳丘を築くための採土痕程度のものと考えられる。墳丘には中心からかなり南側によった場所に主軸を東西方向にむけた石室が検出された。さらに、南側墳端部から鉄器、玉、須恵器等がまとまって出土した。墓壙の掘り方は全くなく、遺物のみの出土であったが、遺物の出土状態から考えて埋葬主体と考えられた。従って前者を第1主体部、後者を第2主体部とすることにした。

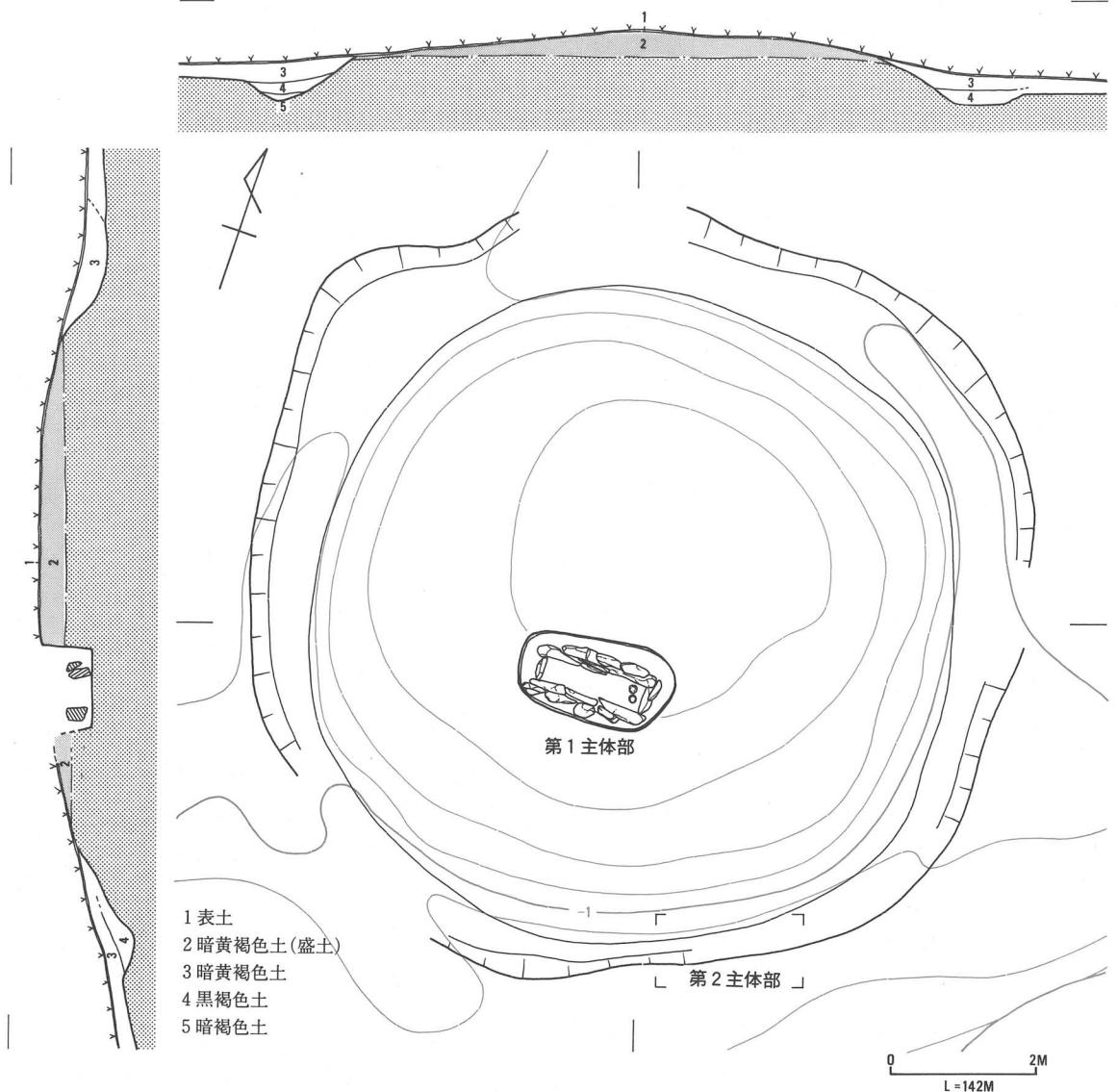
第1主体部(第24・25図)は長辺1.1m、短辺55cmの不整方形の掘り方に、箱式石棺状の石室を築いている。偏平な石を小口側に立て、これを狭むように側壁側に3枚の石を立てている。側壁外側にはさらにもう一列石を並べている。天井は4枚の扁平な石を並べ、各石と石の間にはもう1段置かれている。石と石のすき間は粘土で埋めている。床面には荒い砂利が敷き詰められていた。床面の幅は約35cm、長さは1.4mを測る。

遺物としては東小口側に須恵器杯身が伏せられて2個並んで出土しただけである。枕に転用されたものである。第27図1・2がそれである。両者とも須恵器杯身で計測値は全く同じで径12.3cm、高さ3.1cmを測る。受け部はやや上方に張り出し、やや内傾する立ち上がり部端部の内側はやや張り出し稜を形成している。底部外面は約2分の1ヘラケズリを施している。

第2主体部(第26図)は前述のように



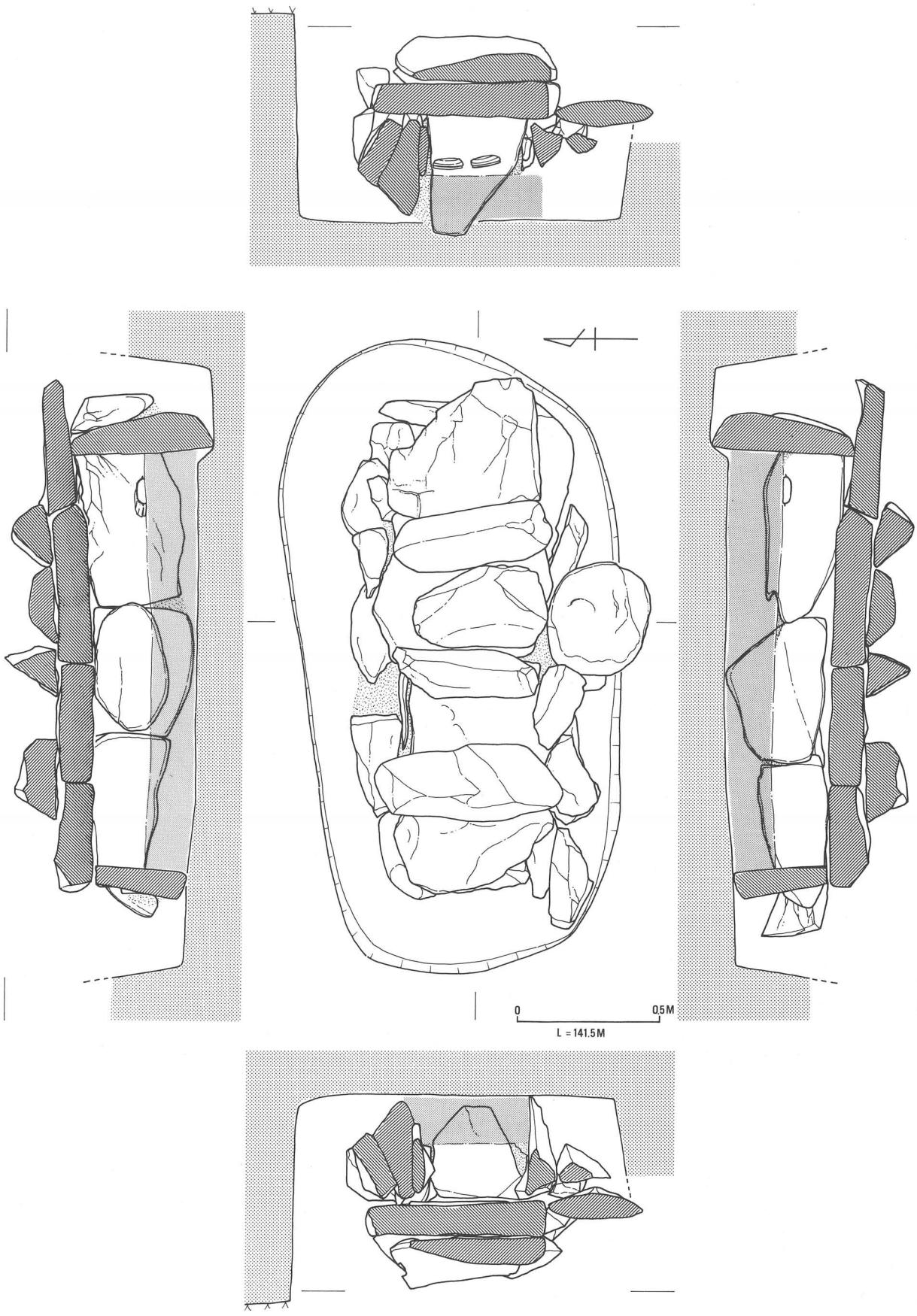
第22図 1～4号墳位置図 (S=1:200)



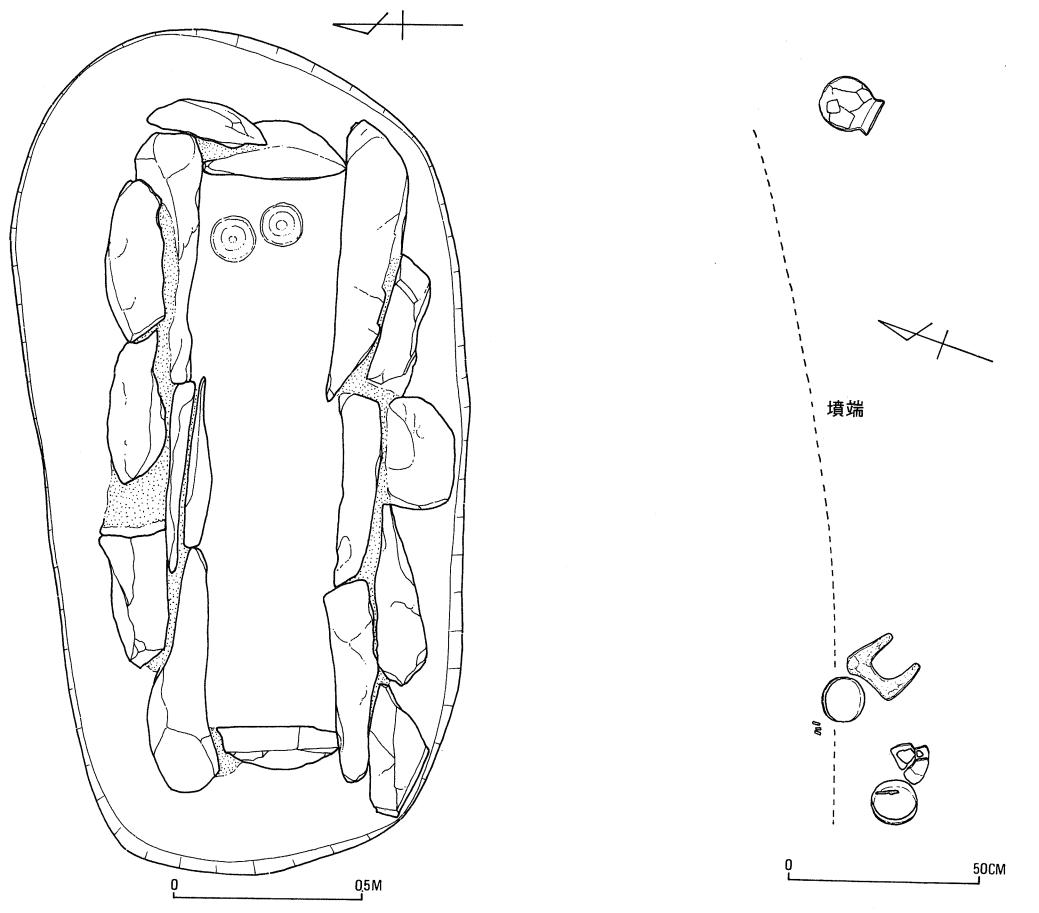
第23図 1号墳平面・断面図 ($S = 1 : 100$)

墓壙は検出されなかったが遺物の出土状態から断定した。すなわち墳丘の南側の墳端線に沿ってほぼ同一レベルで遺物が出土した。西側に鋤先、刀子、須恵器、製塩土器、管玉がまとまって出土し、東側に1.3m離れて土師器甕形土器が出土した。

第27図3~11がそれである。4・5の須恵器杯蓋は第1主体部の杯身とそれぞれセット関係になる。すなわち第27図1と5、2と4である。3は土師器甕形土器である。口径10cm、器高12.5cmと小型のものである。6は製塩土器である。口縁部平面径は不整五角形を呈し、外面にはタタキ、内面には指頭圧痕がみられる。胎土には砂粒を多量に含みザラザラした感じをうける。7~9は軟色の緑色凝灰岩製管玉である。いずれもかなり風化が進んでおりトロトロの状態である。10は刃部の大半、茎部の先端を欠くが刀子である。11は鋤先である。木製の鋤先部



第24図 1号墳第1主体部平面・断面図 ($S = 1 : 20$)

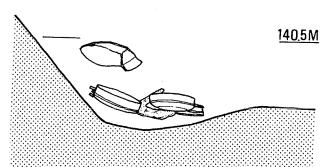


第25図 1号墳第1主体部平面図 (S = 1 : 20)

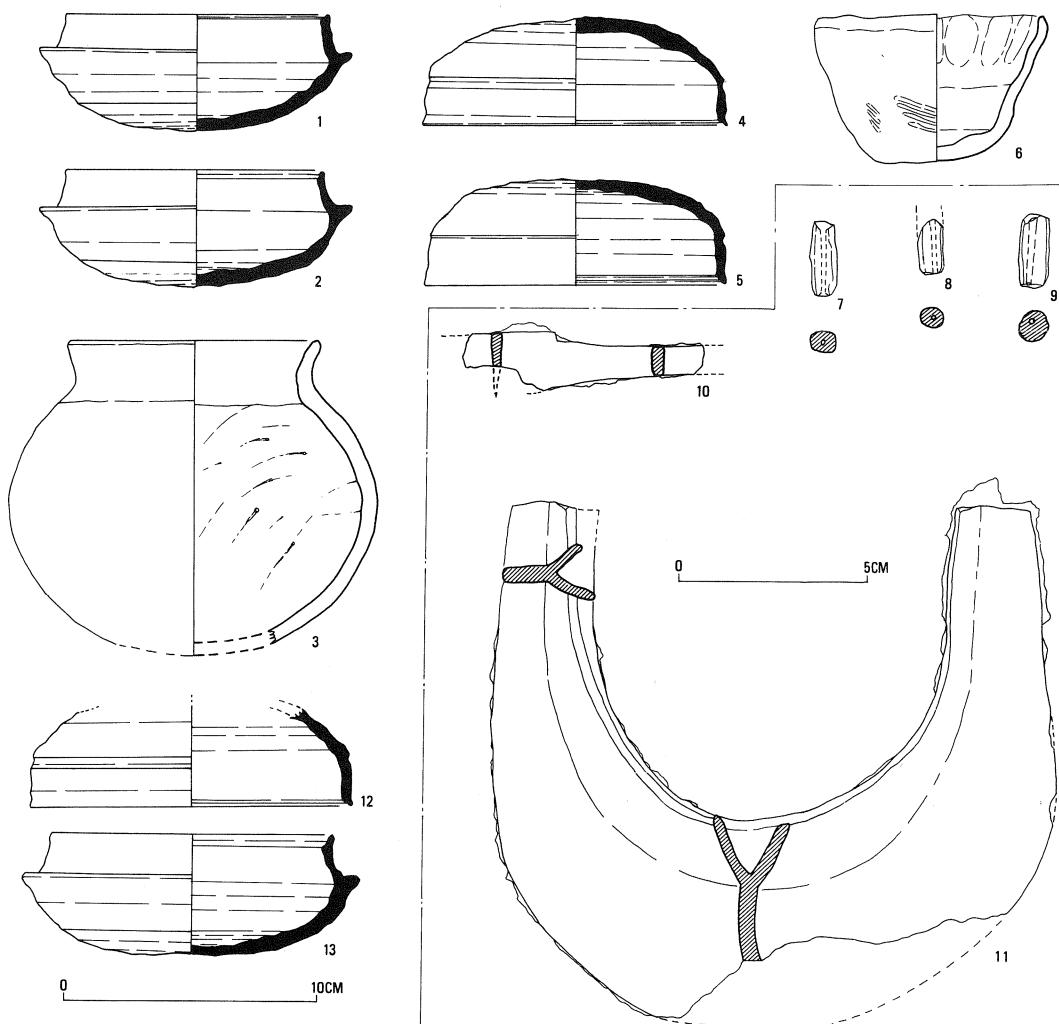
が挿入されるV字形のえぐりが内側にめぐっている。かなり使用されたものらしく、先端の一部が欠損している。遺存状態は極めてよい。12・13は墳丘表土除去中に出土したものである。
2号墳 (第28~33図)

1号墳に次ぐ規模をもつ。径7.6m、中央部での旧地表面からの高さは約30cmを測る。墳丘のほぼ中央部に主軸を東西方向にむけた第1主体部が位置する。墳丘の周囲には南側を除き現地表面からの深さ50cmを測る周溝がめぐる。その周溝の西側部分に石蓋土壙墓の第2主体部、土壙墓の第3主体部が検出された。

第1主体部 (第30図) は石室をもたない。いわゆる木棺直葬である。最初に幅約1m、長さ約3mの長方形に約45cm掘り込み、そこからさらに幅約60cm、長さ2.7mの長方形に約30cm掘り込んだ2段掘りの墓擴である。床面の東寄りの部分から須恵器杯身と蓋が伏せられた状況で2個並んで出土した。枕に転用されたものである。第31図1・2がそれである。口径、器高等の計測値、形態等1号墳出土のものに類似している。どちらも内面には赤色顔料の付着が顯著に認められた。さらに、この須恵器の周辺からは滑石製の玉が出土した。玉は最も大きいもの



第26図 1号墳第2主体部平面
・断面図 (S = 1 : 20)



第27図 1号墳出土遺物

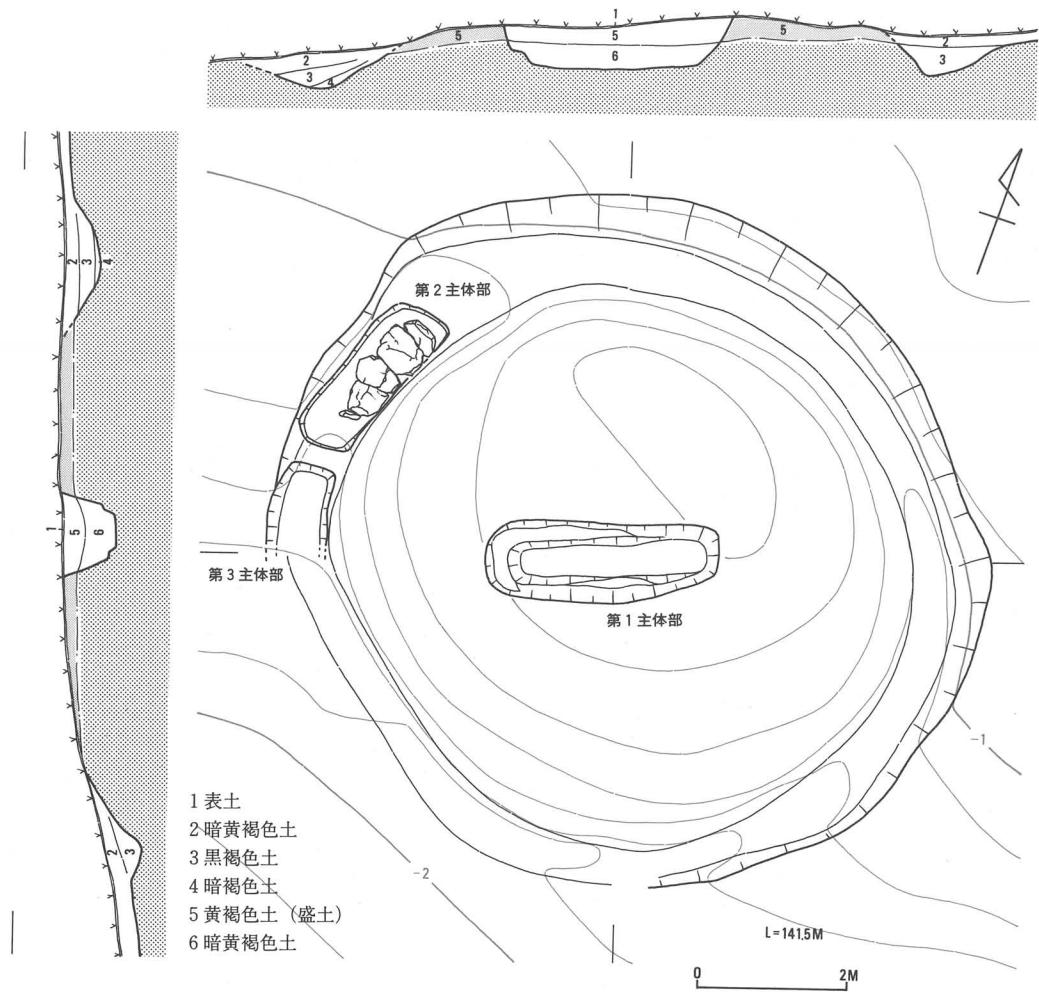
で径6mm、最も厚いもので2.4mmを測る（第29図）。

第2主体部（第32図）は石蓋土壙墓である。周溝底面に長さ2.2m、幅80cmを計る浅い長方形土壙を掘り、さらに中央部に長さ1.65m、幅25~45cmを測る墓壙を掘り込んでいる。その上に偏平な石を4枚並べ墓壙を覆っている。

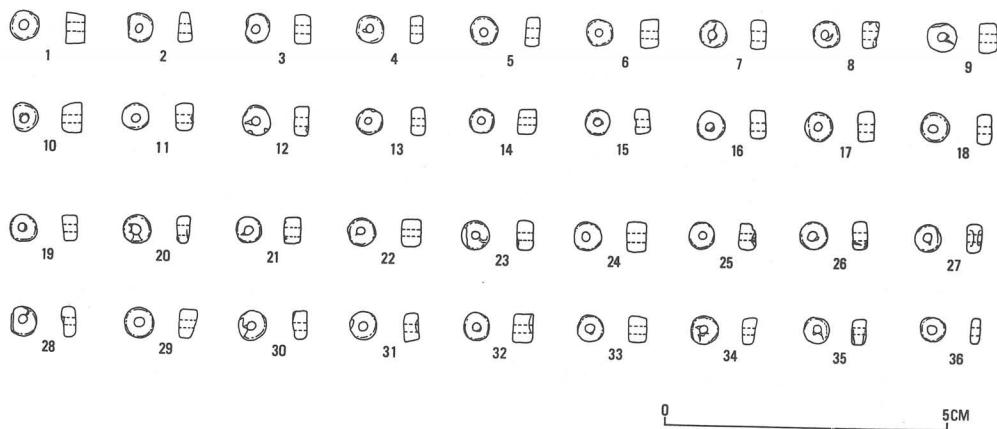
遺物は何も出土しなかった。

第3主体部（第33図）は幅1.5m、長さ2.5m以上を測る土壙墓である。南側は自然傾斜に解消され把握できなかった。

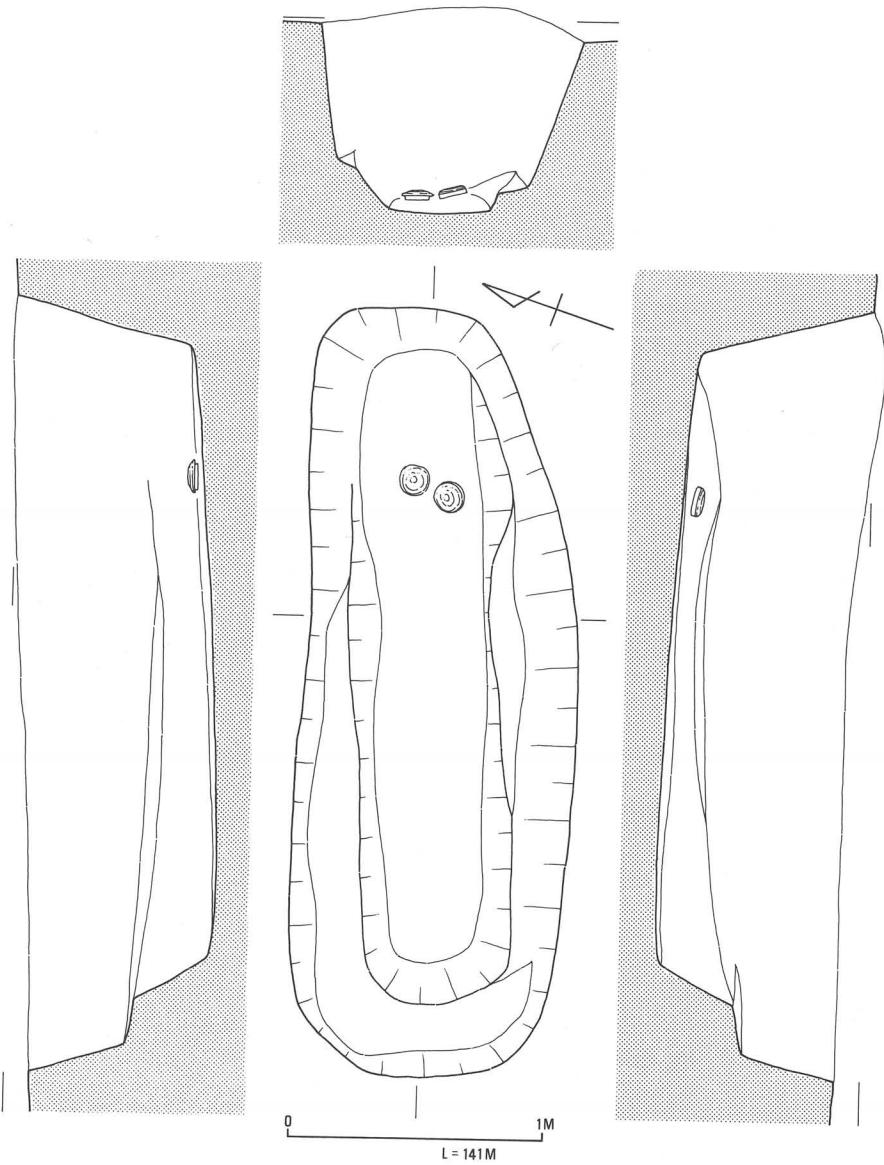
遺物としては床面中央部より須恵器杯蓋、製塩土器各1点が出土した。第31図3・4がそれである。3は1と外観、色調等類似するが、口縁部端部が面をもつ点が異なる。4の製塩土器は1号墳同様口縁部は不整円形を呈し、胎土は砂質に富みザラザラした感をうける。口縁部内面には指頭圧痕が観察される。使用に供したためか、セピア色に部分的に変色している。



第28図 2号墳平面・断面図 ($S = 1 : 100$)



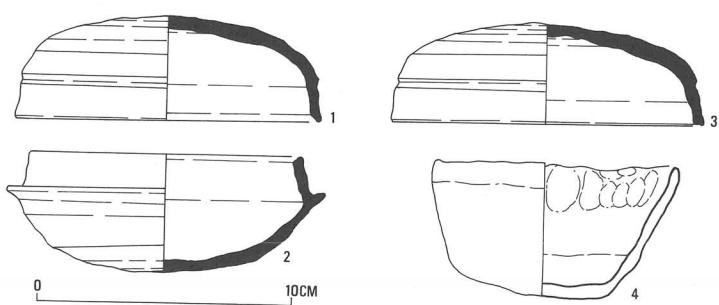
第29図 2号墳第1主体部出土遺物



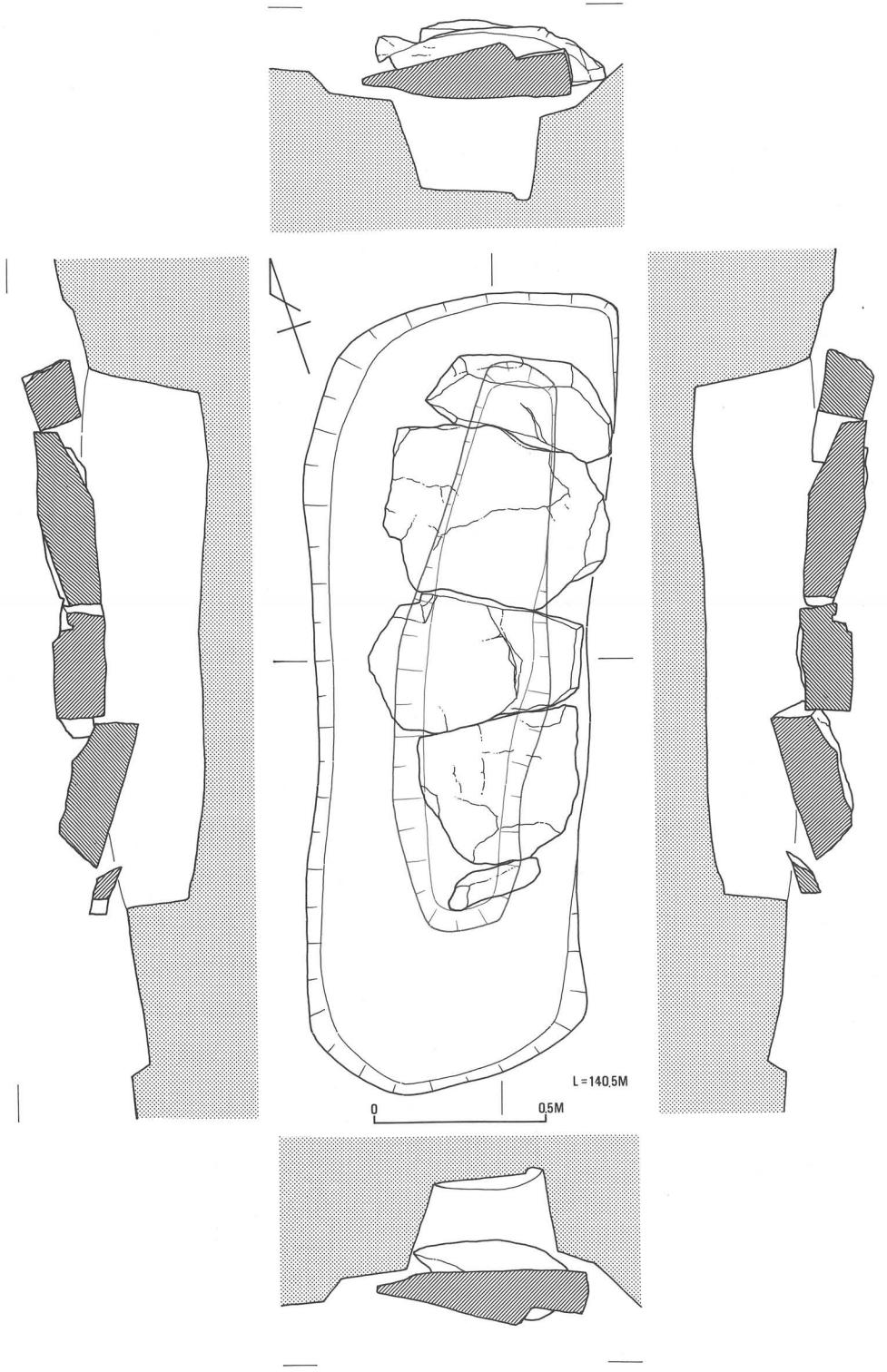
第30図 2号墳第1主体部平面・断面図 ($S = 1 : 30$)

3号墳 (第34~36図)

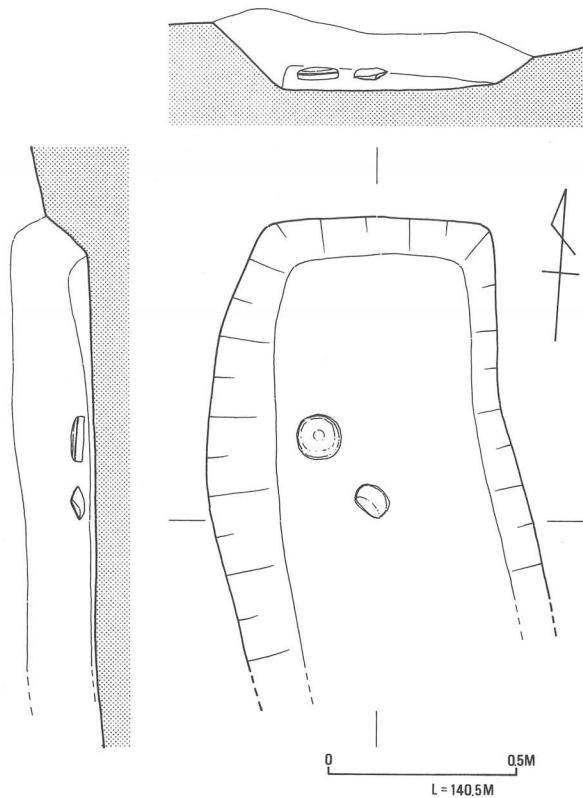
1号墳と2号墳のほぼ中央部に位置する。径3.5~4.1mを測る円墳である。平面形は第34図のとおり、不整円形であり、墳形は円または方のどちらにもとれそうである。ここでは一応



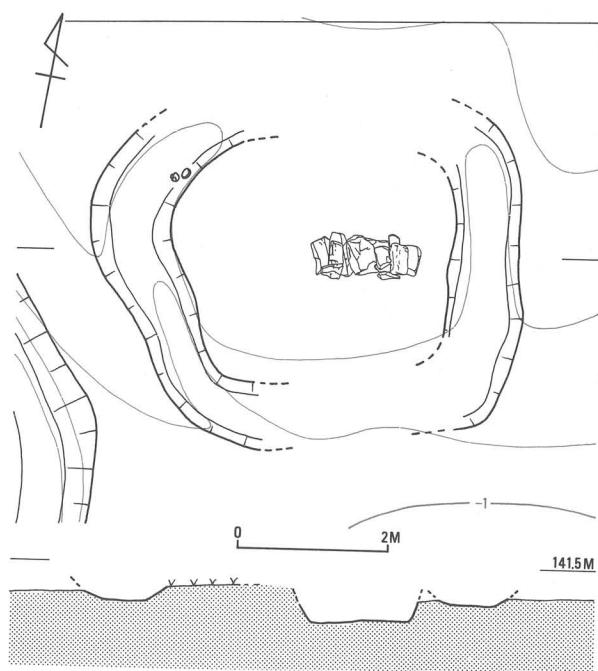
第31図 2号墳出土遺物



第32図 2号墳第2主体部平面・断面図 ($S = 1 : 20$)



第33図 2号墳第3主体部平面・断面図 ($S = 1 : 20$)



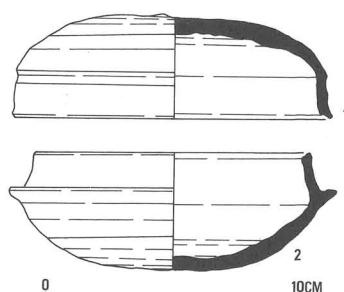
第34図 3号墳平面・断面図 ($S = 1 : 100$)

円墳として取扱っておきた
い。盛土は全くなく、幅70cm
~1.1mの周溝を掘削するこ
とにより古墳を意識してい
る。本来盛土があったのが流
失したという状況はまず考
えられない。というのは、1・
2号墳で確認できるように現
地表面は盗掘を受けておら
ず、古墳築造時の地形をほ
とどめているからである。

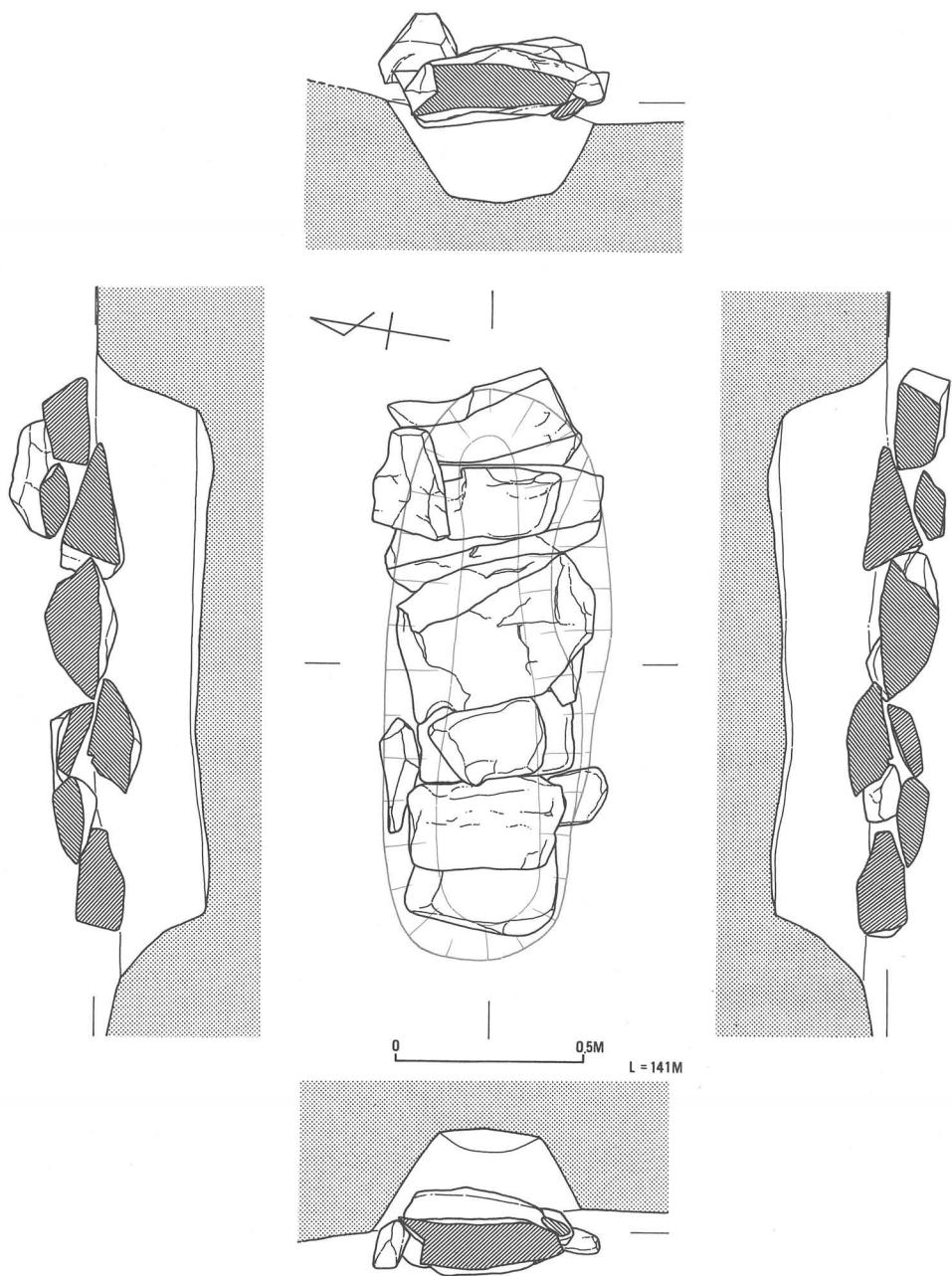
溝に囲まれた範囲の中央部
やや東よりに主軸を東西方向
にむけた石蓋土墳墓が位置す
る。長さ約1.5m、幅約50cm、
中央部での深さ25cmを測る長
楕円形の土壙を掘り、その上
を蓋石で覆っている。蓋石は
最初に間を開けて3枚置き、

その上の段にすき間をふさぐよう間に
石を置き、さらにその上に間をふさ
ぐよう配置している。

遺物は主体部からは何も出土しなか
った。しかし、周溝の北西部分より須
恵器杯・身各1点が出土した。第35図



第35図 3号墳出土遺物



第36図 3号墳主体部平面・断面図 ($S = 1 : 20$)

1・2がそれである。両者はセット関係にある。1・2号墳のものと似た特徴をもっている。

4号墳（第37・38図）

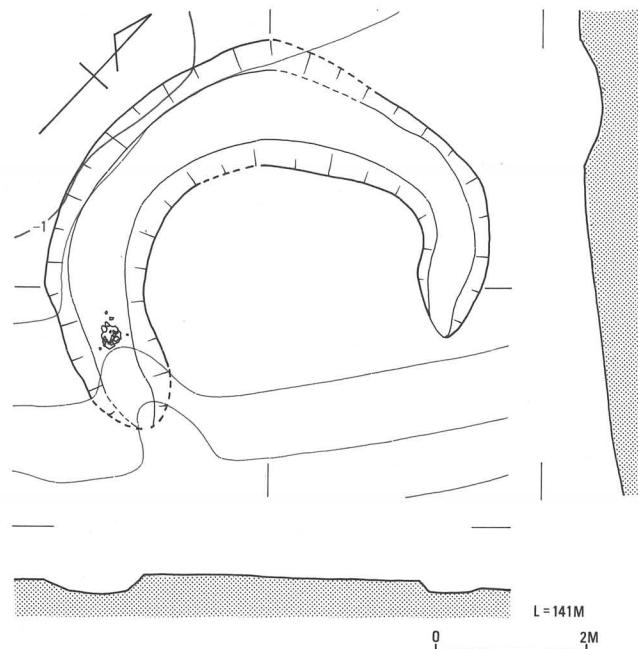
1号墳の北東方向に少し離れて位置する。丘陵頂部東端の緩やかな斜面に立地する。埋葬主体部、盛土は全くなく、円形に溝がめぐるだけである。溝の内側は径約4.2mを測る。その周囲に最大幅1.5m、深さ30cm、断面形は緩やかなU字形を呈す周溝がめぐる。谷側の部分は一部消失している。埋土は単層で、南側周溝より底部を下にし、置かれた状態で土師器甕形土器

1個体が出土した。

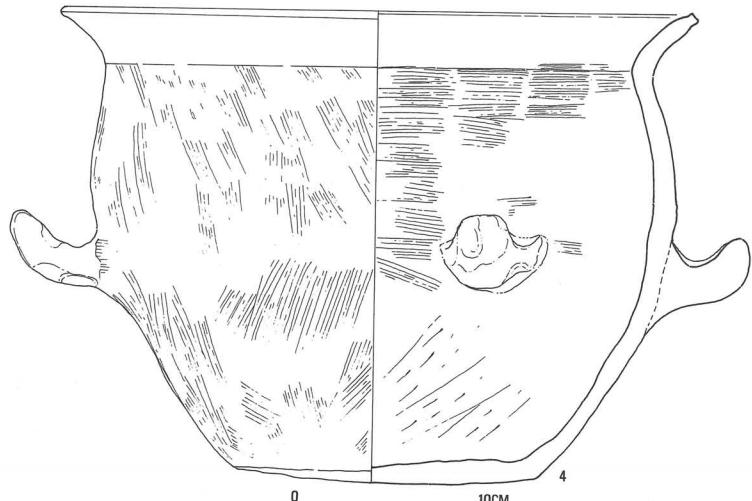
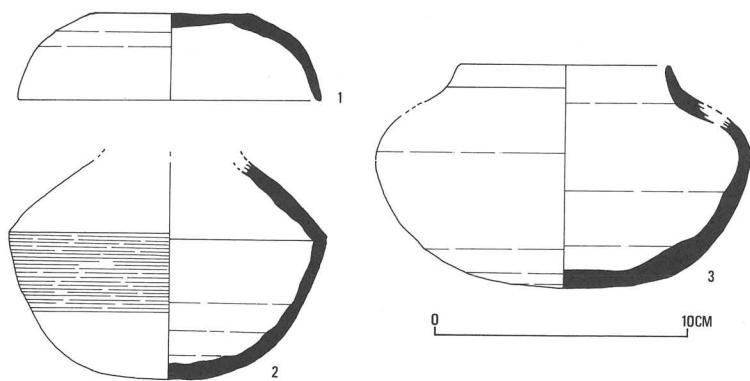
遺物はこの他に周溝の内側部分から数点出土しただけである。第38図に図示したものが全てである。

1は須恵器杯蓋である。口径12cm、器高3.4mを測り、天井部はヘラ切りのままで平らになっている。その他の内外面はヨコナデである。2は短頸壺と考えられる。残存高8.6cm、最大径12.6cmを測る。胴部に稜をもち、稜の下位にカキ目がめぐる。底部外面はケズリ仕上げである。3は短頸壺である。口径8.4cm、器高8.7cmを測る。

口縁部はやや内傾しながら立ち上がり端部は丸くおさめている。底部はヘラ削り仕上げである。4は土師器甕形土器である。ほぼ完形に復元でき口径33.4cm、底径16cm、器高24.8cmを測る。頸部から外反する口縁部をもち、端部はややすほまり端面は面をもつ。胴が少し張り、底部は丸みをもった平底である。外面及び内面の上半はハケ目、内面は下半はケラ削り仕上げである。把手が胴部両側に一対つき、外面は指頭圧痕がよく観察される。



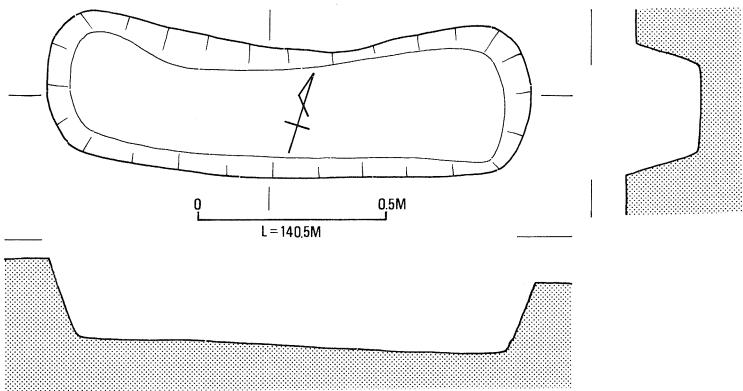
第37図 4号墳平面・断面図 (S = 1 : 100)



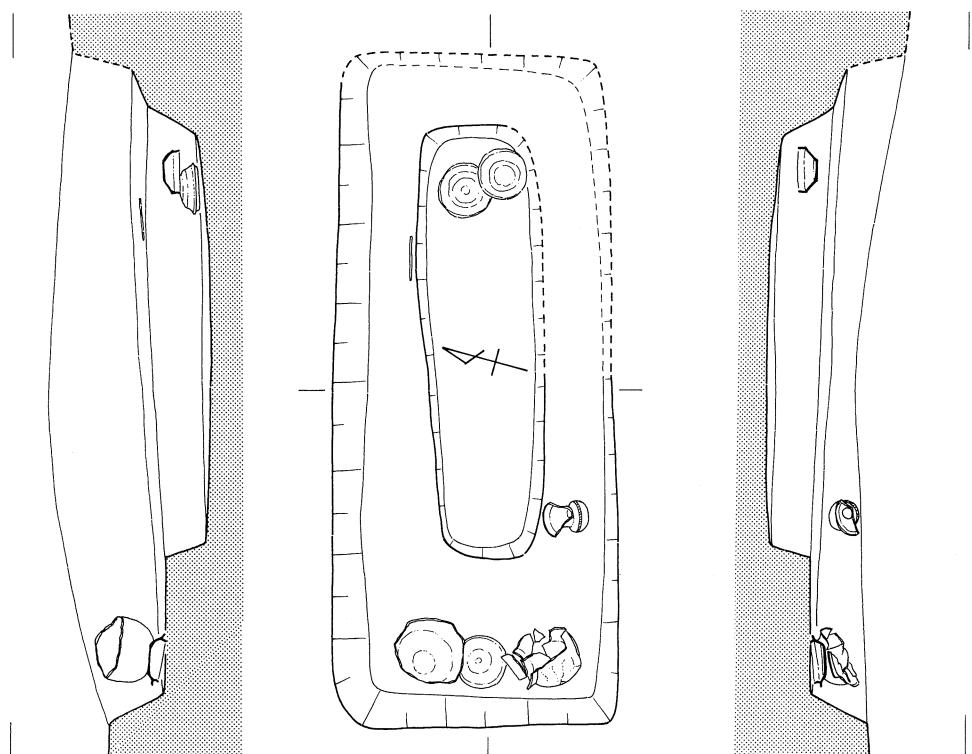
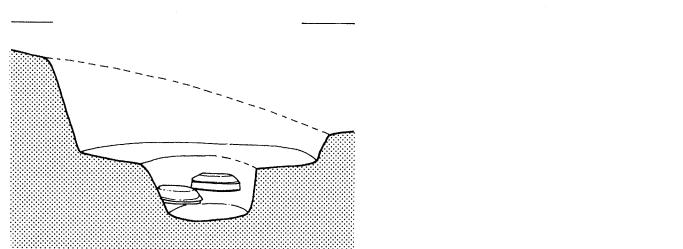
第38図 4号墳出土遺物

土壌墓1（第39図）

1号墳の南西部に隣接し、主軸を東西方向にむけて位置する。長さ1.3m、幅35cm、中央部での深さ約20cmを計る長方形の土壌である。遺物は出土しなかった。1号墳の墳丘外埋葬と考えられる。



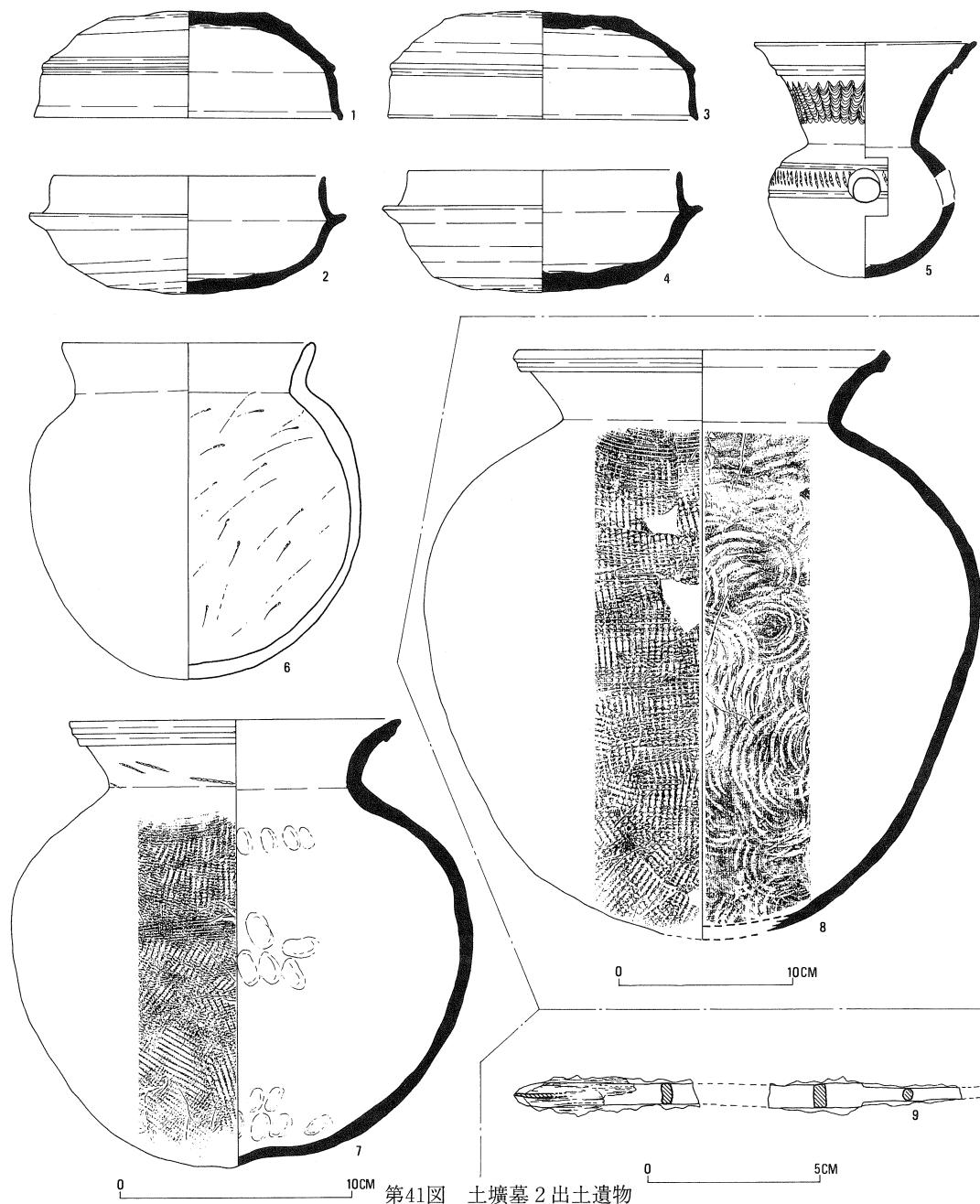
第39図 土壌墓1平面・断面図 ($S = 1 : 20$)



第40図 土壌墓2平面・断面図 ($S = 1 : 20$)

土壙墓 2 (第40・41図)

1・2・3号の南斜面下位に位置する。主軸はほぼ東西方向である。最初に幅75cm、長さ1.8m、中央部での深さ約20cmの方形土壙を掘り、さらに中央部に幅30cm、長さ1.15m、中央部での深さ約15cmを測る方形土壙を掘り込み、墓壙としている。墓壙床面の東端には須恵器杯身と蓋が伏せて並べられていた。枕に転用されたものである。墓壙周囲の一段高い平坦面には西側に須恵器甕、杯身と蓋、土師器甕形土器が、北側には鉄鎌、南側には鍔が置かれていた。



第41図 土壙墓 2 出土遺物

当初この場所には第41図8の須恵器甕が散乱していた。埋葬後上面に置かれていたものと考えられる。

遺物は第41図に図示した。3・4は枕に転されていたものでセット関係にある。1・2は棺外の平坦面西側に重ねて置かれていたものでやはり身と蓋のセット関係にある。これらは技法形態、計測値、胎土、焼成等全く同一である。蓋は口形13.4cm、器高4.6cm、身の器高は5.3cmを測る。蓋の天井部をケズリ平坦に仕上げているのが特徴的である。5は魂、6は土師器甕形土器である。7・8は須恵器甕である。7は内面をナデているのに対し、8はタタキをそのまま残している。9は片刃の鉄鎌である。先端は薄く鋭利に仕上げている。先端部と基部に部分的に木質が銹着している。

(3) その他

窯址（第42～46図）

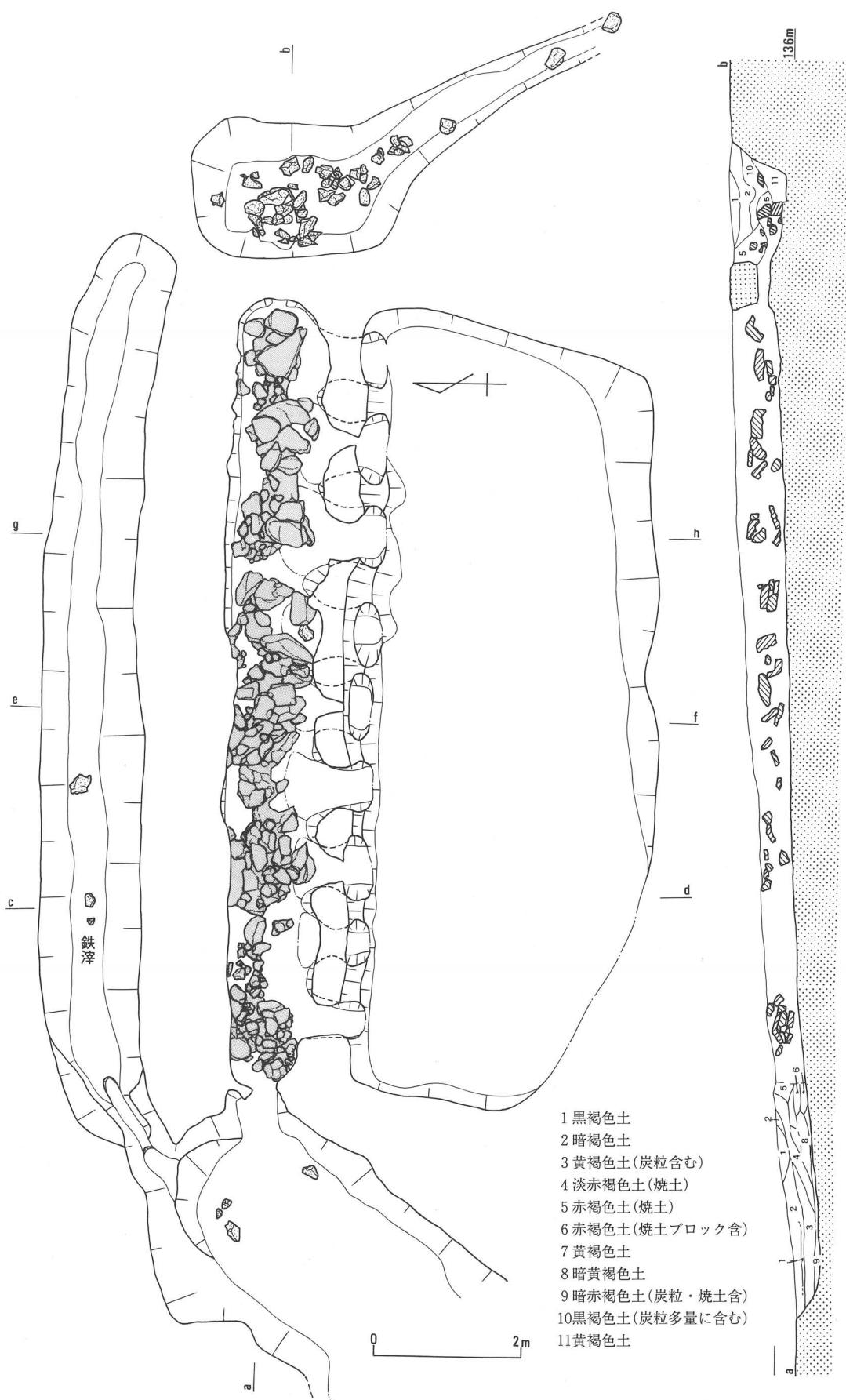
V・Z-21・22区の南斜面に位置する。窯は主軸を等高線に対しかなり斜交させて立地する。窯は焼成部、山側の溝（上方溝）、谷側の平坦面（側庭作業面）等の関連施設から構成されており、その各々が比較的良好に残る。

焼成部は地山を垂直に掘り下げた半地下式構造で焼成部長10.5m、幅1.1m、山側での掘り下げ深さは約0.8mを測る。谷側には側庭作業面に面して9個の横口がほぼ等間隔に開口している。横口の4個は天井部が完全に残っている。横口の正面形はおよそ長形70cm、短径40cmの楕円形を呈する。最も焚き口に近い横口2個のみがやや小ぶりである。横口から焼成部につながる床面は一段ややくぼんでおり何かを搔き出した痕跡と考えられる。焼成部の埋土内には窯の天井壁片が多数含まれており、その一部の裏面には天井構築の際の骨組み痕跡の残るものもある。内部からの出土遺跡は皆無である。また床面は非常によく焼けておりほぼ全面が還元により須恵質（青灰褐色）に変化している。壁面及び横口に関しても幅約20cmまで被熱により淡黄褐色、赤褐色に変色している（第43・44図）。焼成部床面の傾斜角度は約2.5度である。焼成部の西側に焚き口が、東側に煙道に付設されている。

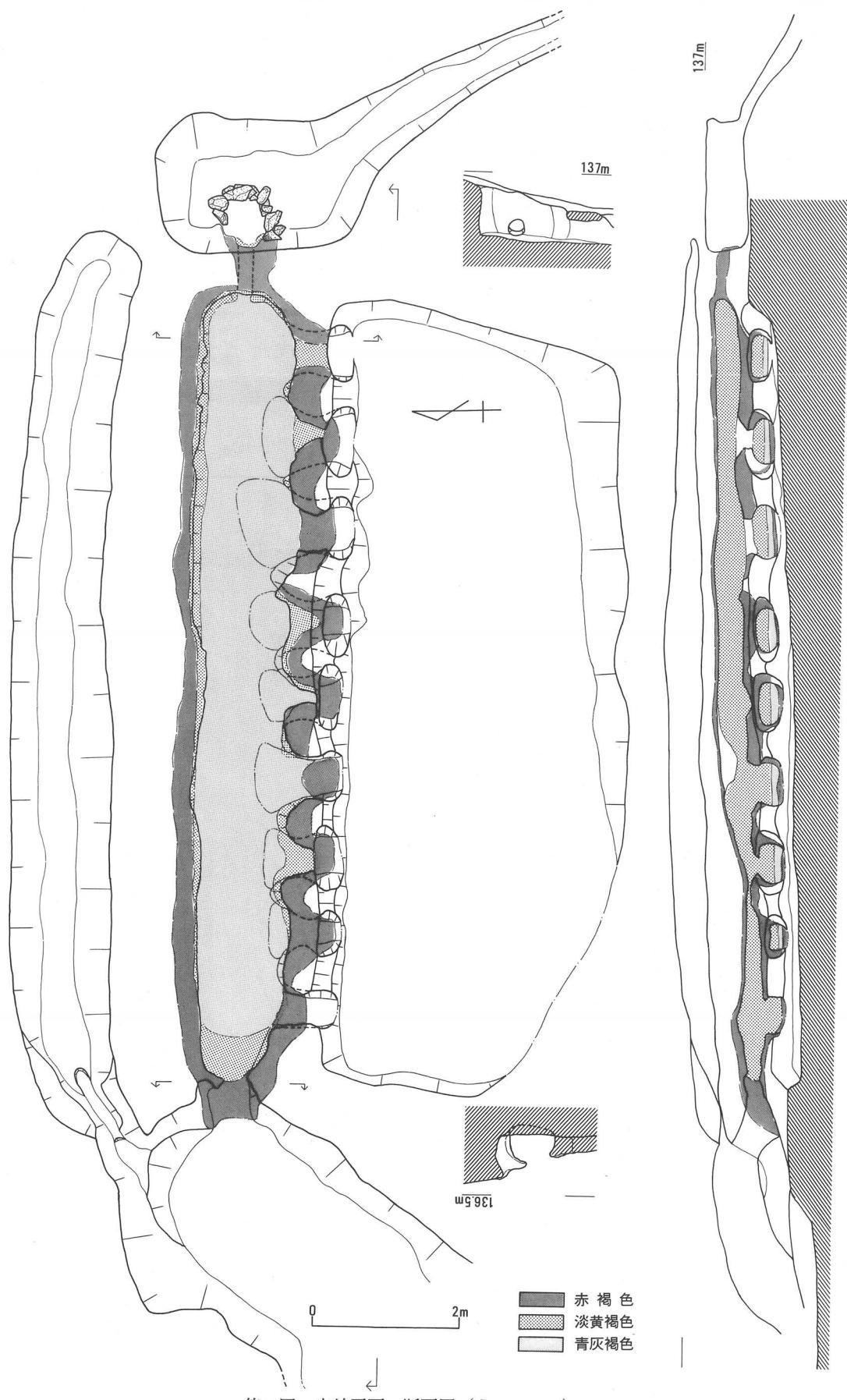
焚き口では窯壁幅が狭くなり天井部がドーム状になっていた痕跡が見られる。焚き口の作業面は焼成部床面よりやや低くなり長径5m、単径2mの長方形状を呈するが南辺は斜面のため明瞭でない。また、側庭作業面には接続していないが山側では上方溝と接続している。焼成部入口で閉塞用と考えられる拳大から人頭大程の石数個を検出している。

煙道（第45図）は長径約2.7m、単径1.8mに掘り込まれた土壙の中に、「コ」の字状に石を組み煙り出しの穴を設けたものである。径約22cm、長さ70cm程の暗渠で焼成部に連結させており、さらにこの土壙には排水のためと思われる溝が谷側へ向かって伸びている。石は持ち送り状に積まれ隙間を粘土で補強している。暗渠部分も火を受け赤褐色に変化している。

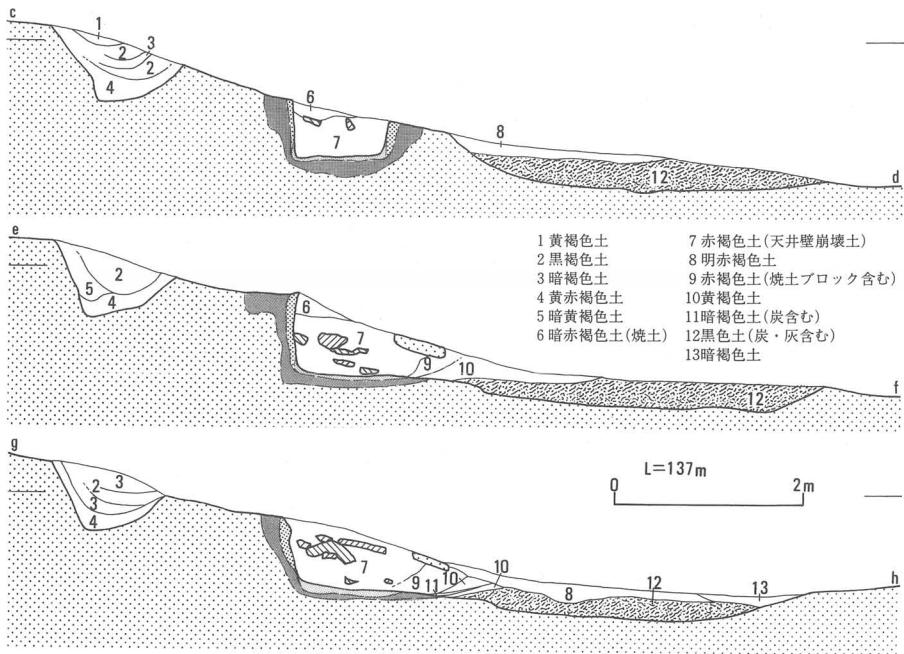
上方溝は焼成部の1.2m上方に平行に作られており、長さ約12m、最大幅1.4mを測り、焚き



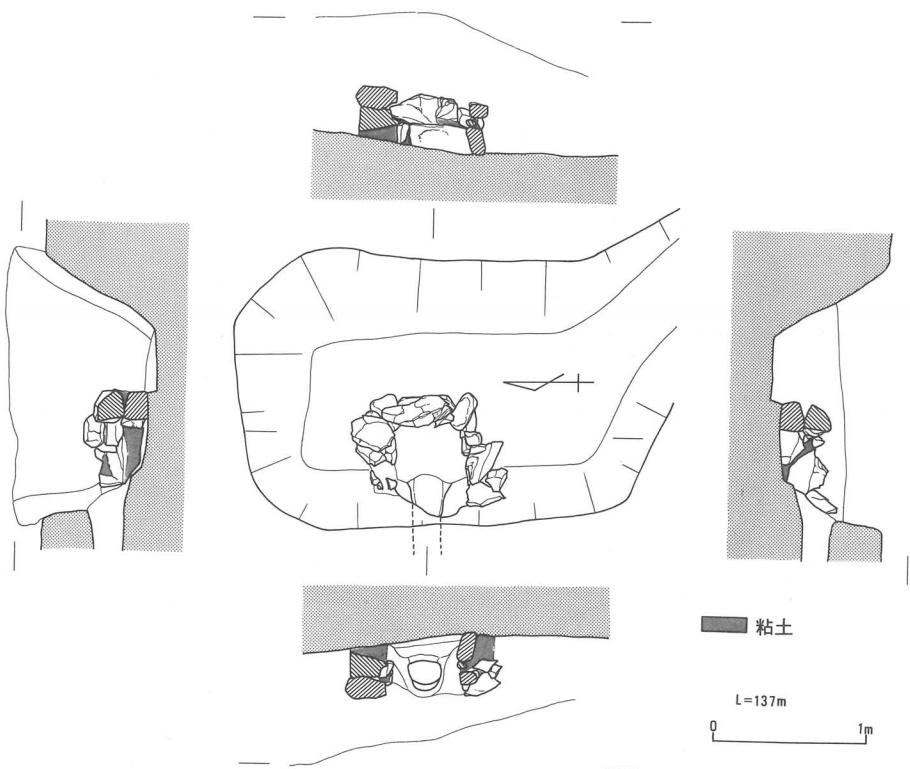
第42図 窯址窯内検出状況平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



第43図 窯址平面・断面図 (S = 1 : 80)



第44図 窯址土層断面図 ($S = 1 : 80$)



第45図 窯址煙道平面・断面図 ($S = 1 : 50$)

口作業面に連結し煙道部分では解消している。内部から鉄滓が1個出土している。

側庭作業面は焼成部の南側におよそ $10.5 \times 3.8\text{m}$ の範囲に形成された平坦面である。平坦面

は比較的良好に残り、横口から搔き出された状態の炭・灰を含む堆積が床面に認められる（第44図12）。またこの作業面の南4mの地点に、鉄滓が集中的に廃棄されている箇所があるが付近に製鉄炉は発見されていない。

出土遺物として側庭作業面上層から須恵器2個体分の小片と上方溝内部から鉄滓1個が出土している。

遺物の須恵器は第46図に図示した。いずれも破片からの復元である。1は須恵器杯身である。底部に貼付け高台がつく。口径約11.4cm、底径8cm、器高3.5cmを測り体部は底部との屈曲部からやや直線的に斜方向へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部はヘラ切り後になで調整をおこなっている。2は底部に高台が付く椀である。高台は断面が三角形を呈し端部は丸くおさめている。口径約14.6cm、底径7.8cm、器高5.5cmを測る。体部と底部との明瞭な屈曲はみられず、直線的に斜方向へ立ち上がり端部を丸くおさめている。底部はなで仕上げである。鉄滓は分析の結果鉱石製練滓である。これら須恵器は埋土上層からの出土であるので即この窯の年代を示すものではない。しかし付近にこれら土器を伴う別遺構が見られない事から何らかの関連性はあると思われる。この須恵器の年代観をあえて考えると奈良時代以降であり、これら一連の窯の所属時期に比べるとやや年代観がずれるので、この窯の所属（操業）時期については特定できない。

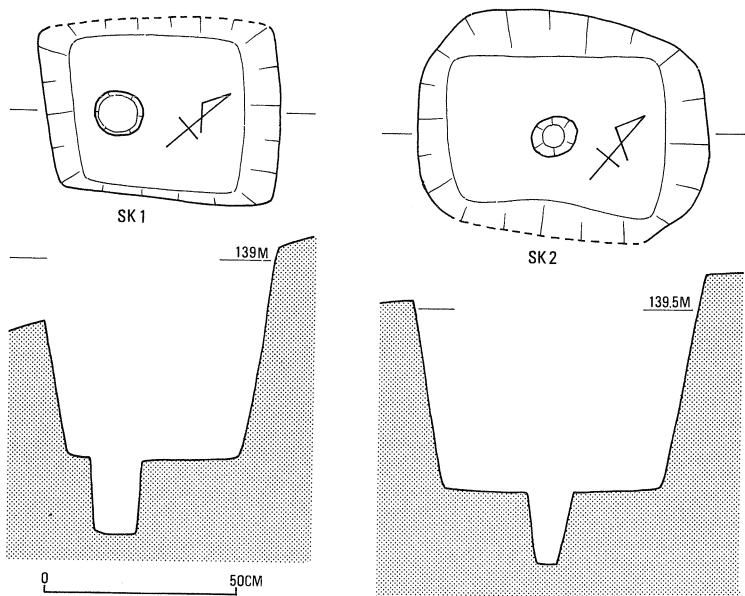
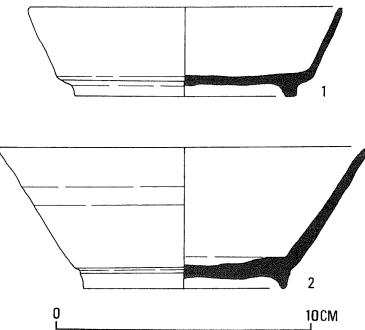
土壤1（第47図）

W-20区南斜面に位置する。長辺61cm、短辺48cmの方形プランで深さ55cmを測る。床面西よりに径13cm、深さ20cmの柱穴1個をともなう。埋土は乳灰白色土でサスカイトの石片が出土している。用途及び所属時期は不明だが狩猟用の落とし穴と考えられている。

土壤2（第47図）

S・T-18区、段状遺構

2の床面検出時に確認した土壌である。長辺75cm、短辺60cmの方形プランで深さ58cm程掘り下げ床面中央に柱穴が1個存在する。柱穴は径12cm、深さ20cmを測る。埋土は淡灰白色土で出土遺物は存在しない。



第47図 土壌1・2平面・断面図 (S = 1 : 20)

4 B地区の調査の記録

B地区では弥生時代後期前半の遺構が大半を占める。東西に派生する丘陵上に、住居址12軒、建物址3棟、段状遺構29基の他、土壙、土壙墓、柵列、溝状遺構等を検出した。その他にも、古墳時代の土壙墓1基、窯址2基等が検出されている。以下、時期別・各遺構ごとに概略を述べることにする。

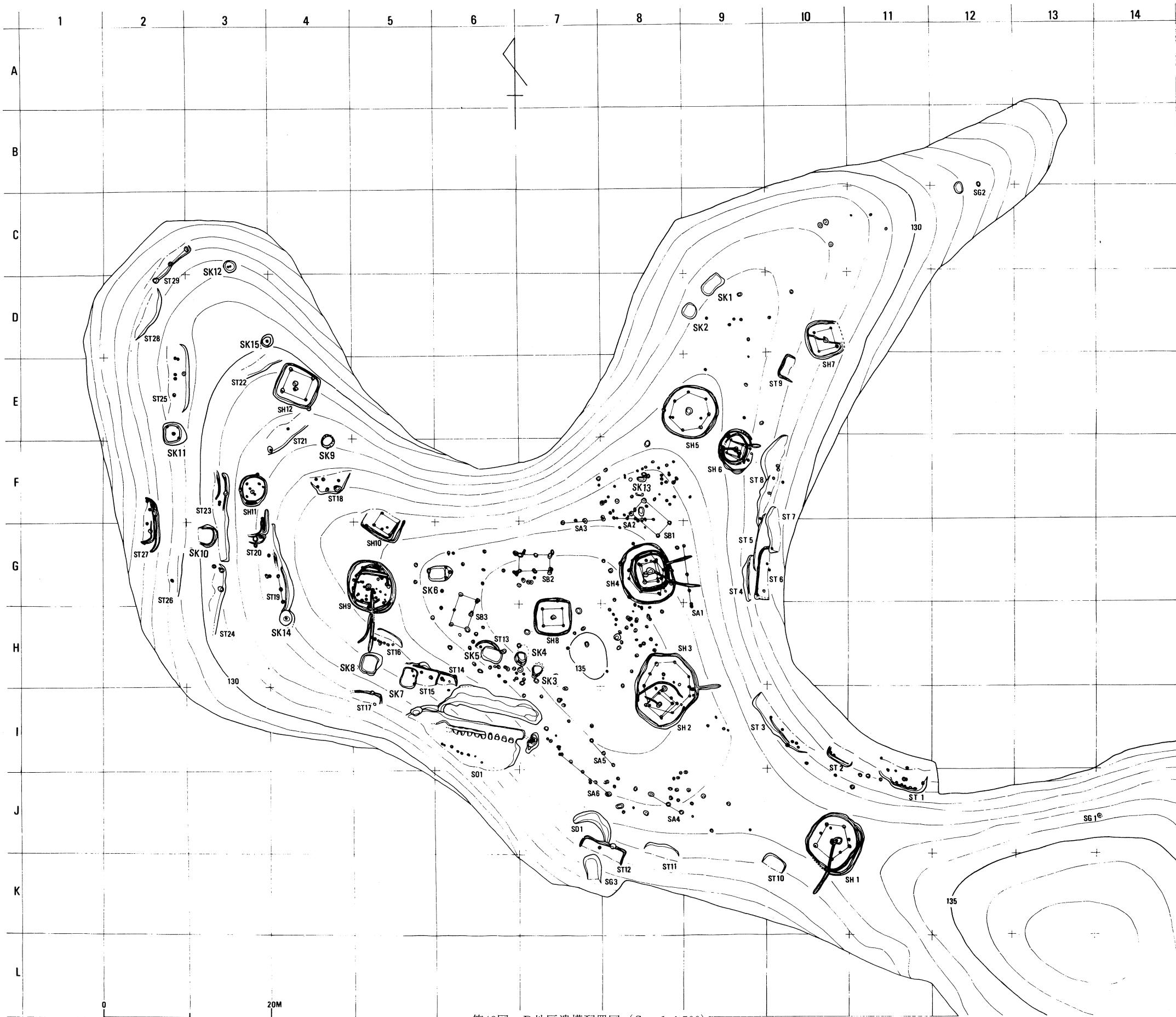
(1) 弥生時代

住居址1（第49図）

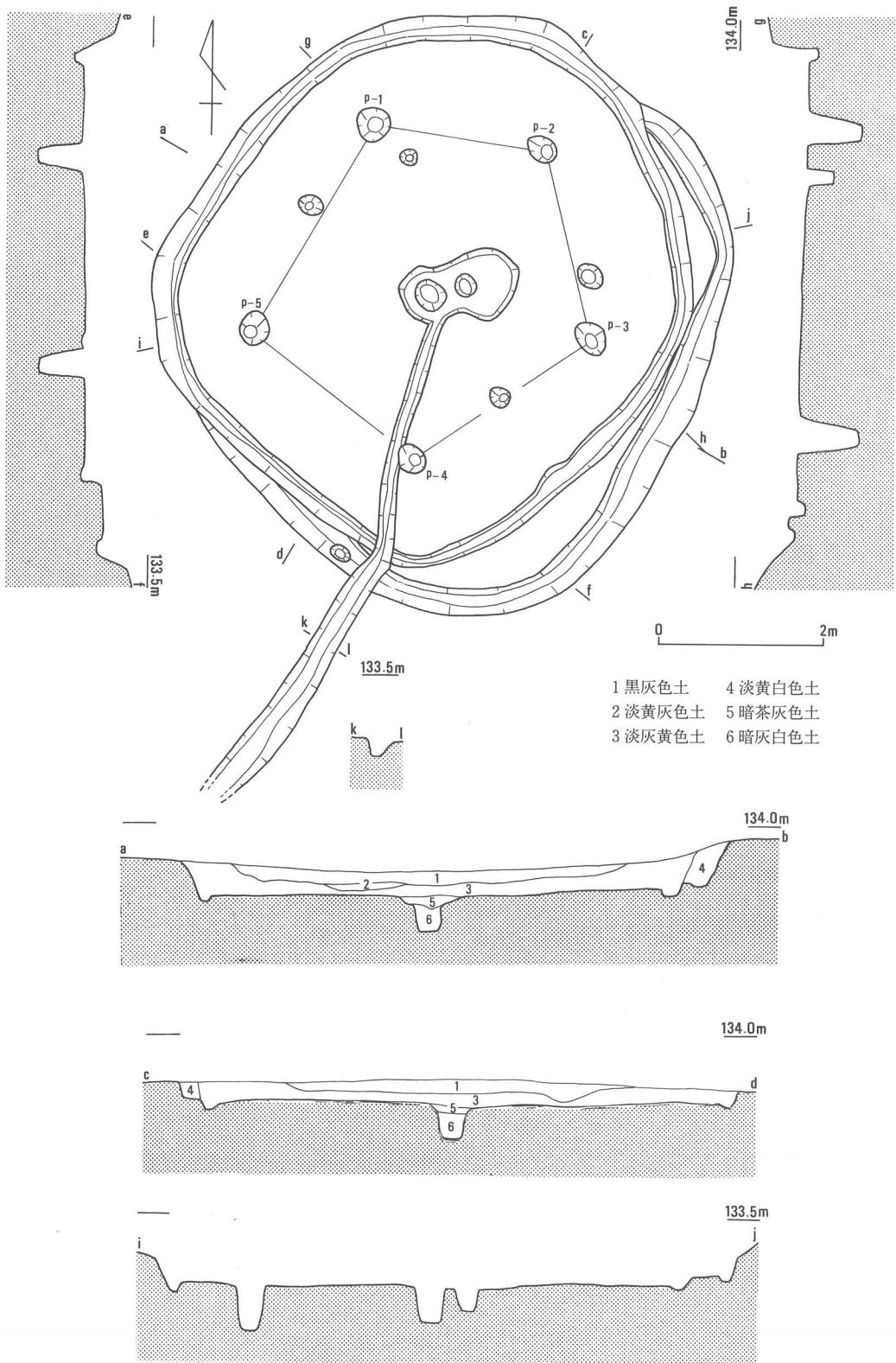
東西へ派生する丘陵のつけ根部分に位置する。径7m前後の円形竪穴式住居である。床面中央には浅い落ち込みの中に、ほぼ円形で深さ74cmを測る中央穴が検出された。この中央穴から、住居外方へ南北方向の床溝がはしる。本住居は5本柱で構成され、各柱間距離は約2.5mを測る。それぞれのピットの深さは40~50cmとかなりしっかりしたものである。床面周囲には深さ約12cmの壁体溝が巡る。また住居の東側外方には、建て替えを示唆する浅い溝が1本検出されているが、切り合い関係より、東側外方の住居の方が古いことが理解される。遺物は床面からは高杯形土器が1点出土したのみで、残りはすべて埋土中より検出された。

住居址1出土土器（第50図）

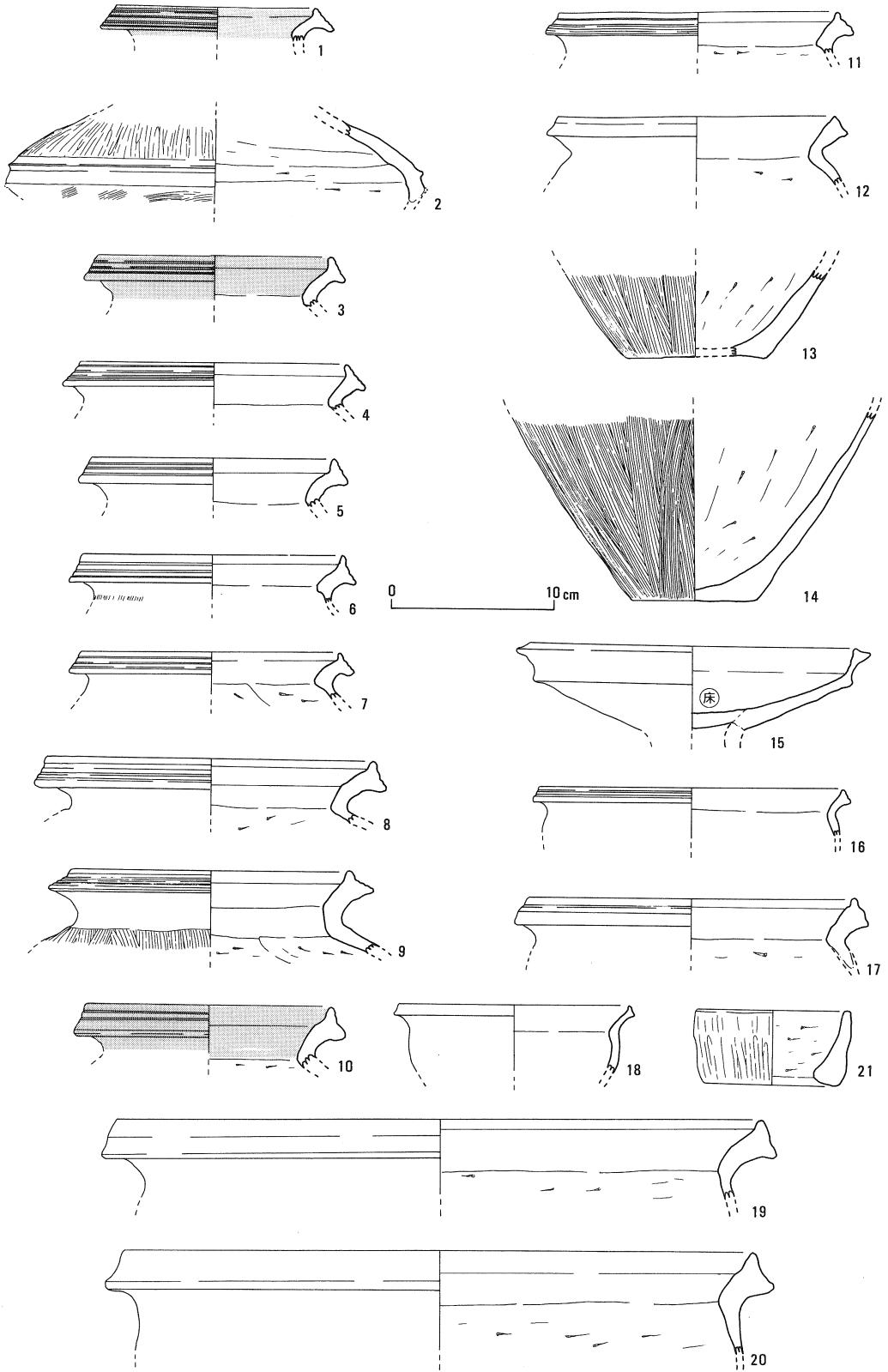
1・2は壺形土器である。1は上下に拡張をみせる口縁部を有し、内外面とも赤色顔料の塗布が顕著である。2は直口壺の胴部と思われる。胴部中央には2条の突帯を有し、その上方をタテ方向のヘラミガキ、下方を斜方向のハケ目で丁寧に仕上げている。内面はヘラケズリ仕上げである。3~12は甕形土器の口縁部である。3~11はいずれも口縁端部を上下に肥厚・拡張させ、端面には数条の凹線文を巡らすタイプである。3・10の内外面には赤色顔料が、4・6の口縁部下端にはススの付着がそれぞれ顕著に認められた。12の口縁端面には、凹線文をいったん施した後、強いヨコナデによって仕上げるタイプである。13・14は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。共に外面はタテ方向のハケ目を、内面はヘラケズリを施している。15は高杯形土器の杯部片である。床面から出土した。浅い杯部から斜め上方にのび、ゆるく屈曲して口縁部に至る。口縁端面は水平を意識しながらもやや内傾する。内外面とも磨滅が激しいが、外面はタテ方向のヘラミガキで仕上げたと思われる。底部は円盤充填による。16~20は鉢形土器である。上下に肥厚させた口縁部の外面には、16・17は数条の凹線文を施し、18~20はヨコナデで仕上げている。19・20は口径約38.4cmを測る大形のものである。21は用途不明の筒状土製品である。底部付近は器壁が厚くやや内傾する形状を呈す。外面全体はタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向の細かいヘラケズリで比較的丁寧に仕上げている。



第48図 B地区遺構配置図 (S = 1 : 500)



第49図 住居址1平面・断面図 (S = 1 : 80)



第50図 住居址1出土土器 (S = 1 : 4)

住居址 2・3（第51図）

東西へ派生する尾根の頂部やや西斜面よりに、住居址 2 と大形の住居址 3 の 2 軒が切り合って検出された。以下、各住居について記述する。

住居址 2（第51図）

長径約6.0m、短径約5.5mの若干いびつな円形を呈する竪穴住居である。壁体に沿って深さ平均7cmの浅い壁体溝がめぐる。遺構検出面から住居址床面までの掘り形の深さは、最深部で約48cmと比較的浅い。本住居は、2回にわたる建て替えが行われている。まずP-1～P-4の4本柱の住居で、その柱間距離は平均2.2m、中央穴をとり囲むようにほぼ方形に柱が配されている。もう一方の柱穴配置は、P-1を共有してP-2・P-5・P-7とひし形を呈するものである。柱間距離はほぼ2.5mであるが、P-1～P-7間が2.7mと若干長い。住居址床面中央にはわずかな高まりをもって円形を呈する2個の中央穴が位置する。床面からの深さは30～40cmを測る。これらの前後関係は不明であるが、本住居の2回の建て替えに伴うものと考えられる。中央穴周辺には炭化物の広がりが集中して認められた。また、中央穴から壁体溝に向けて西方に床溝がはしるが、住居内で解消される小規模なものである。遺物は床面及び埋土中より若干の土器、石器が出土した。

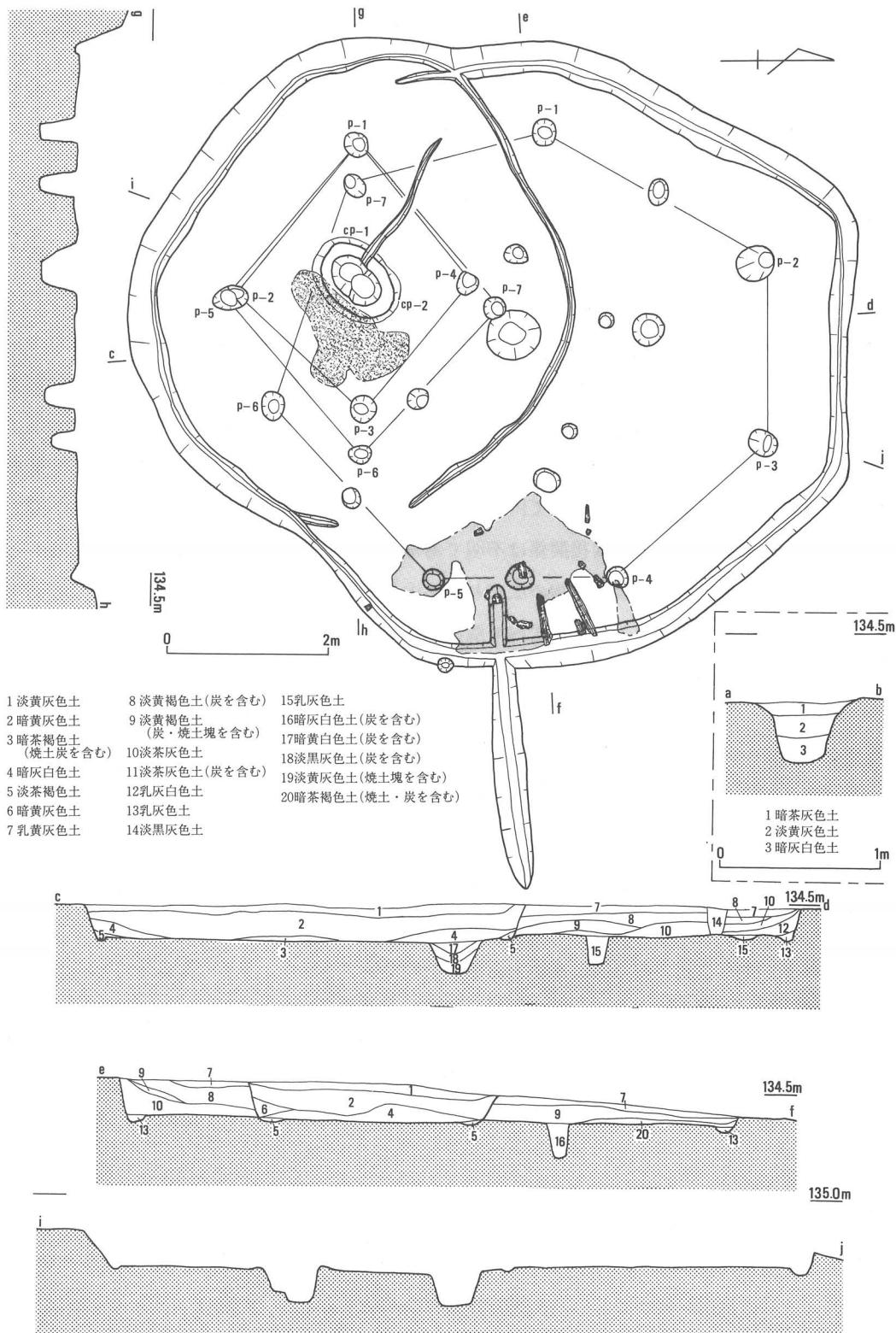
住居址 3（第51図）

前述の住居址 2 と南半を切り合って検出された。径約7.8mの七角形の大形の竪穴住居である。床面中央部には、径約64cm、深さ約38cmの中央穴が位置する。柱穴は中央穴を中心にはほぼ等間隔に各コーナーに配されており、7本柱の住居と考えられる。また、丘陵の東斜面に向けてまっすぐに床溝がはしる。中央穴との接合部付近では検出できなかったが、本住居に伴うものと推測される。また、床面西方隅より焼土面が集中して検出された。さらに周辺から炭化材もまとまって出土していることから、焼失住居の可能性を指摘できよう。遺物は床面及び埋土中から多数の土器が出土している。

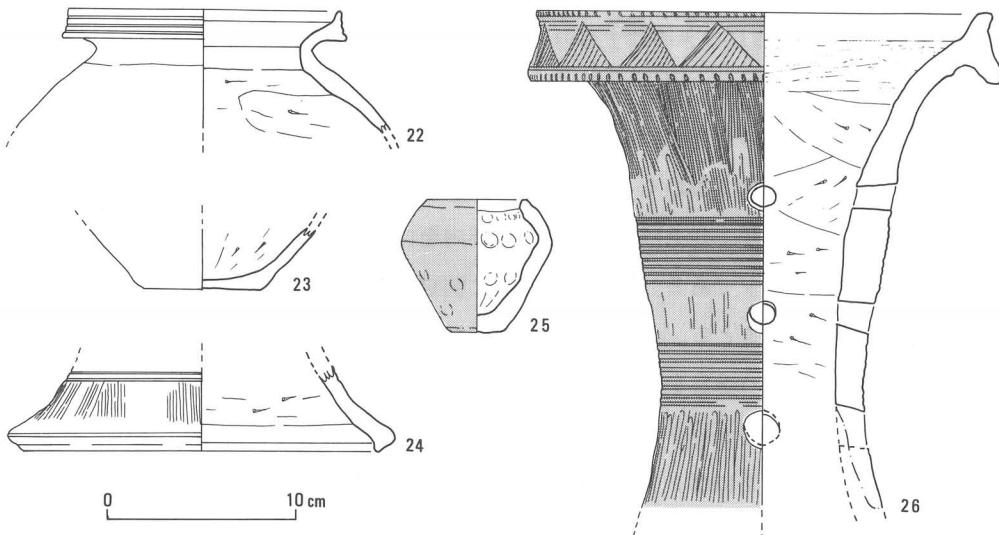
出土土器や住居の切り合いから、住居址 2 が住居址 3 に先行すると考えられる。

住居址 2 出土土器（第52図）

図示できる土器は5点にすぎないが、そのうち4点は床面出土の良好な資料である。22は壺形土器と思われる。やや上方に拡張をみせる口縁端部には3条の明瞭な凹線文を施している。胴部外面上半は表面剥離が激しいため調整等詳細は不明であるが、内面はヘラケズリで仕上げている。23は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。24は器台形土器あるいは高杯形土器の脚裙部である。脚端部は若干肥厚させ、丸くおさめている。外面は地文でタテ方向のハケ目を

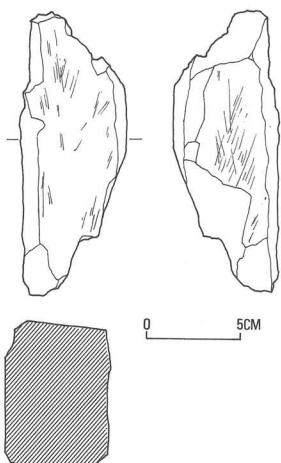


第51図 住居址2・3平面・断面図 (S = 1 : 80)



第52図 住居址2出土土器 (S = 1 : 4)

施し、その上部には数条の凹線文が認められた。25は手づくね土器である。底部から斜め上方にたちあがり、胴部中央やや上半寄りでゆるく屈曲して口縁部に至る単純な器形を呈する。口径は4.6cmを測る。内外面ともナデで丁寧に仕上げられており、ところどころに指頭圧痕が残る。外面全体に赤色顔料の塗布が顯著である。26は器台形土器である。細めの胴部から、ゆるやかにラッパ状にひらいて口縁部に至る。上下に著しく拡張する口縁部外面の上・下端には規則正しく列点文が巡り、その間を凹線文、鋸歯文で加飾する。胴部外面はタテ方向のハケ目を地文とし、下方はタテ方向のヘラミガキで仕上げる。胴部中半には数状の沈線文が施される。また円形の透し孔が3段、4方向に認められた。外面一帯に赤色顔料の塗布が顯著であった。内面は大半をヨコ方向のヘラケズリで仕上げ、口縁部内面をヨコナデ、下方にはヘラミガキを施す。



住居址2出土石器 (第53図)

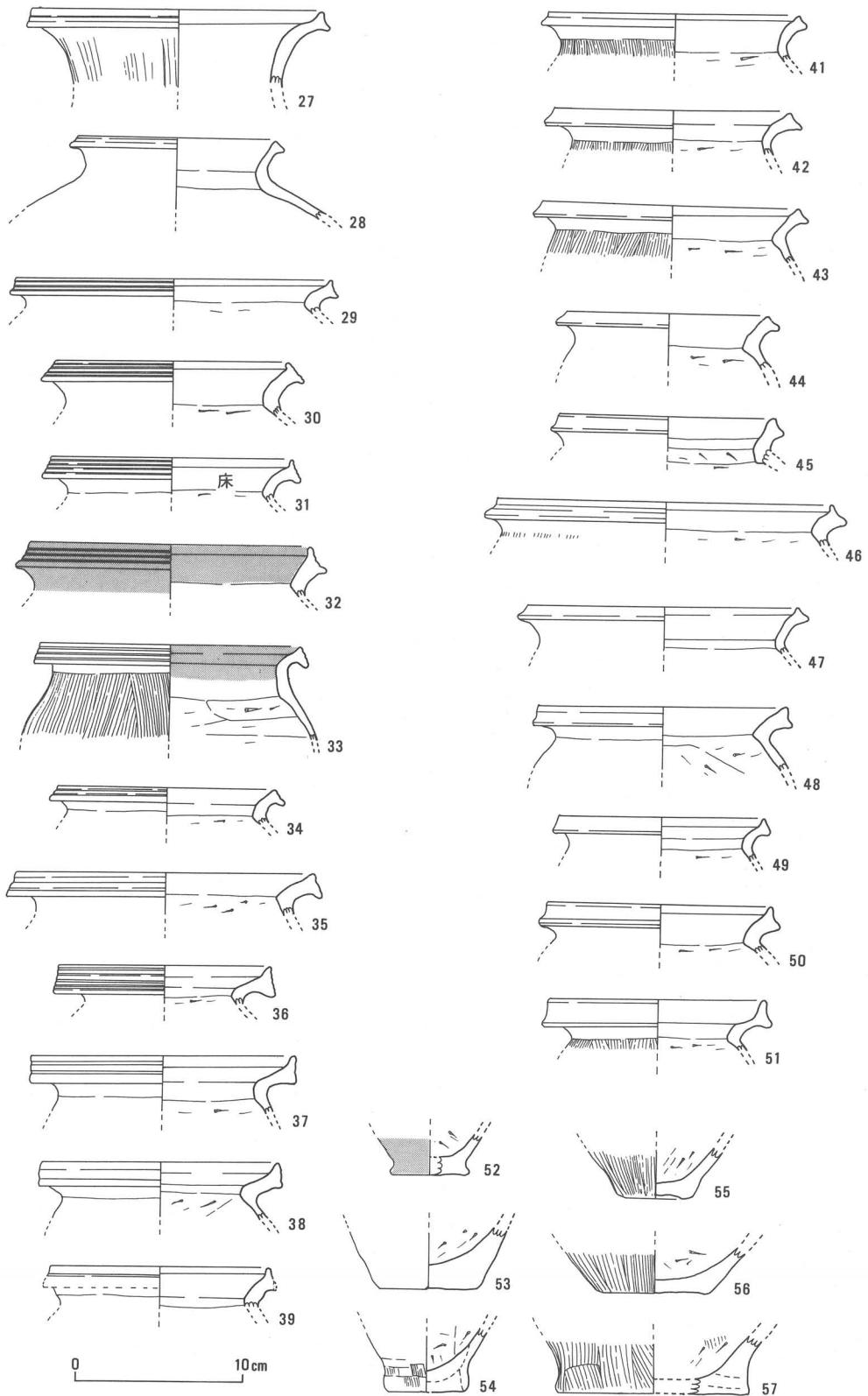
床面から出土した砥石である。砥面は表離2面とも使用している。石材は凝灰岩と思われる。

住居址3出土土器 (第54・55図)

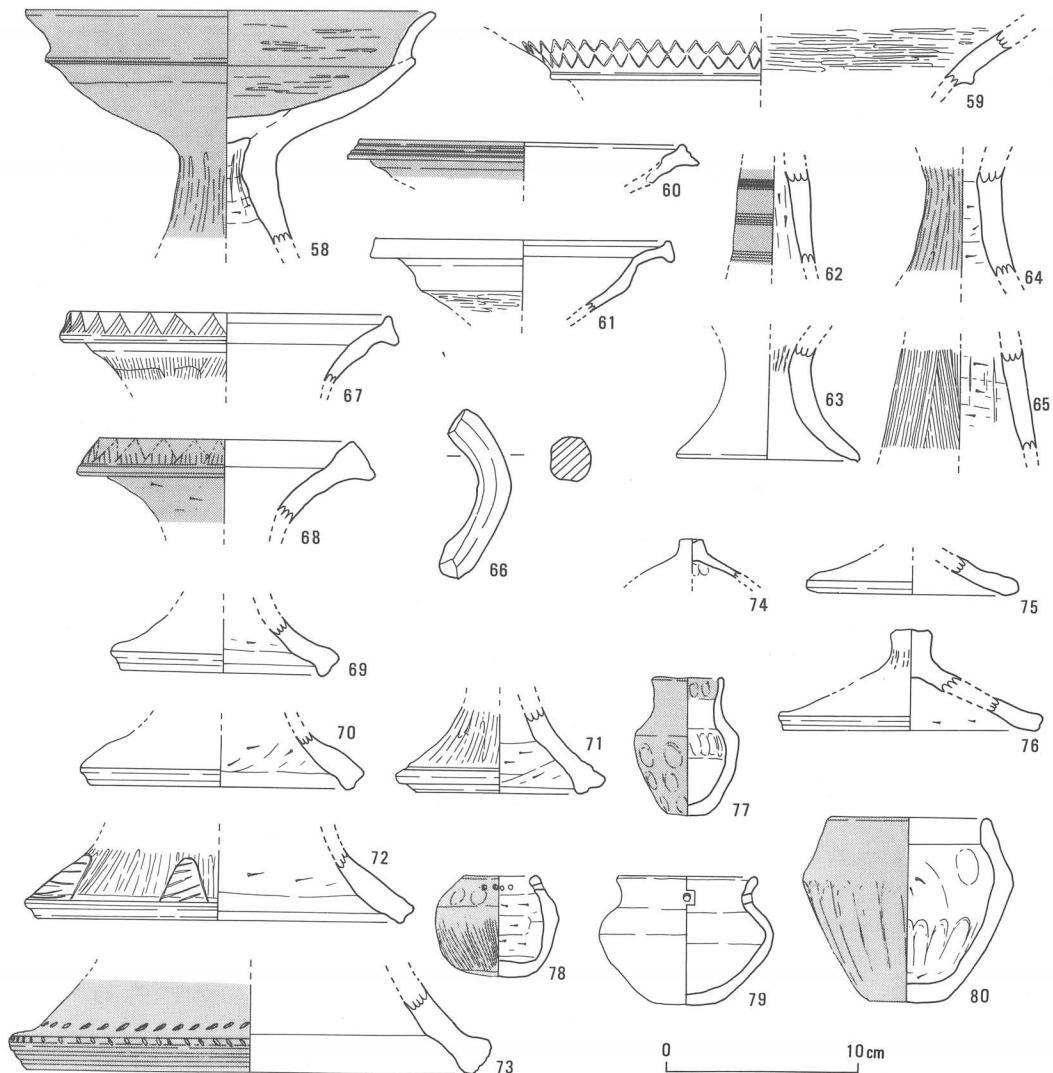
27・28は壺形土器である。27はやや長めの頸部を有し、ラッパ状にゆるやかに開いて口縁部に至る。上下に若干の拡張をみせる口縁部の外面には2条の深い凹線文を施す。頸部上半にはタテ方向のハケ目がかすかに残る。29~51は甕形土器の口縁部。これらの中には口縁部外面に凹線文を施すもの(29~39)と、ヨコナデで仕上げるもの(41~51)があり、さらに端部の形状によって上下に肥厚する

第53図 住居址2
出土石器 (S = 1 : 4)

もの（Aタイプ）、下方にひきのばすもの（Bタイプ）、上方に拡張するもの（Cタイプ）の3つに分けられる。29～32はいずれもAタイプで、外面には3～4条の明瞭な凹線文を施す。32の内外面には赤色顔料の付着が認められた。33～35はBタイプである。33～35はBタイプである。33の口縁部外面には3条のくっきりとした凹線文が巡る。胴部外面上半に粗いタテハケを施し、内面はヘラケズリで仕上げている。口縁部内面にはところどころに赤色顔料が付着していた。36～39はCタイプである。36・37は端面に明瞭な凹線文を有するが、38・39は凹線文を施した後ナデ消す手法をとる。41はAタイプの口縁形を有し、外面をヨコナデで仕上げる。胴部外面にはタテ方向のハケ目を施し、上半をヨコナデしている。42～47はBタイプである。42・43・46の胴部外半は細かいタテハケを、44・45・47はナデにより仕上げる。51の口縁部はCタイプである。胴部外面にはタテハケがかすかに残る。器壁が薄くシャープなつくりである。30・31・33・35・37・38・42・49の口縁部下端にはススが付着している。52～57は壺形土器あるいは壺形土器の底部である。52は比較的小型のもので、底面はナデによって外方にひき出されている。外面全体に赤色顔料が残る。54の器面には、ハケメの際工具を押しあてたような細かい単位が残り、断面では粘土の成形順序が観察された。55～57の外面はタテ方向のハケ目を施し、内面はヘラケズリで仕上げている。58～62・64・65は高杯形土器である。58は床面から出土した。短かめの脚部から斜め上方に立ち上がり、ゆるく屈曲して口縁部に至る。端部は丸くおさめている。杯部外面はヨコナデで、内面はヨコ方向のヘラミガキで仕上げている。脚部外面にはタテ方向のヘラミガキがかすかに残る。また、外面全体と杯部内面には赤色顔料の塗布が顕著である。59～61は杯部片。59は茶褐色の精緻な胎土を用い、1条の突帯文の上方には山形のヘラ描沈線文が2条施される。内面は細かいヨコ方向のヘラミガキで丁寧な仕上げである。62・64・65は脚部片である。外面の調整は、櫛描文・ヘラミガキ・ハケ目と三種三様である。63は器種不明。内外面とも磨滅が激しい。67～73は器台形土器である。67・68は口縁部で、上下に肥厚させた口縁部外面には両者とも鋸歯文を描く。胴部外面の調整は67がタテハケ、68はヨコナデによる。68の外面には赤色顔料の塗布が顕著である。69～73は脚裾部である。72の外面はタテ方向のヘラミガキの後、丸味をおびた鋸歯文で加飾している。73の外面は全体に赤色顔料が塗布され、脚裾と端面上部には刺突文が巡る。脚端部には数条の凹線文が巡る。66は土器の把手部分である。74～76は蓋形土器である。77～80は手づくね土器。77は口径約3.2cm程度の小形のもので、胴部から屈曲して短かめの頸部を有する。胴部内外面には指頭圧痕が顕著に残る。外面と口縁部内面に赤色顔料の塗布が顕著に認められた。球形を呈する78の胴部下半には斜方向のハケメ、上半は指ナデの痕跡が残る。内面の調整は細かいヘラケズリである。2個1組の円形透し穴が1ヶ所に穿たれている。79には透し穴が2方向認められる。内外面ともナデ仕上げである。80は斜め上方に張り出す胴部から「く」の字に屈曲して端部に至る。内外面とも下半では指ナデによって整形した痕跡が顕著に認められた。外面には一帯に赤色顔料



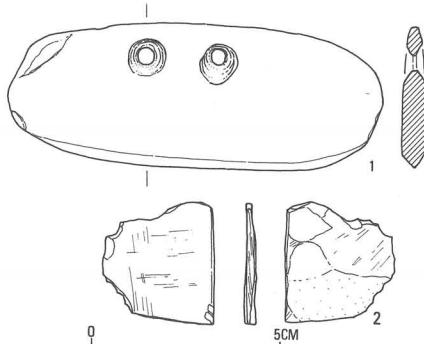
第54図 住居址3出土土器(1) (S = 1 : 4)



第55図 住居址3出土土器(2) (S = 1 : 4)

が塗布されている。

住居址3出土石器（第56図）



1は白雲母石英片製の磨製石庖丁である。最大長10cm、最大幅3.8cm、最大厚6mmを測り、鋭利な刃部をもつ。紐孔は2箇所にあり、表裏両面から行われている。2は粘板岩製の砥石である。一部剥離しているが、表裏2面とも砥面として使用していたことが観察できる。最大厚でも3mm程度と非常に薄手で小形の砥石である。

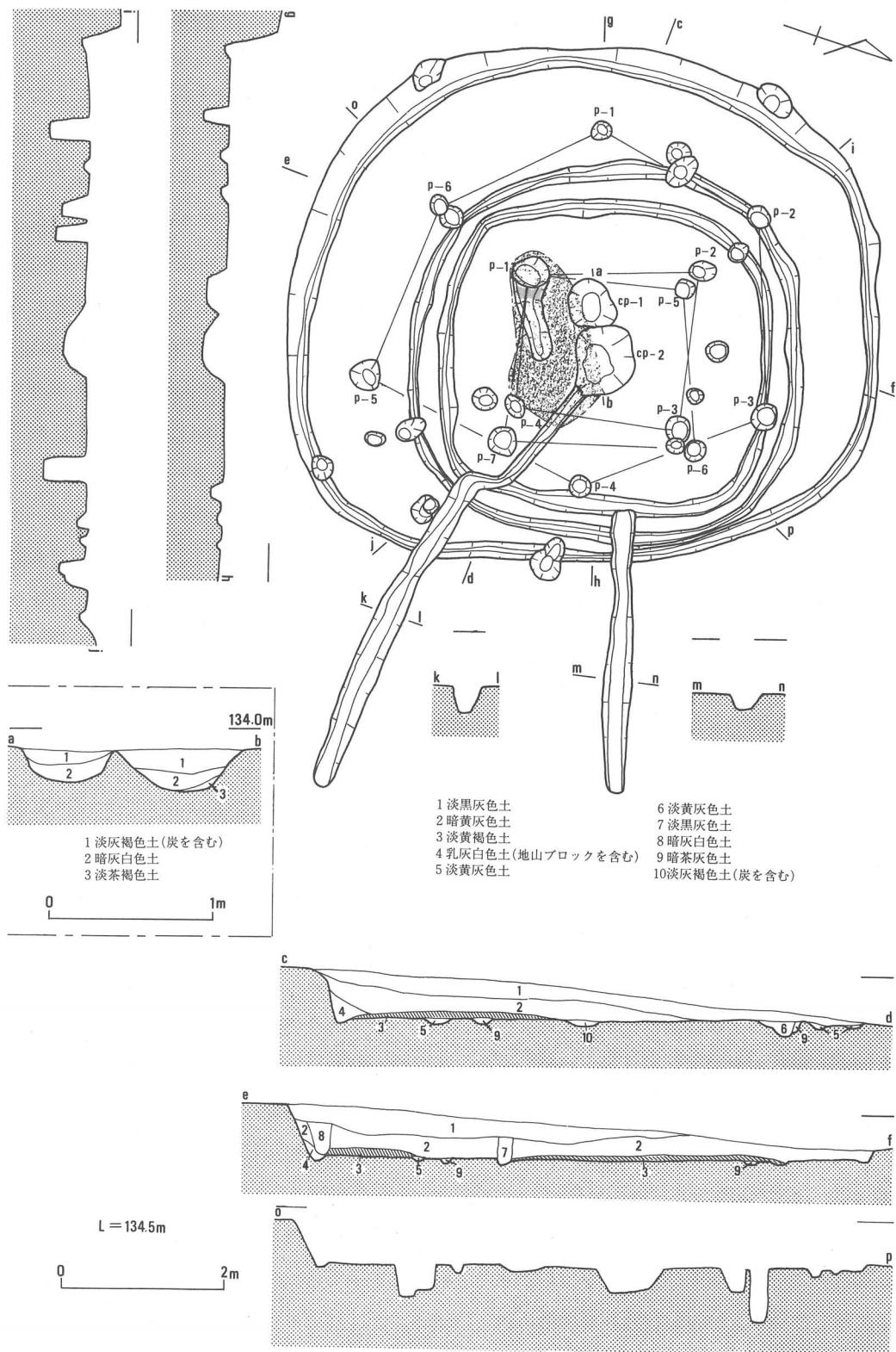
第56図 住居址3出土石器 (S = 1 : 2)

住居址4（第57図）

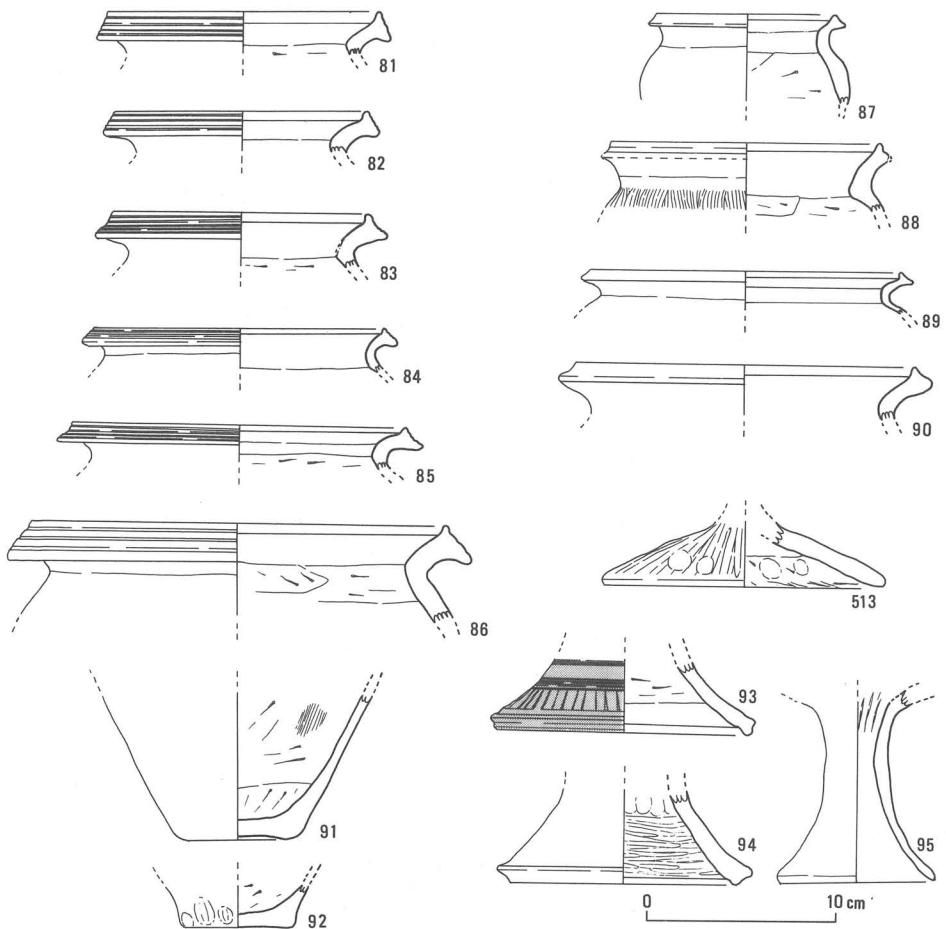
東西へ派生する尾根の頂部やや北西寄り、3号住居の北側約6mに位置する。2度にわたる拡張が行われた結果、3軒が重複した状況で検出された。最初の住居は、径約4.0mを測る隅丸方形4本柱の住居である。柱穴はP-1～P-4の4本で構成されている。径約76cmの不定円形の中央穴（CP-2）が住居のはば中に位置する。この中央穴の床面からの深さは最深部で約26cmを測る。埋土上層は淡灰褐色を呈し、炭を多く含んでいる。中央穴から住居の東側外方に向けて深さ約32cmの床溝が走る。最初の拡張は、CP-2を共有してほぼ同心円状になされ、長径約4.8mの円形住居を営んでいる。この時の柱穴も前回と同様に4ヶ所で認められ、P-1、P-5、P-6、P-7がこれに相当する。最後は、2度目の拡張時の住居と東壁をほぼ接して、西へやや広がるような形で拡張がなされている。径約6.8mの大形の円形住居となり、柱穴はP-1～P-6の6本柱である。柱間距離はそれぞれP-1～P-2が2.2m、P-2～P-3が2.4m、P-3～P-4が2.5m、P-4～P-5が2.9m、P-5～P-6が2.3m、P-6～P-7が2.2mを測る。本住居の遺構検出面から、住居址床面までの掘り形の深さは、西側で約60cmを測るが、東側は斜面のため壁体がほとんど流出しており、壁体溝がかろうじて遺存するのみである。本住居に伴うと考えられる中央穴はCP-1である。径は60cm程度の不整円形で、深さは床面から20cmと非常に浅い。CP-2と同様、埋土上層に炭を含む淡灰褐色土層である。CP-1、CP-2の2つの中央穴の南側付近には炭の集中区が検出された。遺物は床面及び埋土中より若干の土器が出土した。

住居址4出土土器（第58図）

81～90は甕形土器である。81～80の口縁端部はいずれも上下に拡張をみせながらもやや下方にひきのぼし気味に仕上げており、外面には明瞭な凹線文を施す。87～90の端部の特徴は先述したものと同様で、その外面をヨコナデで仕上げるタイプである。87は口径約9cmを測る小形のものである。胴部外面はナデ仕上げ、内面は粗いヘラケズリを施す。88の胴部外面にはタテ方向のハケ目が観察される。83・84の口縁部下端、87の頸部にはススが付着している。91・92は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。91は床面から出土した。外面は磨滅が激しいが、内面はヘラケズリで、ところどころにハケ目が残る。92の底面付近には指おさえの痕跡が顕著である。513は蓋形土器である。径14.4cmを測る。外面は全体に粗いタテ方向のヘラミガキを施し、部分的には指頭圧痕が観察される。内面はヘラケズリの後指でおさえて成形している。ところどころでひっかいたような刺痕が残り、縁辺にそってススが付着している。つまみ部分は欠損している。93～95は高杯形土器の脚部である。93は外面に数状の沈線を巡らし、その下部に刺突文を施している。脚端部はナデによりわずかに肥厚させる。外面全体に赤色顔料の塗布がなされている。94の外面はナデで仕上げており、下半に一部黒斑が認められる。内面はヨ



第57図 住居址4 平面・断面図 (S = 1 : 80)

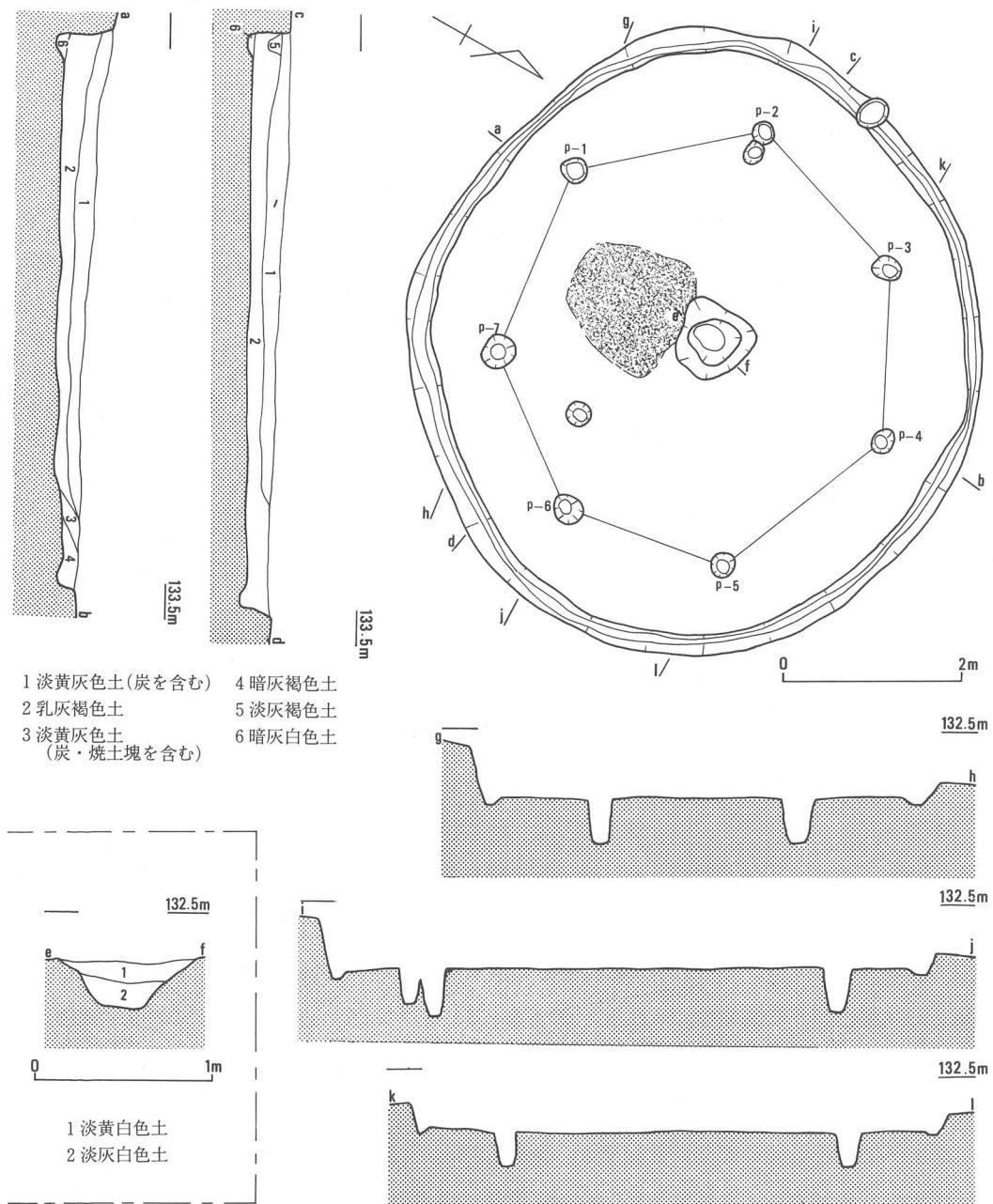


第58図 住居址4出土土器 ($S = 1 : 4$)

コ方向のヘラミガキ、その上半には指おさえによる凹凸が残る等、入念な仕上げである。器台あるいは脚台の可能性も考えられる。95は内外面とも磨滅が激しいため詳細は不明である。

住居址5（第59図）

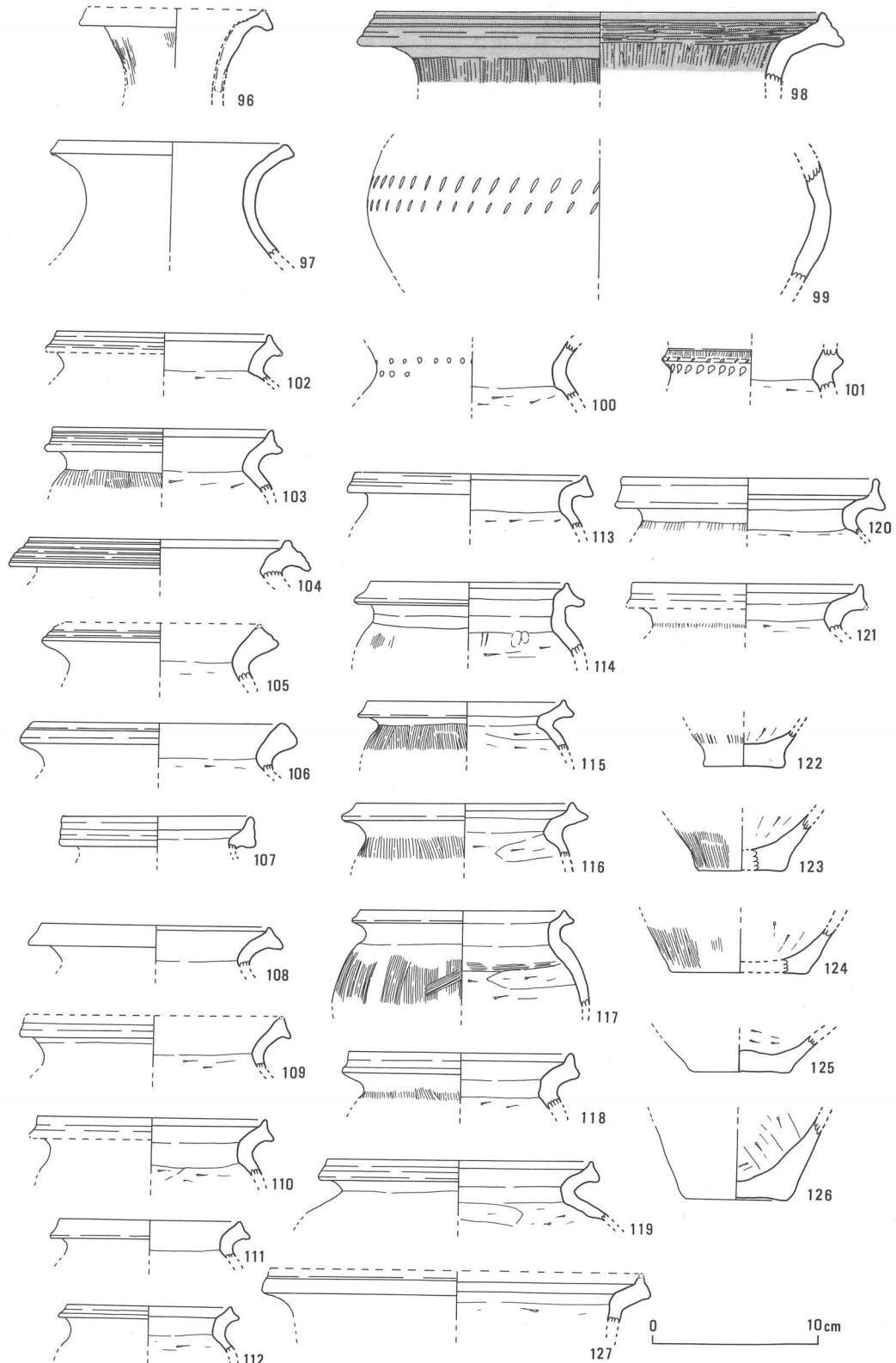
北東へのびる丘陵の鞍部に位置する。径約6.8mの大形の円形竪穴住居である。P-1～P-7の7本の柱穴により構成され、角柱間距離は平均して5.2mを測る。それぞれの深さも約40～50cmと一定しており、非常にしっかりとした柱穴である。遺構検出面から床面までの深さは最深部で約56cmを測るが、住居の東側は斜面のため埋土が流出している。床面の中央には中央穴が位置する。床面から約56cm程掘りくぼめたゆるやかな2段掘りを呈し、その中には淡黄白色と淡灰白色の埋土が堆積していた。中央穴のまわりで炭・灰の集中が認められた。また、床面周囲には壁に沿って幅約30cmの溝がめぐる。遺物は多数の土器・石器が、埋土中の散在した状態で検出された。



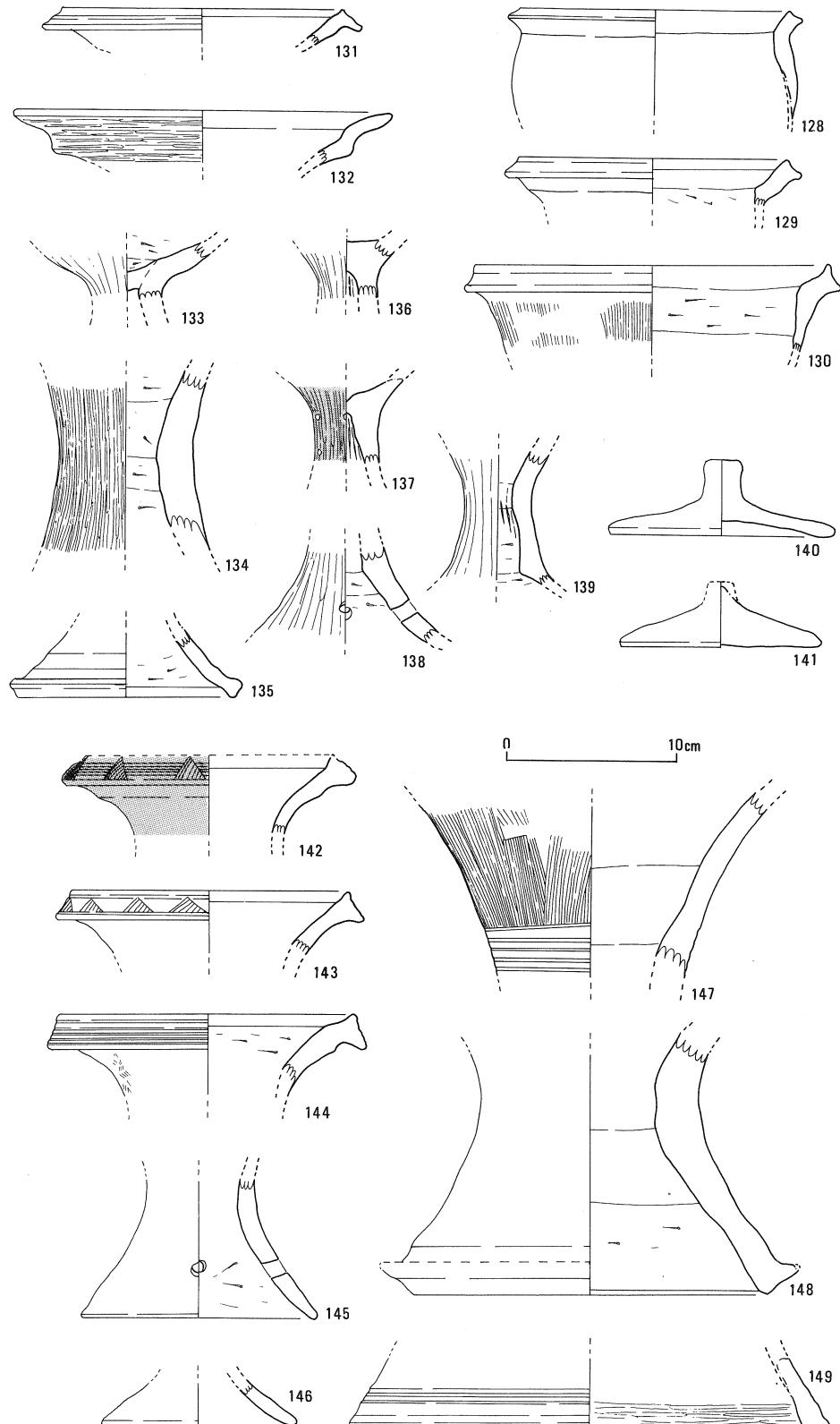
第59図 住居址5平面・断面図 (S = 1 : 80)

住居址5出土土器 (第60・61図)

96~99は壺形土器である。96・97は長頸壺。両者とも磨滅が著しく調整等詳細は不明であるが、96の外面にはかすかにタテ方向のハケメが残る。97は床面から出土した。98は口径約26.4cmを測る。口縁端部を上下に肥厚させ、端面には明瞭な3状の凹線文をもつ。頸部外面上半はタテ方向のハケメ、内面はタテ方向のヘラミガキの上半にさらにヨコ方向の細かなヘラミガキを施す等入念に仕上げている。内外面とも赤色顔料の塗布が顯著である。99は胴部片である。



第60図 住居址5出土土器(1) (S = 1 : 4)

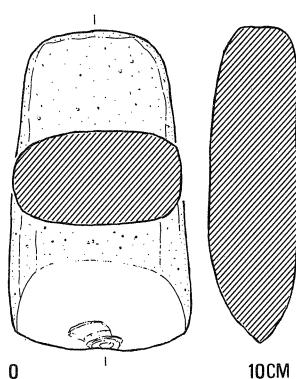


第61図 住居址5出土土器(2) (S = 1 : 4)

内外面とも磨滅が激しいが、最大径部に2列の刺突文が巡る。100は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片と思われる。屈曲部外面は2列の円形刺突文が飾られている。101も同様に頸部屈曲部付近の破片であろうか。ケズリ出しによる突帯のまわりを大小の刺突文で加飾し、内面は屈曲部以下をヘラケズリしている。102～122は甕形土器の口縁部である。これらは大きく、口縁部外面に凹線文を施すもの（102～107）と、ヨコナデで仕上げるもの（108～121）に分けられる。さらに先の住居址3出土の土器で分類したように、口縁端部を上下に肥厚させるAタイプ、下方にひきのばすBタイプ、上方に拡張させるCタイプの3つに分類できる。105・106・110・112はAタイプ、102～104・108・109・111はBタイプ、118・120・121はCタイプである。114は胴部上半から口縁部にかけてがまのびしたような特徴をもつ。117は胴部外面上半にハケ目を施し、胴部内面はヘラケズリ、その上半をハケ目で整える。122～126は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。外面をタテハケで仕上げるものと、ナデで仕上げるもの2種類がある。内面の調整はすべてヘラケズリ。127～130は鉢形土器と思われる。127の上方につまみ上げがちの口縁端部にはかすかな1条の凹線文が観察できた。131～139は高杯形土器である。132は浅めの杯部からゆるやかに屈曲して口縁部に至る。杯部外面はヨコ方向の細かなヘラミガキで仕上げている。133～139は脚部片である。外面調整のほとんどがタテ方向のヘラミガキで、135のみナデ仕上げとなっている。134は器壁が厚くしっかりとした脚部である。137は外面を丁寧なヘラミガキの後、円形刺突文で加飾している。さらに外面全体には赤色顔料の塗布が顕著である。138は4方向に円形の透し孔が穿たれる。140・141は蓋形土器である。両者とも磨滅が著しい。142～149は器台形土器である。142～144は口縁部。いずれも端部の形状は上下に肥厚させるタイプであるが、その外面は凹線文の後鋸歯文を巡らすもの（142）、上下端に凹線文を施しその間を鋸歯文で飾るもの（143）、数条の凹線文を施すのみのもの（144）とバラエティーに富む。144の胴部にはかすかなハケ目が残る。145は脚部であるが、内外面とも磨滅が激しいため詳細は不明である。2方向に透し孔が穿たれ147は胴部片で、ゆるやかにラッパ状にひらく器形を呈す。外面中程には5状の凹線文が巡り、その上方にはタテハケが施される。148・149は脚裙部。148は磨滅が激しいが、肉厚な器壁を有す。149の外面には2状の凹線文が巡り、内面はヘラミガキで仕上げている。

住居址5出土石器（第62図）

砂岩製の磨製石斧である。最大長12.6cm、最大幅7.2cm、最大厚3.9cmを測り、刃角は約80度である。刃部中央には、敲打痕が認められた。



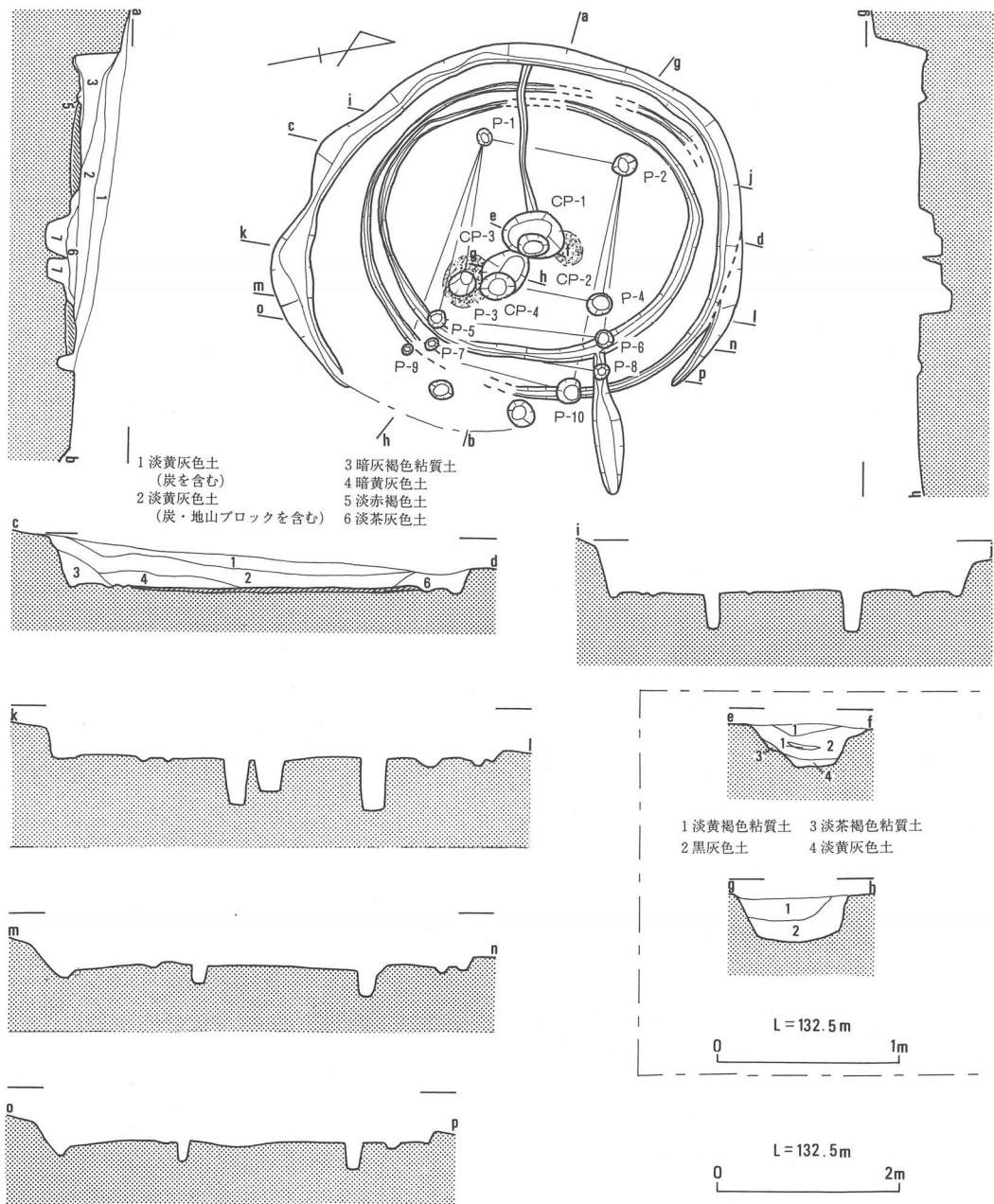
第62図 住居址5
出土石器（S = 1 : 3）

住居址 6 (第63図)

丘陵頂部の北東斜面、住居址 5 の東側約1.5mに位置する。3度にわたる拡張が行われた結果、4軒が重複した状況である。最初の住居は、長径約3.6m、短径約2.9mの小規模な円形住居である。主柱はP-1～P-4の4本柱で構成されている。床面の中央には卵形で深さ48cmを測る中央穴が位置する(CP-1)。この中央穴から西方の壁体溝にかけて幅約8cm、深さ約4cmと非常に小規模な床溝が走る。最初の拡張はこの中央穴を中心に、最初の住居の壁体溝の外周にはほぼ沿う形で壁を新設して行われている。柱穴はやはり4ヶ所に認められた(CP-1～CP-2～CP-5～CP-6)。壁体溝は西側を半周し、残りの部分は消失している。さらに最初の住居の壁体溝の北側に幅約12cmの小規模な壁体溝を新設することによって2度目の拡張がなされている。ところどころ最終段階のものと重複しており全周はしない。今回も4本柱の住居である。P-1、P-2を共有して、さらに東側へP-7、P-8を新設している。中央穴はCP-3である。そして最終段階は長径4.9m、短径4.4mの楕円形住居である。柱穴はP-1～P-2～P-9～P-10の4本柱で長方形状の配置を呈する。中央穴はCP-4である。埋土は6層に分層され、上層は淡黄灰色土で炭を多く含む。中央穴の周辺には焼土面の広がりが2ヶ所にわたって検出された。遺物は床面及び埋土中より多量の土器が出土している。

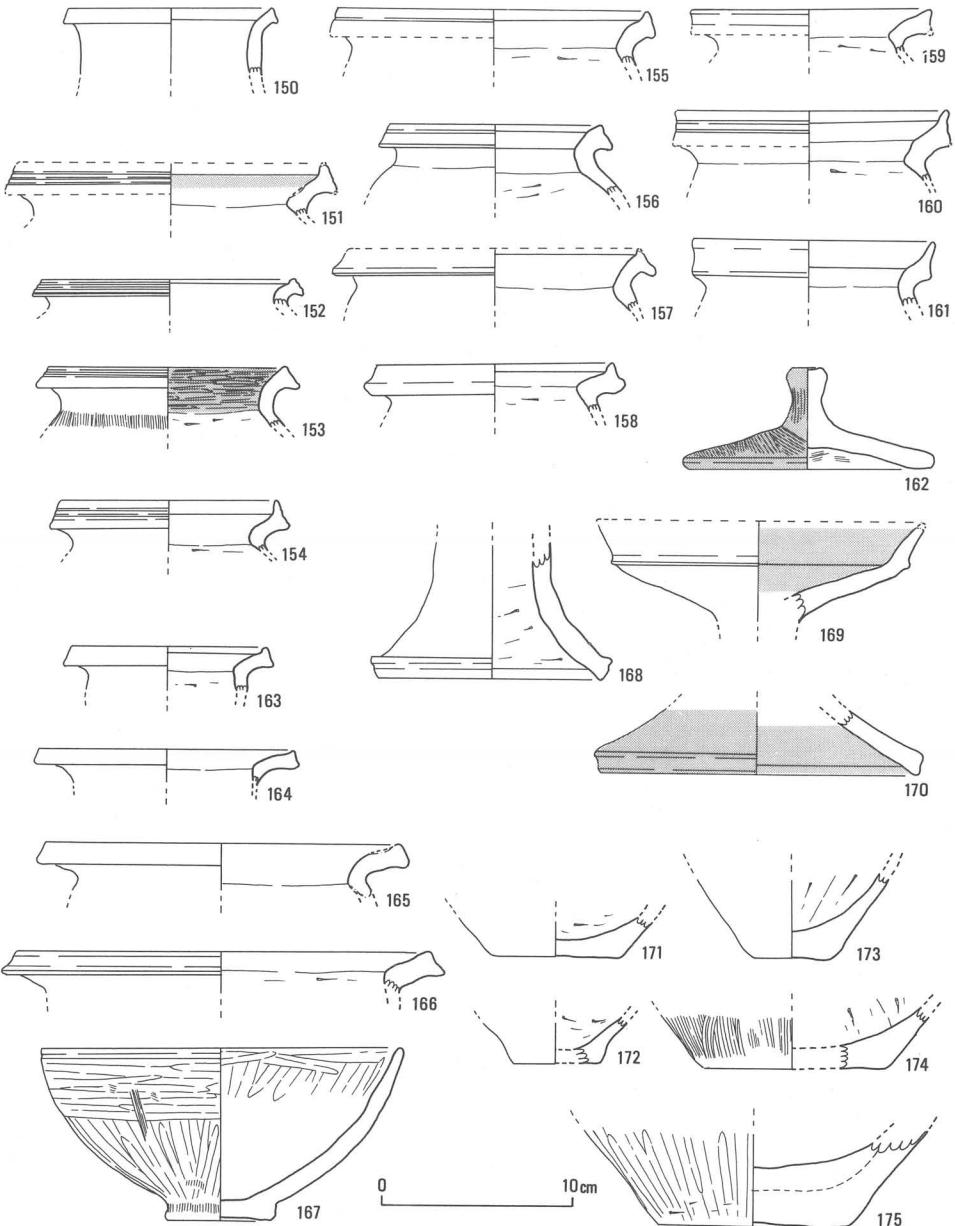
住居址 6 出土土器 (第64図)

150は壺形土器である。比較的長めの頸部をもち、口縁端部は上下にわずかに肥厚させている。内外面とも磨滅が激しいため調整等は不明である。151～161は甕形土器の口縁部である。このうち口縁端面に数状の凹線文を施すものは151～156、160、残りは強いヨコナデで仕上げるタイプである。153は床面からの出土。下方にひきのばしぎみの口縁端部を有す。胴部外面はハケ目、その上半はナデを施す。また口縁部内面には細かいヘラミガキや赤色顔料の塗布が認められる等全体的に丁寧な仕上げである。154の口縁部はやや上方にひきのばす。また155の端部は上下肥厚、156～158は下方にひきのばす。160・161は上方につまみ上げる等の各特徴をもつ。162は床面からほぼ完形で出土した蓋形土器である。外面は赤色顔料の塗布が全面に及ぶ。粗い斜方向のハケ目を施す。端部は指ナデによってまるく仕上げている。内面にも細かな単位のハケ目が乱方向に残る。縁辺に沿ってススが付着している。163～167は鉢形土器である。163・164は中でも小形の部類に入る。いずれも磨滅しているが、口縁端部はヨコナデで仕上げていると思われる。167は床面出土である。ナデによって成形した脚台部と椀状を呈する器形を有し、口形は約18.4cmを測る。淡黄褐色の精緻な胎土を用いる。外面下半にタテ方向のヘラミガキを施した後、その上半を再びヨコ方向のやや細かいヘラミガキで仕上げている。脚部と胴部の接合部にはハケ目が部分的に残り、外面にもところどころハケ目の痕跡が認められた。内



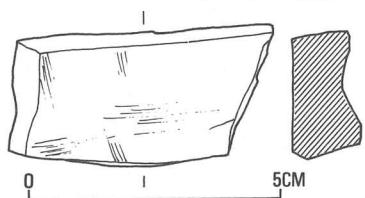
第63図 住居址6平面、断面図 ($S = 1 : 80$)

面は全体的にナデ仕上げで、中程より上部をタテ方向のヘラミガキ、さらにその上半をヨコ方向のヘラミガキで入念に仕上げている。169も床面出土、高杯形土器の杯部である。浅めの杯部から屈曲して斜め上方に開くが、口縁端部は欠損している。屈曲部分ではつまみ出して突帯部分をつくり出す。内外面とも磨滅が激しいが、内面には全面に赤色顔料の塗布が推定される。168・170は高杯形土器あるいは器台形土器の脚部片である。168の外面はナデ、内面はヘラケヅリを施している。脚端部は上下に肥厚させ、端面はヨコナデで仕上げている。170は内外と



第64図 住居址6出土土器 ($S = 1 : 4$)

も磨滅が激しいため詳細は不明であるが赤色顔料の塗布がかすかに認められた。171～175は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。175の外面はタテ方向の粗いヘラミガキで仕上げている。



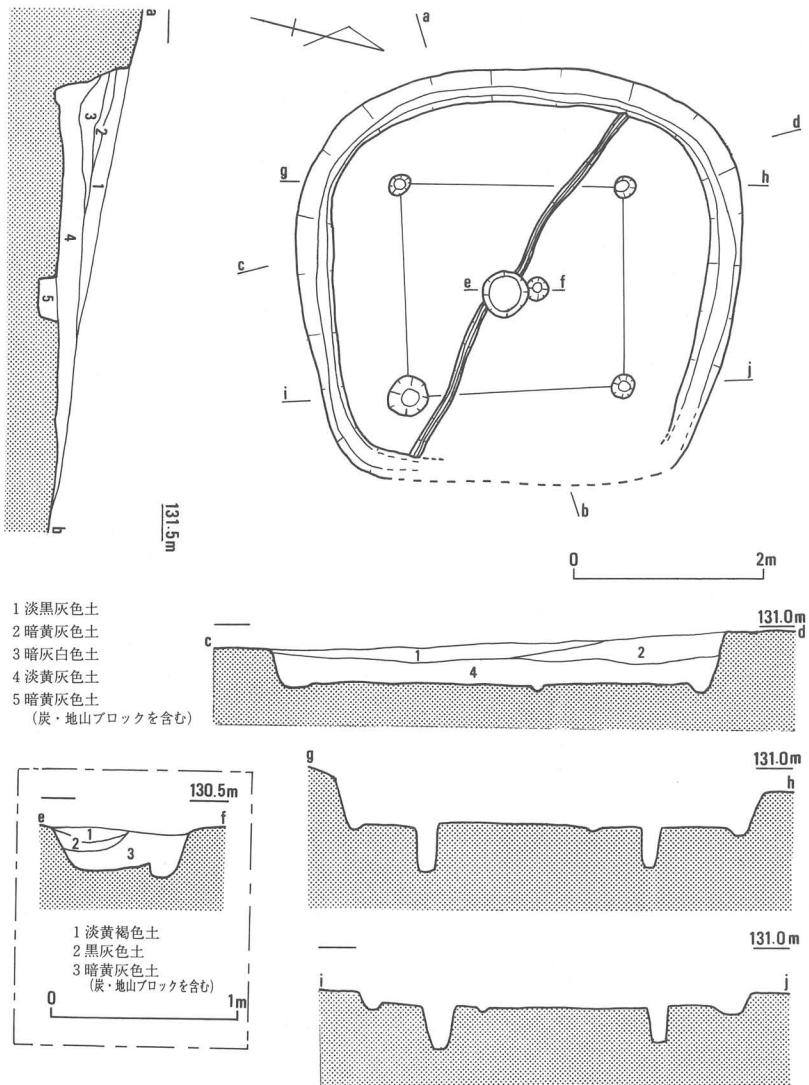
住居址6出土石器 (第65図)

埋土中より出土した粘板岩製の砥石である。砥面は表面1面だけの使用である。

第65図 住居址6出土石器 ($S = 1 : 3$)

住居址7（第66図）

北東へのびる丘陵の東側斜面に位置する。径約4.6mの隅丸方形を呈す竪穴住居である。床面の周囲には壁に沿って壁体溝が巡るが、東側は斜面のため流出しており壁は遺存しない。住居内には、ほぼ方形に4個の柱穴が等間隔に配されている。柱穴の深さは、いずれも床面から45cm程度のしっかりとしたものである。床面の中央には円形の中央穴が位置する。深さは床面から25cmと比較的浅いが、埋土は3層に分層され炭化物を多量に含む。この中央穴から東西方向に床溝が走る。

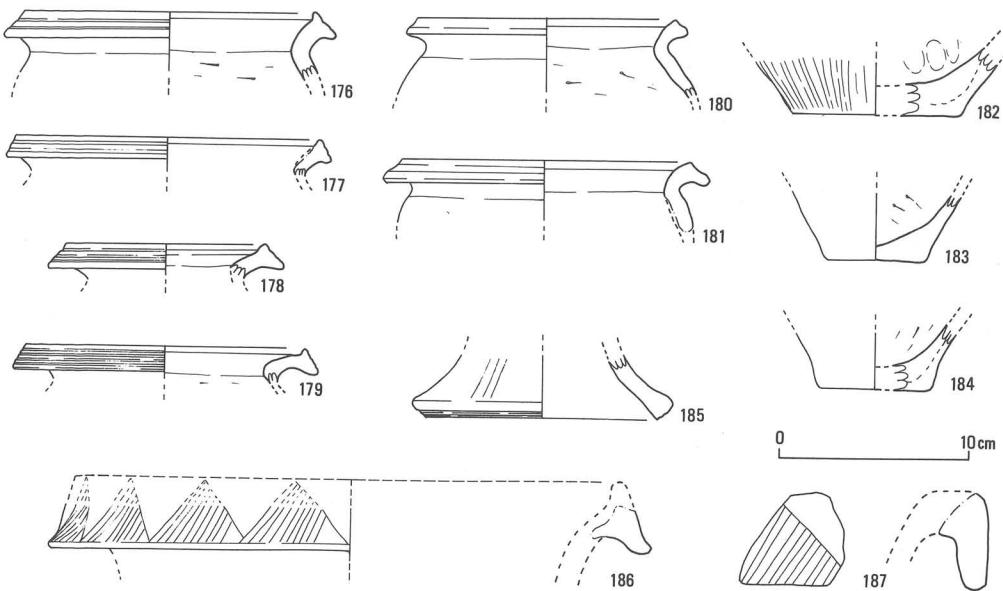


第66図 住居址7平面・断面図 (S = 1 : 80)

両者とも幅約8cm、深さ約6cmと非常に小規模なもので、壁体溝に取り付いて解消される。若干量の土器・石器が埋土中より検出された。

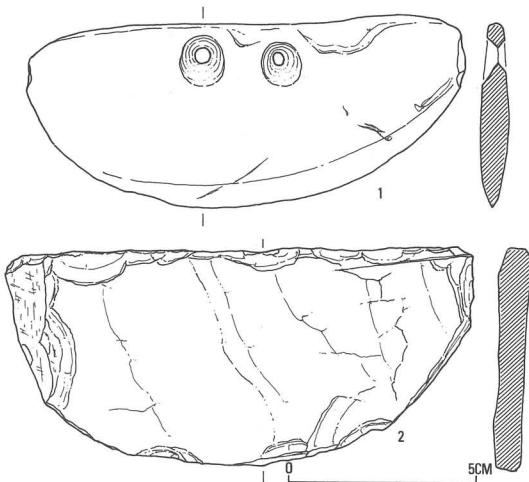
住居址7出土土器（第67図）

176~181は甕形土器である。口縁端面に数条の凹線文を施すタイプ（176~179）と、端面をヨコナデで仕上げるタイプ（180・181）に分けられる。さらに前者では、口縁端部を上下に肥厚させるもの（176・177）と、下方にひきのばしげみ（178・179）の2者が認められた。178は口径がわずか9.6cmという小形のものである。180・181の口縁端部も下方にひきのばす特徴をもち、181は胴のあまり張らない器形を呈す。182~184は壺形土器あるいは甕形土器の底部である。精緻な胎土でつくられた182の外面は粗いタテ方向のハケ目の後指ナデにより仕上げ



第67図 住居址7出土土器 ($S = 1 : 4$)

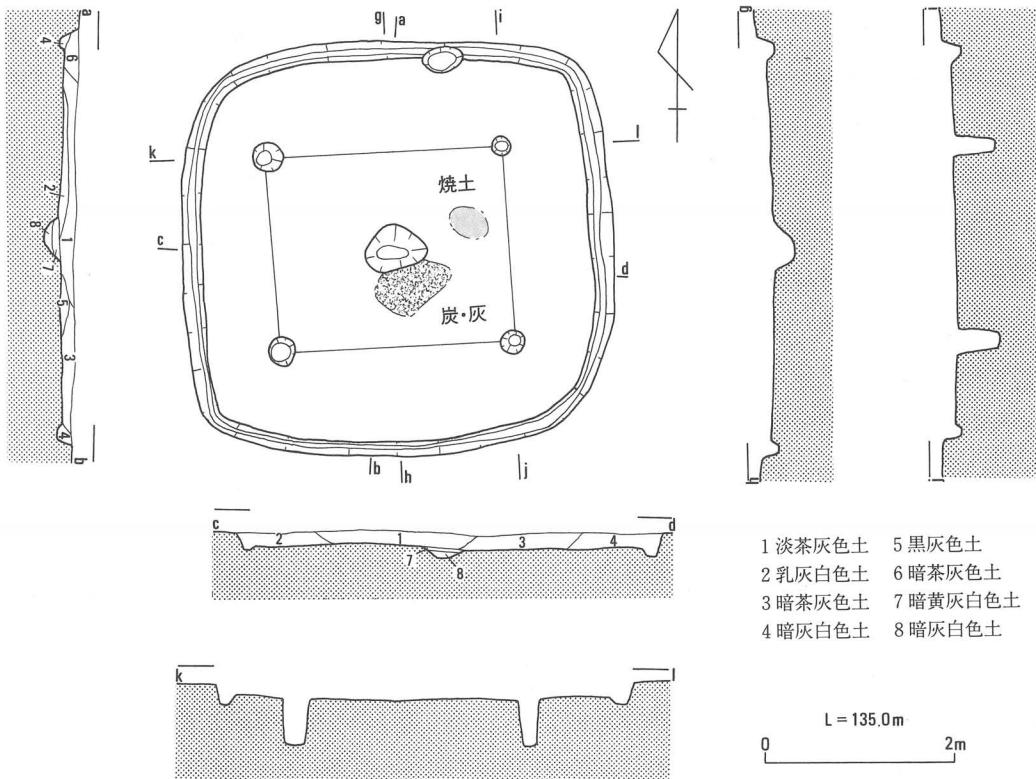
ている。内面は丁寧な指おさえの痕跡が観察された。185は高杯形土器の脚部と考えられる。脚端部は肥厚させ丸くおさめており、外面には2条の浅い凹線文がめぐる。その上部には櫛描文の名残りと思われるタテ方向の直線文がかすかに残る。186・187は器台形土器の口縁部片である。両者とも小片の上、磨滅しているがかすかに鋸歯文が観察された。



第68図 住居址7出土石器 ($S = 1 : 2$)

住居址8 (第69図)

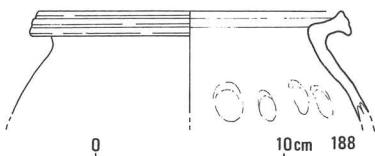
北東と北西にのびる丘陵のつけ根部分、丘陵のほぼ頂部平坦面に位置する。一辺が径4.4mを測る方形の堅穴住居である。現地表面から床面までの深さは16cmと非常に浅い。床面の中央には長径約64cmの不整橢円形の中央穴が位置する。床面を約20cm程度掘りくぼめ、断面は浅い皿状を呈す。中央穴の周囲には焼土・炭化材が集中して認められた。この中央穴を取り囲むように長方形状に4個の柱穴を配する。長辺は約2.5m、短辺は約2mを測る。また床面の周囲には壁にそって壁体溝が巡る。埋土中より若干量の土器と鉄器1点が出土した。



第69図 住居址8平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

住居址8出土土器 (第70図)

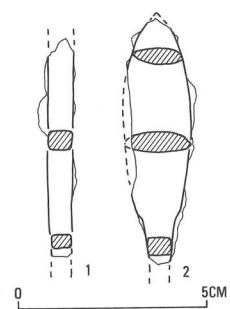
図示できるものは188の甕形土器1点にすぎない。上下にやや拡張する口縁部を有し、端面には凹凸のはっきりとした2状の凹線文が巡る。器壁は荒れており調整等の詳細な観察は困難であるが、胴部内面上半に指頭圧痕が顯著に認められた。



第70図 住居址8出土土器
($S = 1 : 80$)

住居址1・8出土鉄器 (第71図)

1は住居址1から、2は住居址8から出土した鉄器である。紙面の都合上、ここでまとめて説明を加えることにする。1は、鉄釘あるいは鉄鎌の基部と思われる。両端を欠損しているが、現存長5.8cm、最大厚6mmを測り、断面は長方形を呈する。埋土中より出土した。2は鉄鎌であると考えられる。残存長6.5cm、最大幅1.5cmを測り、平面形は柳葉形を呈する。弥生時代の鉄器の類例としては少ないものである。



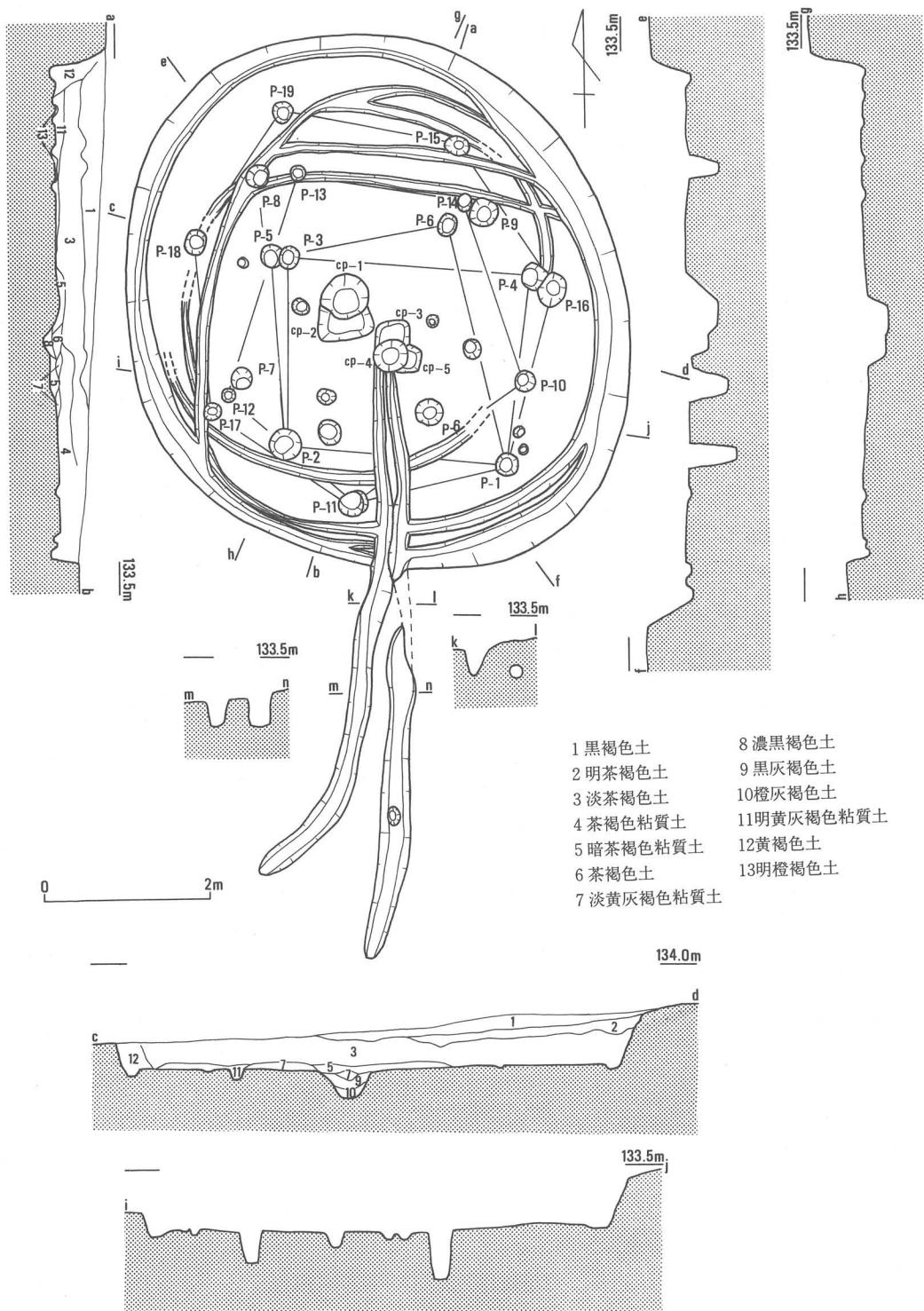
第71図 出土鉄器
1.住居址1 2.住居址8
($S = 1 : 2$)

住居址9（第72図）

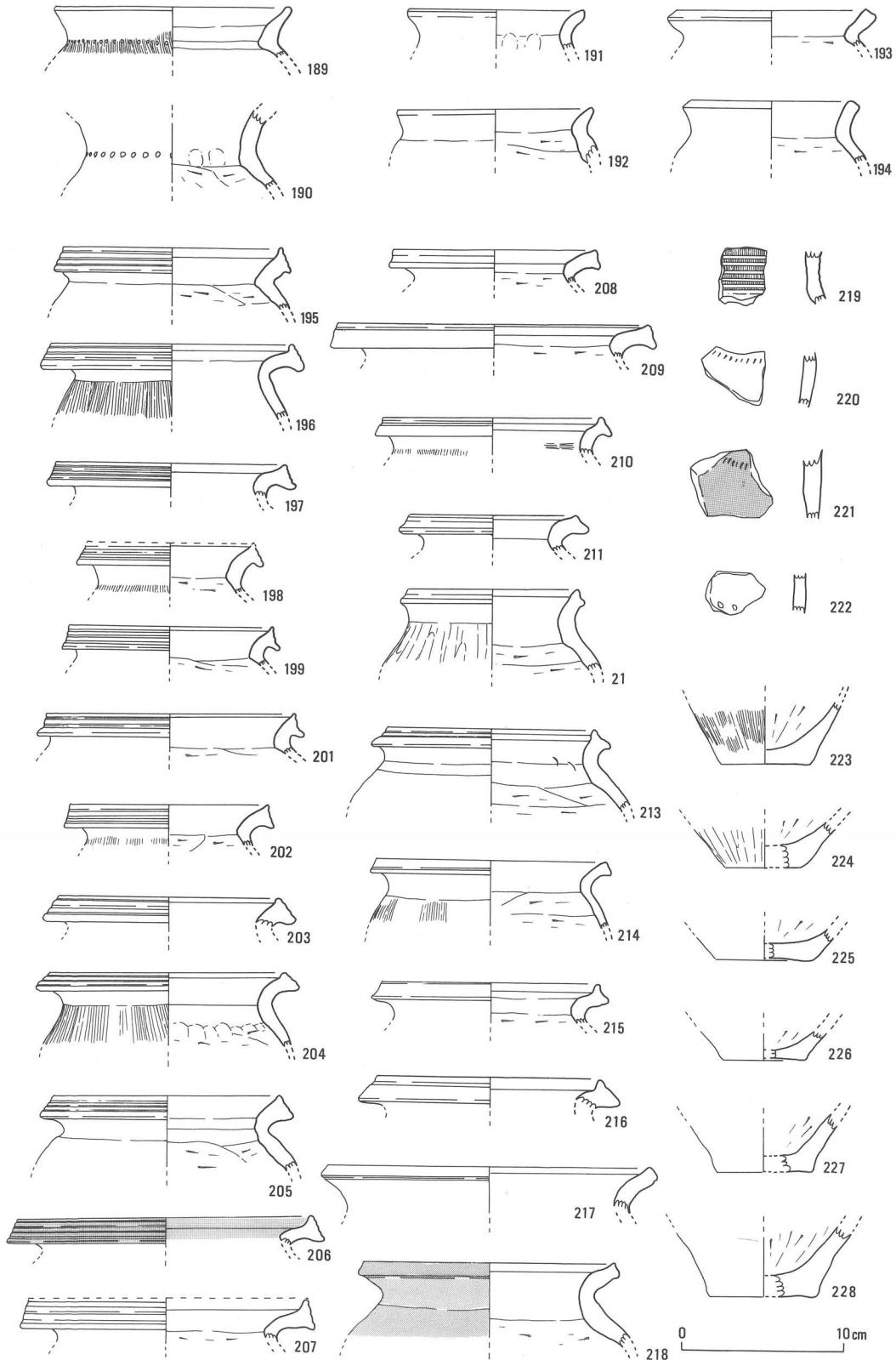
北西にのびる丘陵のつけ根部分、G-5～H-5区にかけて位置する。この住居址は、床面北側の壁体溝の検出状況から4回にわたって順次拡張されていったことが窺える。しかし、各壁体溝が住居址内のところどころで不明瞭となるため必ずしもその全貌は明らかでないが、最終段階では長径6.28m、短径5.96mのやや不整形な円形の大形住居となる。いずれの場合も地面を60cm程度掘りくぼめて住居を構築している。最初の段階はCP-5を中心穴とし、P-1、P-2、P-3、P-4の4本柱で構成されるものである。この住居址に伴う壁体溝は、1番内側の溝と考えられ復元すると長径4.6m、短径4.2mの円形住居となる。次に若干いびつはあるが、P-1、P-2、P-5、P-6の4本柱の住居へと拡張がなされる。中央穴はCP-4。続いてP-6、P-7、P-8、P-9の4本柱を有する住居となり、この際の中央穴はCP-1と考えられる。さらにP-10、P-11、P-12、P-13、P-14の5本柱で構成される大形住居へと拡張は続く。この住居の中央穴はCP-3である。最終段階では、P-1、P-11、P-17、P-18、P-19、P-15、P-16の7本柱の大形住居となる。中央穴はCP-2と思われる。以上のように、4回の拡張に伴いその都度中央穴も移動していることが判る。中央穴はいずれも床面から30cm前後地面を掘りくぼめ、底面は水平を意識している。埋土はレンズ状の堆積を示す。平面形は円形と方形の2タイプに分かれる。この中央穴から南北方向に2本の床溝が走る。両者とも幅約20cm、深さ32cm程度のものでこのうち東側の床溝については住居との取り付き部分で暗渠となっている状況が確認された。住居址の埋土は13層に層され、水平な堆積の様子が断面から観察できる。遺物は埋土中より多量の土器片が、各地点に散在した状態で出土した。

住居址9出土土器（第73・74図）

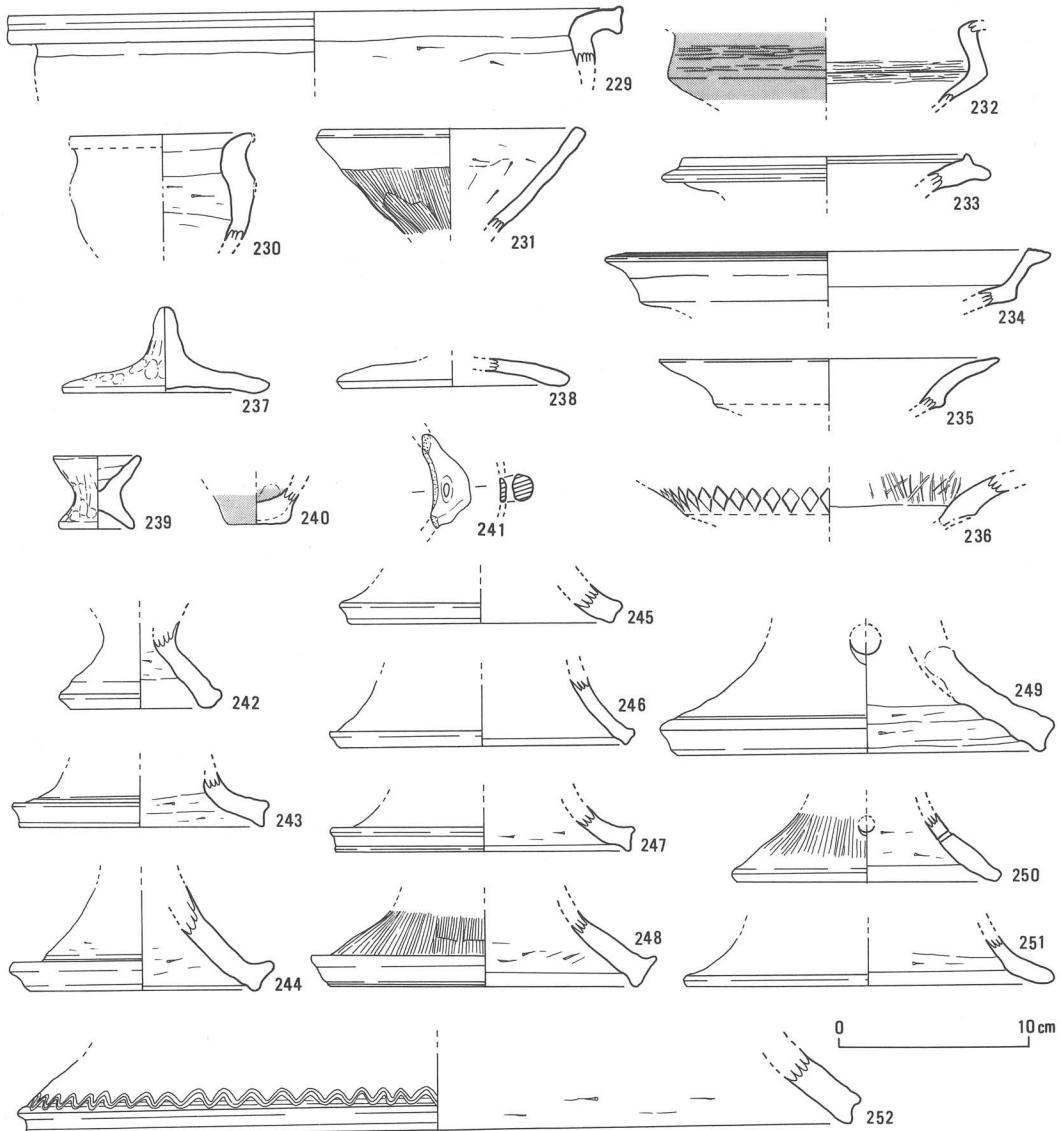
189～218は壺形土器の口縁部と思われる。189～194は端部を拡張せずまるくおさめるものである。このうち189・190は屈曲部に円形の刺突文を巡らす。191～194の外面はナデにより仕上げる。193・194の口縁端部は水平を意識しながらも斜め下方にまるくおさめている。195～207は口縁端部外面に数条の凹線文を施すタイプである。その中でもさらに端部の断面形態により、上下に肥厚・拡張させるもの（195・196）をAタイプ、下方にひきのばすもの（197～201、203、204、206）をBタイプ、上方拡張を意識したもの（207）をCタイプの3種に分類できる。胴部外面は、タテ方向のハケ目で仕上げるものが目立つ。208～218は口縁部をヨコナデで仕上げる。あるいは凹線文を施した後にナデ消す手法をとるものである。これらの中には前述のAタイプに対応するもの（208、209、214、217、218）と、Bタイプに対応するもの（210～213、215、216）の2種が認められた。212の胴部外面はタテ方向の粗いヘラミガキで仕上げている。胴部内面上半は基本的にはヘラケズリを、個体によっては爪形、ハケ目痕が残るものがある。219



第72図 住居址9平面・断面図 (S = 1 : 80)



第73図 住居址9出土土器(1) (S = 1 : 4)



第74図 住居址9出土土器(2) (S = 1 : 4)

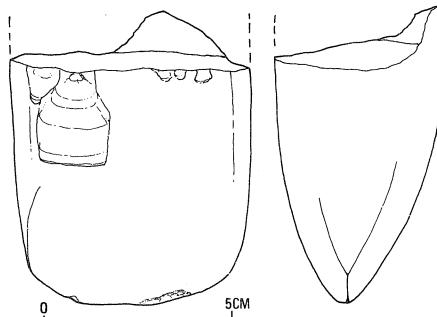
～222はいずれも小破片で、外面に刺突文、細かいタテハケの上に凹線文等が観察できる。206の内外面、218、221の外面には赤色顔両の塗布が認められた。223～228の壺形土器あるいは甕形土器の底部である。外面はタテハケで仕上げるものと、ナデで仕上げるものとに分けられる。229・230は鉢形土器である。229は口径が32cmにも及ぶ大形のもので、上下に若干拡張する口縁部を有する。外面は凹線文を施した後、ナデ消したものと思われる。これに比べて230は口径7.6cm程度の小形のものである。器壁は厚くてごつい作りである。231は椀形土器と思われる。脚端部は欠損しているが、杯部は斜め上方にまっすぐ開いて口縁部に至る。端部はまるくおさめている。外面は下半をタテ方向のハケ目、その上半をヨコナデで仕上げている。内面はヘラケズリであろうか、乱方向の粗い砂粒の動きが観察できる。232～236は高杯形土器の杯部

片である。232は浅い坏部から屈曲、内傾して口縁部に至る。内外面ともヨコ方向のヘラミガキが施されており、外面には赤色顔料が塗布されている。236はゆるく屈曲して斜め上方に開く形状を呈するが、端部は欠損している。外面は山形櫛描文を2段にわたって施し加飾する。内面は乱方向の粗いヘラミガキの痕跡が残る。茶褐色の独特の胎土で、住居址6からも、似した破片が出土している。237、238は蓋形土器である。237は口径8.8cm程度の小形のもので、外面には指頭圧痕による凹凸が顕著に残る。239は手づくね土器である。脚部から屈曲して斜め上方でまるくおさめる。口径4cm、器高約3.8cmの非常に小形のおちょこ形を呈するが、用途は不明である。外面には粗いヘラミガキ状の单位と指頭圧痕が残る。240は小形土器の底部である。内外面ともナデで仕上げ、赤色顔料を塗布している。242～252は高杯形土器あるいは器台形土器の脚部である。248の脚端部は上下に拡張を示し、外面はヨコナデにより仕上げている。脚部外面には丁寧なタテハケを施す。249、250は円形の透し孔が穿たれる。252の脚端径は40cmにも及ぶ大形のもので、裾部外面には浅い凹線文を施した後、波状文が加飾している。内面の調整はヘラケズリ。

先にも述べたように、住居址9では多量の土器が埋土中より各地点に散在した状態で出土した。したがって各土器とそれに伴う住居の関係についてはいまひとつ不明瞭な結果となった。しかし、以上で述べた出土土器から認めうる若干の時期幅は、本住居で行われた4回の拡張を確実に反映しているものと思われる。

住居址9 出土石器（第75図）

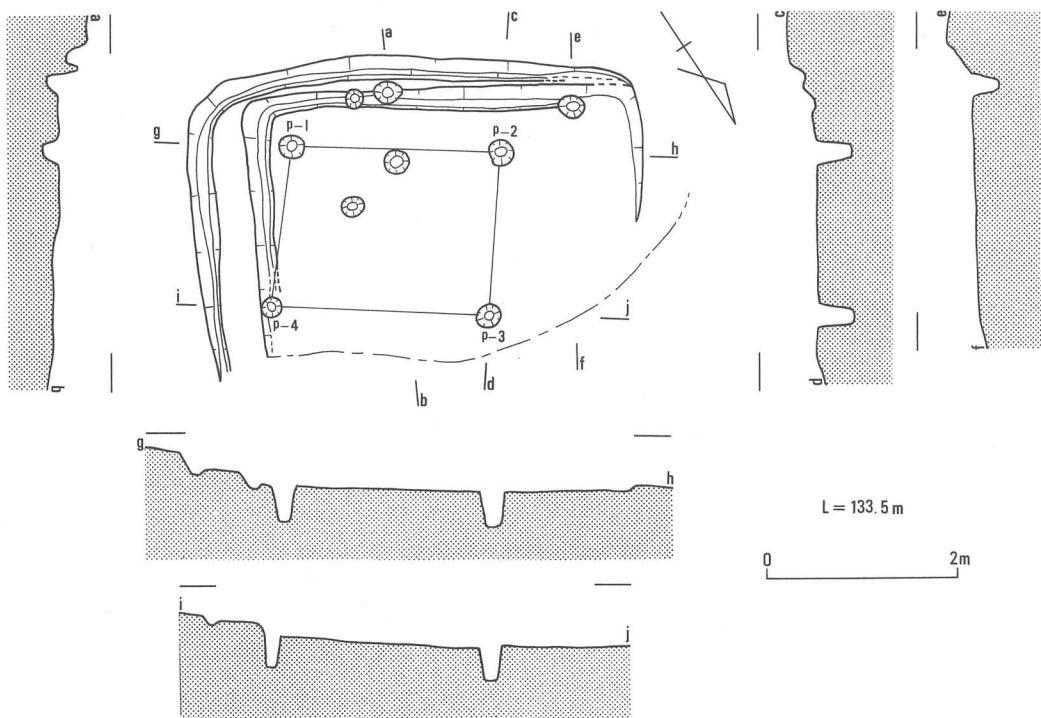
埋土中より出土した玢岩製の磨製石斧である。頭部は欠損しているが、現存長で7.7cm、最大幅3.9cm、刃角は75度を測る。欠損後、何らかの剝離が及んでいる痕跡が表面の敲打痕から判る。また刃部の先端に残る細かい使用痕や刃各の鋭さ等から、この石器が頻繁に使用されていた様子が窺えるといえよう。



第75図 住居址9 出土石器

住居址10（第76図）

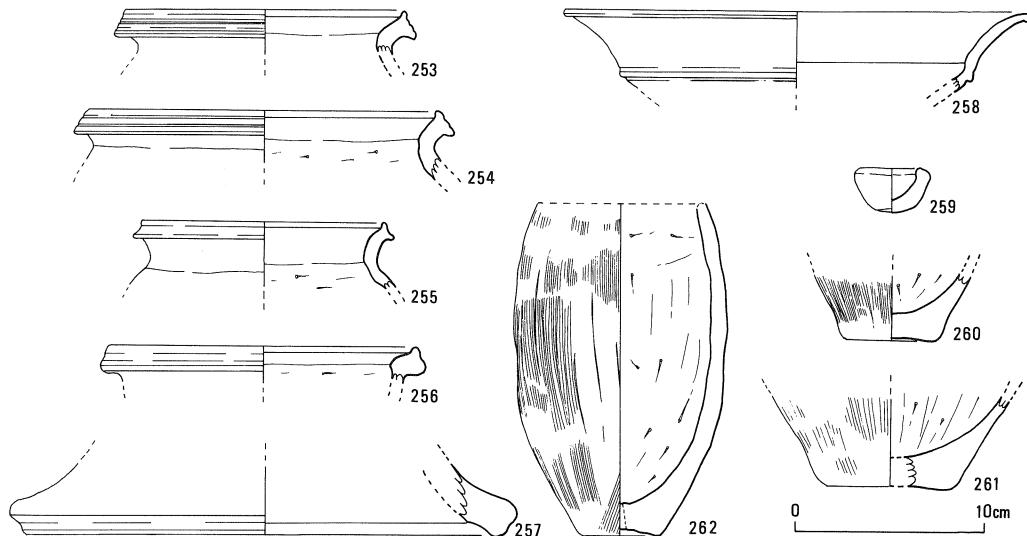
北西へのびる丘陵の北斜面寄り、住居址9の北側約3mの所に位置する。住居をめぐる周溝のうち、西、北側部分は自然傾斜によって解消されている。残存部分で一辺が約4.8mを測る方形住居と推定される。床面のほぼ中央には4個の柱穴が位置する。それぞれの深さは、床面から約40cmとほぼレベルをそろえて方形に配される。壁体溝の東、北部分のすぐ内側にもう1本溝が巡るが、この溝に伴う柱穴は検出されなかった。また、中央穴に推定されるピットも確認できなかったことから、本遺構は住居址というよりもむしろ作業場的性格を有する可能性がある。遺物は埋土中より、若干の土器・石器が出土した。



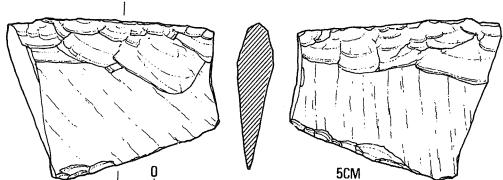
第76図 住居址10平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

住居址10出土土器（第77図）

253～255は壺形土器の口縁部である。いずれもやや下方にひきのばし気味の端部を有し、その外面は2～3状の凹線文を施すもの（253、254）と、ヨコナデで仕上げるもの（255）に分けられる。256は鉢形土器である。上下に肥厚させる口縁部は外面をヨコナデで仕上げている。口縁部から胴部にかけての内面は鋭く屈折し、以下をヘラケズリで調整する。257は器台形土器の脚部である。258は、浅い椀状の杯部から屈曲してゆるく外反しながら上方にたちあがる形状を呈す高杯形土器の杯部である。口縁端部は外方にややつまみ出した感じでまるくおさめている。屈曲部外面には強いヨコナデにより稜をつくり出している。全体的に薄手でシャープなつくりである。259はおちょこ形の手づくね土器である。口径は2.4cmと非常に小さい。内外面とも指ナデにより仕上げている。260、261は壺形土器あるいは壺形土器の底部である。いずれも外面をタテ方向のハケ目、内面にヘラケズリを施している。262は甌形土器と思われる。砲弾状の細長い胴部を有する。口縁端部は欠損しているが、明確な口縁部はもたず素縁におわるものと推定される。外面は全体にタテ方向のハケ目が施され、ところどころにヘラで搔いたような長いスジの痕跡がある。さらに器面には指ナデによる凹凸が顕著に残る。内面は乱方向のヘラケズリが施されている。底部は若干上げ底気味になっており、中心には外面からの穿孔が認められた。



第77図 住居址10出土土器 (S = 1 : 4)



第78図 住居址10出土石器 (S = 1 : 2)

住居址10出土石器 (第78図)

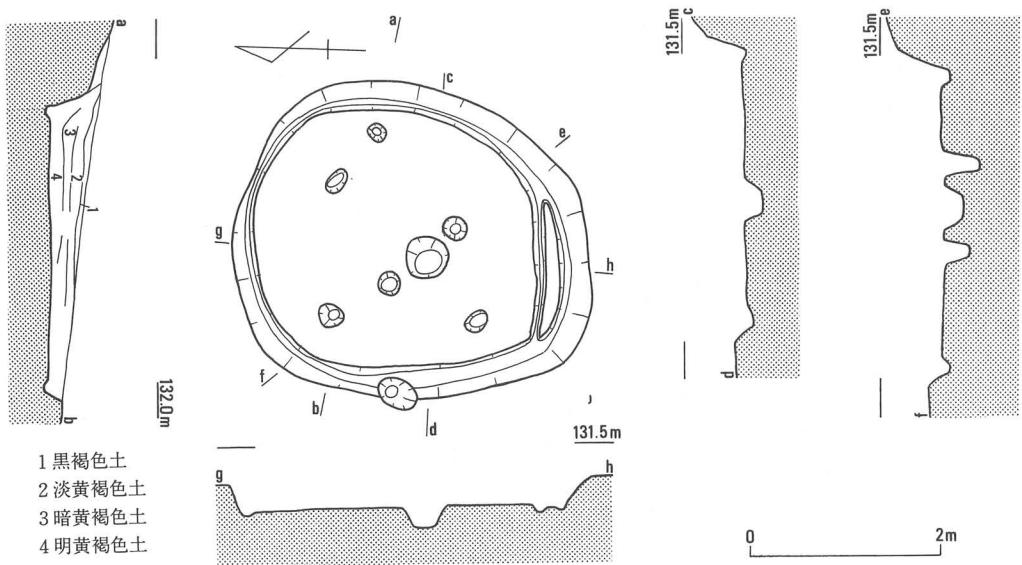
打製石庖丁の欠損品であると思われる。石材はサヌカイトである。両側刃から表裏両面とも剥離が施されていること。尖頭形を呈することから、石槍の可能性も考えられる。

住居址11 (第79図)

北西にのびる丘陵の西側斜面、F-3区に位置する。長径約3.8m、短径約3.3mの楕円形を呈する小形の竪穴住居である。住居の周囲には幅12cm程度の壁体溝がめぐる。住居南側部分では内側にもう1本小規模な溝の重複が認められた。床面のほぼ中央には径約48cmの中央穴が位置する。床面からの深さは24cmと浅く、断面は逆台形を呈する。中央穴の両サイドにはほぼ東西方向に2つの小柱穴が検出された。他にも床面には数個のピットが検出されたが、柱穴の配置を示すものは認められない。本遺構は、規模が小さいことから住居址というよりもむしろ作業場的な性格を指摘できるが、類例の少なさから今回は住居址として分類した。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

住居址11出土土器 (第80図)

263・264・266は甕形土器である。263・264の口縁端部はいずれも斜め下方にひきのばすタイプ。263は端面には3条の凹線文を、264は凹線文を数条施した後ナデ消す方法をとる。266は胴部上半からゆるく屈曲し口縁部に至る。口縁端部は拡張せず、ヨコナデでまるく仕上げている。265は鉢形土器と思われる。ほぼ垂直にたち上がる胴部から屈曲して口縁部に至る。外

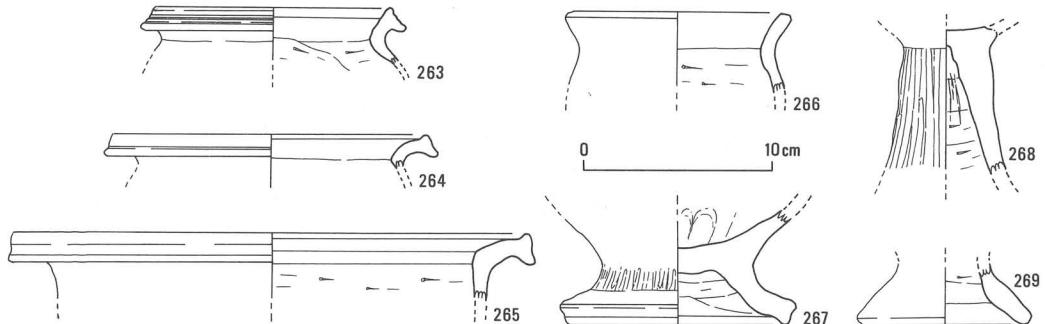


第79図 住居址11平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

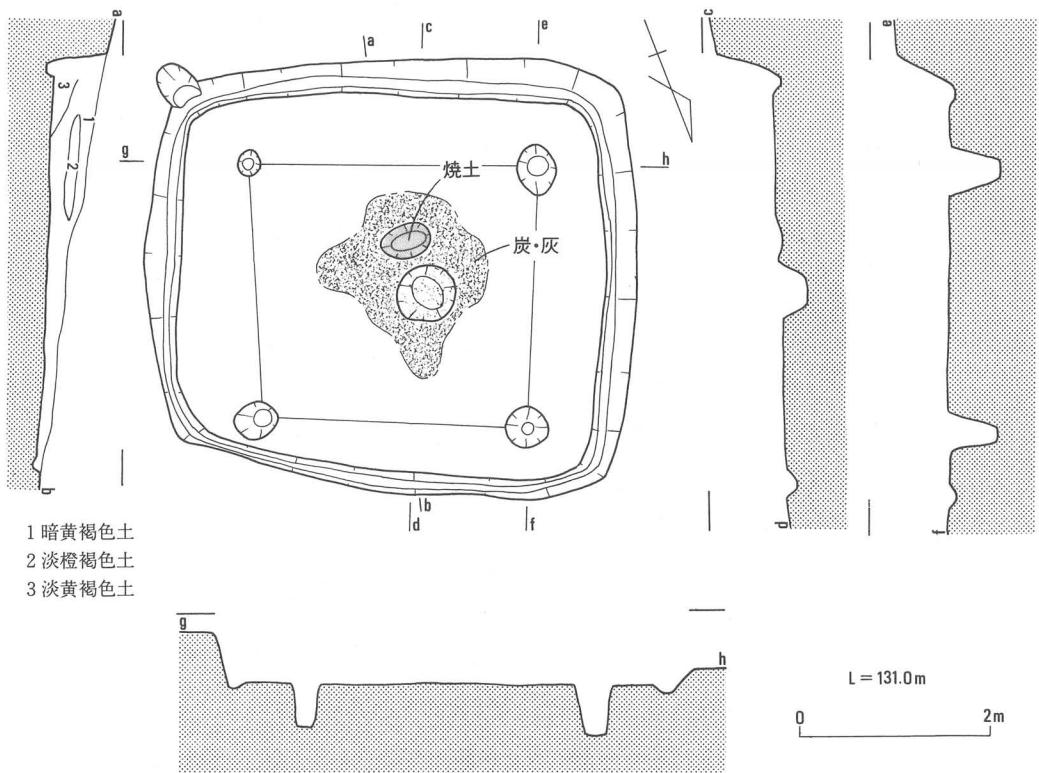
面はヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラケズリを施す。288は高杯形土器の脚部である。脚部外面はタテ方向のヘラミガキで入念な仕上げ。内面はヘラケズリが施され、上半にはしづり痕が残る。接合部には棒状工具をつきさしたような痕跡が認められた。267・269は脚台部である。267は淡黄褐色の緻密な胎土を用いる。やや肥厚ぎみの脚端部はヨコナデ、脚部外面はタテ方向のヘラミガキで仕上げる。底面内側には指頭圧痕が顕著に残る。

住居址12 (第81図)

北西にのびる丘陵の東側斜面、段状遺構21と22の間に位置する。等高線走向に沿って営まれた長辺5.2m、短辺4.6mの方形住居である。床面の周囲には、深さが平均8cm程度の浅い壁体溝がめぐる。遺構検出面から住居址床面までの掘り形の深さは最深部で60cmを測るが、住居址北側は自然傾斜により埋土上面が流出している。床面の中央には、中央穴と思われるピットが2個検出された。北側のピットは若干いびつな円形を呈し、床面からの深さは約30cmを測る。



第80図 住居址11出土土器 ($S = 1 : 4$)

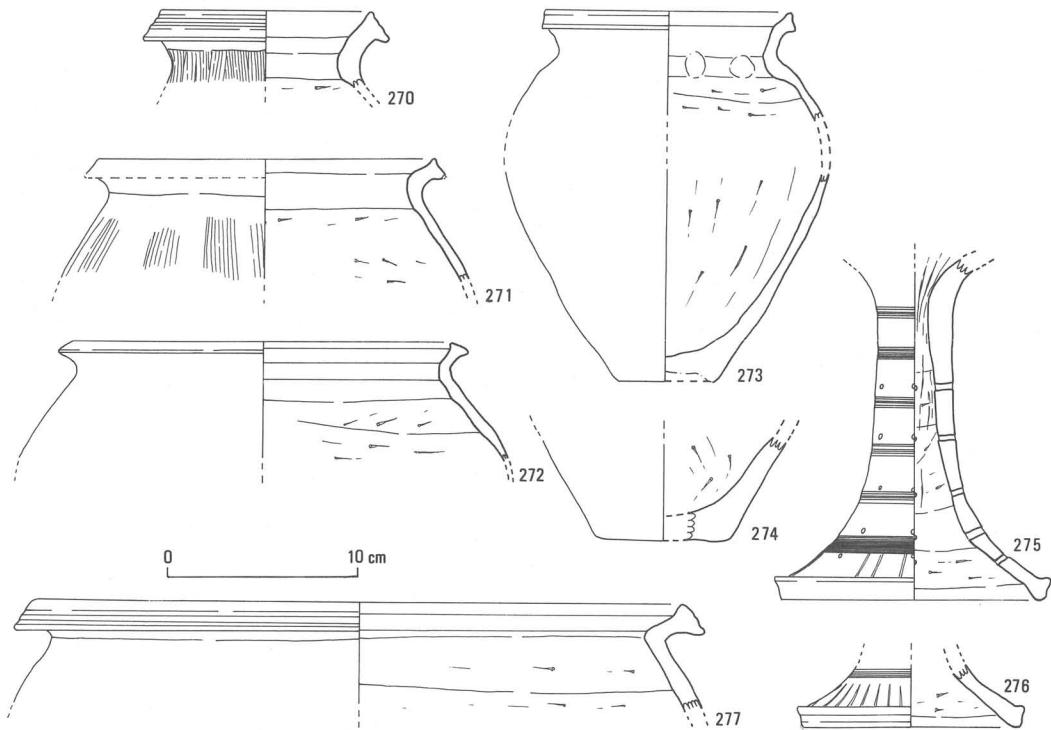


第81図 住居址12平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

だ円形を呈す南側のそれには、浅い皿状の凹みに焼土が堆積していた。両者とも周辺には比較的広範囲にわたって炭化物の集中が認められた。これらの中央穴をとり囲むように4本の柱穴が方形に配される。柱穴の平面形は大小さまざまであるが、床面からの深さは52cm程度で4本ともほぼレベルをそろえている。遺物は埋土中より若干の土器が出土した。

住居址12出土土器（第82図）

270～273は甕形土器である。270は口径約10.4cmの小形のもので、上下に拡張する口縁端部外面には3条のしっかりした凹線文を施す。やや長めの頸部外面にはタテ方向のハケ目を施し、その上半はナデで仕上げる。器壁が厚い。271・272の口縁端部は上下にやや肥厚させるタイプ。両者とも磨滅が激しいが、口縁部外面はナデ仕上げと思われる。271の胴部外面には、かすかにタテ方向のハケ目が観察された。273も全体的に磨滅が激しい。胴部内面下半はタテ方向、上半はヨコ方向のヘラケズリを施す。頸部屈曲部内面には指ナデで仕上げたようすが窮える。275・276は高杯形土器の脚部である。いずれも器面が荒れているが、275の脚裾部には粗いタテ方向の櫛描文が施し、その上部には数条の櫛描文を6段規則正しく施し加飾している。各文様の間には小さな透し穴を外側から5段6列施している。内面はほぼヨコ方向のヘラケズリで仕上げ、杯部付近になるとしづら痕が認められる。276もほぼ同様の文様構成と思われる。277

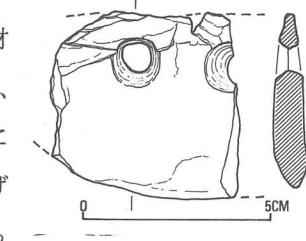


第82図 住居址12出土土器 ($S = 1 : 4$)

は鉢形土器と考えられる。上下に肥厚させる口縁部外面には2~3条の凹線文を巡らすが、その上をナデているためかすかに凹凸が残るのみである。

住居址12出土石器（第83図）

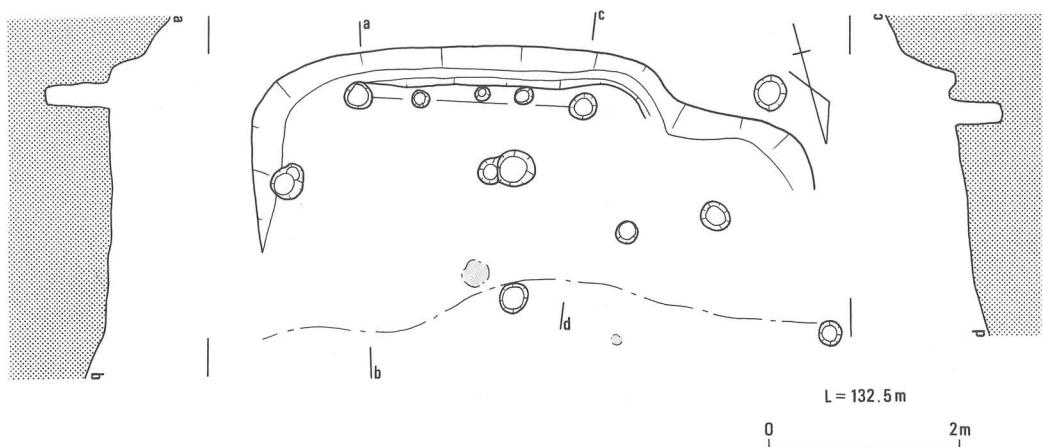
千枚岩製の磨製石庖丁である。両端は欠損している。また、石材の性質によるためか表面の剥離が著しい。紐孔は2個所に認められ、表裏両面より穿孔が行われている。このため、紐孔の断面中央部に稜を形成している。刃部は表裏両面からの研磨により鋭角に仕上げられている。石庖丁の石材には、粘板岩、白雲母石英片岩が用いられることが多く、この種の石材は希な例である。



第83図 住居址12出土石器

段状遺構1（第84図）

B調査区の丘陵つけ根部分の東斜面に等高線走向に沿って位置する。斜面を断面「L」字状に削平し、長さ約5.9m・幅約2.5mの平坦面を形成する。壁面直下には杭状のものを打ち込んだと考えられる小柱穴がほぼ一列に並んだ状態で検出された。中でも両端の2つは、深さが64cmを測るしっかりとしたものである。平坦面には柱穴と考えられるピットが数個検出されたが、建物配置を示すものはない。また傾斜変換点の付近では少量の焼土が検出された。遺物は埋土

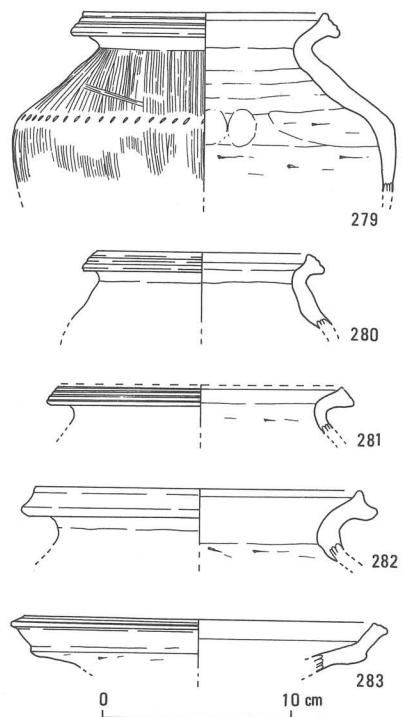


第84図 段状遺構1平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

中より若干の土器片が出土している。

段状遺構1出土土器（第85図）

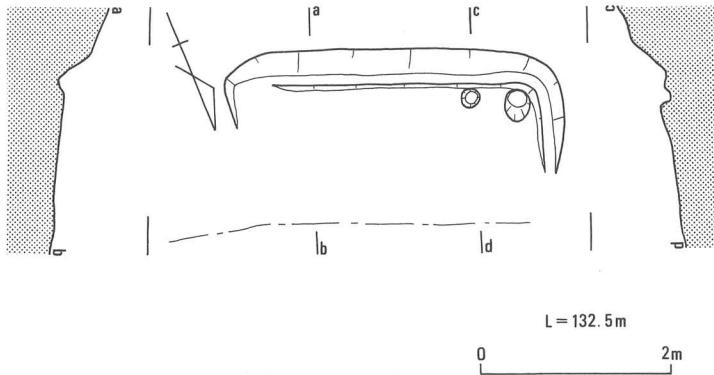
279は壺形土器である。強く張り出す胴部を有する。上下に肥厚させる口縁部外面には3条の明瞭な凹線文を施す。胴部外面は全体にタテ方向のハケ目が施され、最大径部には刺突文が巡る。内面は最大径のやや上位までヨコ方向のヘラケズリを施し、口縁部内面に至るまではユビナデで丁寧に仕上げている。280～282は甕形土器である。やや下方にひきのばし気味の口縁部の外面は、凹線文を巡らすもの（280、281）と、ヨコナデで仕上げるもの（282）の2タイプに分けられる。283は高杯形土器の杯部片である。浅い皿状の杯部からゆるく屈曲して口縁部に至る。口縁端部は水平面を若干外方に肥厚させ、端面には深い凹線文がかすかに残る。杯部外面の砂粒の動きから、強いヨコナデで器面を整えた様子が窺える。また屈曲部外面は、強いヨコナデによって稜を形成している。



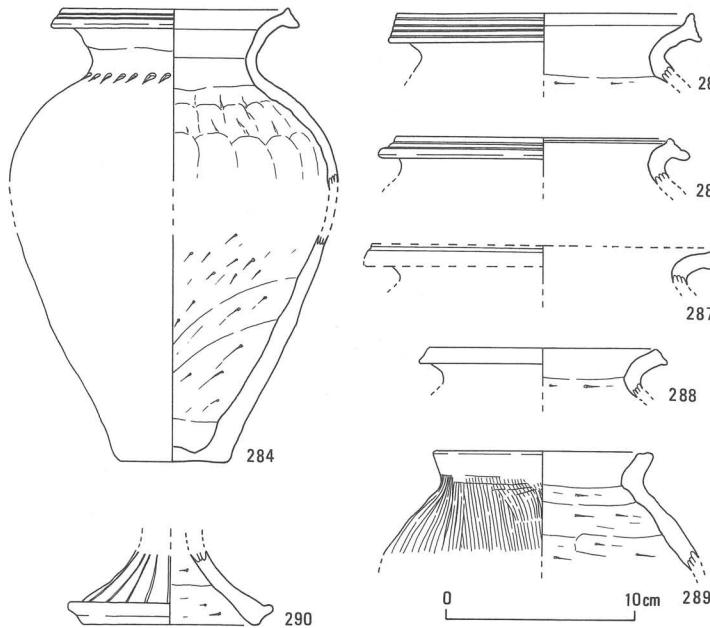
段状遺構2（第86図）

第86図 段状遺構2（ $S = 1 : 4$ ）

B調査区の丘陵つけ根部分の東側斜面、段状遺構1の西側約2.8mに位置する。斜面を断面「L」字状に削平し、長さ約3.6m・幅約1.4mを測る平坦面を形成する。壁面に沿って床面からの深さ約8cmの深い溝が巡っているが、北側部分は遺存していない。西側のコーナー部分には大小



第86図 段状遺構2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



第87図 段状遺構2出土土器 ($S = 1 : 4$)

(287、288) がある。289は水平を意識しながらも、ナデによってまるく素縁におさめる口縁部を有する。胴部外面上半にはタテ方向のハケメが観察できる。屈曲部付近には、工具の圧痕らしい圧痕がところどころに残り、外面一帯にはススの付着が認められた。胴部内面はヘラケズリで仕上げている。290は高杯形土器の脚部片と思われる。外面には、粗いタテ方向の櫛描文がかすかに残っている。内面の調整はヘラケズリである。

段状遺構3 (第88図)

B調査区の丘陵つけ根部分の東側斜面に等高線走向に沿って位置する。段状遺構2の北西約1.75mにある。斜面を「L」字状に削平し、長さ約9m、幅約1.8mを測る平坦面を形成する。壁体の内側には非常に浅い溝状が走るが、長さ3.8m程度の地点で自然に消滅している。平坦

の浅い柱穴が2個検出されたのみである。遺物は埋土より若干の土器が出土した。

段状遺構2出土土器 (第87図)

284は壺形土器である。胴部のあまり張らない全体的にスマートな器形を呈し復元器高24cm、口径は約

11.2cmを測る。口縁端部はやや外方

にひきのばし気味に仕上げ、外面には3条のくっきりとした凹線文を巡らす。外面一帯はナデ仕上げで、頸部屈曲部には大きめの刺突文が一周する。胴部内面下半は上方へ粗くケズリ上げ、上半は指おさえによる凹凸と、しづり痕が顕著に認められる。口縁部内面はコヨナデで仕上げている。285～289は壺形土器である。口縁部外面に凹線文を数条施すもの(285、286)と、

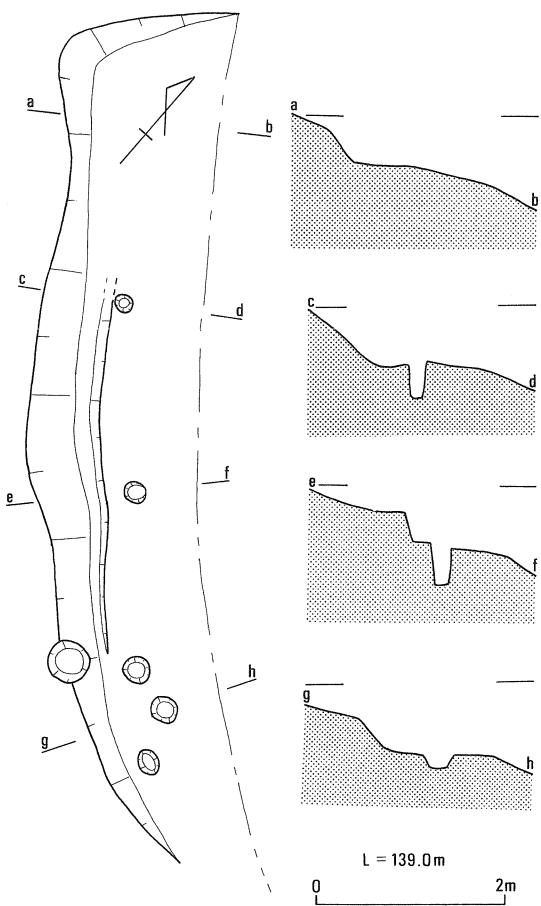
ヨコナデで仕上げるもの

面からは、柱穴と思われるピットが数個検出されたが、規模・深さ等まちまちで建物配置を示すものは認められなかった。遺物は、埋土中より若干の土器片が出土している。

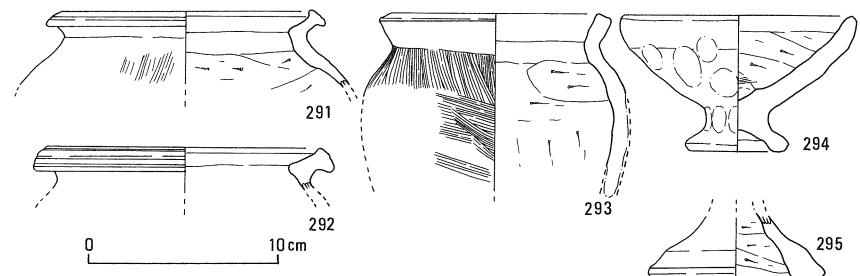
段状遺構3出土土器（第89図）

291～293は甕形土器である。291・292の口縁端部はともに上下への拡張を若干意識し、外面には数条の明瞭な凹線文を施す。291の胴部外面はタテ方向のハケ目がかすかに残り、口縁部下端にはススが付着していた。胴部内面はヘラケズリを施し、頸部から口縁部に至っては強いヨコナデにより稜を形成している。293は胴のあまり張らない器形を呈する。口縁端は水平を意識しながらもヨコナデで丸くおさめている。胴部外面上半はタテ方向の丁寧なハケ目、その下半を斜方向のハケ目で切っている。内面は下半を上方にケズリ上げ、上半はヨコ方向のヘラケズリで仕上げている。口縁部

内面の調整は指ナデによる。外面一帯にススの付着が顯著である。294は楕形土器である。脚台部から屈曲し

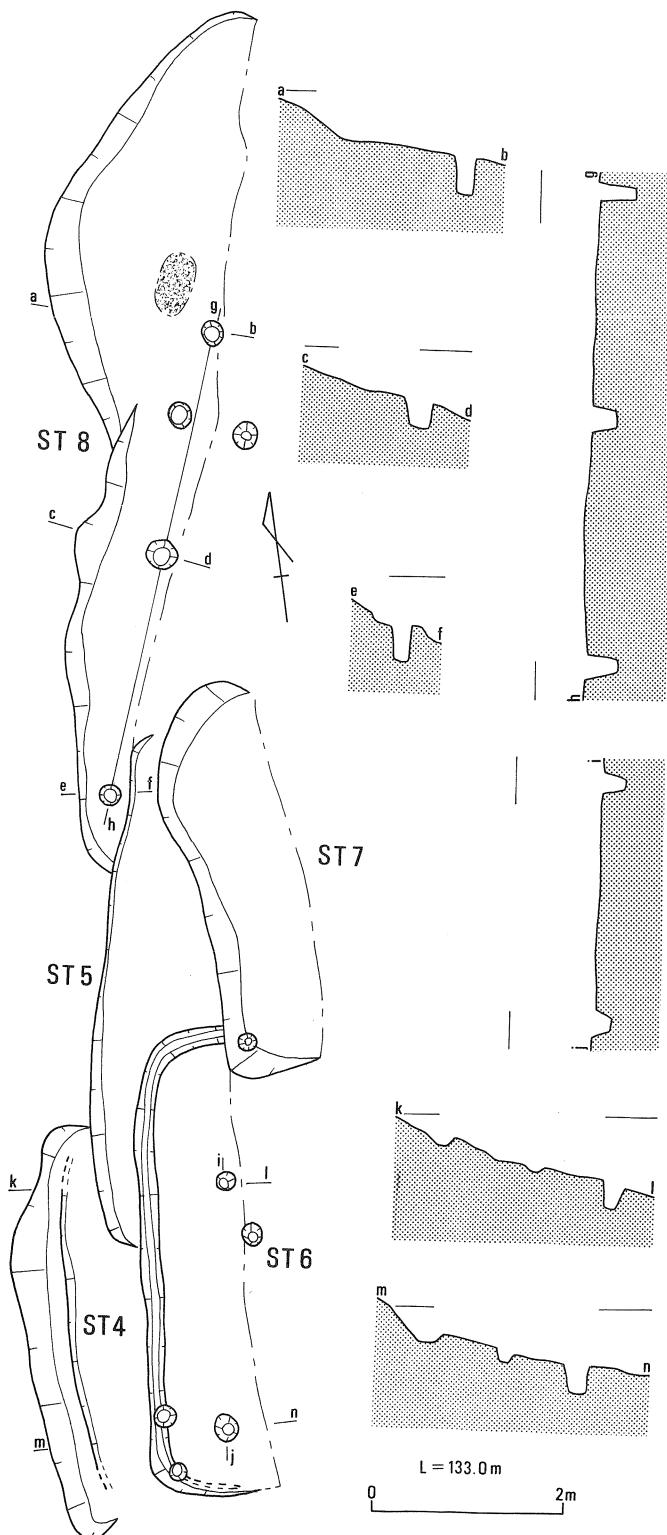


第88図 段状遺構3平面・断面図 (S = 1 : 80)



第89図 段状遺構3出土土器 (S = 1 : 4)

て、やや内彎しながら口縁端部に至る。外面は全体的に指ナデ調整を基本とし、ところどころに指おさえによる凹凸が認められる。坏部内面はヘラケズリで上端部はヨコナデで仕上げる。器壁は約1cmと肉厚な印象をうける。295は脚台部の破片である。脚端部は水平を意識しながら外方へ肥厚させている。外面をヨコナデ、内面は細かいヘラケズリで仕上げている。



第90図 段状遺構 4～8 平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構 4～8 (第90図)

北東へのびる丘陵の東斜面に、等高線走向に沿って位置する。約10.5 mの範囲に段状遺構 4 から段状遺構 8 までの 5 遺構が切り合った状況で検出された。以下、各遺構の概要について記述し、出土遺物に関する説明を加えることにする。

段状遺構 4 (第90図)

遺構の切り合いの最南端、4号住居から東へ約4 mの斜面上に位置する。ゆるやかな斜面を長さ4.4 mの範囲で掘りくぼめ、北側部分は段状遺構5によって切られている。壁面に沿って幅16 cm程度の溝が走るが、両端は自然に解消される。埋土中から器台、高壇等若干の土器が出土した。

段状遺構 5 (第90図)

段状遺構4の北側に位置する。5.4 mにわたって一見自然傾斜のようないい掘り込みがなされているが、南コーナーは段状遺構6に、北コーナーは段状遺構7にカットされている。埋土中より若干量の土器が出土したが、図示できるものはなかった。

段状遺構 6 (第90図)

段状遺構4の西側にほぼ平行して位置する。ゆるやかな斜面を断面「L」字状に削平し、長さ4.9 m、幅88 cm程の平坦面を形成する。壁面直下に

は小規模な溝がめぐり、北端は段状遺構7によりカットされている。柱穴と考えられるピットも数個検出されたが、建物址を示すものはない。遺物は埋土中より若干の土器が検出した。

段状遺構7（第90図）

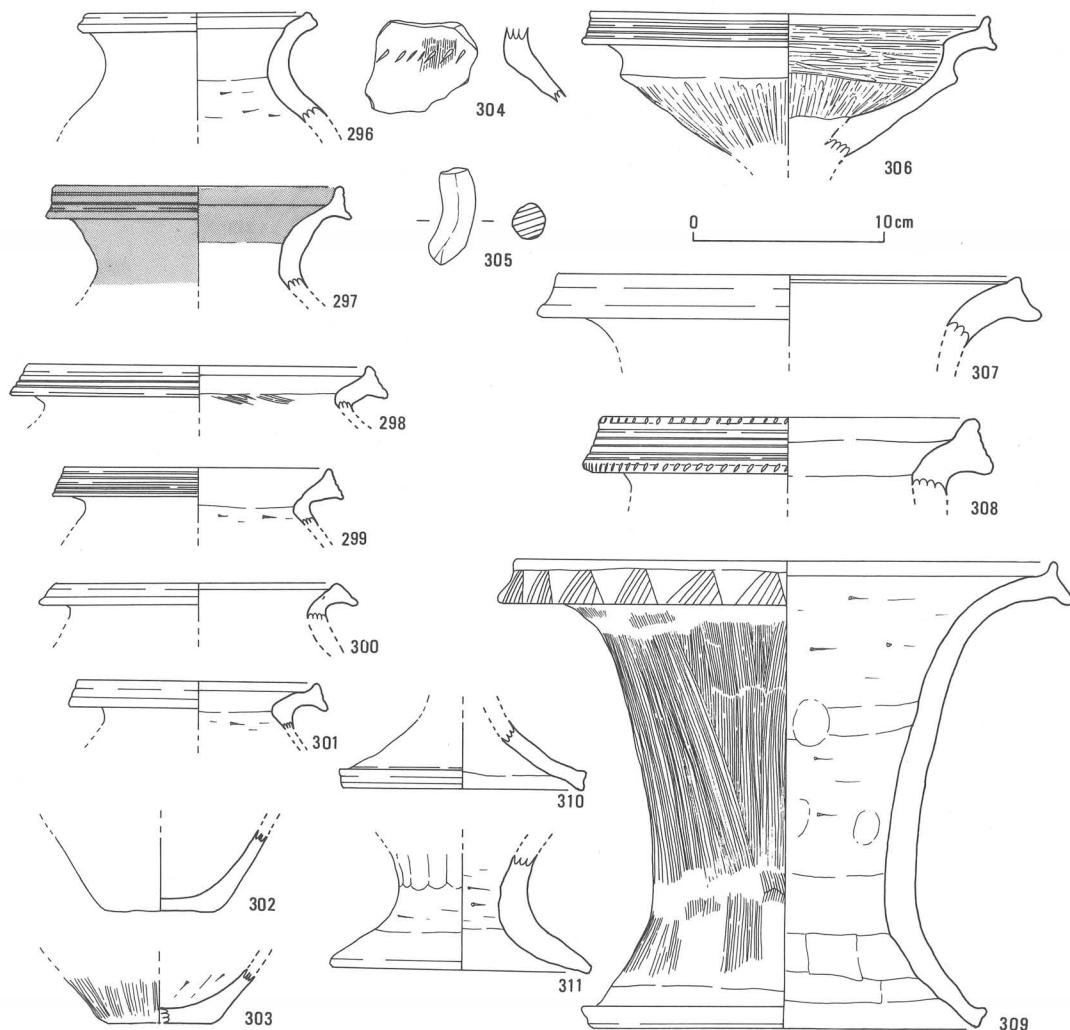
段状遺構5の東側、段状遺構6の北側コーナーに接して位置する。斜面を浅く掘りくぼめて長さ約3.9m、幅92cmの平坦面を形成する。埋土中から若干の土器片が出土したがいずれも小片で図示できるものはなかった。

段状遺構8（第90図）

南端を段状遺構5に接し、遺構の集中区の最北端に位置する。9.2mの範囲に段状遺構が2つ切り合った状況を呈するが、ここでは一遺構として取り扱う。傾斜変換点の付近では、杭列の可能性が考えられるピットが3つ並んだ状態で検出した。各柱穴の深さは24~38cmとまばらであるが、いずれもしっかりとしている。北側平坦面では隅・灰面の広がりが認められた。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

段状遺構4出土土器（第91図）

296・297は壺形土器である。296は上下に肥厚させる口縁部内外面をヨコナデで仕上げる。外面は磨滅しているが、内面は頸部以下ヘラケズリが観察される。297の口縁部は上方に拡張をみせる。外面には3条の明瞭な凹線文が施される。外面全体と内面上半に赤色顔料の塗布が認められた。298~301は甕形土器の口縁部である。口縁部外面に凹線文を施すもの（298・299）と、ヨコナデで仕上げるもの（300・301）に分けられる。298は上下に拡張する口縁端部を有し、その外面には3条の明瞭な凹線文を施す。内面はヨコナデで、屈曲部下方に斜方向にハケ目の痕跡を残している。302・303は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。303の外面はタテ方向のハケ目が、内面はケズリ上げている。304の外面にはかすかなタテ方向のハケ目の上に刺突文が観察できる。305は把手部分の破片である。306は高杯形土器の杯部である。浅い杯部から鋭く屈曲して口縁部に至る。口縁端部は上下に拡張し、外面には4条の明瞭な凹線文を施す。外面下半はタテ方向のヘラミガキで仕上げ、その上半をナデ消している。内面は杯部下半をタテ方向のヘラミガキで、その上を口縁部内面までヨコ方向の細かいヘラミガキで仕上げている。さらに口縁部内面はヨコナデと全体に入念なつくりである。307~309は器台形土器である。308は比較的厚手のもので、上下に肥厚する口縁端部の外面には数条の凹線文が巡り、その上・下端を刺突文で飾る。壺形土器の可能性も考えられる。309はのびやかな上半部に比べ、下半部は寸づまりな器形を呈す。脚端部は肥厚させ、やや外方拡張を意識してか外面をヨコナデで仕上げている。一方、上下拡張を示す口縁端部の外面には規則的に鋸歯文が巡り、その上端



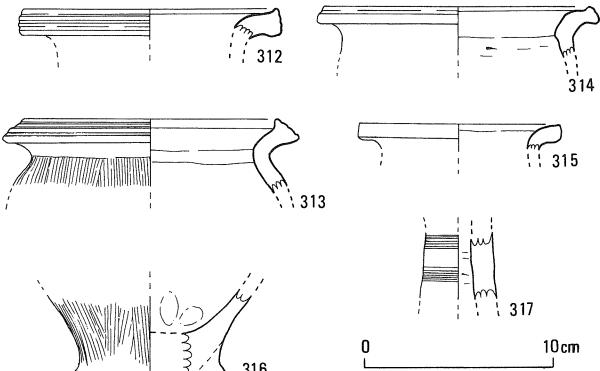
第91図 段状遺構4出土土器 ($S = 1 : 4$)

をヨコナデで仕上げる。胴部外面は細かいタテ方向のハケ目が全面に施され、下半はその上からナデでハケ目を消している。脚裾部内面は左方向から右方向へヘラ状工具を押しあてた痕跡がみられる。胴部内面はヨコ方向のヘラケズリで仕上げているが、ところどころに指頭圧痕が残る。310・311は高杯形土器あるいは器台形土器の脚裾部である。311はやや厚手で、脚裾に向けて急に開き、端面はまるくおさめている。外面はヨコナデにより、この際の砂粒の移動が端所に観察される。上半部は指おさえによる凹凸が顕著に残っている。

段状遺構6出土土器（第92図）

312は長頸タイプの壺形土器である。やや肥厚ぎみに仕上げる口縁部外面には、明瞭な凹線文を数条施す。313が甕形土器。口縁端部は上下に若干肥厚させ、外面には3条の凹線文が巡る。胴部外面上半はタテハケが施されている。314・315は鉢形土器と思われる。315は口径10cmに

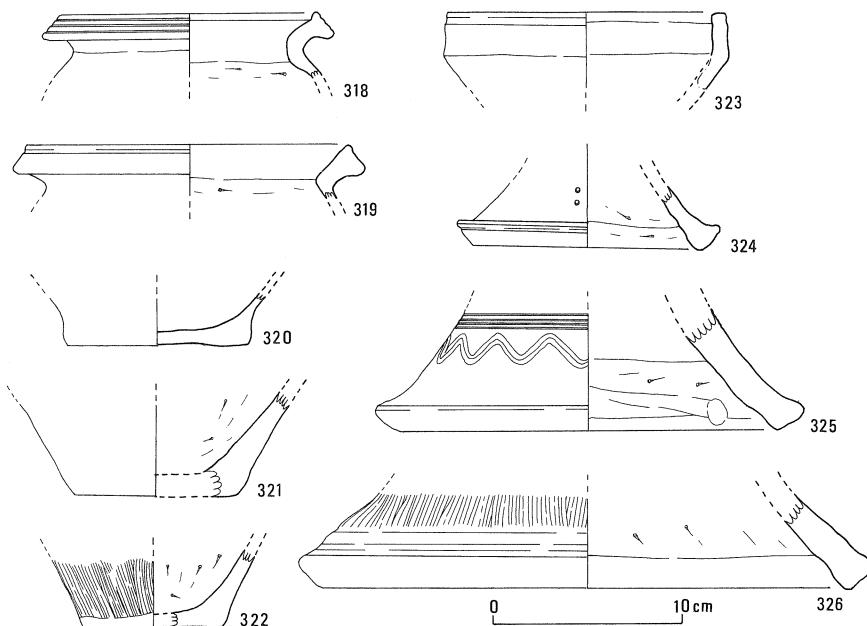
もみたない小形のものである。316は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。外面はタテ方向のハケ目、底面付近は外方へ若干つまみ出し気味に仕上げており、この際の指ナデによって先のハケ目がところどころ消されている。317は高杯形土器の脚部である。外面には櫛描文がかすかに残る。



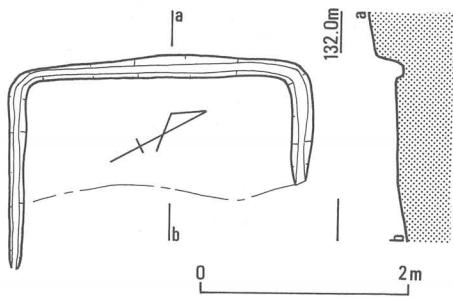
段状遺構 8 出土土器（第93図）

第92図 段状遺構 6 出土土器 ($S = 1 : 4$)

318・319は甕形土器の口縁部である。両者とも上下に肥厚する端部を有し、318の外面は3状の凹線文、319はナデ仕上げである。320～322は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。322の外面には一部にススの付着が認められた。323は高杯形土器の杯部である。やや深めの杯部からゆるく屈曲し、口縁端部にむけては垂直にたちあがる。端面は水平に仕上げている。口縁部付近外面には、浅い凹線文が一条巡る。324は高杯形土器あるいは器台形土器の脚部である。外面には竹管文状の文様が施され、1部にススの付着が認められた。325・326は器台形土器の脚裾部である。325の外面上半には櫛描文がその下位には粗い波状文が巡る。内面はヘラケズリで一部に指頭圧痕が残る。326は「ハ」の字状に開く器形を呈し、若干肥厚させるのみの脚端部はヨコナデで仕上げる。外面はタテハケを施すが、脚裾付近のヨコナデにより下半は消されている。内面は概ねヘラケズリで、裾部はナデ仕上げである。



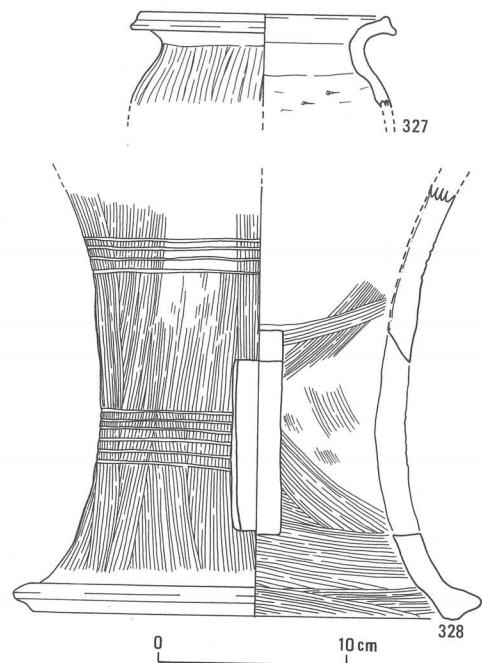
第93図 段状遺構 8 出土土器 ($S = 1 : 4$)



第94図 段状遺構9平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構9 (第94図)

北東へのびる丘陵の東側斜面、住居址7の南西1.5mの地点に等高線走向に沿って位置する。斜面を断面「L」字状に浅く掘りくぼめて、長さ2.5m、幅1.1mの小規模な平坦面を形成している。平坦面の周囲には、床面からの深さが約6cm程度の深い溝が巡る。埋土中より若干の土器片が出土した。

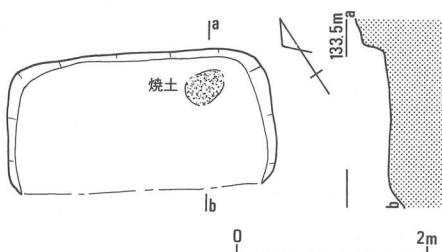


第95図 段状遺構9出土土器 ($S = 1 : 4$)

段状遺構9出土土器 (第95図)

327は甕形土器である。口縁部からゆるく屈曲して胴部へと至るが最大径はあまり張り出なさい。口縁端部は若干下方へのひきのばしを意識しており、外面はヨコナデで仕上げる。胴部外面は粗いタテハケを施し、頸部上半はヨコナデで仕上げる。口縁部下端にはスヌが付着していた。胴部内面の調整はヘラケズリ。328は器台形土器である。筒状のすんどうな胴部を有し、脚裾部に向かってはあまり開かない。胴部外面は全体をタテハケで調整した跡、数条の手描き風凹線が巡る。長方形の透し孔が4方向に認められた。脚端部は斜め外方へ肥厚させ、外面は強いヨコナデにより仕上げている。内面は斜方向のハケメが上方から下方へ順に施された様子が観察できる。橙褐色のキメの細かい胎土を用いている。

段状遺構10 (第96図)

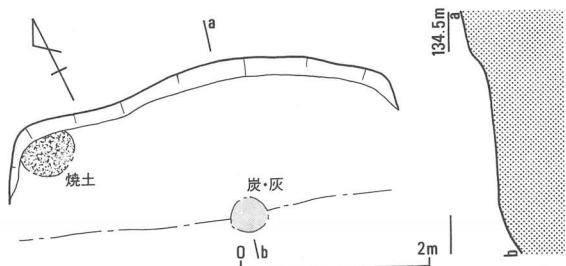


第96図 段状遺構10平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

住居址1の南西方向に1.5m、丘陵のつけ根部分の南側斜面に位置する。斜面を断面「L」字状に掘りくぼめて長さ2.6m、幅約1.4mの平坦面を形成する。柱穴等は検出されなかったが、平坦面の北東隅に焼土面の広がりが確認できた。埋土中より若干の土器片が出土したが、いずれも小片のためここで図示できるものはない。

段状遺構11（第97図）

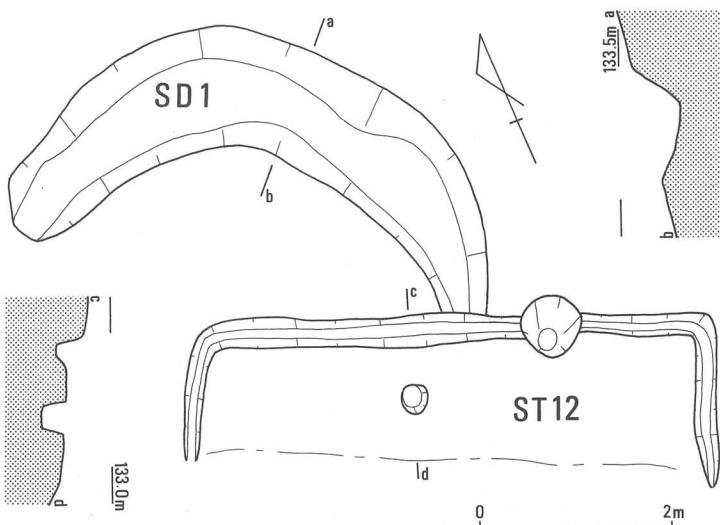
前述の段状遺構10の西側5mの斜面上に位置する。斜面を断面「L」字状に掘りくぼめて長さ約4.1m、幅約1.7mの平坦面を形成する。柱穴等は検出されなかつたが、平坦面の北西コーナーで焼土面が、傾斜変換点付近では炭化材の集中が認められた。埋土中より少量の土器が出たが、いずれも小片で図示できるものはなかった。



第97図 段状遺構11平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構12（第98図）

段状遺構11の西側約1.3mの斜面上に、溝状遺構1と重複して検出された。また、本遺構の南側には古墳時代の土壙墓が営まれている。斜面を断面「L」字状に掘りくぼめて長さ5.2m、幅1.2mの平坦面をつくりだす。この平坦面の周囲には深さ10cm程度の壁溝が巡っているが、傾斜が変換する付近で自然に解消される。

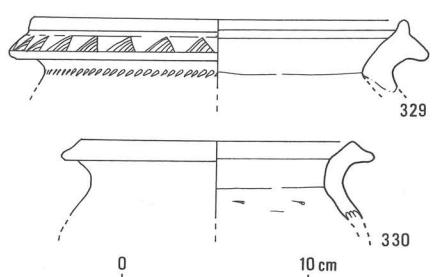


第98図 溝状遺構12溝状遺構1平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

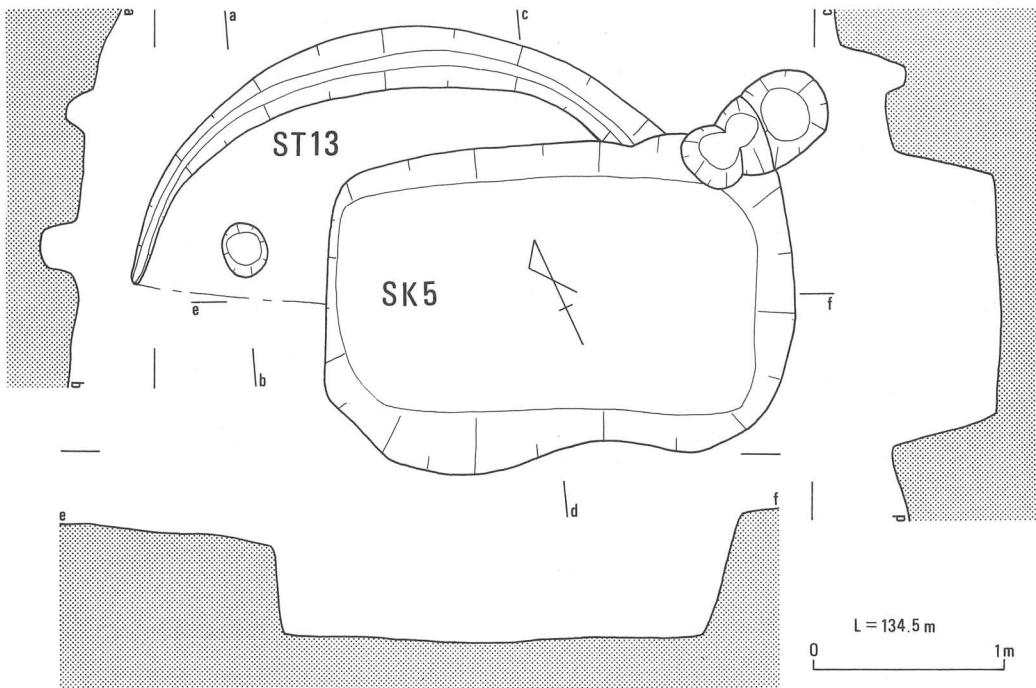
平坦面の中心では柱穴が検出されたが、建物址を示すものはない。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

段状遺構12出土土器（第99図）

329は壺形土器と思われる。下方への引きのばしを意識した口縁端部を有する。外面には規則正しい鋸歯文が一周するが、その上半は1条の凹線文によりナデ消されている。また頸部屈曲部外面には刺突文が1列巡る。内面は磨滅が激しいが、口縁内面はコヨナデで仕上げている。330は甕形土器である。口縁端部は329と同様、下方へ引きのばし気味に仕上げている。



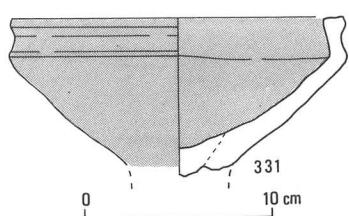
第99図 段状遺構12出土土器 ($S = 1 : 4$)



第100図 段状遺構13、土壤5平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構13（第100図）

丘陵平坦面のやや西寄りに方形土壙5と重複して検出された。斜面を50cm程度掘りくぼめて、半円形の平坦面を形成する。平坦面の周囲には床面からの深さ20cm弱の壁体溝が巡るが、南半分は方形土壙5によって切られている。柱穴と思われるピットが西側隅で1個検出された。遺構の平面形や構築位置等から、本遺構が住居址である可能性も考えられるが、ここでは段状遺構として取り扱っておく。遺物は埋土中より若干の土器片が出土したが、図示できるものは1点にすぎない。



第101図 段状遺構13出土土器 ($S = 1 : 4$)

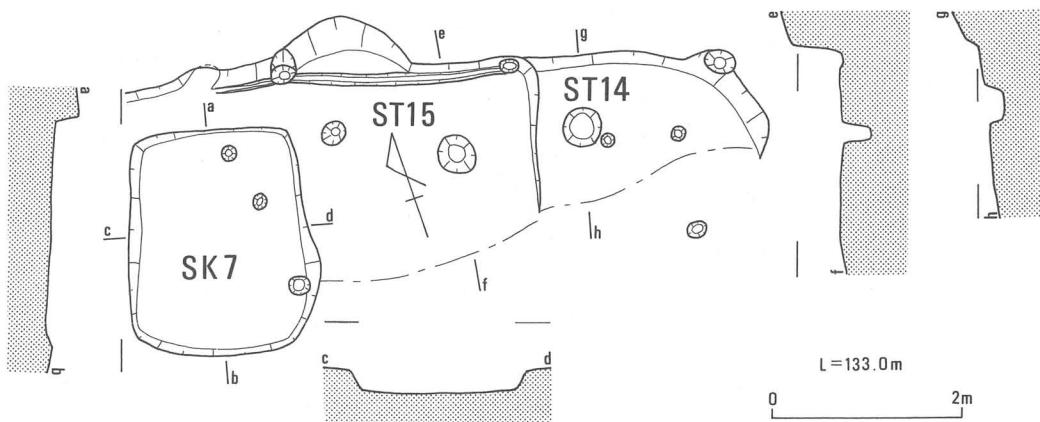
いる。

段状遺構13出土土器（第101図）

331は高杯形土器の杯部である。比較的深めの受け部からゆるく屈曲し、やや内傾しながら口縁端部に至る。端部は外方へやや肥厚させながらも端面は水平に整える。内外面ともナデにより丁寧に仕上げており、赤色顔料の塗布も全面に認められた。脚部との接合部分は、円盤充填の手法がとられて

段状遺構14・15（第102図）

段状遺構14と15は丘陵の西側斜面に重複して位置する。以下、遺構ごとに順次説明を加えることとする。



第102図 段状遺構14・15、土壙7平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構14（第102図）

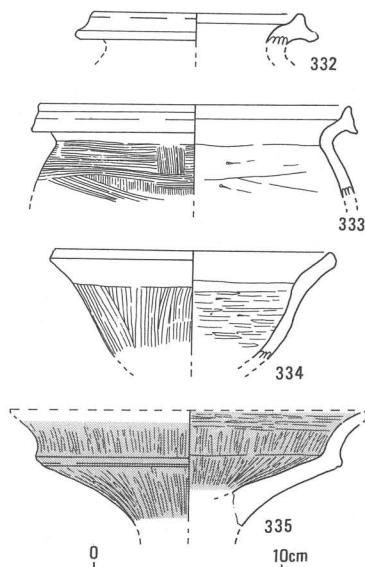
ゆるやかな斜面を断面「L」字状に掘りくぼめて幅1.3m程度の平坦面をつくりだす。遺構の西側は段状遺構15によってきかれている。大小の柱穴状のピットが数個検出されたが、建物配置を示すものはない。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

段状遺構15（第102図）

段状遺構14の西側に接して位置する。段状遺構14と同様斜面を「L」字状に掘りくぼめて幅約2mの平坦面をつくりだす。北壁直下には、深さ4cm程度の非常に浅く小規模な溝がまっすぐ走る。ここでも柱穴状のピットが数個検出されたが建物址を示すものはない。遺物は埋土中より若干の土器が検出された。

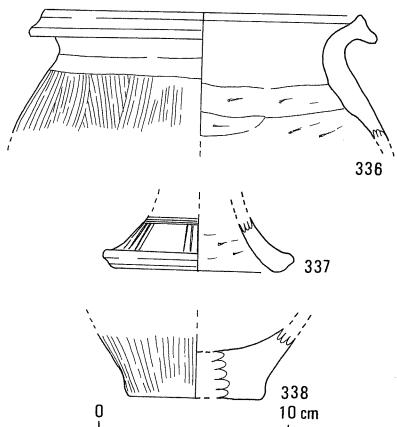
段状遺構14出土土器（第103図）

332・333は甕形土器である。332の口径は比較的小さく、口縁端部はやや外方へひきのばした感じである。外面はヨコナデで仕上げる。333は上下に拡張させる口縁端部を有し、その外面はヨコナデを施す。胴部外面上半は、乱方向の細かいハケメで、一帯にススが付着している。胴部内面の調整はヘラケズリ。334は鉢形土器と思われる。底部は欠損しているが、斜め上方にのびゆるく屈曲して口縁端部に至る。外面は丁寧なタテハケの後その上半をヨコナデで仕上げている。内面屈曲部以下はヨコ方向のヘラミガキ、口縁内面はヨコナデ仕上げとなっている。335は高壺形土器の壺部である。浅い皿状の受け部からいったん屈曲して、ゆるく外反しながら



第103図 段状遺構14出土土器 ($S = 1 : 4$)

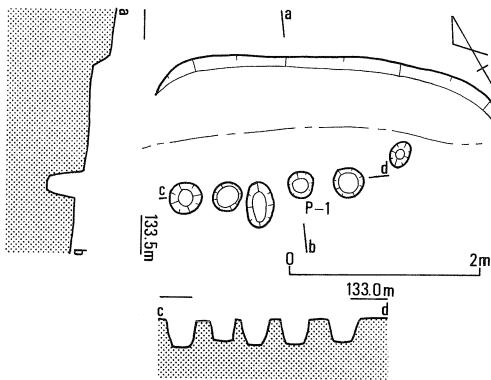
口縁端部に至る。内外面ともタテ・ヨコのヘラミガキを駆使し、さらに赤色顔料の塗布が顯著に認められる等、全体的に入念な仕上げの様子が窮える。



第104図 段状遺構15出土土器 ($S = 1 : 4$)

段状遺構15出土土器 (第104図)

336は甕形土器である。やや下方にひきのばし気味の口縁端部は外面はヨコナデで仕上げる。また、胴部外面上半はタテ方向の粗いハケ目を、内面はヘラケズリをそれぞれ施している。337は高杯形土器の脚裾部である。外面は数状の櫛描文で加飾される。338は甕形土器あるいは壺形土器の底部片である。外面には粗いタテハケが施され、断面形より比較的肉厚な底部であることが判る。



第105図 段状遺構16平面・断面図 ($S = 1 : 80$) ピットの平面形や大きさはそれぞれバラエティーに富んでいるが、床面からの深さは24~28cmの間でほぼレベルをそろえる。遺物はP-1から、壺形土器の口縁部が1点出土したのみで他に遺物は認められなかった。

段状構16 (第105図)

丘陵頂部の西側斜面、住居址9の外方へ流れ出る溝の東端に接して位置する。ゆるやかな斜面を断面「L」字状に削平して長さ3.6m、幅0.6mの平坦面をつくりだす。傾斜がゆるく変換するあたりで、

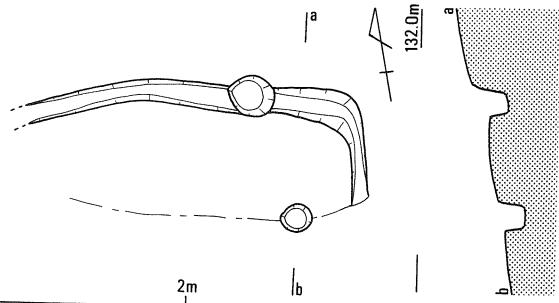
柱穴状のピットが一列に5個並んで検出された。

段状遺構16出土土器 (第106図)

339は壺形土器である。胴部からゆるやかに屈曲し、斜め外方にまっすぐのびて口縁部に至る。端部はヨコナデによって丸くおさめている。口径は13.2cmを測る。外面にはタテ方向のハケ目がかすかに観察され、屈曲部付近では2条の凹線文風の段が巡っている。内面調整はヨコ方向のヘラケズリ、口縁端内部のみヨコナデによって仕上げている。

段状遺構17 (第107図)

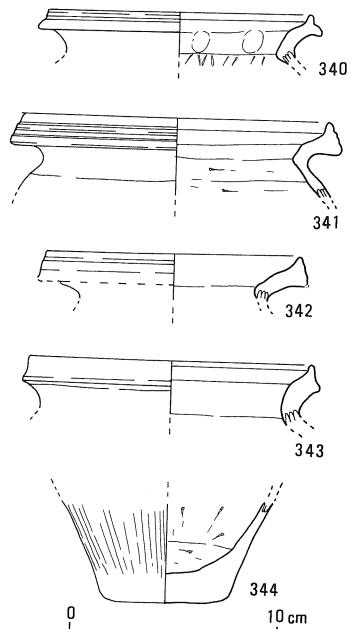
北西にのびる丘陵の南斜面、住居址9の真南9.5mに位置する。ゆるやかな斜面を幅16cm程度の溝条遺構で区画しているが、西半は自然に解消される。柱穴条のピットが2ヶ所で検出されたが、建物址を示すものではない。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。



第107図 段状遺構17平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

段状遺構17出土土器 (第108図)

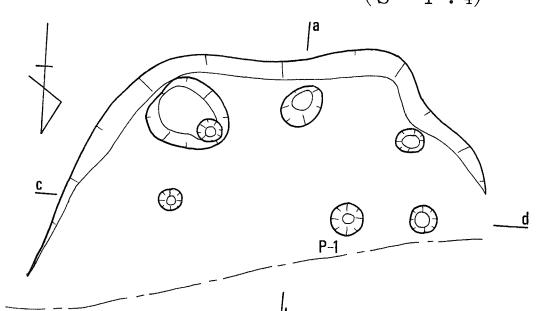
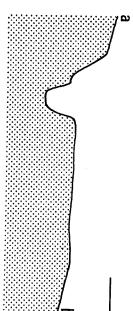
340~343は甕形土器である。これらの口縁端面に凹線文を施すもの(340・341)と、ヨコナデにより仕上げるもの(342・343)の2タイプに分けられる。340の口縁端部は上下にひきのばす。内面には指ナデの痕跡、屈曲部直下にはヘラ状工具で搔いたようなキズが残っている。341の口縁端部は肥厚ぎみであるが、やや上方拡張を意識している。胴部外面はヨコナデ、内面はヘラケズリで仕上げる。343の頸部屈曲部より上部はまのびする形状を呈する。344は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。外面は粗いタテハケ、内面は乱方向のヘラケズリで仕上げている。



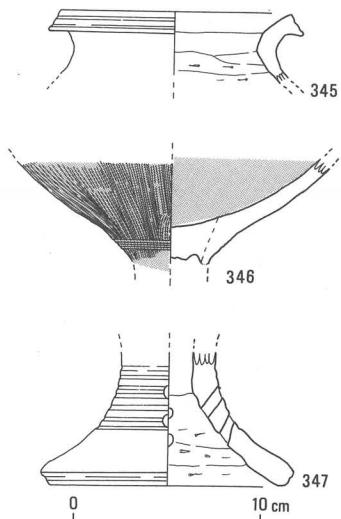
第108図 段状遺構17出土土器 ($S = 1 : 4$)

段状遺構18 (第109図)

北西へのびる丘陵鞍部、住居址10の北西3.8mに位置する。ゆるやかな斜面を断面「L」字状に削平して長さ5m、幅約1.8mの平坦面をつくりだす。平坦面では床面から深さ20~56cm程度のしっかりした柱穴が6~7ヶ所で検出されたが、いずれも建物配置を示さない。遺物は埋土中ならびにP-1より土器片が数点出土した。



第109図 段状遺構18平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



第110図 段状遺構18出土土器
(S = 1 : 4)

段状遺構18出土土器 (第110図)

345は甕形土器である。若干下方にひきのばし気味の口縁端部の外面には2条の明瞭な凹線文を施す。胴部外面はヨコナデ、内面はヘラケズリで仕上げている。346は高杯形土器の坏部である。外面はタテ方向の細かいハケ目を全面に施し、下端には浅い凹線文風の沈線を数条巡らせる。内面はナデ仕上げ、脚部との接合部分は円盤充填の手法が認められる。内外面とも赤色顔料の塗布が顯著である。347は器台形土器あるいは高杯形土器の脚部である。外面は全体的にナデ仕上げで、中程にはくっきりとした凹線文がラセン状に巡る。その間には、2段の円形透し孔が4ヶ所に認められた。肥厚ぎみに仕上げられる脚端面は、凹線文を1条施した後、ナデで仕上げている。内面の調整は横方向のヘラケズリである。

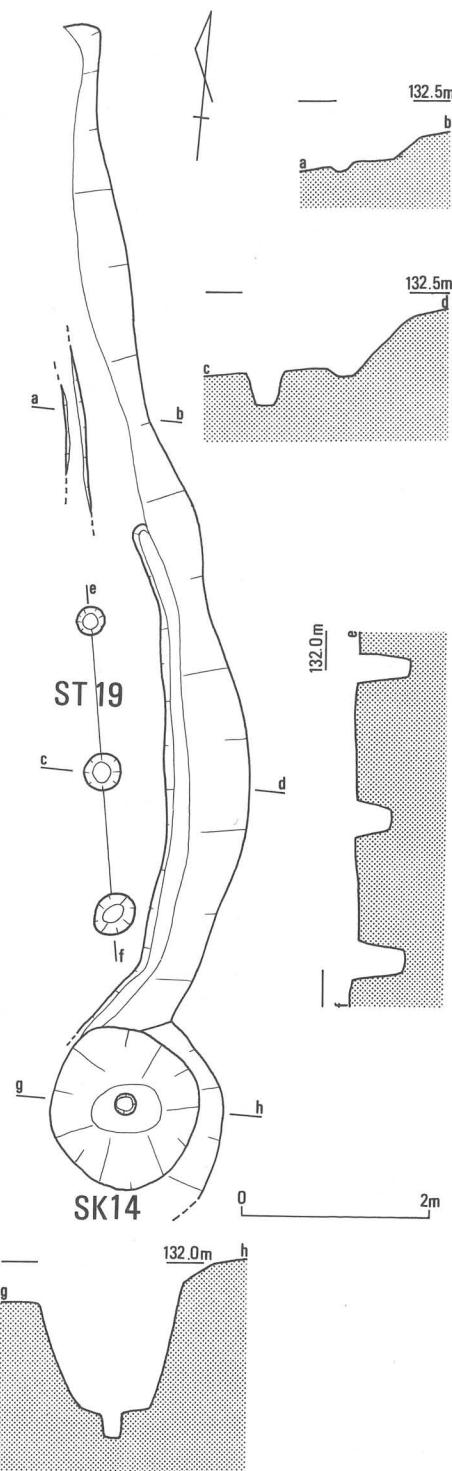
段状遺構19 (第111図)

北西にのびる丘陵の西側斜面、住居址9の西側約3.3mに位置する。斜面を断面「L」字状に掘りくぼめて長さ約10.4m、幅約1.6mの長大な平坦面を形成する。壁体に沿って幅約12cm、深さ約8cmの溝が巡るが、床面の中程で終息する。平坦面には、柵列を思わせる柱穴状のピットが1列に3個並んで検出された。ピットの径はおよそ30~48cm、深さは40~56cmを測るしっかりしたものである。遺構の北側には小規模な溝状遺構が走るが、自然に解消される。また本遺構の南側では、陥し穴状遺構と切り合っている。遺物は埋土中より少量の土器が出土したが、器台形土器・高杯形土器が目立つため、本遺構は祭祀遺構としての性格を有する可能性を指摘できる。

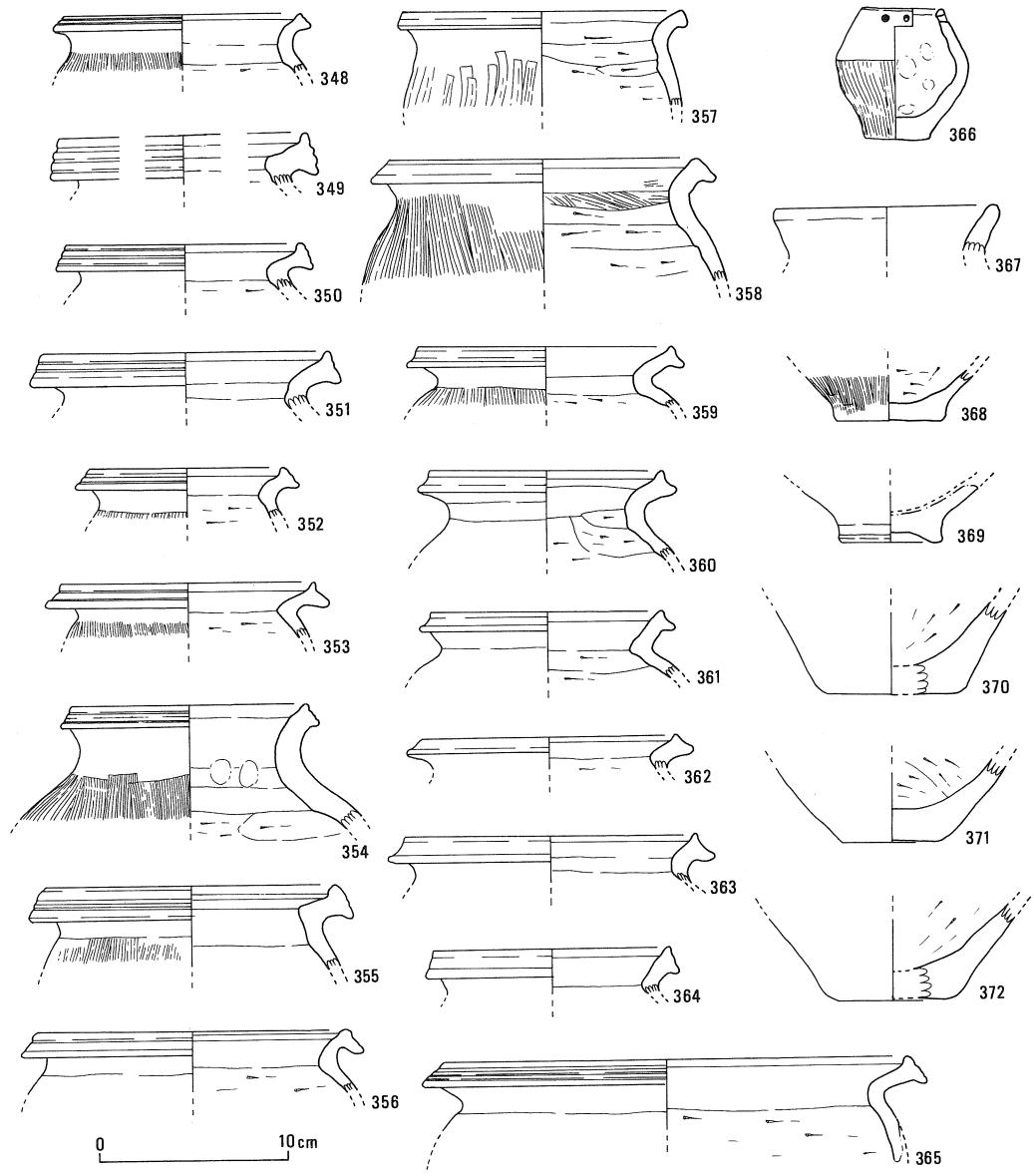
段状遺構19出土土器 (第112、113図)

348~365、367は甕形土器である。これらは口縁端部に明瞭な凹線文を施すもの(348~356、365)と、ヨコナデで仕上げるもの(357~365)の2タイプに分けられる。348~352、354、364、365は口縁端部を上下に肥厚・拡張させる。354の胴部外面にはタテ方向の細かいハケ目の単位が観察できる。胴部内面はヨコ方向のヘラケズリ、頸部内面はナデを施しころどころに指頭圧痕が残る。365は口径が他に比べて大きめで、胴部があまり張らない器形が予想されるため、鉢形土器の可能性も考えられる。353、356、358~363は口縁端部を斜め下方にひきのばすタイプである。353の胴部外面はタテハケで、356はナデで仕上げている。358の胴部外面にはタテハケを施す。内面は頸部直下を乱方向のハケメで調整し、その後ヘラケズリで仕上げる。357・367は口縁部の拡張を意識せず素縁に終わるタイプである。357は最大径のあまり張り出さない

い胴部を有し、外面には細かい单位で下方から上方へケズリ上げた痕跡が認められる。内面は頸部直下からヨコ方向にヘラケズリを施す。366は手づくね形土器である。口径約3.6cmを測る。胴部最大径以下はヘラミガキ、上半はナデ仕上げとなっている。2個1組の穿孔が2ヶ所で認められた。内面には指頭圧痕の痕跡が顕著である。368～372は甕形土器あるいは壺形土器の底部である。368は外面を細かいタテハケの後、底面付近をひとナデする。内面には乱方向のヘラケズリを施す。369は上げ底状を呈する比較的薄手の土器である。370～372の外面は磨滅が著しく調整等詳細は不明であるが、内面はヘラケズリを施している。373～379は高杯形土器の坏部あるいは脚部である。373～375は口縁端面を上下に肥厚させ、外面には数状の凹線文が巡る。373の外面はヨコ方向のヘラミガキで、375はタテハケがかすかに観察できる。内面調整はいずれもヘラケズリ。374は口径約14.8cm、器高約12.6cmを測る。短めの脚部を有し、比較的深い坏部からゆるく屈曲して口縁部に至る。脚部外面は細かいタテ方向のヘラミガキで丁寧に仕上げる。外面全体には赤色顔料の塗布が著しい。376は浅い椀状を呈する。外面は下半はタテ方向のヘラミガキ、上半をヨコナデで仕上げている。口縁部下端には1条の凹線文が巡る。内面は屈曲部より下半にタテ方向のヘラミガキを施した後、ユビナデで仕上げている。内外面とも赤色顔料の塗布が顕著である。377の浅い皿状を呈する受け部の外面は、タテ方向のヘラミガキで入念に仕上げている。屈曲部外面に1状の凹線文が1周するが、それより上半は欠損している。内面も同様にヘラミガキ仕上げている。断面より、脚部との接合部分は円盤充填の手法をとり、すき間をうめるためにあてがわれた粘土の様子が観察される。内外面とも赤色顔料を塗布している。378、379は脚裾部で外面には櫛描文が施されている。両者とも若干肥厚させた端部外面はヨコナデで仕上げる。380～384は器台形土器である。

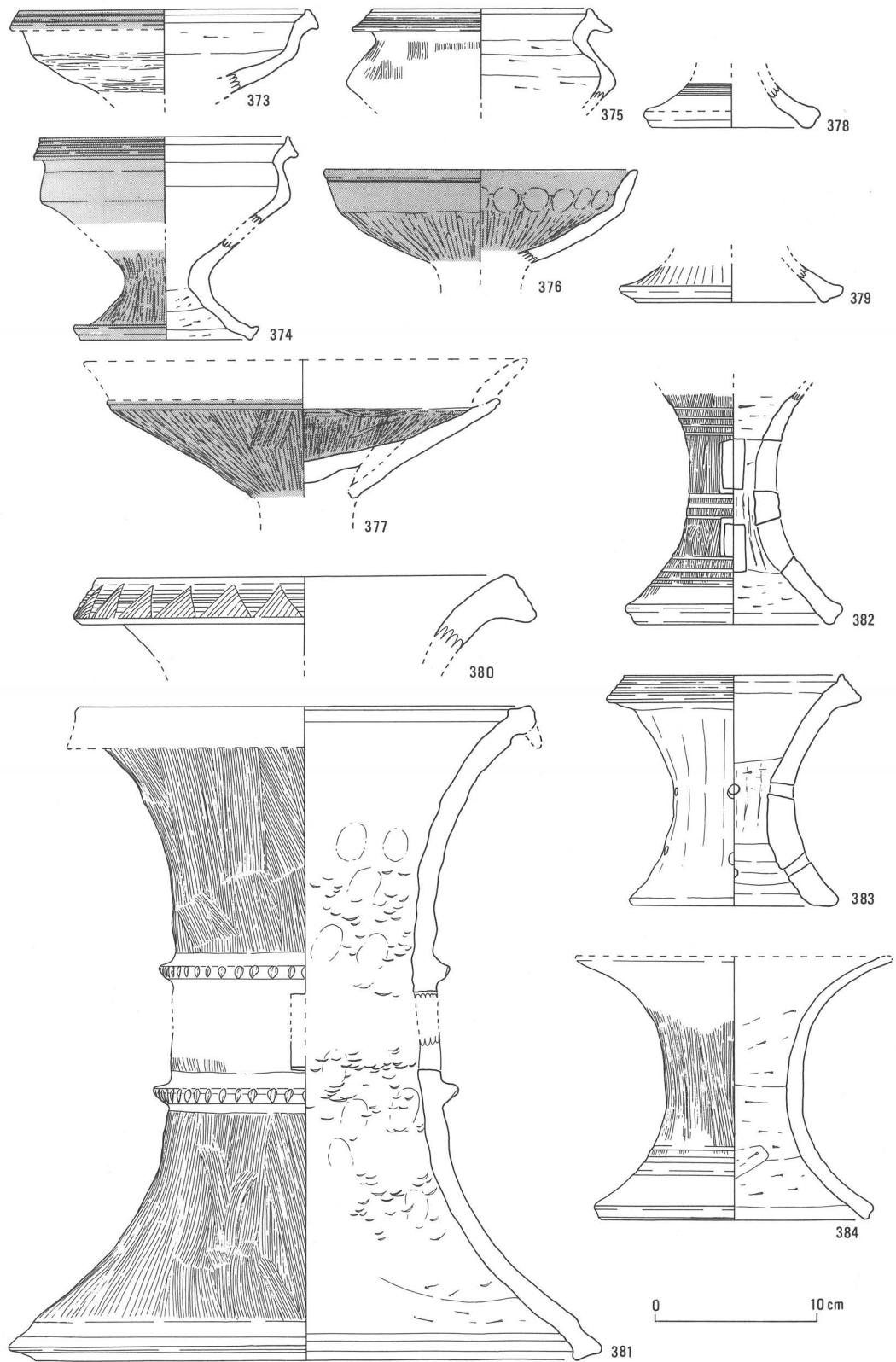


第111図 段状遺構19、土壙14平面・断面図
(S = 1 : 80)

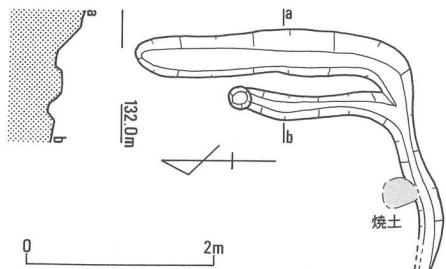


第112図 段状遺構19出土土器(1) (S = 1 : 4)

形状・大きさともバラエティに富んでいる。380は口縁部。端面には数条の凹線文が巡り、さらに鋸歯文で加飾する。381は口径約26cm、器高38cmを測る大形の器台である。急激に開く脚裾部を有する。外面全体にタテ方向のハケ目、胴部中半にはタガ状の突起の上に豆粒大的刺突文が巡る。さらに方形の透し穴が4方向に穿たれる。内面は全般的に指ナデによる凹凸が顕著であり、その際の爪形も数多く刻まれている。382は外面全体にタテ方向のハケ目を施した跡、3~4条の凹線文をバランスよく3段に巡らしている。この間に長方形の透し穴が2段、4方向に認められる。内面は脚裾部と上半部をいへラケズリで、その間にはしづり痕が残る。383の器面は粗くケズリ整えられている。円形の透し穴が4方向に穿たれる。384は脚部からラッパ状に大きく開き口縁部に至る。外面にはタテ方向のハケメを、その下半には3条の浅い凹線



第113図 段状遺構19出土土器(2) ($S = 1 : 4$)



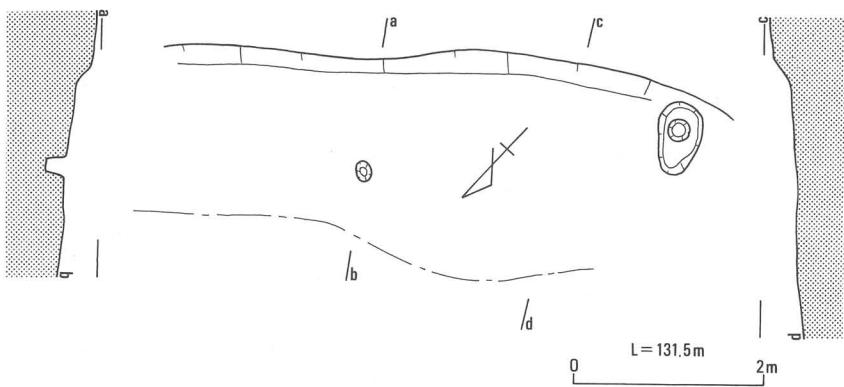
文が巡る。内面調整はヘラケズリである。

段状遺構20（第114図）

北西にのびる丘陵の西側斜面、段状遺構19の北側に位置する。南北にのびる浅い溝条遺構が2本合流・屈曲して西方へ向かう。西へのびる溝状遺構の北壁

第114図 段状遺構20平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

に接して焼土面が認められた。また南側には大小の柱穴状のピットが数個まとまって検出されたが、建物址を示すものはない。遺物は何ら検出されなかった。



段状遺構21（第115図）

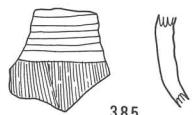
北西にのびる丘陵の鞍部中央、住居址12の南側に位置する。斜面とはいえ、ほとんど傾斜のない地面を断面「L」字状に掘りくぼめて長さ

5.8m、幅約1.8

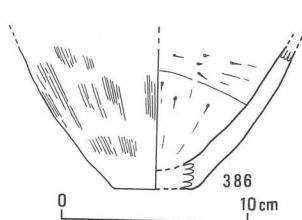
第115図 段状遺構21平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

mの平坦面を形成したのみの簡単なつくりである。遺物は、埋土中より若干量の土器片が出土した。

段状遺構21出土土器（第116図）



385は壺形土器の頸部の破片である。細かいタテ方向のハケ目の上半、浅い凹線文がかすかに観察できる。386は壺形土器あるいは壺形土器の底部片である。内外面とも磨滅がかなり進んでいるが、外面はタテハケ、内面には粗いヘラケズリが施されている。



段状遺構22（第117図）

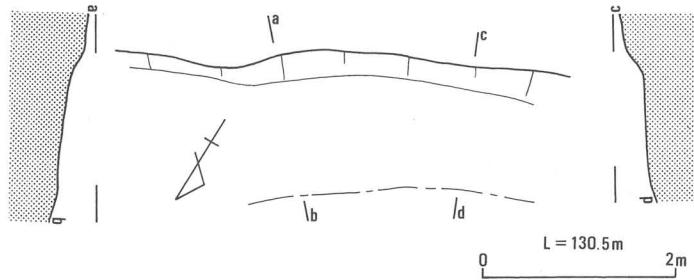
北西にのびる丘陵の鞍部、住居址12の北コーナーに接するよう位置している。ゆるやかな斜面を浅く掘りくぼめて長さ4.4m、幅約1.2mの平坦面をつくりだしたのみの遺構である。本遺構から

第116図 段状遺構21出土土器 ($S = 1 : 4$)

らは、柱穴状のピットも遺物も検出されなかった。

段状遺構23（第118図）

北西にのびる丘陵の西側、住居址11の西側に等高線走向に沿って位置する。ゆるい斜面を浅く掘りくぼめて幅1m、長さ10mの平坦面をつくりだす。平坦面の中央やや北寄りに焼土面が

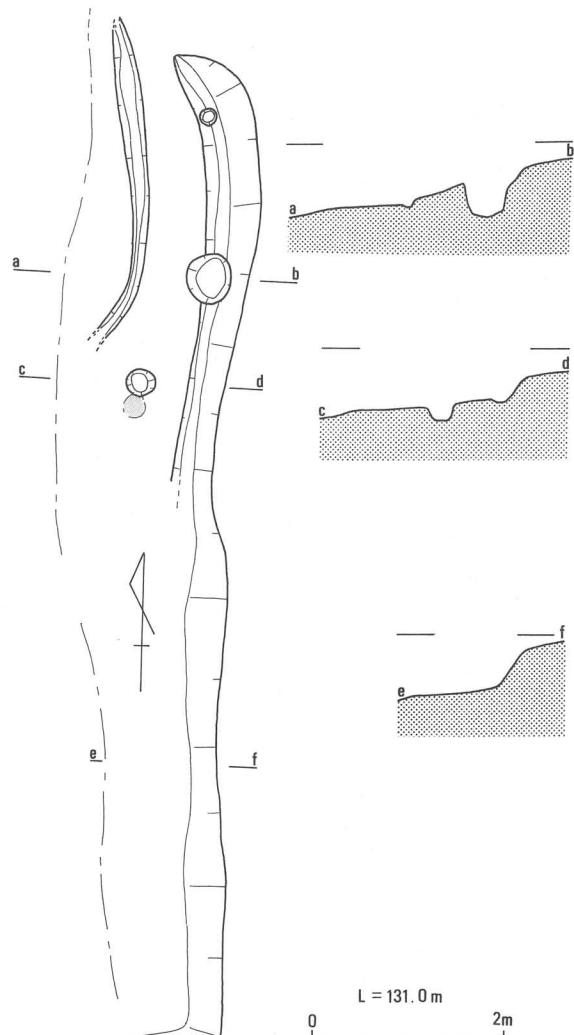


第117図 段状遺構22平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

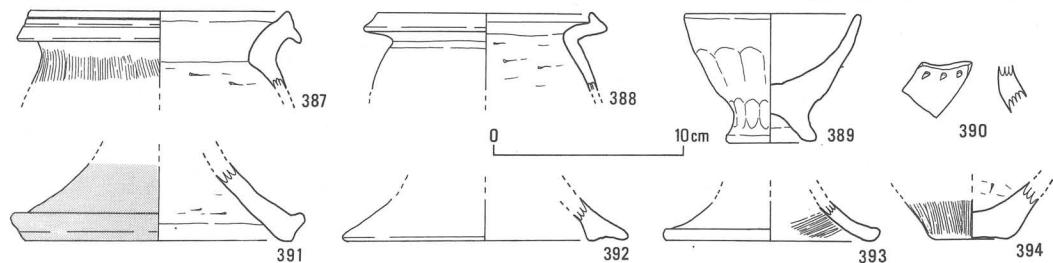
検出された。また遺構の北半、壁面直下と平坦面中央には南北方向に粗い溝が走るが、いずれも自然に解消される。溝内・平坦面では2~3個の柱穴状ピットが検出されたが、建物配置を示すものはない。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

段状遺構23出土土器（第119図）

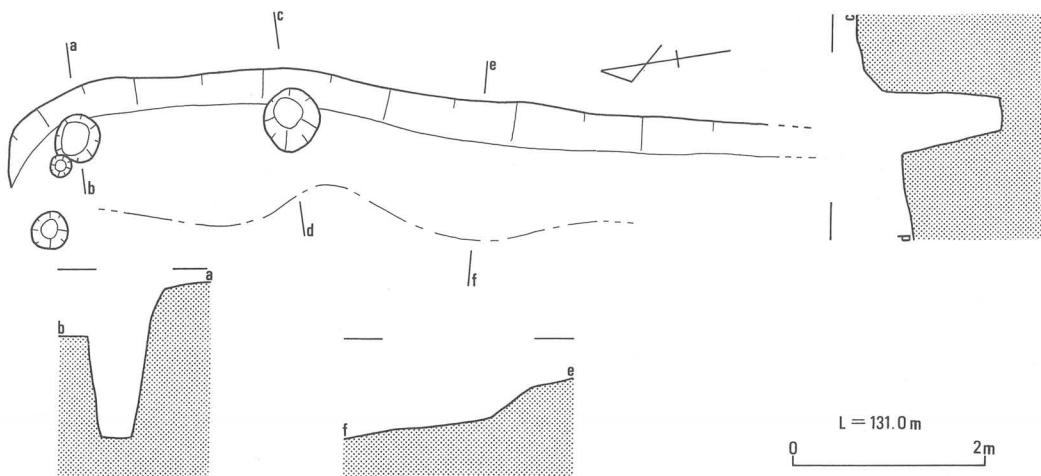
387・388は甕形土器の口縁部片である。387は下方にひきのばすタイプの口縁端を有し、外面には2状の凹線文を施した後指ナデで仕上げている。胴部外面上半は丁寧なタテ方向のハケメを施す。内面上半部はヨコナデ、下半部はヘラケズリで仕上げている。388の口縁端は上方にひきのばすタイプで、外面はヨコナデで仕上げている。389はコップ形のミニチュア土器で、口径8.8cm、器高約6.8cmを測る。精微な胎土を用い、内外面ともユビナデにより丁寧に仕上げている。受け部と脚部の接合部分にはユビオサエの痕跡が顕著に残る。391~393は高壺形土器あるいは器台形土器の脚裾部である。393の内面には細かな斜方向のヘラミガキが観察される。



第118図 段状遺構23平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



第119図 段状遺構23出土土器 ($S = 1 : 4$)



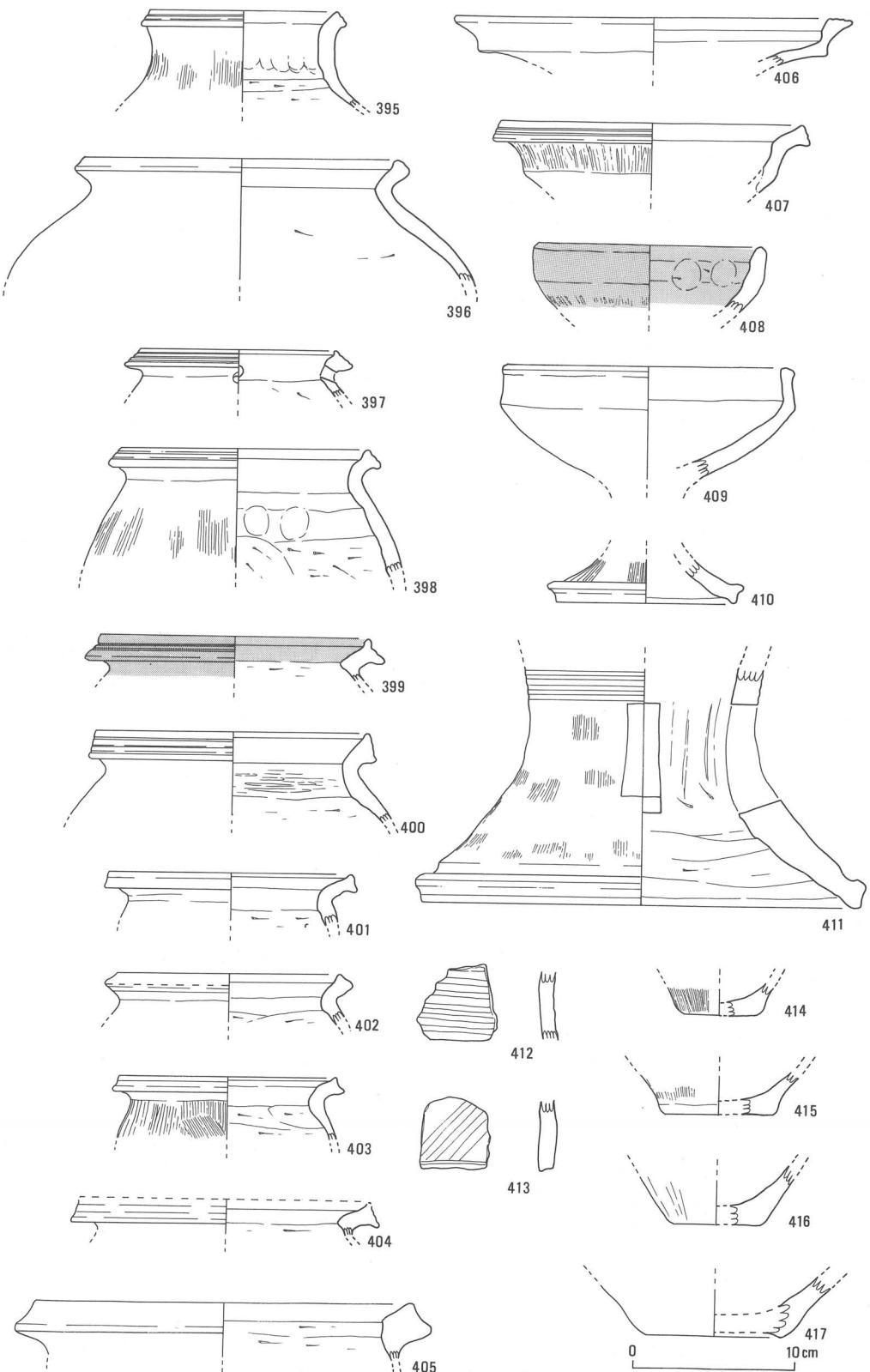
第120図 段状遺構24平面・断面図 (S = 1 : 80)

段状遺構24 (第120図)

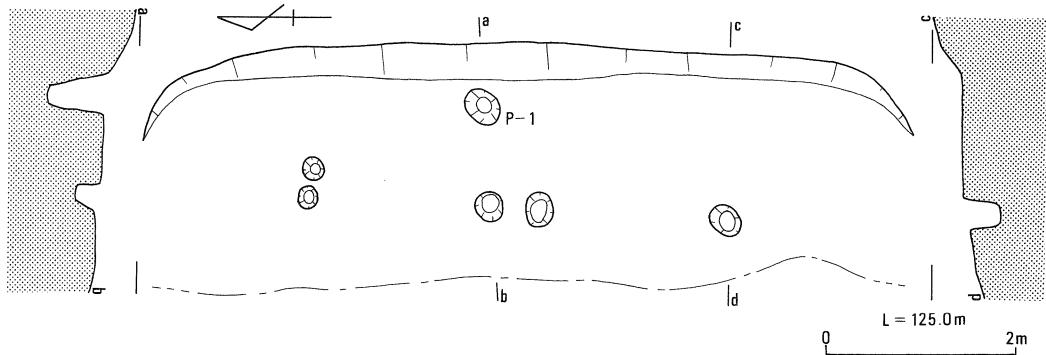
北西にのびる丘陵の西側斜面、段状遺構23の南側に接して位置する。斜面を掘りくぼめて幅1m、長さ8mの平坦面を形成する。平坦面の北側で径60cm程度、深さ約1cmのしっかりとした柱穴が2ヶ所確認されたが、建物址にはならなかった。壁面直下の溝・焼土面等は認められず、平坦面の南端も自然に解消される。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。

段状遺構24出土土器 (第121図)

395～397、399、400は壺形土器と考えられる。395の若干肥厚させ気味の口縁端面には2条の凹線文が巡る。頸部外面にはタテハケの痕跡がかすかに残る。内面はヘラケズリ、その上半をユビナデで仕上げている。397の口径は11cm程度を測る。下方にひきのばすタイプの口縁部外面にはしっかりした4条の凹線文が施されている。頸部屈曲部には穿孔が認められた。400の屈曲部内面にはヨコ方向のヘラミガキが観察される。401・402は口径14～15cm前後の中形の甕形土器である。406～409は高杯形土器の杯部。406は浅い杯部から鋭く屈曲して外方へ拡張させる口縁端部を有する。ほぼ水平な端面にはかすかに1条の凹線文が認められた。407は406に比べて比較的深めの壺部からゆるく屈曲して口縁端部に至る。下方にひきのばし気味の口縁端面には2条の浅い凹線文が巡る。壺部外面上半はタテ方向のヘラミガキ、内面はナデて丁寧に仕上げている。408は口径13cm程度の茶椀形を呈する壺部片である。口縁端部は丸くおさめる。外面にはかすかにタテ方向のヘラミガキが残る。また内面では指頭圧痕が観察される。409はゆるく外彎する壺部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端は肥厚している。内外面とも磨滅が激しいため調整等の詳細な観察は困難である。410は高杯形土器の脚裾部である。上下に肥厚を示す脚端部の外面には数条の櫛描文が施される。411は器台形土器。太めの胴部から大きく開いて脚端部に至る。端部は上下に肥厚させており、外面はヨコナデで



第121図 段状遺構24出土土器 ($S = 1 : 4$)



第122図 段状遺構25平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

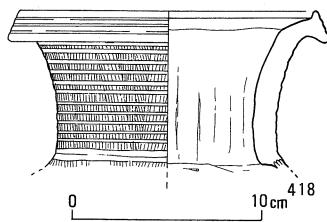
仕上げている。胴部外面はタテ方向のハケ目の後、上半にはナデをほぼ全面に施している。胴部中位には数条の凹線文が巡る。内面下半は粗いヘラケズリで、上半にはしづり痕が残る。4方向に長方形の透し穴が穿たれる。412～417は壺形土器あるいは壺形土器の底部片である。タテハケ、ヘラミガキ、ナデと仕上げ方はさまざまである。412・413は破片である。412は凹線文、413は鋸歯文の一部と考えられる。

段状遺構25（第122図）

北西にのびる丘陵の西側斜面、等高線走向にほぼ平行して位置する。ゆるい斜面を断面「L」字状に浅く削平して、幅約2m、長さ約8mの平坦面を形成する。平坦面には数個のピットが検出された。これらのうちいくつかは、深さを30cm前後にそろえているため柵列の可能性も考えられる。遺物はP-1の埋土中より、長頸壺の口縁部が出土したのみである。

段状遺構25出土土器（第123図）

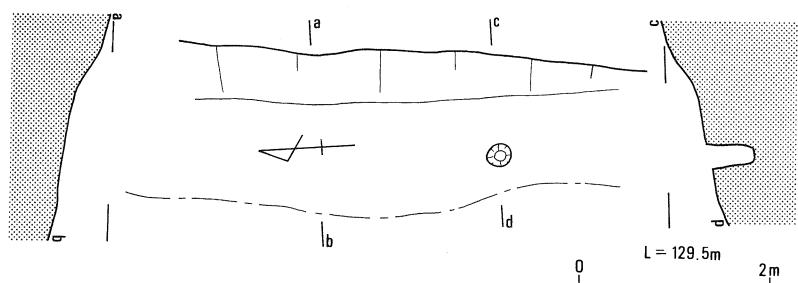
壺形土器の頸部から口縁部にかけての破片である。上下に拡張させる口縁端外面には3条の明瞭な凹線文を巡らす。ゆるく外反する頸部の外面は、細かいタテハケの後凹線文を施す。口縁部内面はナデ仕上げ、頸部にはしづり痕が認められる。屈曲部以下はヘラケズリで仕上げている。



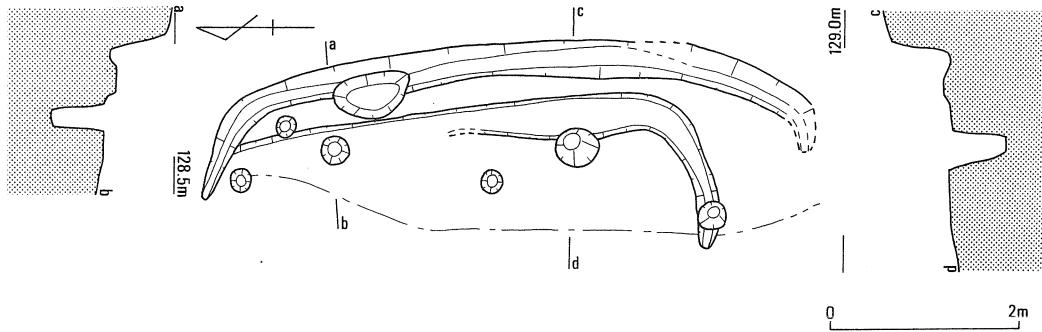
第123図 段状遺構25出土土器 ($S = 1 : 4$)

段状遺構26（第124図）

北西にのびる丘陵
西斜面、等高線走向



第124図 段状遺構26平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



第125図 段状遺構27平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

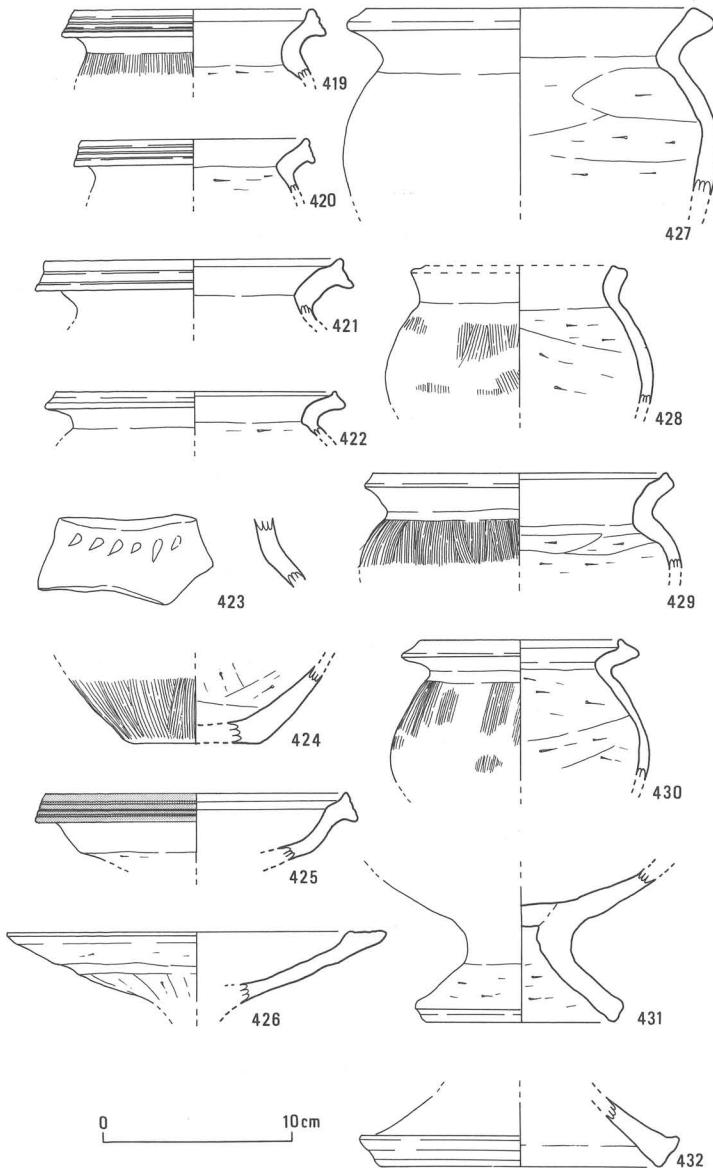
に沿って位置する。なだらかな斜面を断面「L」字状に浅く掘りくぼめて平坦面をつくりだが、その両端は自然に解消される。平坦面のやや南寄りに深さ約48cmのピットが1ヶ所検出されたのみで、遺物等は認められなかった。

段状遺構27（第125図）

北西にのびる丘陵の西側斜面の最下段に等高線走向に沿って位置する。斜面を断面「L」字状に削平し、長さ約6m、幅約1.6mの平坦面をつくりだす。壁面直下には幅16cm程度の周溝が巡る。また、平坦面の中央部から南方へ向けて幅約34cmの深い溝状の遺構が部分的に重複して検出された。遺構内には大小数個のピットを検出したが、建物の柱穴配置を示すものは認められない。遺物は埋土中より出土した。この溝状遺構、さらに西方へ屈曲し自然に消滅している。

段状遺構27出土土器（第126図）

419～430は甕形土器である。419・420は口径11～12cm程度の小形のもので、上下に肥厚を示す口縁端部には3～4条の凹線文を施す。427は胴の張らないスマートな器形を有する。口縁端部は下方にひきのばし気味で、外面はナデで仕上げる。428は卵形の胴部からゆるく屈曲して口縁部に至る。端部は面をもたず、ほぼ水平に丸く仕上げている。胴部外面にはタテ方向のハケ目がかすかに残り、内面は細かいヘラケズリで調整する。430の口縁端部は上方に軽くひき上げるタイプで、ヨコナデを施している。胴部外面の調整はタテ方向のハケ目、内面はヘラケズリである。外面にはススの付着が顕著に認められた。423は壺形土器の頸部屈曲部と思われる破片で、外面には大粒の刺突文が一周する。424は壺形土器あるいは甕形土器の底部片である。底部平坦面に至るまで細かなタテ方向のハケ目が施されている。425・426は高杯形土器の坏部である。425は浅い受け部からゆるく屈曲して口縁端部に至る。上下に肥厚させた端面には赤色顔料が塗布され、しっかりとした3条の凹線文が巡る。その他は内外面ともナデ仕上げである。426の受け部は、口縁端部めがけてラッパ状にひらく。ほぼ水平に整形された口縁

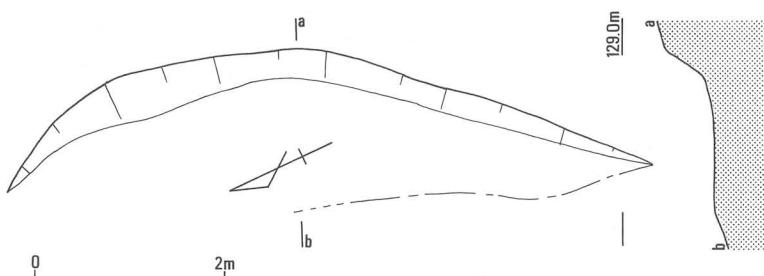


第126図 段状遺構27出土土器 (S = 1 : 4)

端面には浅い凹線文が巡る。外面は粗く削って面を整えた後、下半をタテ方向、上半をヨコ方向にそれぞれナデて仕上げている。内面もやはりナデ仕上げ。431は台付鉢の脚部と考えられる。脚端部は拡張を示さず、ナデて丸くおさめている。外面はヨコナデ、内面は細かいヘラケズリを施す。脚部との接合には、円盤充填の手法がとられている。

段状遺構28 (第127図)

北西にのびる丘陵の北側斜面、段状遺構25の北側3.5mの地点に位置する。斜面を断面「L」字状に削平して、長さ約6.8m、幅約1.4mの平坦面をつくりだす。壁は直線ではなく、ゆるやかにカーブを描いている。壁面直下に巡る溝・ピット等は検出されなかった。また、遺物も出土していない。

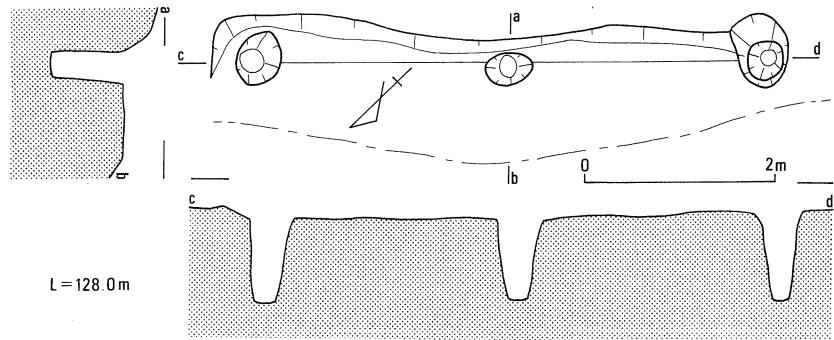


第127図 段状遺構28平面・断面図 (S = 1 : 80)

段状遺構29

(第128図)

丘陵の北西端、
段状遺構28の北側
に接続して検出さ
れた。斜面を断面
「L」字状に削平
して、長さ約6.0

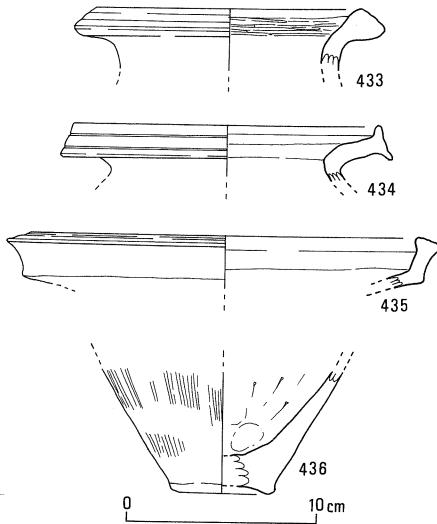


第128図 段状遺構29平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

m、幅約1.2mの平坦面を形成している。壁体に沿って、柱穴状のピットが3個検出された。直径は40~60cmの間で、床面からの深さが約88cm程度とそれぞれが規模をそろえている。柵列状の遺構配置を示すものと思われる。遺物は埋土中から若干の土器片が出土したのみで、いずれのピットからも遺物は検出されなかった。

段状遺構29出土土器 (第129図)

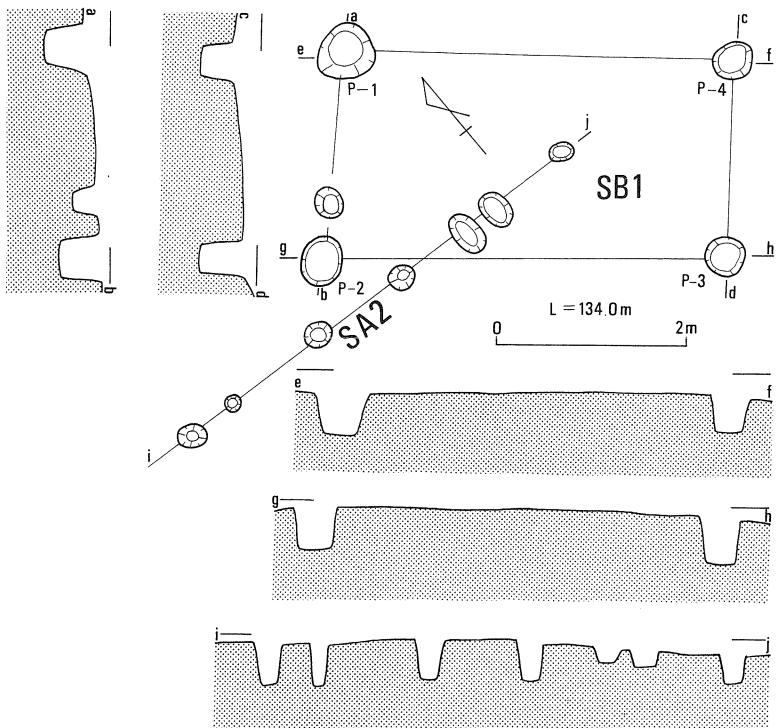
433は若干の頸部を有する壺形土器である。下方に肥厚させる口縁端部の外面は強いヨコナデで仕上げており、その内面にはヨコ方向のヘラミガキが残る。434は甕形土器と思われる。胴部上半から鋭く屈曲して口縁部に至る。端部は上下に拡張させ、外面にはくっきりとした2条の凹線文が巡っている。後に強いヨコナデにより仕上げたのであろう、その際の稜が器面によく残る。435は高壺形土器である。浅めの壺部から屈曲して口縁端部に至る。端面はやや外傾しながらもほぼ水平を保ち、その外面は数条の凹線文の後、ナデにより仕上げている。外面には一部で黒斑が認められた。436は底部片である。外面にはかすかにタテハケが残る。底面には指により、ナデたりおさえた痕跡が顕著に残っている。



第129図 段状遺構29出土土器 ($S = 1 : 4$)

建物址1 (第130図)

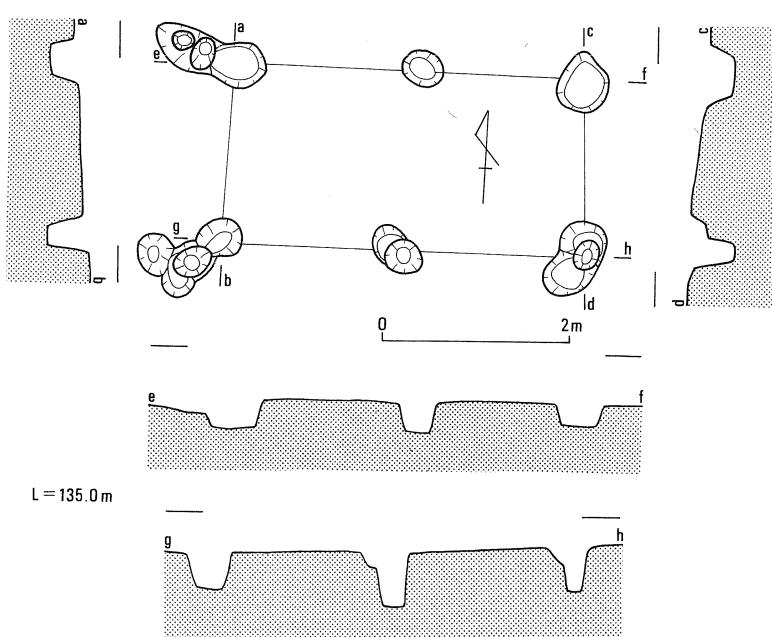
調査区のはば頂部付近に、柵列状遺構2と重複して検出された。柵行方向を等高線のカーブに合わせ、その距離は約4.16m、梁間約2.16mを測る1間×1間の建物址である。柱穴の直径はまちまちであるが、深さは約44~45cmで4ヶ所ともほぼ一定である。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。



第130図 建物址1、柵列状遺構2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

建物址2 (第131図)

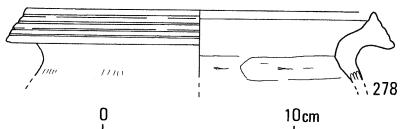
調査区丘陵頂部の平坦面に桁行方向を等高線走向にそろえて位置する。桁行2間、梁間1間の建物址である。桁行約3.8m、梁間約1.9mを測る。柱穴状のピットがところどころ重複して複雑な状況を呈するが、心々距離を考慮して本遺構に所属する柱穴を定めた。各柱穴の深さは37cm前後を測る。遺物はいずれの柱穴からも出土しなかった。



第131図 建物2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

建物址3 (第132図)

調査区頂部付近、建物址2の南東方向に位置する。桁行3.8m、梁間2.1mを測る1間×1間の建物址である。4個の柱穴の深さは平均で42cmと比較的浅いが、直径は最大のものが60cmとしっかりしている。P-2～P-4のいずれの柱穴にも礫が混入していた。遺物はP-1より土器片が1点出土したのみである。



第133図 建物址 3 出土土器

建物址 3 出土土器 (第133図)

P-1より唯一の出土である。278は甕形土器の口縁部で、端部は上下に拡張させる。外面には4条の明瞭な凹線文を施す。胴部外面上半は、かすかにタテハケが残る。内面はヘラケズリで仕上げているが、屈曲部より上半は強いヨコナデにより、稜を形成するほどである。

土壙墓1 (第134図)

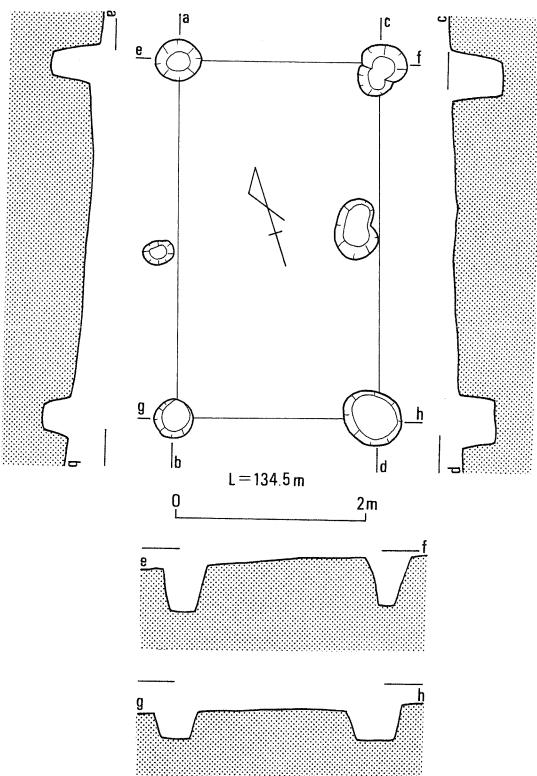
調査区J-14区に単独で位置する。掘り形上面は約94cm、床面では約32cmを測る断面逆台形の土壙墓である。遺構確認面からの深さは最深部で約58cmを測る。遺構の東半分は後世の削平を受け、流出している。埋土は单層で淡灰白色を呈する。

第134図 土壙墓1 平・断面図
(S = 1 : 40)

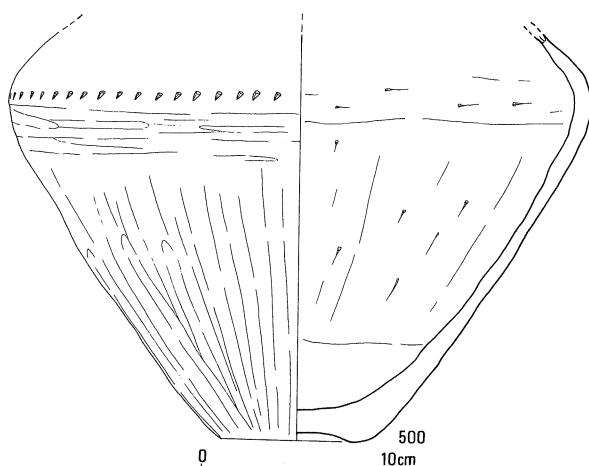
床面から若干浮いた状態で、壺形土器の胴部下半部が出土した。これは壺形土器を使用後壺棺に転用し、埋葬したものと考えられる。副葬品等は認められなかった。

土壙墓1 出土土器 (第135図)

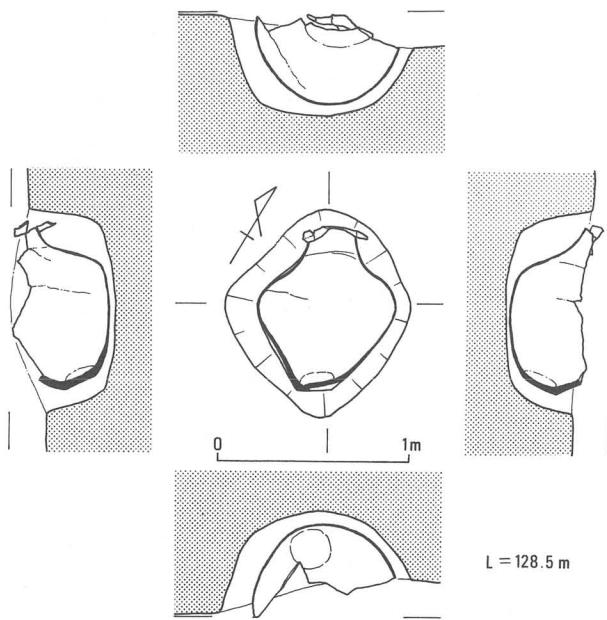
最大径部は30.8cmを計る壺形土器で、使用後壺棺に転用したものと思われる。淡黄褐色の緻密な胎土を用いる。最大径の外面には規則正しい列点文が巡る。胴部下半はタテ方向のヘラミ



第132図 建物址 3 平面・断面図 (S = 1 : 80)



第135図 土壙墓1 出土土器 (S = 1 : 4)



第136図 土壙墓2平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

埋土は単層で淡茶褐色を呈する。前述の土壙墓1と同様、床面から若干浮いた状態で、口縁部を打ち欠いた壺形土器と高杯形土器の杯部片が検出された。大きさから小児用の埋葬施設と考えられる。埋土を精査したが、副葬品及び歯・骨等は何ら検出されなかった。

土壙墓2出土土器（第137図）

壺形土器を壺棺に、また高杯形土器の坏部をその蓋として転用した例と考えられる。501は口径は21.6cmを測り、壺形土器にうまくかぶさる大きさである。浅い杯部から屈曲して斜め上方にたちあがり、口縁端部に至る。端部は上下に拡張を示し、その外面にはくっきりとした3条の凹線文が施されている。杯部外面下半はタテ方向のヘラミガキ、上半はヨコナデに入念に仕上げている。内面の調整はヨコナデである。内外面とも赤色顔料の塗布が顕著に認められた。脚部との接合部分は円盤充填の手法が観察される。指ナデの際についたと思われる凹凸が器面全体によく残っている。502は壺形土器である。口縁部を意識的に打ち欠いて壺棺に転用している。胴部中央やや上半部寄りに、径36.6cmを測る最大径を有する大形の個体である。胴部外面には、上方から順次斜方向の粗いハケ目を施したその後、底部からのヘラミガキで仕上げている。外面上半には一部ヘラでひっかいたような刺痕が観察される。頸部との屈曲部には、大きめの刺突文と刺痕状のスジの2個が1単位となって規則正しく一周する。頸部外面は丁寧なタテハケを施している。内面は3回に分けてケズリ上げた様子が観察される。上半部は指おさえで仕上げたのである。爪形の痕跡が多く残っており、頸部内面にも同様に指頭圧痕が規則的に施されている。底部はやや上げ底気味に仕上げる。淡黄褐色の非常に精緻な胎土を用い、全体的に入念な仕上げがなされている。

ガキ、その上半はヨコ方向のヘラミガキで丁寧に仕上げる。内面は下半をタテ方向のヘラケズリ、最大径より上部はヨコ方向のヘラケズリを施している。

土壙墓2（第136図）

北東にのびる丘陵の最先端、B-12、C-12区にまたがって位置する。現存する掘り形は長径約1.1m、短径約96cmを測るが、上面は後世の削平を受け残存していない。遺構確認面からの深さは最深部で54cmを測る。

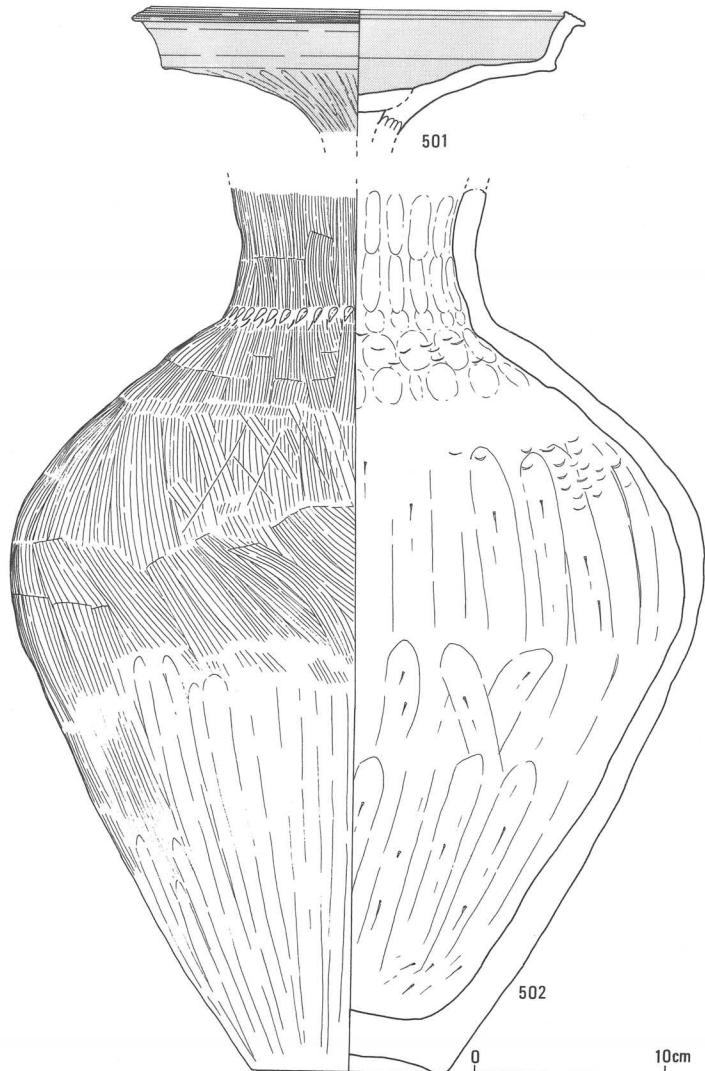
$L = 128.5 \text{ m}$

土壙1（第138図）

北東にのびる丘陵の西斜面に、長軸が等高線走向に沿うように位置している。長辺約2.9m、短辺約1.7m、深さ約52cmを測る不整長方形土壙である。埋土は3層に分層される。遺物は土器片が1点出土したのみである。また、床面に貼りつくように、30cm大の礫が検出されたが、その意義については不明である。

土壙1出土土器（第139図）

437は壺形土器の口縁部と考えられる。上下拡張を示す口縁端部外面には、3条の明瞭な凹線文が巡っている。口縁部内面には赤色顔料が塗布されている。全体を強い指ナデにより仕上げているためか、稜の鋭いシャープな印象をうける土器である。



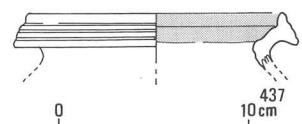
第137図 土壙墓2出土土器 ($S = 1 : 4$)

土壙2（第140図）

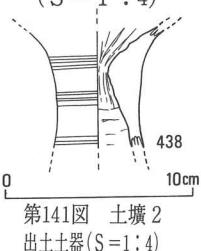
北東にのびる丘陵の東側斜面、先の土壙1と並んで検出された。長辺約1.8m、短辺約1.7m、深さ約56cmを測る隅丸方形土壙である。埋土は土壙1と同様に3層に分層できる。ここでも遺物は埋土中より土器片1点の出土をみたのみである。

土壙2出土土器（第141図）

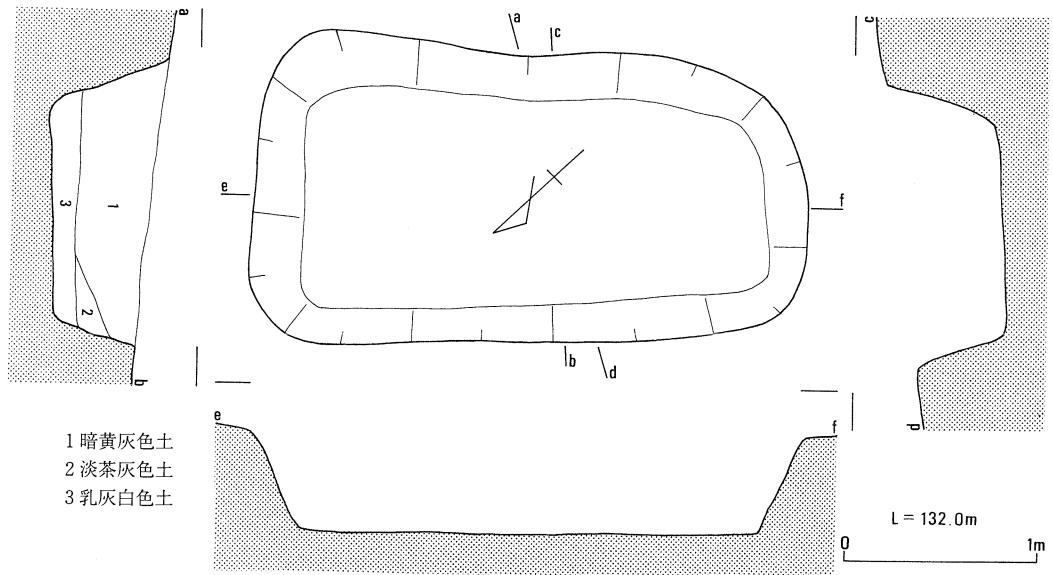
438は高壺形土器の脚部片である。外面は5条1単位の櫛描文で加飾される。内面にはしづり痕が残り、下方はヨコ方向のヘラケズリで仕上げている。



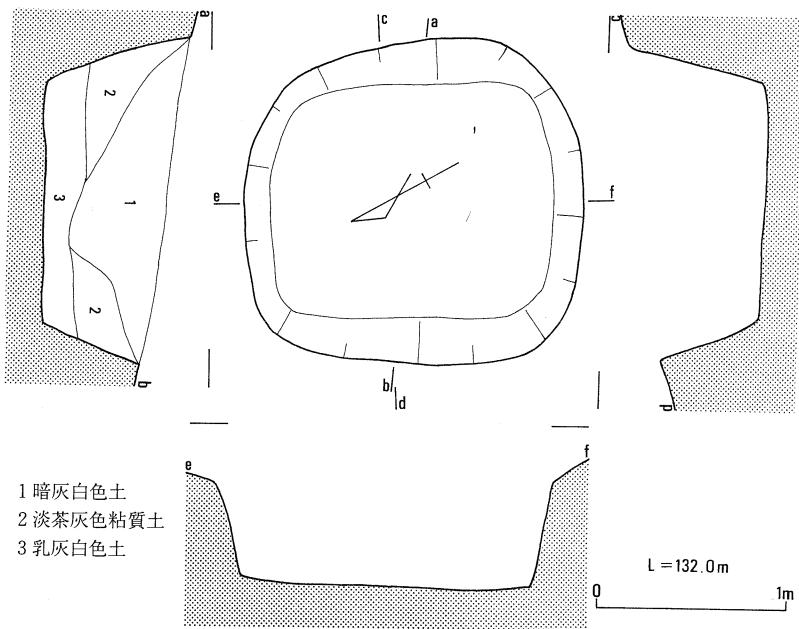
第139図 土壙1出土土器 ($S = 1 : 4$)



第141図 土壙2出土土器 ($S = 1 : 4$)



第138図 土壙1平面・断面図 ($S = 1 : 40$)



第140図 土壙2平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

土壙3 (第142図)

丘陵のほぼ頂部平坦面に位置する。本遺構は、地面を掘りくぼめて中に食物堅果類を貯える“貯蔵穴”的機能を有すると考えられる。土壙上面直径約1.2m、下面直径約1.5mの断面フラスコ状を呈する。床面の周囲に、幅約8cm、深さ約2cm程度の非常に小規

模な溝が巡るが、機能等は不明である。土層の堆積は地面の傾斜に相反する形でなされ、埋土は10層に分層できる。この内、土器、礫等は上層に集中して比較的多量に検出された。

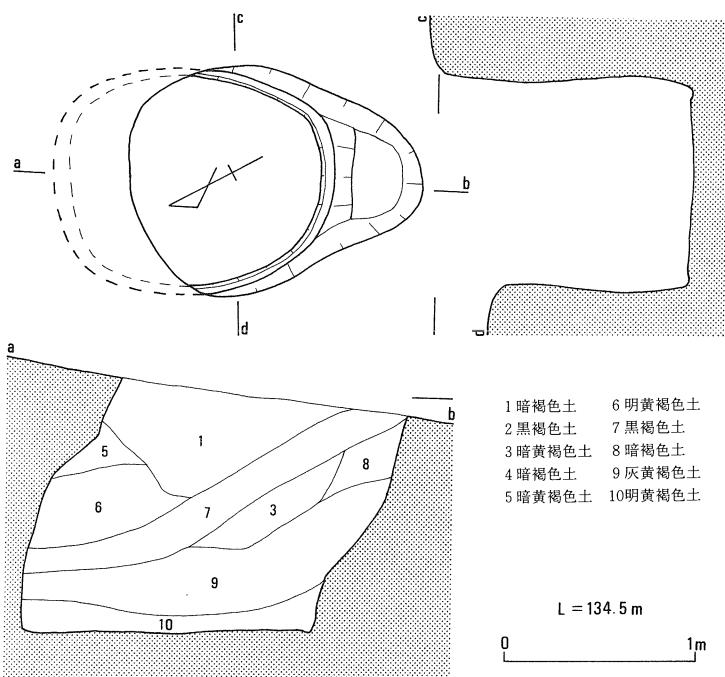
土壙3出土土器 (第143図)

439・440は壺形土器である。439は短めの頸部からゆるく外反して口縁部に至る。端部は上下に拡張させ、外面にはくっきりとした2条の凹線文が巡る。頸部外面にはタテ方向のハケ目

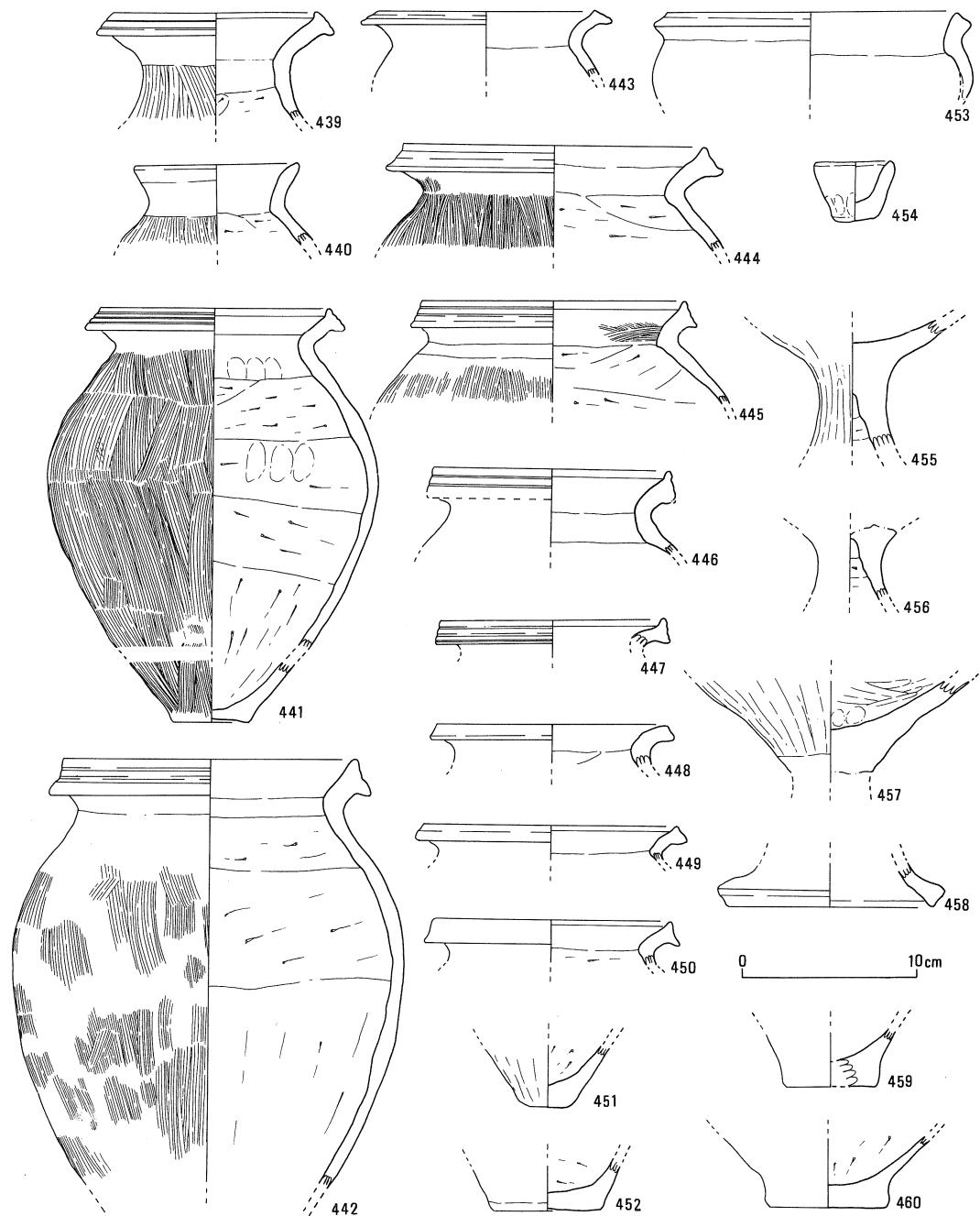
を施し、その上半部をナデにより仕上げている。内面は屈曲部以下をヘラケズリ、上半はヨコナデで仕上げる。440は、胴部よりゆるやかに折れて斜め上方にたちあがり、口縁部に至る。端部は拡張せずにまるく収める。胴部外面上半は細かいタテ方向のハケ目で、その上半から口縁端にかけてはナデ仕上げを施す。内面は屈曲部以下をヘラケズリ、以上はナデ仕上げとする。441～450は甕形土器である。

441は口径約12.8cm、器高24cm

を測る比較的小形のものである。口縁端部は上下に拡張傾向を示し、外面には明瞭な3条の凹線文が巡っている。胴部外面全体は、上方から下方に向かって4回に分けてタテ方向のハケ目が施されている。一部にススが付着していた。内面は下半をタテ方向のヘラケズリ、中・上半をヨコ方向のヘラケズリで仕上げ、ところどころに指頭圧痕が観察される。口縁部内面は、ヨコナデにより仕上げている。442はあまり胴の張り出さないタイプ。下方に引きのばし気味の口縁部外面は2～3条の凹線文を施した後ナデ消している。胴部外面は磨滅が激しいものの、随所にタテ方向のハケ目が認められる。内面はヘラケズリで仕上げる。443・444は、口縁端部を下方にひきのばすタイプである。443の口径は12cm程度の小形のもので、胴部から屈曲、ややまのびして口縁部に至る。口縁端面にはかすかに凹線文が残る。444の胴部外面はタテ方向の細かいハケ目、内面はヘラケズリで仕上げている。445の口縁端部は上下に若干肥厚させており、その外面には2～3条の凹線文が一周する。胴部外面は磨滅が激しいがタテ方向のハケ目、内面はヘラケズリで仕上げている。また鋭く屈曲して口縁部に至る内面には、斜方向のハケ目が一部残る。446・447の口縁部は上方に拡張させるタイプで、両者とも外面には2～3条の凹線文が巡る。448～450はいずれも磨滅が激しいが、口縁部外面は凹線文ではなくヨコナデ仕上げと思われる。453は鉢形土器である。ゆるく内彎した胴部から屈曲して口縁部に至る。端部は下方にひきのばすタイプ。内外面とも磨滅が激しいため調整等は不明である。454は手づくね土器である。おちょこ形を呈し、比較的厚手に仕上げている。底部付近には指頭圧痕が残る。455・456は高壺形土器の脚部である。455の脚部外面は粗いタテ方向のヘラミガキで仕上げる。



第142図 土壌3平面・断面図 (S = 1 : 40)



第143図 土壙3出土土器 ($S = 1 : 4$)

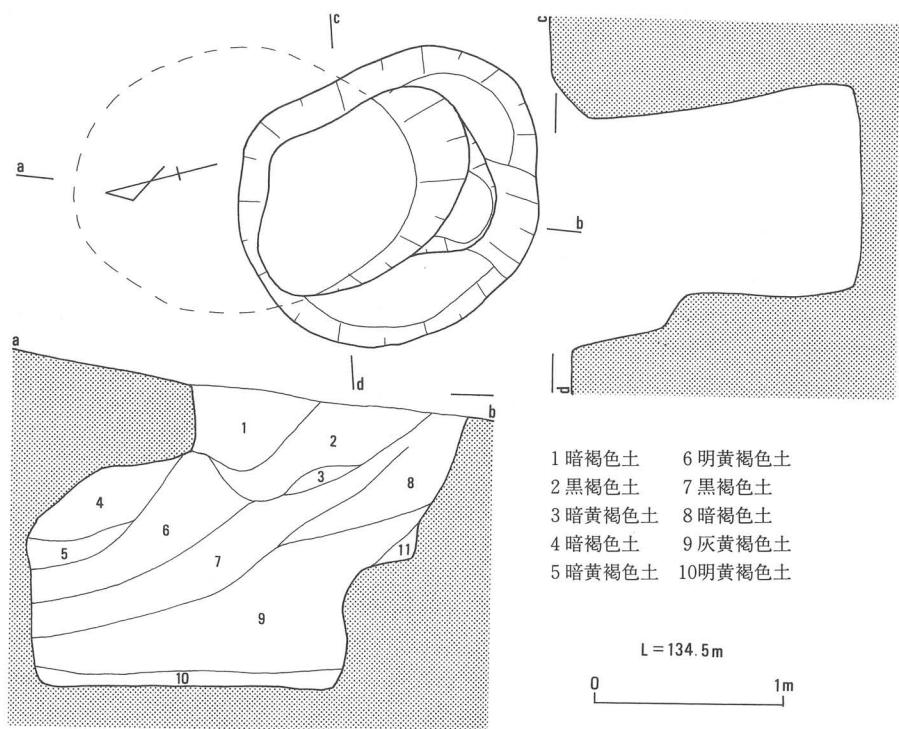
内面の調整はヘラケズリであるが、上部に棒状工具でつきさしたような痕跡が認められる。457は高杯形土器の杯部片であるが、外面は単位の粗いタテ方向のヘラミガキ、内面は斜方向のヘラミガキで、底部付近には指頭圧痕が認められる。脚部との接合は、差し込み式の手法がとられている。458は器台形土器あるいは高杯形土器の脚裾部である。451、452、459、460は底部片。底面が偏平なタイプと、強いヨコナデによりひき出すタイプの2通りが認められる。

土壤4 (第144図)

丘陵のほぼ頂部、土壤3の西側に位置する。上面での最大径約1.6m、底面での最大径は約1.8m、深さ1.6mを測る。

断面図から、上面と底面が南北方向ではか

なりずれて

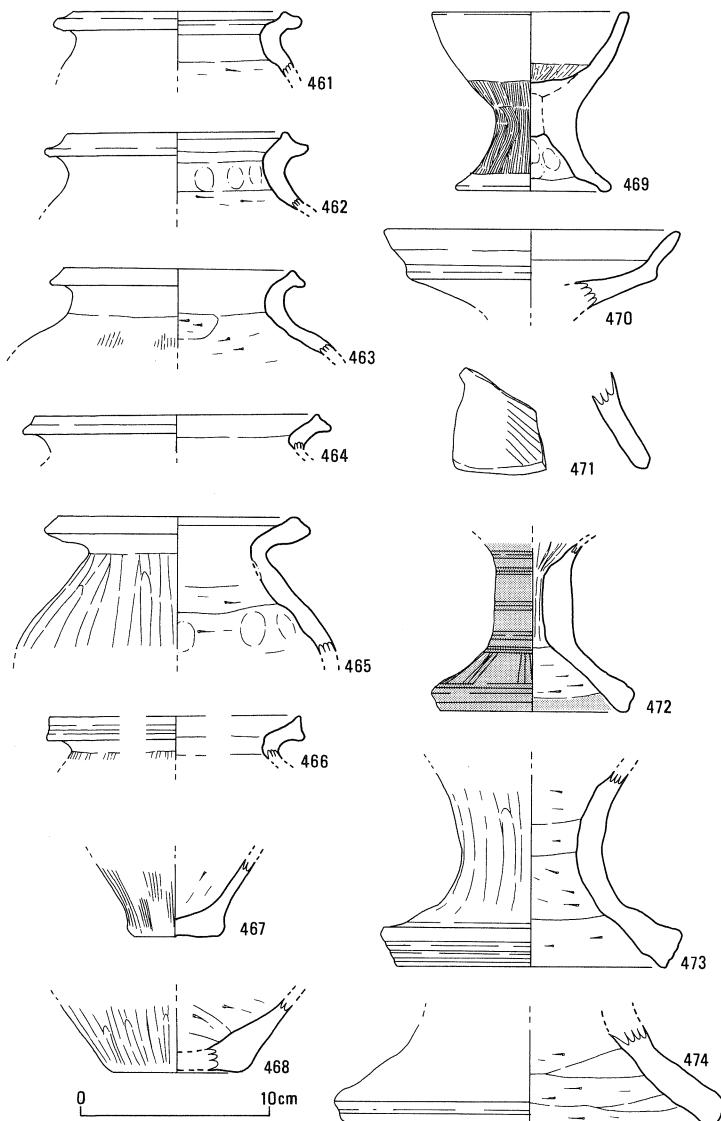


第144図 土壌4 平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

いることが判る。土層はここでも土地の傾斜にさからうように10層に分層された。遺物は上層より比較的多数の土器片が出土している。土壤3と同様、貯蔵穴の機能を有するものと思われる。

土壤4 出土土器 (第145図)

461～464は甕形土器である。いずれも口縁部片、端部は下方にひきのばすタイプである。外面はヨコナデで仕上げる。465は壺形土器と考えられる。胴部の張り出さないストンとした器形で、口縁端部は下方に肥厚させる。胴部外面は単位の粗いタテ方向のヘラミガキを施し、その上半はナデ消している。内面は大部分をヘラケズリで仕上げるが、一部で指頭圧痕の凹凸が残る。466の口縁部は、わずかに上方へ拡張させ外面には2～3条の凹線文が巡る。467、468は底部片である。467は薄手で、底部付近をヨコナデによってやや上げ底気味に仕上げる。外面にはかすかにタテハケが残る。468の外面はタテ方向のヘラミガキ仕上げ。469はコップ形の高壺形土器で、口径10cm、器高約9.4cmを測る。外面のうち多くはタテ方向の丁寧なハケ目を施し、その上・下半をそれぞれナデて仕上げている。脚部内面は指頭圧痕が顕著に残り、脚裾部はナデにより丸くおさめる。壺部内面は底面付近をヘラミガキで、それ以上はナデて仕上げる。外形を一通り整えた後、粘土をさらにつぎあてて整形した様子が断面から観察できる。淡黄褐色の非常に精緻な胎土を用いた入念なつくりである。470は高壺形土器の杯部であるが、



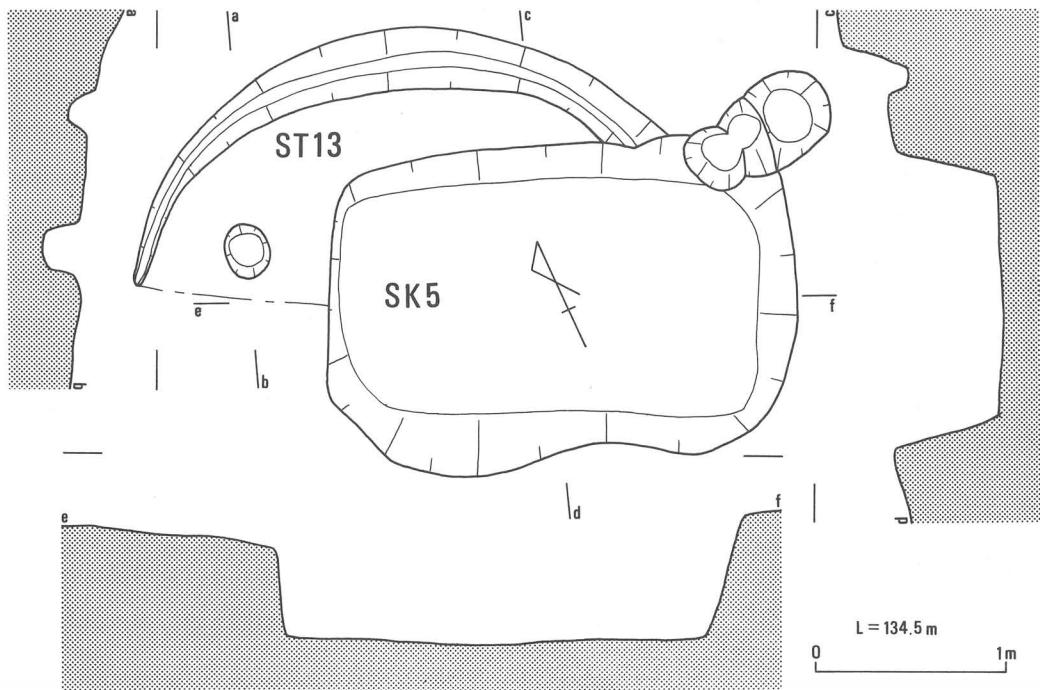
第145図 土壌4出土土器 ($S = 1 : 4$)

脚端部は、凹線文を施した後ヨコナデによって仕上げているためか、器面に凹凸がよく残っている。本遺構出土の土器は、後期前半の中でも比較的新旧が入り混じった様相を呈している。

土壤5（第100図）

丘陵頂部平坦面の西側斜面、土壤4の西側1.75mの地点に段状遺構13と重複して検出された、長軸約2.5m、短軸約1.7mを測る長方形土壤である。地面をほぼ垂直に掘りこんで、床面までの深さはおよそ58cm程度である。切り合い関係から、段状遺構13の後に構築されたものと考えられる。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。また土壤の北東コーナーで3個のピットが重複して検出されたが、本土壤との関係については不明である。

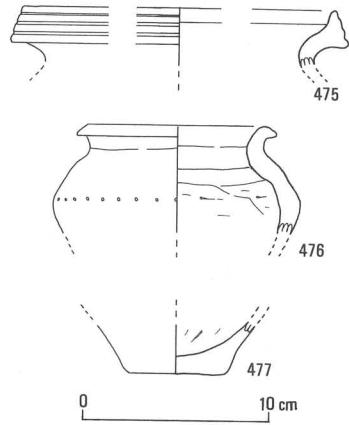
内外面とも磨滅が激しいため調整等詳細は不明である。471は脚裾部と思われる破片で、一部に綾杉文風の櫛描文が残る。472高壇形土器の脚部である。厚みのある筒条の脚部から脚裾部へ向けてゆるやかに開く。外面は3条一組の櫛描文、脚裾部は同じくタテ方向の櫛描文で規則正しく加飾される。脚端部はわずかに肥厚させ、内外面ともナデにより丸く仕上げている。外面全体と脚端部内面には赤色顔料の塗布がなされている。473・474は器台形土器の脚部である。473の脚端部は上下に肥厚させ、その外面には3条の浅い凹線文を施す。外面は単位の粗いヘラミガキが施され、内面は全体をヘラケズリで仕上げている。474の



第100図 土壙5平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

土壙5出土土器 (第146図)

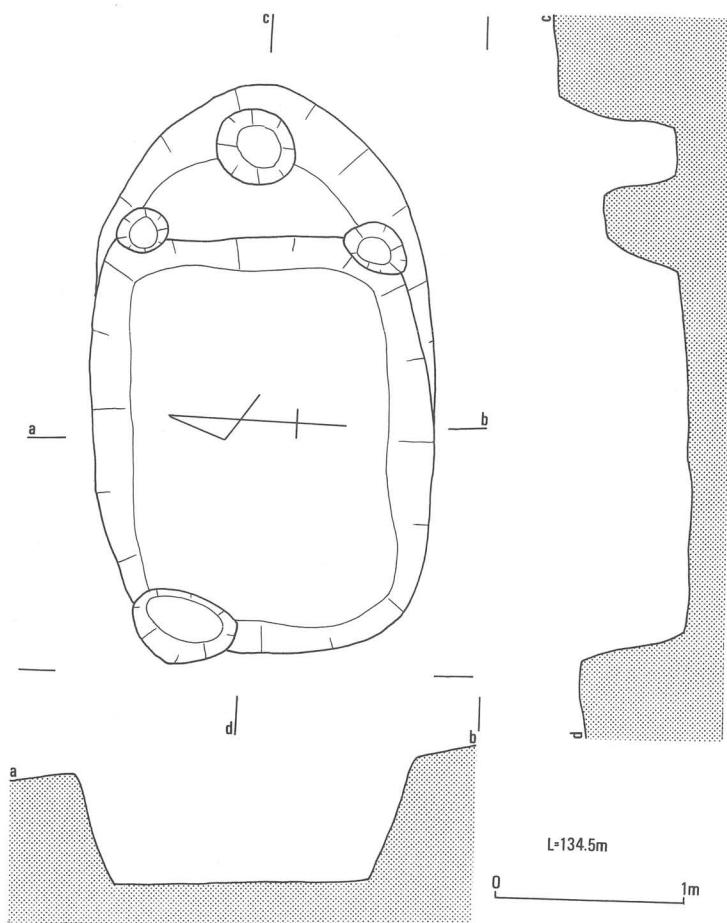
475は甕形土器の口縁部。小片のため口径の復元は不可能であるが、上方への拡張を示す口縁部外面には3条の深い凹線文が観察できる。476は口径8.8cm程度の小形の台付鉢と考えられる。そろばん玉状に張り出す胴部を有し、最大径部には小粒の列点文が一周する。下方に肥厚ぎみの口縁端部外面はヨコナデで仕上げている。胴部内面の調整は粗いヘラケズリ。器壁は比較的厚手である。477は甕形土器あるいは壺形土器の底部片。内外面とも磨滅が激しいため、調整等詳細は不明である。



第146図 土壙5出土土器 ($S = 1 : 4$)

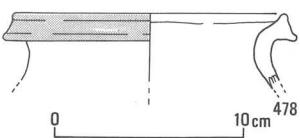
土壙6 (第147図)

丘陵のほぼ頂部平坦面付近、建物址3の北西コーナーから約2.5mの地点に位置する。長辺約2.2m、短辺約1.8m、深さ60cmを測る長方形土壙である。本遺構の東側に円形の土壙が重複し、併せて数個のピットが検出された。直径、深さ等いずれもしっかりとしているが、本遺構との関係の中で考えるよりも、むしろ他の建物址の柱穴の一部と考える方が妥当であろう。遺物は埋土中よりわずかに1点の土器片が出土したのみである。



第147図 土壙6 平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

築が最も新しいと思われる。斜面に位置するため、埋土上面は流出して遺存しない。また床面からは数個のピットが検出されたが、いずれも小規模なもので建物の柱穴配置を示すものはない。遺物は、埋土中より土器片が1片出土したのみである。



第148図 土壙6 出土土器
($S = 1 : 4$)

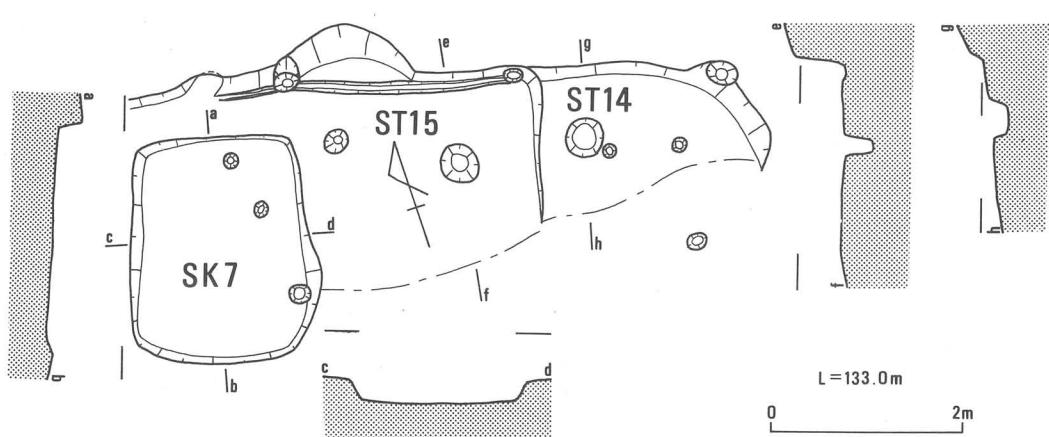
土壙6 出土土器 (第148図)

478は壺形土器と思われる。上下にひきのばし気味の口縁部外面はヨコナデで仕上げており、この部分には赤色顔料の塗布が認められた。

土壙7 (第102図)

丘陵の南側斜面、重複して検出された段状遺構14・15の西端に位置する。長辺約1.2m、短辺1m、深さ約12cmを測る長方形土壙である。段状遺構14・15との前後関係は、

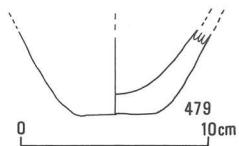
その切り合いより本遺構の構



第102図 段状遺構14・15、土壙7 平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

土壤7出土土器（第149図）

479は甕形土器あるいは壺形土器の底部片である。内外面とも磨滅が激しく、調整等詳細は不明である。



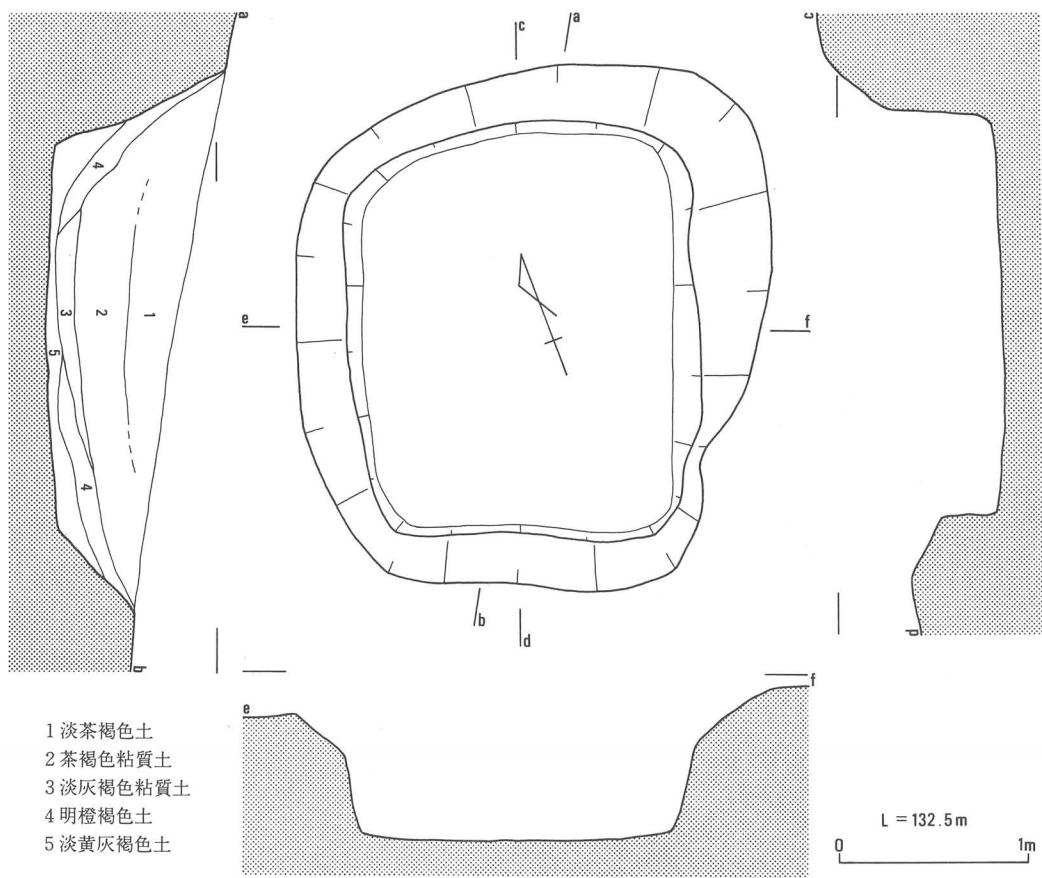
第149図 土壌7出土土器
(S = 1 : 4)

土壤8（第150図）

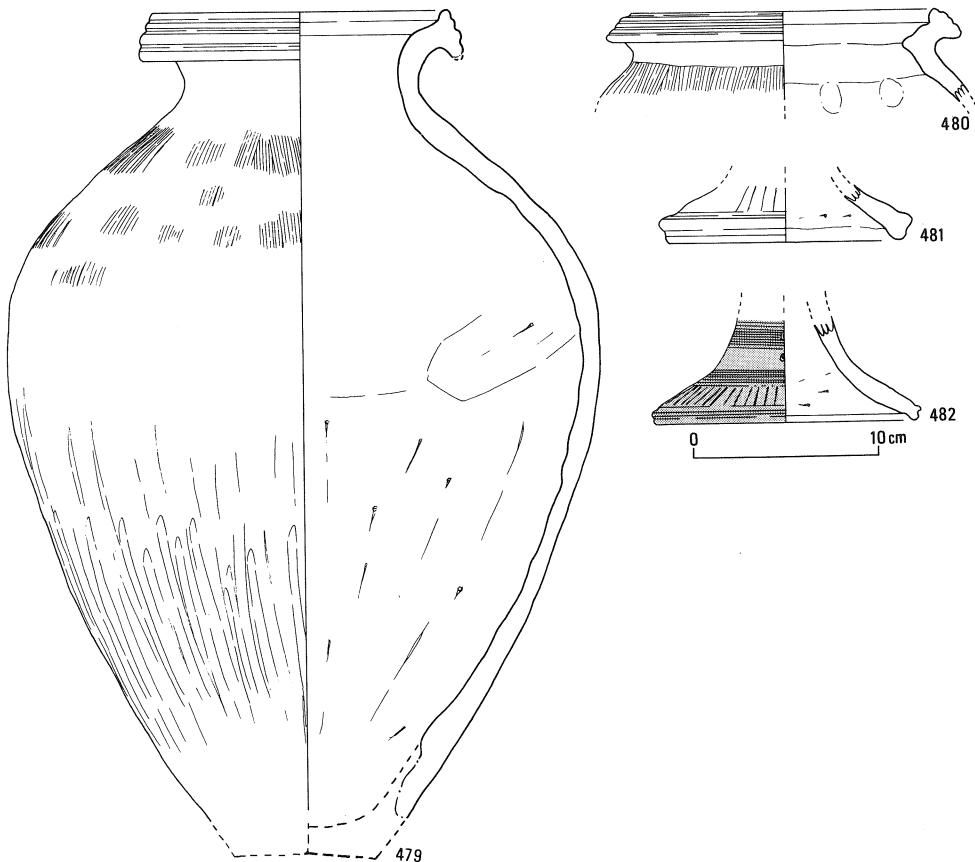
北西にのびる丘陵の南側斜面、住居址9から南方向へ流れ出る溝状遺構の先端部に位置する。長辺約2.8m、短辺2.5mを測る隅丸方形土壌である。土壌はいったんゆるやかに掘りくぼめられ、途中で垂直におちる2段掘りを呈し、床面までの深さは約72cmを測る。埋土は5層に分層され、遺物は主に1、2層と比較的上層に集中して検出された。

土壤8出土土器（第151図）

479は短頸の壺形土器である。ゆるく張り出す胴部からくびれて口縁部に至る。口縁端部は上下に拡張させ、外面には3状の凹線文が巡る。胴部外面上半はタテ方向にハケ目、下半はヘラミガキで仕上げている。480は甕形土器である。胴部上半から鋭く屈曲して口縁部に至る。



第150図 土壌8平面・断面図 (S = 1 : 40)



第151図 土壙8出土土器 ($S = 1 : 4$)

端部は上下に拡張し、外面には4状の深い凹線文が巡る。胴部外面には細かいタテ方向のハケ目を施し、屈曲部はナデで仕上げる。内面は指ナデの痕跡が顕著に残る。481・482は高壺形土器の脚裾部である。いずれも端部は上下に肥厚させ、外面は強いヨコナデで仕上げる。482の外面には櫛描文が規則正しく施され、さらに円形のスタンプ文で加飾した痕跡が4方向で認められた。また外面は一面に赤色顔料を塗布している。

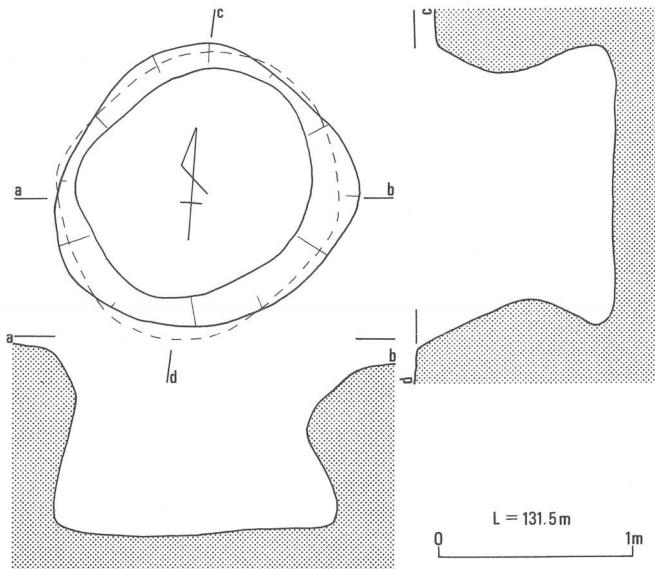
土壙9（第152図）

北西にのびる丘陵の鞍部、段状遺構18と21の間に位置する。上面最大径約1.6m、床面最大径約1.5m、深さ約96cmの断面フラスコ状を呈する土壙である。遺物は若干の土器片が埋土中より検出された。土壙3・4と同様に貯蔵穴としての機能を有する。

土壙9出土土器（第153図）

484は壺形土器の頸部である。頸部径が約18cmと大型のものである。内外面とも磨滅が激しいが、外面には7条の浅い凹線文が巡り、その下位に列点文が規則正しく施されている。485

は壺形土器あるいは器台形土器の口縁部と思われる。内外面とも磨滅が激しいが、口縁端面には2条の凹線文が確認される。486・487は甕形土器である。487の胴部外面は細かいタテ方向のハケ目で仕上げている。内面は粗いヘラケズリによるための凹凸が著しい。上半から屈曲部にかけて、斜方向のハケ目が施される。488は底部片である。内外面とも磨滅が激しく調整等の詳細は不明である。

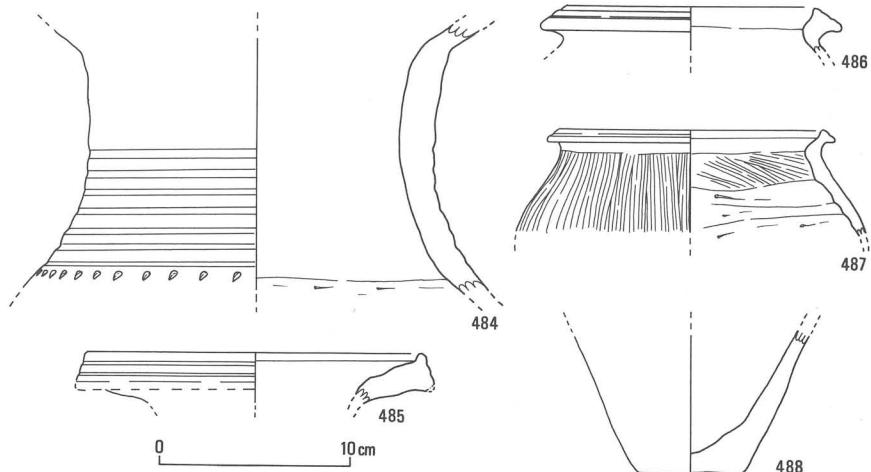


第152図 土壙9平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

土壙10

(第154図)

北西にのびる丘陵の西斜面、段状遺構23の西側に接して位置する。土壙の西半は斜面のため流出しているが、現存で

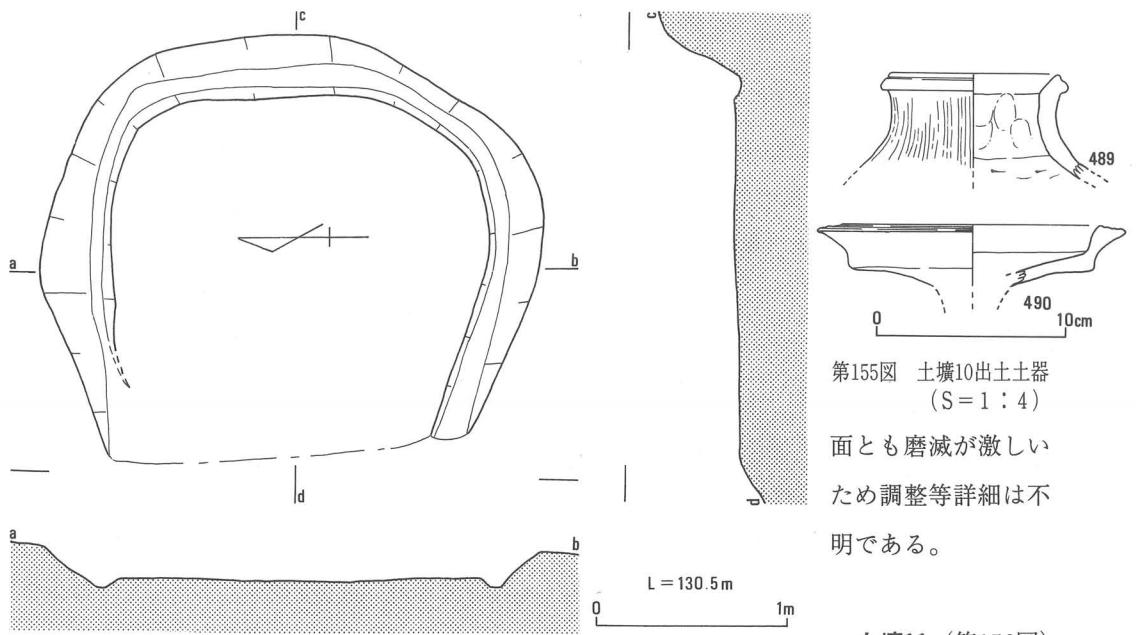


第153図 土壙9出土土器 ($S = 1 : 4$)

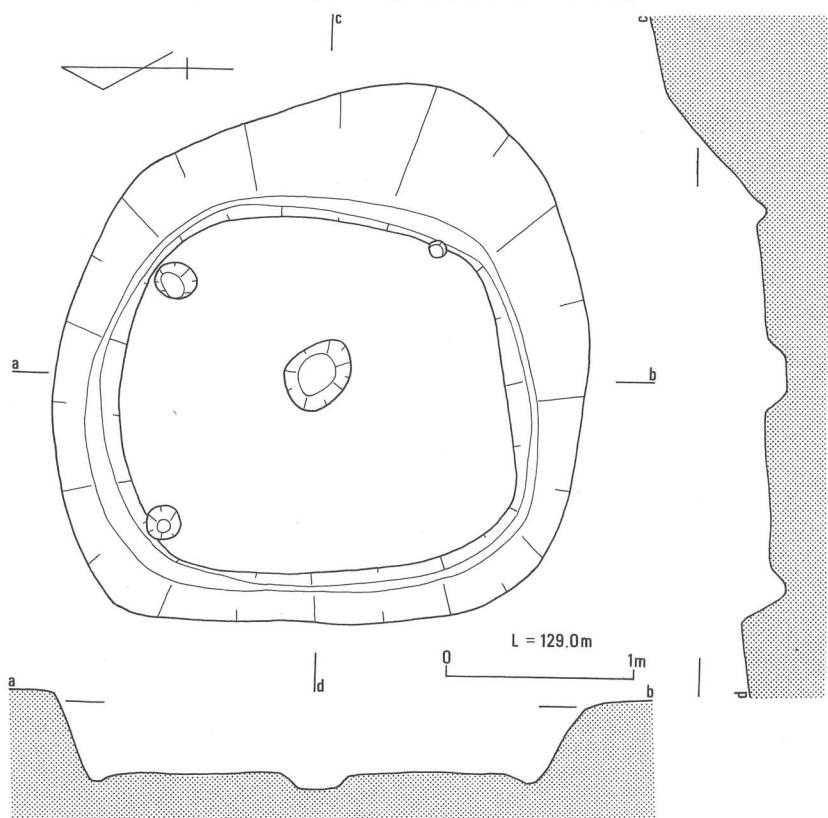
長辺約2.6m、短辺約2.2m、深さ18cmを測る隅丸方形土壙である。床面周囲に壁に沿って幅約10cmの浅い溝が巡り、小形の住居址の可能性も考えられる。しかし柱穴等が検出されなかったため、ここでは土壙として分類した。遺物は埋土中より若干の土器片が出土している。

土壙10出土土器 (第155図)

489は短頸壺形土器の口縁部である。かすかにタテハケの観察される頸部からゆるやかに開いて口縁部に至る。端部は下方に肥厚させ、外面には1条の凹線文が巡る。内面の調整はヘラケズリで、頸部には指頭圧痕が残る。490は高杯形土器である。浅い杯部から屈曲して口縁部に至る。端面はほぼ水平で、外方に若干肥厚させている。数条の浅い凹線文が一周する。内外



第154図 土壙10平面・断面図 ($S = 1 : 40$)



第156図 土壙11平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

これらを中央穴、柱穴と考えると本土壙が小規模な住居址とも想定できるが、ここでは土壙として取り扱うことにする。遺物は埋土中より若干の土器片が出土したのみである。

第155図 土壙10出土土器 ($S = 1 : 4$)

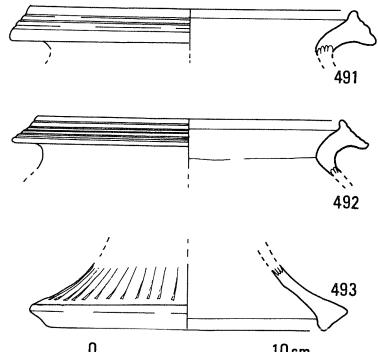
面とも磨滅が激しいため調整等詳細は不明である。

土壙11 (第156図)

北西にのびる丘陵の西斜面、段状遺構25の南側に位置する。一边の長さがほぼ2.8m、深さ約40cmを測る隅丸方形土壙である。床面周囲には、壁にそって幅10cm程度の小規模な溝が一周する。床面中央には径約34cm、深さ約8cmのピット、また各コーナーには規模等はまちまちであるがピットが3ヶ所で検出された。こ

土壙11出土土器（第157図）

491・492は甕形土器である。両者とも下方にひきのばし氣味の口縁部を有し、端面には3～5条の凹線文が巡る。493は高杯形土器である。脚端部外面は、タテ方向の櫛描文で加飾されている。



第157図 土壙11出土土器
(S = 1 : 4)

土壙12（第158図）

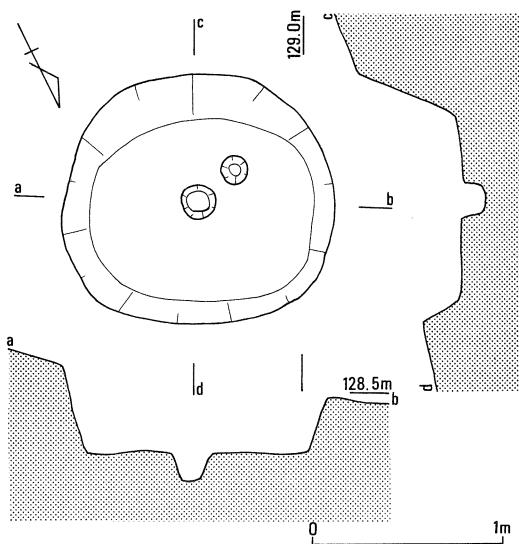
北西にのびる丘陵の先端部、段状遺構29の東側に位置する。長辺約1.4m、短辺約1.2m、深さ約44cmを測る円形土壙である。床面から、2ヶ所でピットが検出された。このうちの1つの床面ほぼ中央に位置し、径20cm、深さ約14cmを測る。陥し穴の可能性も指摘できるが、出土遺物からここでは土壙に分類した。

土壙12出土土器（第159図）

埋土中より、唯一出土した甕形土器の底部片である。外面にはタテ方向の粗いハケ目が、内面にはヘラケズリの痕跡がかすかに観察される。外面には一帯にススの付着が顯著である。

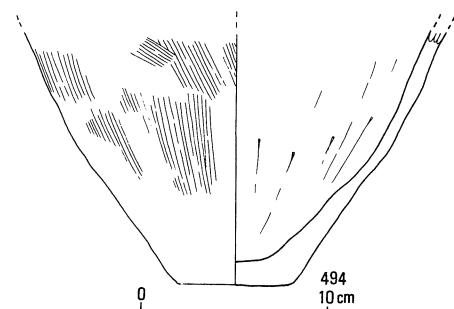
土壙13（第160図）

北西にのびる丘陵のつけ根、ピットの集中区に位置する。長辺約1.1m、短辺約60cm、深さ32cmを測る楕円形土壙である。埋土中より若干の土器片が出土した。



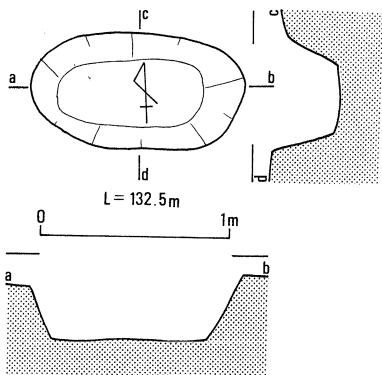
土壙13出土土器（第161図）

503は小形の短頸壺である。内外面とも磨滅が激しいため調整等詳細は不明。504～506は甕形土器である。504は上下に肥厚させる

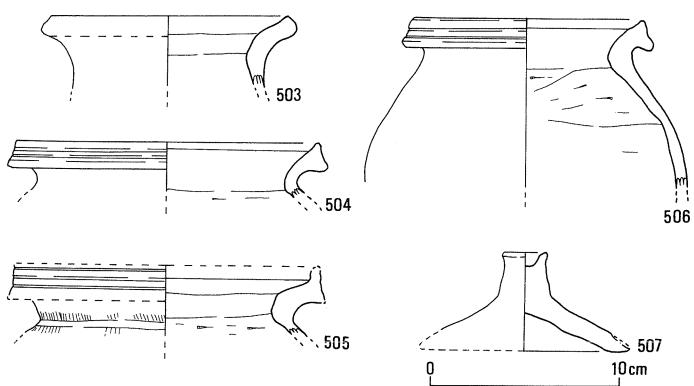


第158図 土壙12平面・断面図 (S = 1 : 40)

第159図 土壙12出土土器 (S = 1 : 4)



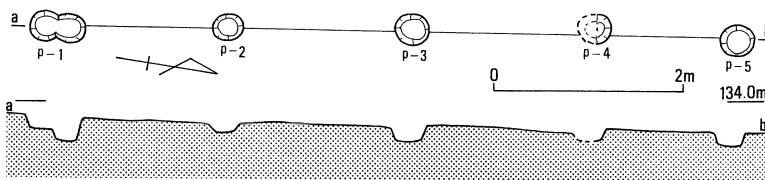
第160図 土壌13平面・断面図
(S = 1 : 40)



第161図 土壌13出土土器 (S = 1 : 4)

口縁端部外面に数条の凹線文を施した後、ナデている。505は上方に拡張させる口縁端部を有し、その外面には数条の凹線文を施す。屈曲部にタテハケが観察されるが、一部をナデ消している。506は口径12cmを測る。口縁部は下方にひきのばすタイプで、外面には明瞭な3条の凹線文が巡っている。胴部があまり張り出さない器形を呈し、津山市天神原遺跡13号住居址（註1）より出土した甕形土器と同タイプのものではないかと思われる。また、土壌8より出土した479の壺形土器に関しても器種は異なるが、同時期の特徴を備えていると考えられる。507は蓋形土器である。口径約4.4cmの小形のもので、内外面とも磨滅が激しい。

（註1）河本 清他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 1957年



第162図 柵列状遺構1平面・断面図 (S = 1 : 80)

柵列状遺構1(第162図)

調査区中央平坦部の
東斜面、住居址4から
流れ出る2本の溝状遺
構に重複して検出され

た。P-1～P-5の5つの柱穴から成る柵列である。P-1～P-2、P-2～P-3、P-3～P-4、P-4～P-5の心々距離はそれぞれ94cm、98cm、94cm、74cmを測る。各ピットの径は20cm前後、深さもほぼ8cmと規模をそろえており、住居址4に付随する柵列の可能性が考えられる。遺物はいずれのピットからも出土しなかった。

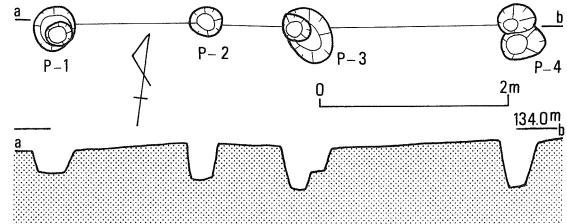
柵列状遺構2(第130図)

北東にのびる丘陵のつけ根部分、建物址1と重複して位置する。ピットの大きさも深さもまちまちであるが、一直線上に規則正しく並ぶため柵列状遺構とした。

柵列状遺構3(第163図)

北東にのびる丘陵のつけ根部分、前述の柵列状遺構2と方向をほぼ等しくして検出された。

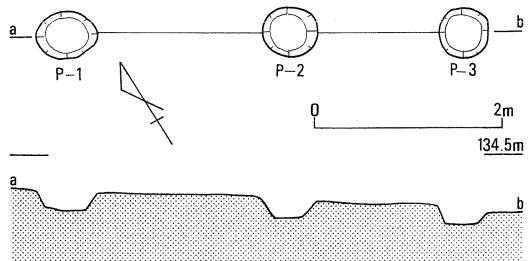
各ピットの心々距離はP-1～P-2、P-2～P-3、P-3～P-4の順でそれぞれ80cm、50cm、110cmを測る。深さも12cm、18cm、22cm、22cmとまちまちであるが、一応並びの柵列状遺構として分類した。



第163図 柵列状遺構3平面・断面図 (S = 1 : 80)

柵列状遺構4（第164図）

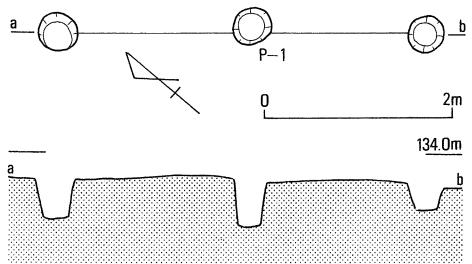
調査区丘陵の南斜面、段状遺構11の北側に3個のピットが並んで検出された。P-1～P-2、P-2～P-3の心々距離はそれぞれ1.2m、90cm、ピットの径は平均30cmを測る。本遺構はその立地から、丘陵外からの敵の侵入を防御する役割を有する柵列の可能性が考えられる。



第164図 柵列状遺構4平面・断面図 (S = 1 : 80)

柵列状遺構5（第165図）

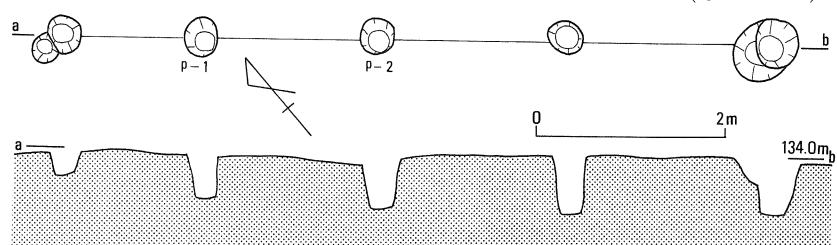
柵列状遺構4と若干軸をずらして丘陵の南斜面に位置する。P-1から土器片が出土した。



第165図 柵列状遺構5平面・断面図 (S = 1 : 80)

柵列状遺構6（第166図）

丘陵の南斜面、柵列状遺構6の南側にはほぼ平行して検出された。心々距離は西側からそれぞれ74cm、90cm、98cm、108cmとまばらであるが、径は18cm前後

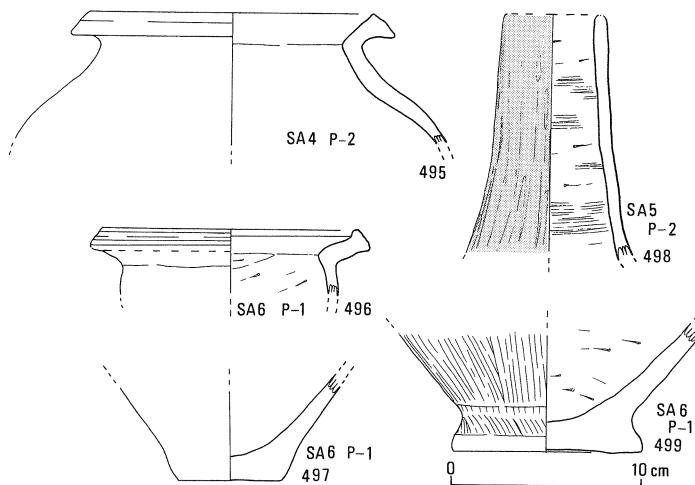


第166図 柵列状遺構6平面・断面図 (S = 1 : 80)

とほぼ一定である。P-1より若干の土器片が出土している。

柵列状遺構出土土器（第167図）

495は甕形土器である。下方にひきのばし気味の口縁端部を有する。内外面とも磨滅が激しい。496は小形の鉢形土器と考えられる。細くすぼまった胴部からゆるく屈曲して口縁部に至る。端部はやや上方にひき上げて内傾する。497は底部片である。498は筒状の土器で、器種は不明

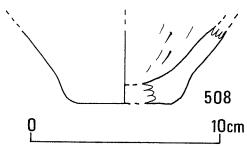


第167図 構造状遺構出土土器 ($S = 1 : 4$)

である。外面はタテ方向のヘラミガキが施され、全面に赤色顔料の塗布が認められる。内面は細かいヘラミガキ、ところどころにヨコ方向のハケ目が残る。直口壺の頸部、あるいは高杯形土器の脚部の可能性が考えられる。499は底部片である。底面はヨコナデによって外方へひきのばし気味に仕上げている。外面は3回に分けてタテハケが施されている様子が観察できる。内面の調整はヘラケズリである。

溝状遺構 1 (第98図)

丘陵の北斜面、段状遺構12と重複して検出された。ゆるく弧を描き、西端は自然に終息する。幅は上面で約12cm、下面で76cmを測る。深さは最深部で40cmで、断面はV字形を呈する。埋土中より弥生土器が出土していることから、本遺構はこの時期の構築と考えることにする。



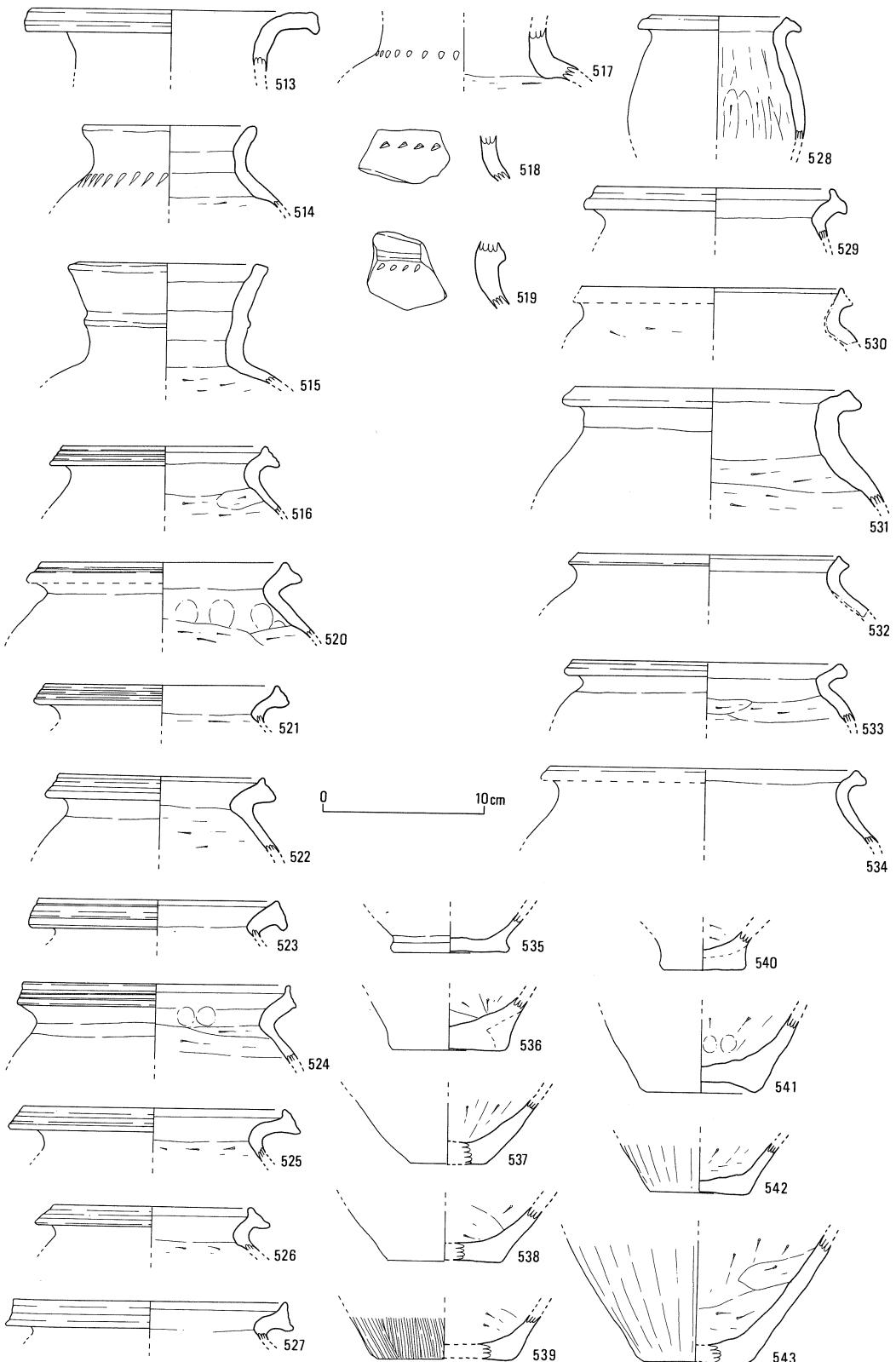
第168図 溝状遺構 1
出土土器 ($S = 1 : 4$)

溝状遺構 1 出土土器 (第168図)

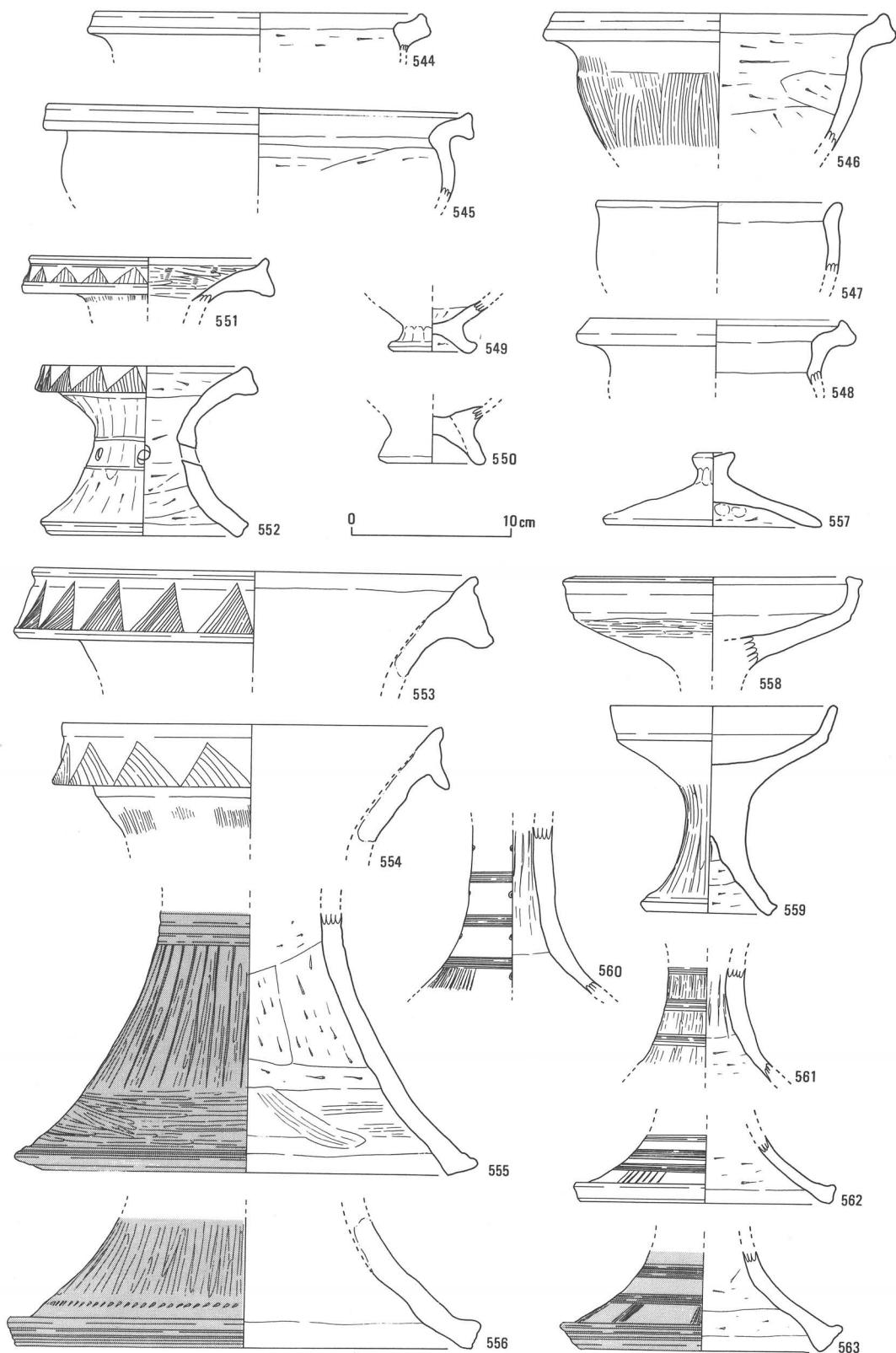
埋土中より唯一の出土である。508は甕形土器あるいは壺形土器の底部片である。内外面とも磨滅が激しい。

遺構に伴わない土器 (第170・171図)

513・517は壺形土器と思われる。いずれも有頸で、517は屈曲部に刺突文が巡る。518・519も同様箇所の破片である。514～516、520～534は甕形土器。514は胴部からゆるく屈曲して口縁部に至る。屈曲部には刺突文が規則正しく巡る。515は直口タイプの口縁部を有し、中半にはケズリ出しによる突帯を1条巡らす。口縁端面はナデにより水平に仕上げている。516以下は、口縁端部の形態で3タイプに分類できる。(44ページの分類参照) 530・532・533のAタイプ、516・520・521・523・525～529・531・534をBタイプ、524をCタイプとする。これらの中でも外面に凹線文を施すものと、ヨコナデで仕上げるものに分けられる。528は口径8cm程度の小形の土器で、胴部が張り出さないタイプである。535～543は甕形土器あるいは壺形土器の底部片である。外面の調整はヨコナデ、タテハケ、ヘラミガキとバラエティーに富んでいる。544～548は鉢形土器である。546はヨコナデで仕上げる口縁部からゆるく屈曲して、底部に向

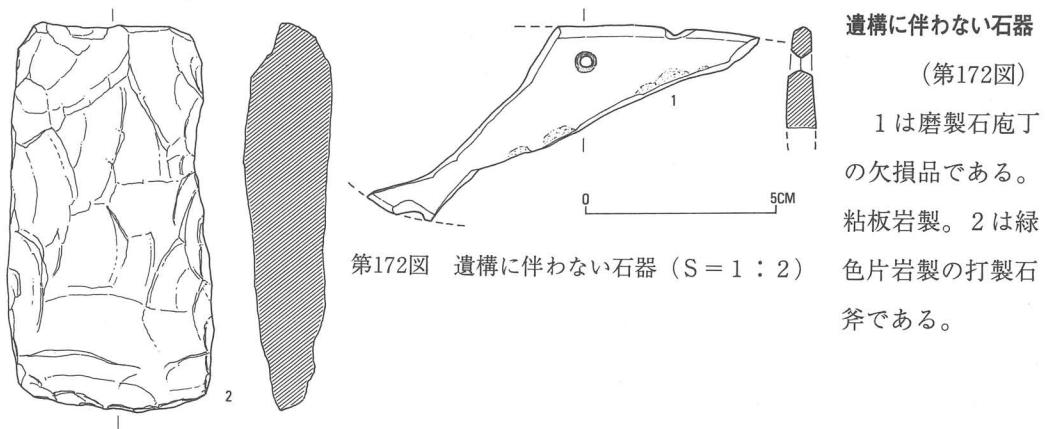


第170図 遺構に伴わない土器(1) (S = 1 : 4)



第171図 遺構に伴わない土器(2) ($S = 1 : 4$)

かいすばまる器形を呈する。外面は丁寧なタテハケを施し、上半は一部をナデ消している。内面の調整は大半がヘラケズリである。549・550は脚台部で、指ナデにより全体を整形している。551～556は器台形土器である。551・552は小形のもので、上下に肥厚させる口縁端部外面には鋸歯文が規則正しく巡る。552は口径11.6cm、器高10.6cmを測る。胴部外面は全体に粗いヘラミガキを施す。また中程には2条の凹線文が巡り、その間に4方向の透し穴が穿たれる。これに比べて、554～556の個体は比較的大形である。555の外面はタテ・ヨコのヘラミガキで整えた後、沈線風のタテ方向の大膽な沈線で加飾し、上半は凹線文が巡る。内面は下半を乱方向はハケ目、上半をヘラケズリで仕上げている。555・556とも外面一帯に赤色顔料が塗布されていた。557は口径12cmを測る蓋形土器である。内外面ともナデ仕上げ。558～563は高杯形土器である。559は完形品で、口径14.4cm、器高26cmを測る。杯部外面は指ナデ、脚部外面はヘラミガキで仕上げる。560～563は脚部片。561は細かいヘラミガキの地文の上に櫛描文で加飾する。563の外面には赤色顔料の塗布が認められた。

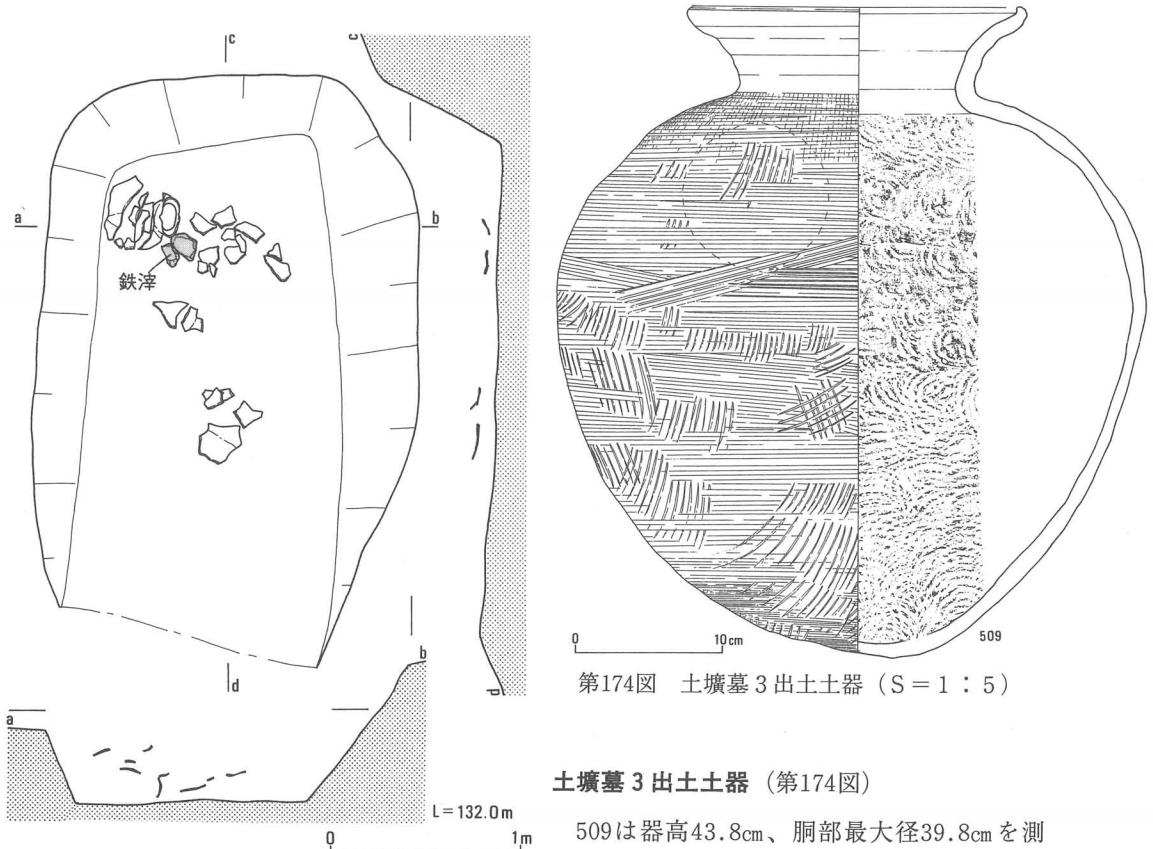


(2) 古墳時代

土壙墓3 (第173図)

調査区丘陵の南側斜面、段状遺構12の南側に位置する。南端は自然傾斜により流出しているが、現存で掘り形上面は長辺約3.14m、短辺約2.04m、床面では長辺約2.8m、短辺約1.36mを測る長方形土壙である。遺構確認面からの深さは最深部で72cmである。土壙の北半に集中して甕形土器のほぼ1個体分の破片がおしつぶされたような状態で出土した。さらに、この須恵器片の間から比較的大形の鉄滓2点も検出されている。この鉄滓は分析の結果、鉱石製練滓であることが判った(註1)。棺痕跡等は確認されなかつたが、須恵器の出土状況から木棺直葬の可能性が考えられる。したがってこれらの須恵器・鉄滓は供献品であったと推測される。出土した須恵器から本土壙墓は7世紀前半の所産と考えられる。

(註1) 分析は、新日本製鉄(株)の大澤正己氏による。成果はあらためて公表される予定である。



第173図 土壙墓3平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

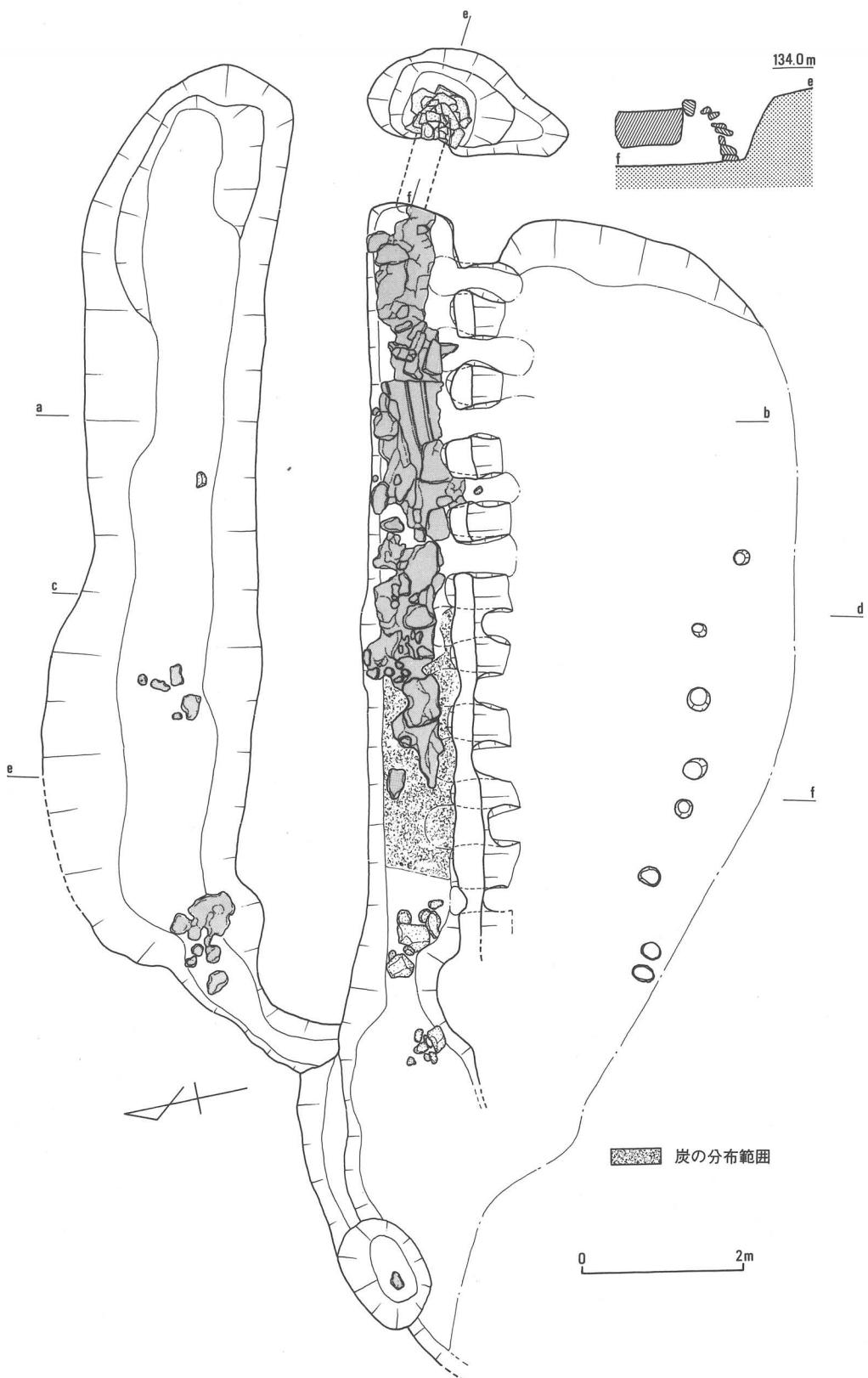
509は器高43.8cm、胴部最大径39.8cmを測る壺形土器である。床面から若干ういた状態で出土した。ほぼ球形の胴部からゆるやかに屈曲・外彎しながら口縁端部に至る。胴部外面にはロクロ成形の際の回転痕の上に、ところどころ叩き目を施している。上半部にはかすかにタテハケの痕跡が残ることから、成形の初段階の様子が窺える。口縁部は内外面とも強いヨコナデにより仕上げており、器面にシャープな稜が残る。口縁端面は上方に若干つまみ上げ、丸くおさめている。胴部内面は、車輪文叩き目が全面に及んでいる。

(3) その他

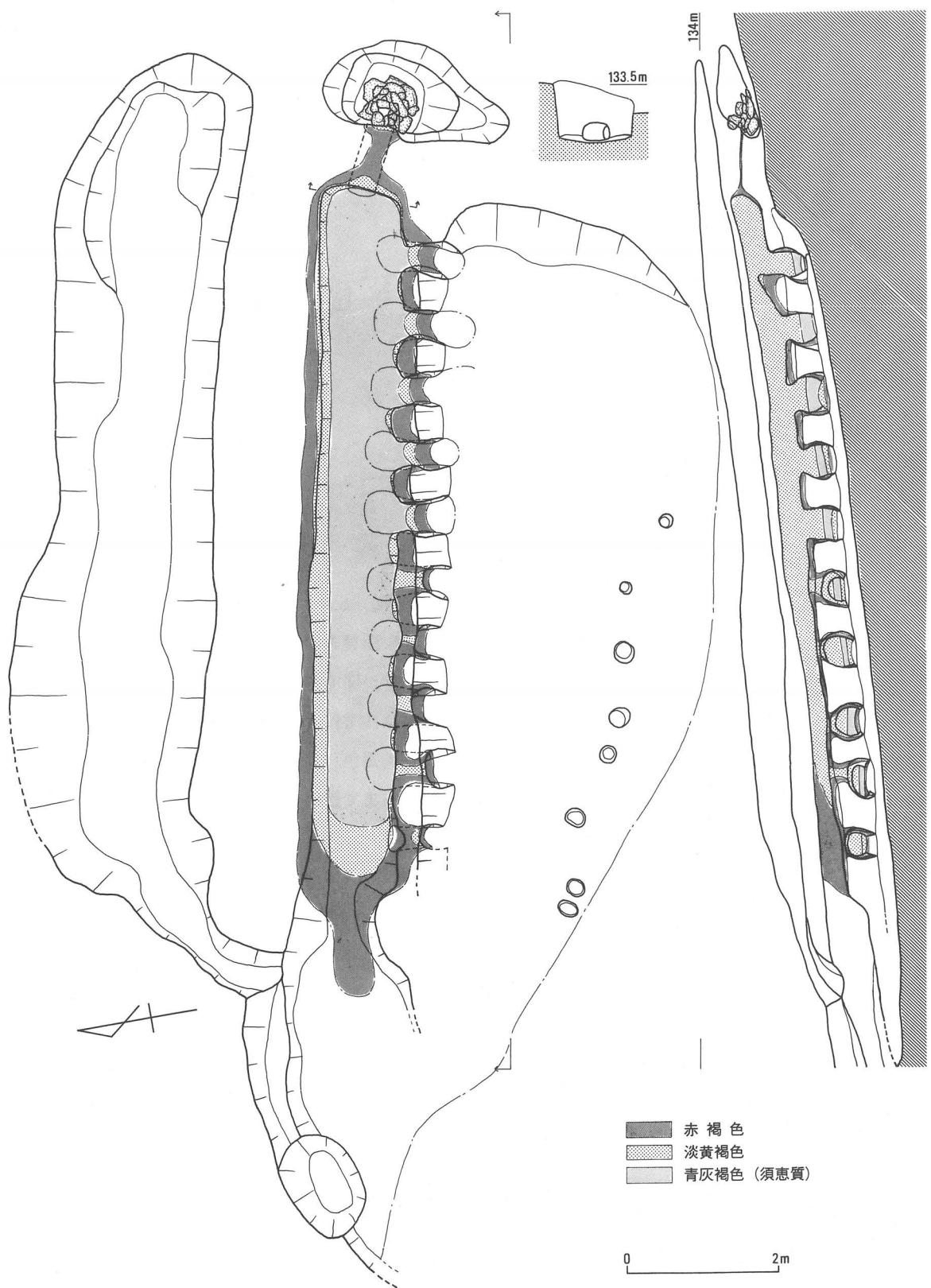
窯址1 (第175・176・177・178図)

I-5・6・7区の南斜面に位置する。窯は主軸を等高線に対しかなり斜交させて立地する。窯は焼成部、山側の溝（上方溝）、谷側の平坦面（側庭作業面）から構成されている。

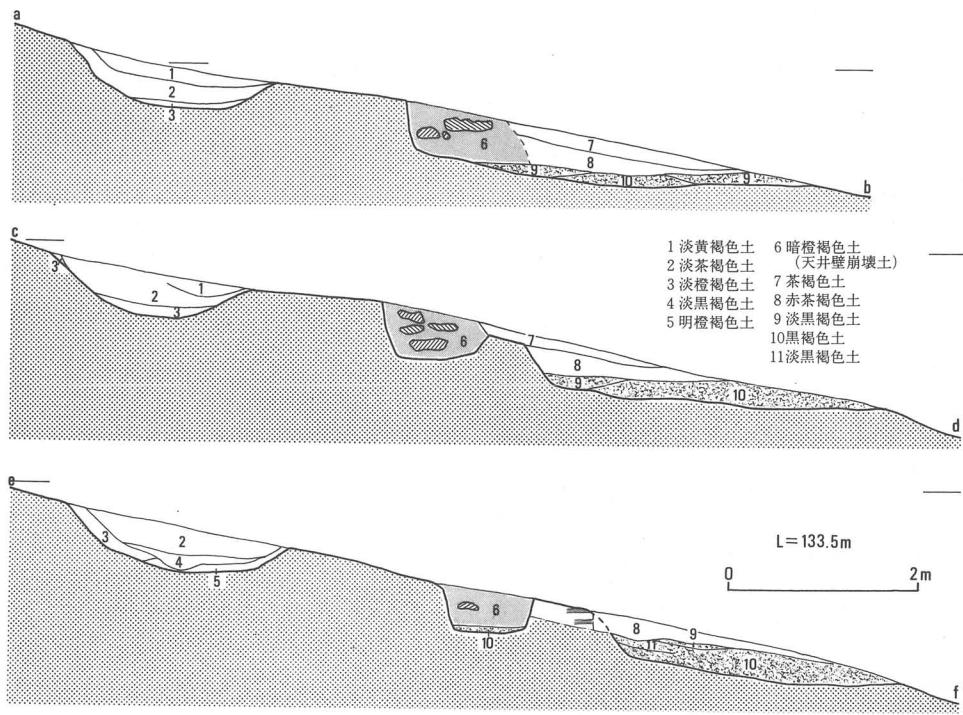
焼成部は地山を垂直に掘り下げた半地下構造で焼成部長9.2m、幅0.8m、山側での掘り下げ深さは約0.6mを測る。谷側には側庭作業面に面して10個の横口が等間隔に開口している。横口は焚き口よりの5個までが天井部が残っている。横口の正面形は長径50cm、短径40cmの正円に近い橢円形を呈する。最も焚き口に近い横口のみがやや小ぶりである。焼成部の埋土内には窯の天井壁片が多数含まれている。その一部の裏面には天井構築の際の骨組み痕跡の残るもの



第175図 窯址1 窯内検出状況平面図及び煙道断面図 ($S = 1 : 80$)



第176図 窯址 1 平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



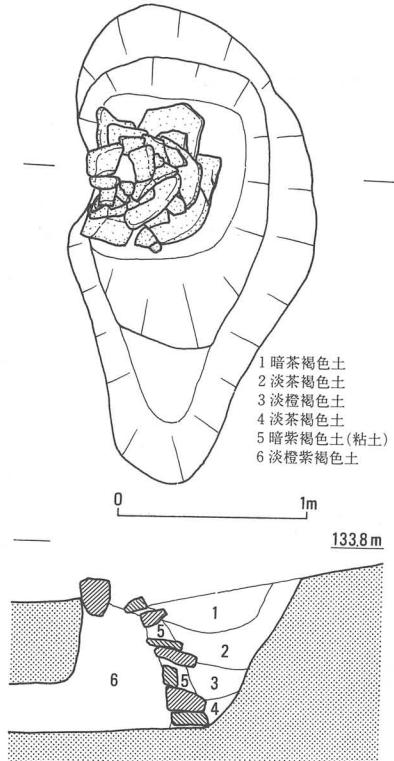
第177図 窯址1 土層断面図 ($S = 1 : 80$)

もある。また床面焚き口よりに炭材が一部残存していた。

県内の横口を持つ窯で内部に炭が残存していた例は初めてである。床面は非常によく焼けておりほぼ全面が還元により須恵質（青灰褐色）に変化している。壁面及び横口に関しても幅約20cmまで被熱により淡黄褐色、赤褐色に変色している（第177図）。焼成部の床面傾斜角度は2.5度である。焼成部の西側に焚き口が、東側に煙道が付設されている。

焚き口では窯壁幅が狭くなる。焚き口の作業面は焼成部床面よりやや低くなり側庭作業面に続いている。西側には長径1.4m、短径1m程の小土壙を伴い、内部に天井壁片が残存していた事からこれらは同時に機能していたものと思われる。焼成部側の作業面で閉塞用と考えられる拳大から人頭大の石数個を検出している。焼成部に接続する床面が舌状に焼けて赤褐色を呈している。山側では上方溝と接続している。

煙道は長径2.5m、短径1.2m、2段に掘り込まれた土壙の中に、「コ」の字状に石を組み煙り出しの穴を設けたものである。径約30cm、長さ80cmの暗渠で焼成部に連結させている。石は持ち送り状に積まれ隙



第178図 窯址1 煙道平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

である。径約30cm、長さ80cmの暗渠で焼成部に連結させている。石は持ち送り状に積まれ隙

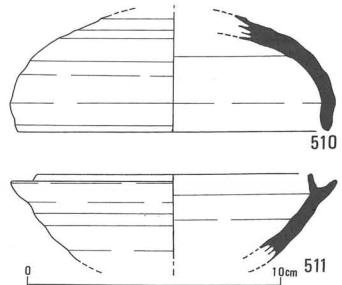
間を粘土で補強している。暗渠部分も火を受け赤褐色に変化している（第178図）。上方溝は焼成部の1.3m上に平行に作られており、長さ12m、最大幅2.6mを測り、焚き口に連結し煙道部分では解消している。焚き口に近い部分の周辺で天井壁片が出土している。

側庭作業面は焼成部の南側におよそ12×3.6mの範囲に形成された平坦面である。床面に炭・灰を含む堆積が認められる（第177図10）。作業面南側に柱穴を数個検出したが、その機能（例えば覆い屋構造の柱址など）を推定するまでにはいたっていない。

出土遺物として上方溝埋土内から須恵器片、鉄滓が少量出土している。

窯址1 出土遺物（第179図）

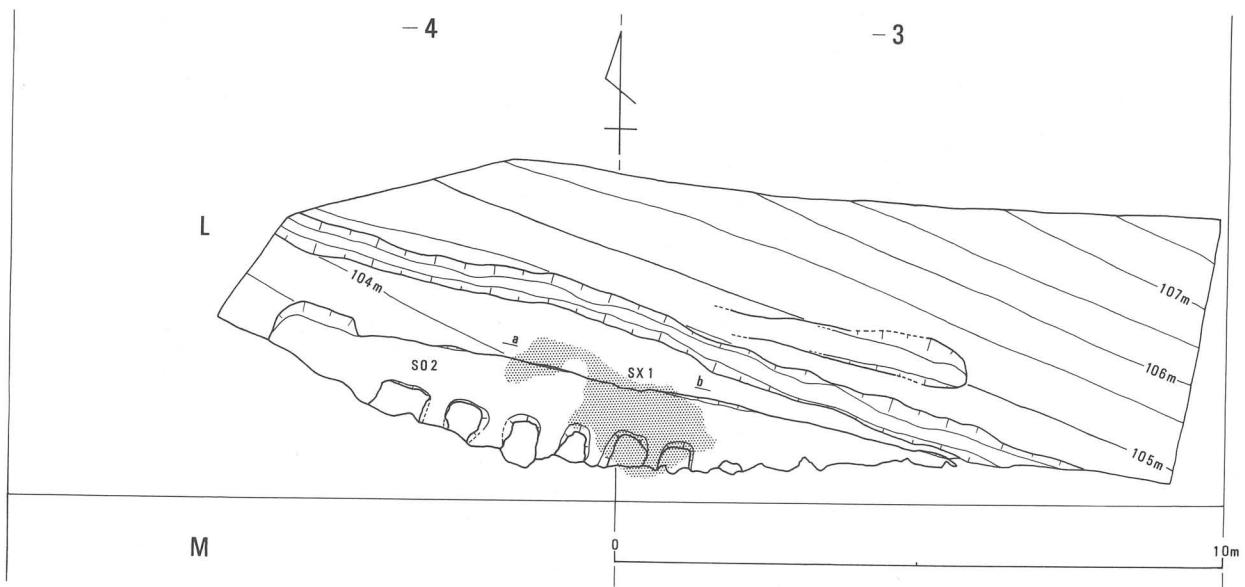
510は須恵器杯蓋である。復元口径12.2cm、残存高4.6cmを測る。口径の割には器高が高く、天井部はヘラ切りのままであり、内・外面はヨコナデである。口縁部はやや内向し端部は丸くおさめている。511は杯身で復元口径10.8cm、残存高3.5cmを測る。立ち上がりは短く端部は丸くおさめている。内・外面はヨコナデである。510とセットになると考えられる。



第179図 窯址1出土遺物（S = 1:3）

窯址2（第180・181・182図）

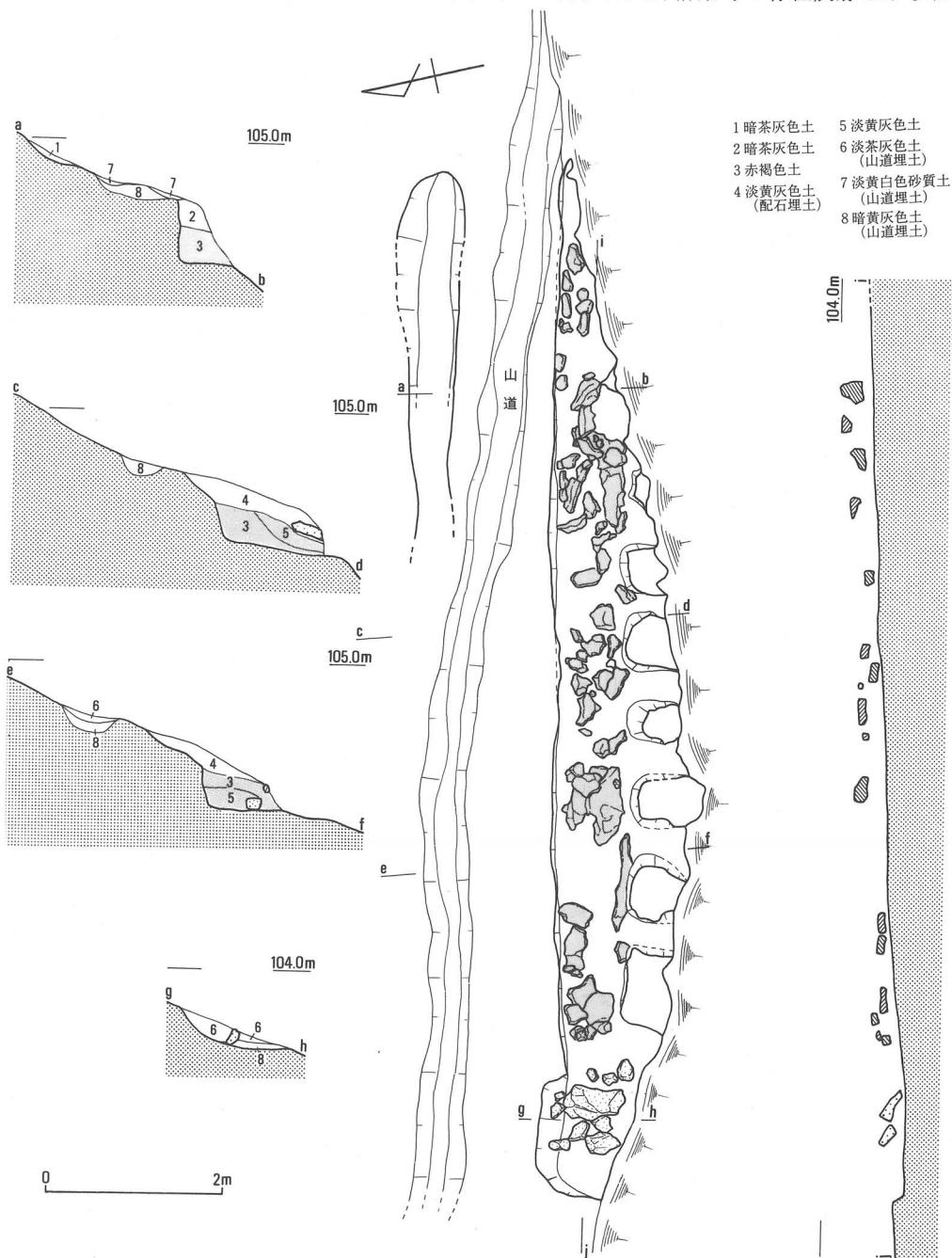
工事用仮設道建設時に後から発見され本調査区とも地理的に少し離れているため、地区割のグリッドに負の数字がついている。L-3・-4区にある窯址である。道路工事のため窯本体も大きく削られている。また最近の山道が窯に平行する形で通っている（第180図）。窯は主軸を



第180図 窯址2周辺地形測量図（S = 1:125）

高等線走向に対しやや斜行させて立地する。窯は本体の焼成部（一部はすでに削られている）、山側の溝（上方溝）からなり、谷側の平坦面（側庭作業面）はすでに存在しない。

焼成部は地山を垂直に掘り下げた半地下式構造で、焼成部残長10m、幅1m、山側での掘り下げ深さは約0.7mを測る。谷側には横口の痕跡が7箇所確認できほぼ等間隔にならぶ。また埋土中には窯の天井壁片が多数含まれており、その一部には天井構築時の骨組痕跡とみられる



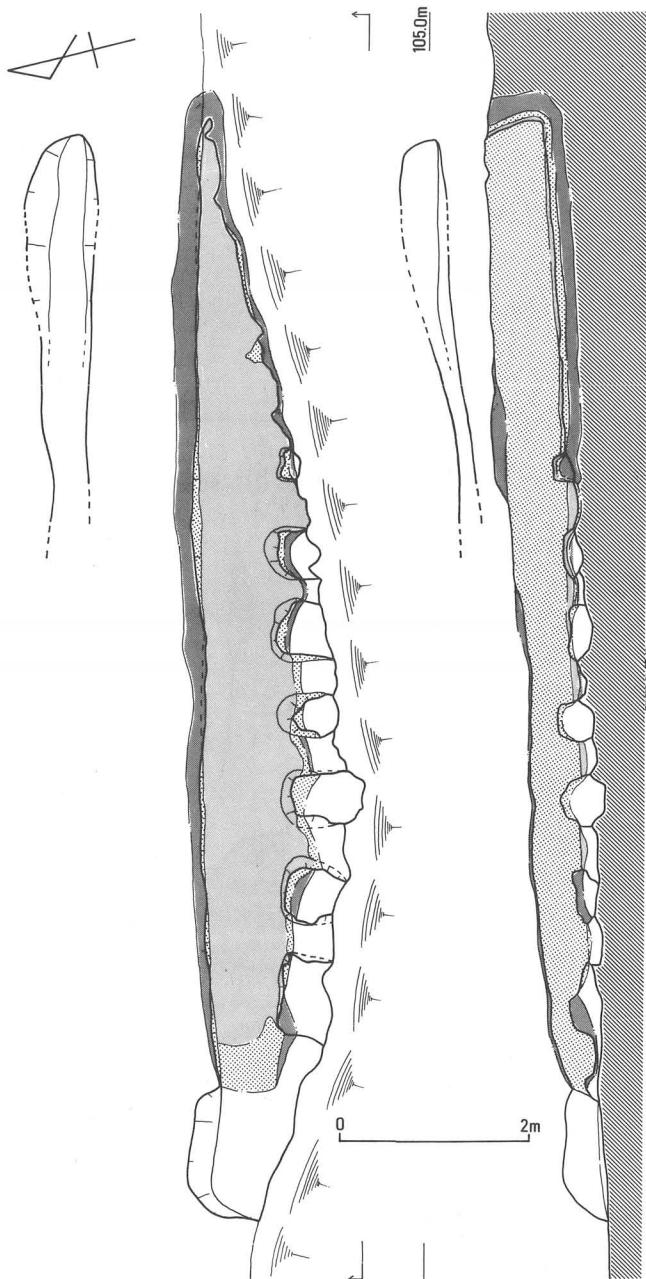
第181図 窯址2 窯内検出状況平面・断面図及び土層断面図 ($S = 1 : 80$)

角材痕の残るものもある。焼成部の床面及び壁面は非常によく焼けしており、幅20cmぐらいまで被熱のため変色している。特に床面は顕著で表面は還元により須恵質（青灰褐色）に変化し、さらに下部は淡黄褐色、赤褐色の2層構造になっている所もある。壁面では須恵質の面は見られず、2層構造だけである。焼成部の床面傾斜角度は約4度である。焼成部の西側に焚き口が付設されているが東側の煙道は存在しない。

焚き口には長方形状の掘り形が残存し、内部には15cm～60cm程の石が数個残っている。閉塞に使用したものであろう。

上方溝は焼成部の1.2m上方に平行に作られているが、削平のため長さ4m、最大幅0.8m程しか残存しない。

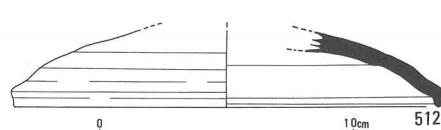
出土遺物として焚き口の埋土から須恵器片が1点出土しているのみである。



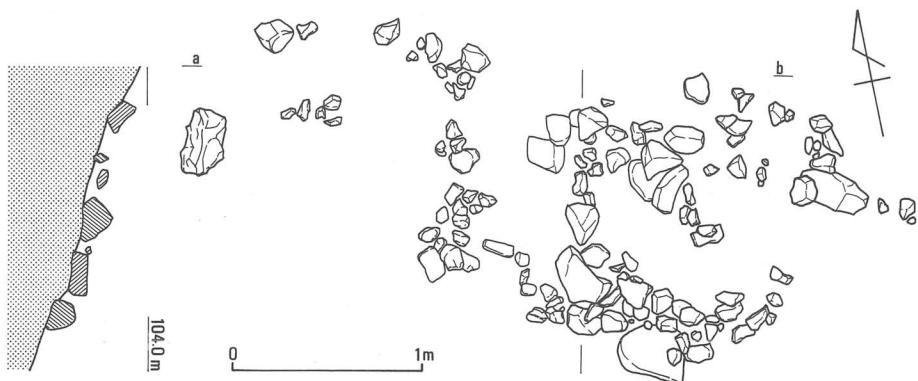
窯址2出土遺物（第183図）

第182図 窯址2平面・断面図（S=1:80）

512は須恵器杯蓋である。復元径16.7cm、残存高2.9cmを測る。口縁部は折り返され端部は丸くおさめている。天井部のつまみは残存しないが一部回転ヘラ削りを施している。その他の内外面はヨコナデである。



第183図 窯址2出土遺物（S=1:3）



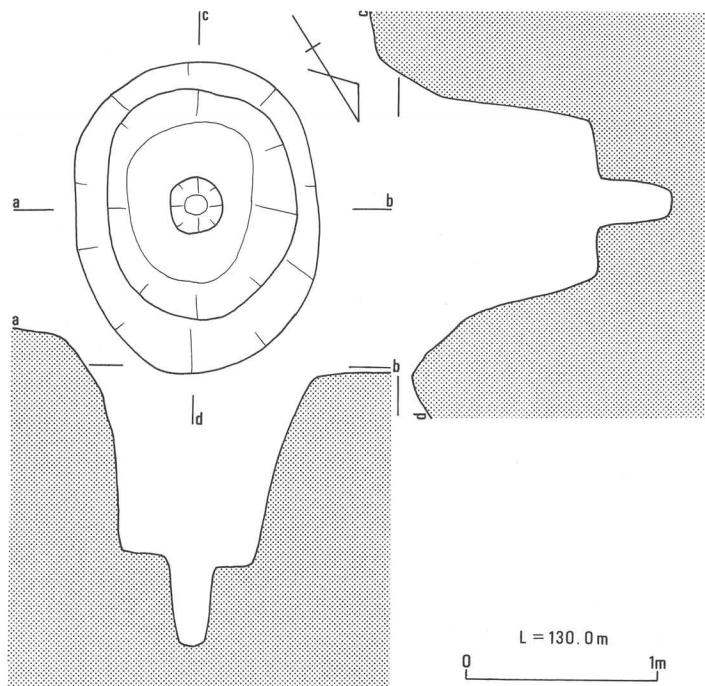
第184図 配石遺構平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

配石遺構（第184図）

L-3-4区の窯跡2に重複して存在する。窯跡の埋土を一部で掘り込んで石が集積している。石は拳大から人頭大の大きさで、表面的な斜面堆積であるため遺構の性格については明確でない。石の間の埋土内から土器片が少量出土しているが所属時期については不明である。

土壤14（第111図）

北西にのびる丘陵の西側斜面、段状遺構19の南端に接して位置する。長径1.72m、短径1.6m、深さ1.32mを測る。円形土壤を掘り込み、さらに床面中央に深さ28cm程度のピットを掘り込んでいる。遺物は出土していないが、縄文時代の狩猟の際の陥し穴と考えられる。



第185図 土壌15平面・断面図 ($S = 1 : 40$)

土壤15（第185図）

北西にのびる丘陵の東斜面段状遺構22の北側に位置する。長径約1.7m、短径約1.3m、深さ1.1mを測る楕円形土壤を掘り込み、さらに床面中央部に深さ約40cmのしっかりとしたピットを掘り込んでいる。土壤14と同様、縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土していない。

IV まとめ

小原遺跡の調査面積はA地区、B地区あわせて約12,000m²にも及び、数多くの遺構を検出することができた。しかし、時代別にみると弥生時代と古墳時代に大別することができる。

以下、時代別に項目をしぼって若干の考察を試みることにする。

1 弥生時代

弥生時代の遺構はA・B両地区で検出されている。遺跡の性格はどちらとも住居址を中心として集落遺跡である。しかし、遺跡の規模は、圧倒的にB地区の方が大きく、範囲も広大なものである。従って、ここではA地区の弥生集落には多くを触れず、B地区を中心に稿を進めるこことする。

(1) A地区の弥生時代集落の時期について

出土遺物が少ないため、あまり多くを語ることはでが弥生時代後期に属することは確かである。第12図の住居址1出土遺物の1の甕形土器、2の高杯形土器、第14図の住居址2出土遺物の1～4の甕形土器等の特徴からみて、後期を前半に分けた場合の前半に位置づけておけば大過ないものと思われる。

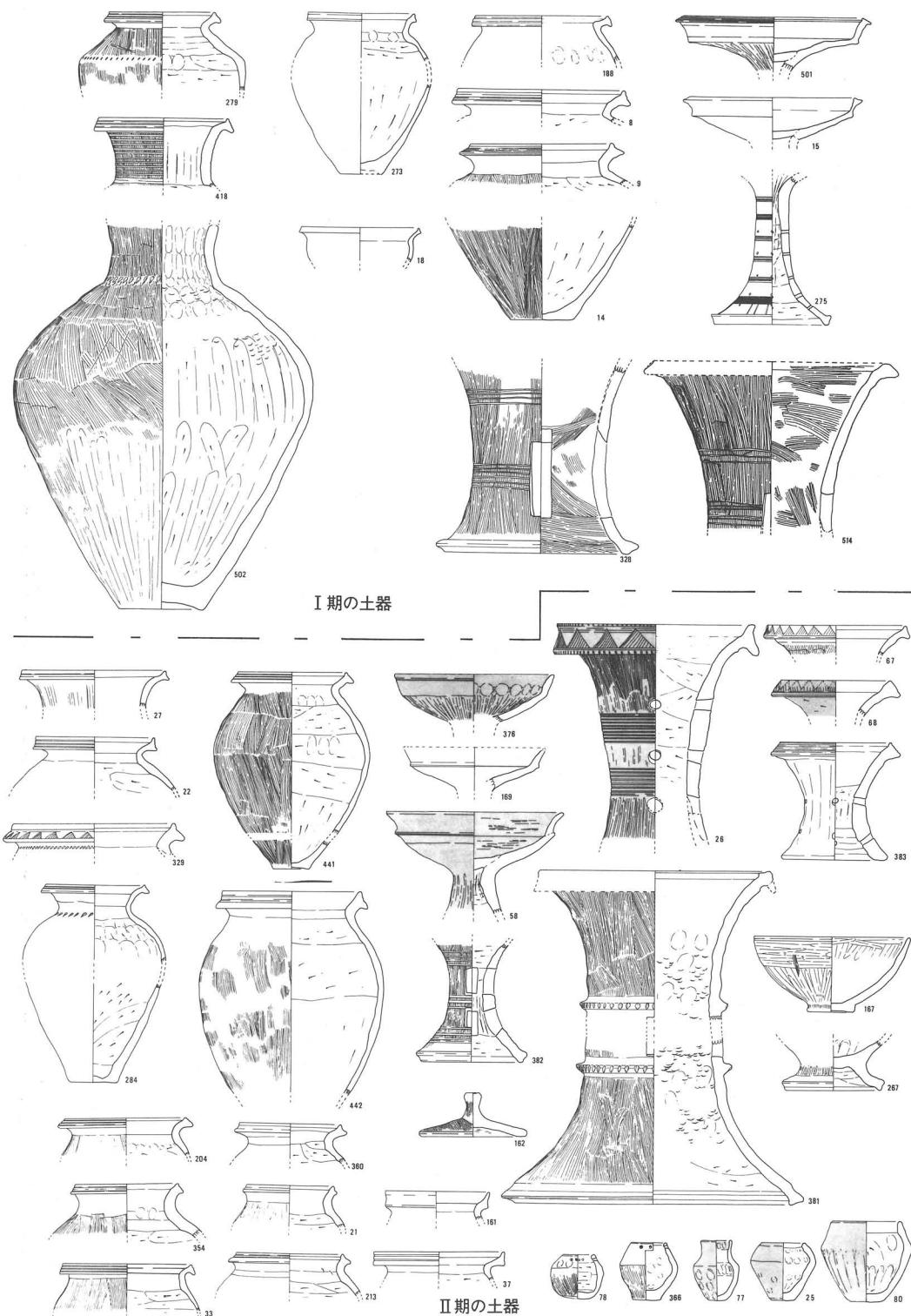
(2) B地区の弥生時代集落と時期について

土器編年について

B地区の集落は出土土器からみて後期前半期に属する。中期あるいは後期後半期の資料が全く混在しないことから、後期前半の時期にだけ限定されて営まれた集落であるということができる。さて、B地区出土の後期前半の土器群であるが大きく2時期に分けられそうである。編年を考えるにあたっては必ずしも良好な資料ではないが、型式学的方法に依存し検討してみたい。まず、後期前半の土器群の中で古い様相をもつものをⅠ期、新しい様相をもつものをⅡ期とし、以下その概要を述べることにする。なお、住居址出土資料を重視したが、他に段状遺構土壙出土のもので補強した。

I期の土器（第186図）

住居址1・4・8・12出土の土器を指標とする。壺形土器にみられる特徴は、頸部凹線文と屈曲部刺突文に代表される。外面はハケ目やヘラミガキを駆使し入念に仕上げられる。甕形土器は上下に肥厚する口縁部を有し、その外面に数条の明瞭な凹線文を施す。器形全体を知り得る資料は(273)の1点のみであるが、最大径部を胴部上半寄りにもつナデ肩のものが主流をなすと思われる。外面は主としてタテ方向のハケ目仕上げで、内面のヘラケズリは胴部上半にまで及ぶ。高杯形土器は県南部の中期的な流れを汲む資料が目立つ(501)(15)(275)。長め



第186図 B地区 I・II期弥生土器分類図

の脚部の外面は櫛描文で規則正しく加飾する。このタイプの脚部には（15）（501）のような杯部がセットとなる。口縁・脚端部とも上下に肥厚させ、外面には凹線文を施すものである。器台形土器（514）の胴部外面にも他の器種と同様、ハケ目と凹線文が多く用いられる。内面全体に残るハケ目からは中期的な伝統が認められる。他に鉢形土器・台付鉢等がこの時期の器種構成に含まれる。

Ⅱ期の土器（第186図）

住居址2・3・5・6・7・9出土の資料を指標とした。Ⅰ期でみられた口縁形態や手法をほぼ踏襲しながらも、若干のバラエティーが現れてくる。壺形土器は（284）のタイプに代表されよう。下方にひきのばす口縁端にめぐる退化凹線文、細くすぼまつた頸部屈曲部の刺突文が特徴である。甕形土器の口縁端部についても下方にひきのばすタイプが圧倒的に増加する。そしてこれらの口縁部の外面調整の中心はⅠ期で主流をなした凹線文からナデ仕上げへと移行している様子が窺える。また器形に関して述べるなら（441）にみられる底部の小形化、（442）の最大径部の下降等、いずれも新しい要素が看取できる。高杯形土器は（58）のタイプが出現する。口縁端部は拡張せず丸くおさめるものである。内外面ともナデ、ヘラミガキを多用し、赤色顔料の塗布等入念な仕上げによるものが多い。杯部と脚部の接合は円盤充填が主流であったと思われる。器台形土器は（26）（381）のように大形のものと、（67）（68）（383）のような小形のものの2種類が認められる。いずれも口縁端面の鋸歯文が発達する時期である。その他には鉢形土器、蓋形土器、手づくね土器が器種構成の中に含まれる。全般的にみて、器種の増加、鋸歯文等による装飾性の盛行がこの時期の特徴としてあげられる。

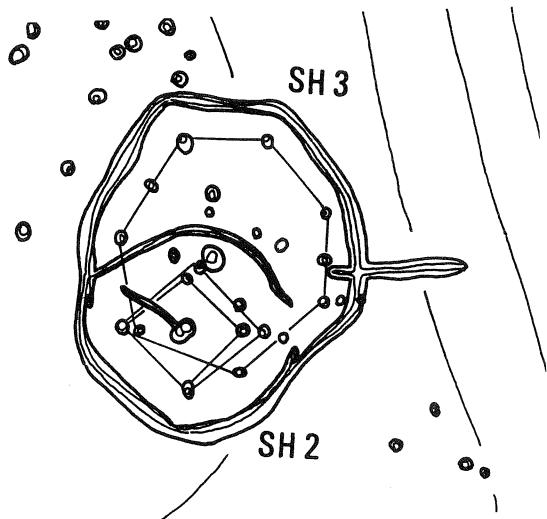
以上、Ⅰ期・Ⅱ期の土器を概観したが、この時期区分は弥生時代後期を前半と後半に分けた場合の前半にあたる。さらに前半期を新・旧の2時期に区分した際、Ⅰ期の土器は旧段階、Ⅱ期は新段階にそれぞれ相当する。県南部の百間川編年に対応させると、Ⅰ期の土器は百間川後期Ⅰに、Ⅱ期の土器は百間川後期Ⅱに併行関係が求められそうである（註1）。さらに県北部では、大田十二社編年1式、2式に多くの類例を認めることができる（註2）。このような後期前半の遺跡は、津山市の東部を流れる加茂川を境にして東側に集中する傾向が認められ、東蔵坊遺跡（註3）中原遺跡（註4）、一貫東遺跡（註5）、大畑遺跡（註6）等がその例としてあげられる。そしてこれらの遺跡が保持する土器様相の多くは、凹線文の発達や加飾性の盛行によって代表される山陽地方との交流の中で広く位置づけることができる。勿論、小原遺跡におけるⅠ期の土器も、この範ちゅうの中でとらえ得る様相を呈している。一方、加茂川以西に所在する遺跡に目を向けてみよう。大田十二社遺跡（註7）、京免遺跡（註8）は津山の中でも大規模な弥生集落の例であるが、ここにみられる土器の様相は、二重口縁や櫛描文の盛行といった山陰系の地域色で彩られている。このように津山周辺では後期前半期に、周辺地域からもたらされた土器文化の受容差が遺跡ごとに顕在化している状況が窺える。美作地方の弥生

時代後期の土器群は、時期により、地域により、非常に複雑・多岐にわたるが、後期前半のこの段階でその動きがすでに芽生えはじめていたといえるだろう。

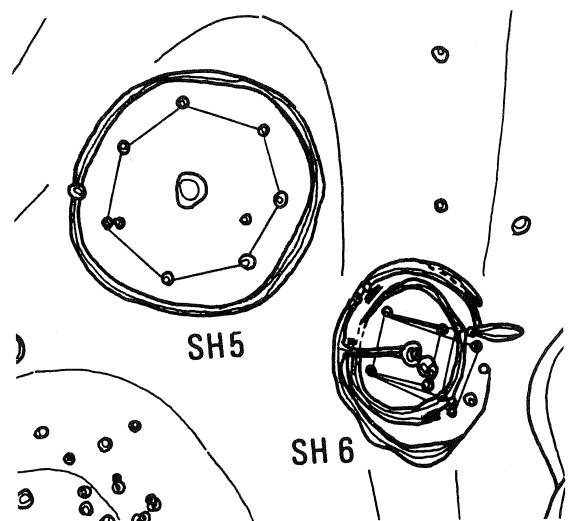
集落構成について

前述の土器編年によって住居を区分すると、Ⅰ期に属する住居は住居址1・4・8・12の4軒が考えられる。住居址1の例を取り上げてみよう。ここでは2軒の住居が切り合った状況を呈している。この2軒は同時併存はあり得ないから、Ⅰ期のうちでもさらに、細分の可能性が指摘できる。この細分を裏付けるに有効な例として住居址4を取り上げてみよう。ここでは2回の拡張が行われた結果、3軒の住居が重複した状況を呈している。これらのうち同時併存はあり得ないから、ここでは3時期の幅が考えられる。また、Ⅱ期に該当する住居は、住居址2・3・5・6・7・9・10の7軒となるが、1つ1つを検証していくと、住居址2と住居址3の切り合い関係より（第187図）、新・旧の2時期の細分が予想されるのである。また、住居址5と住居址6の距離は、検出状況で1.75mと非常に接近して構築されている（第188図）。

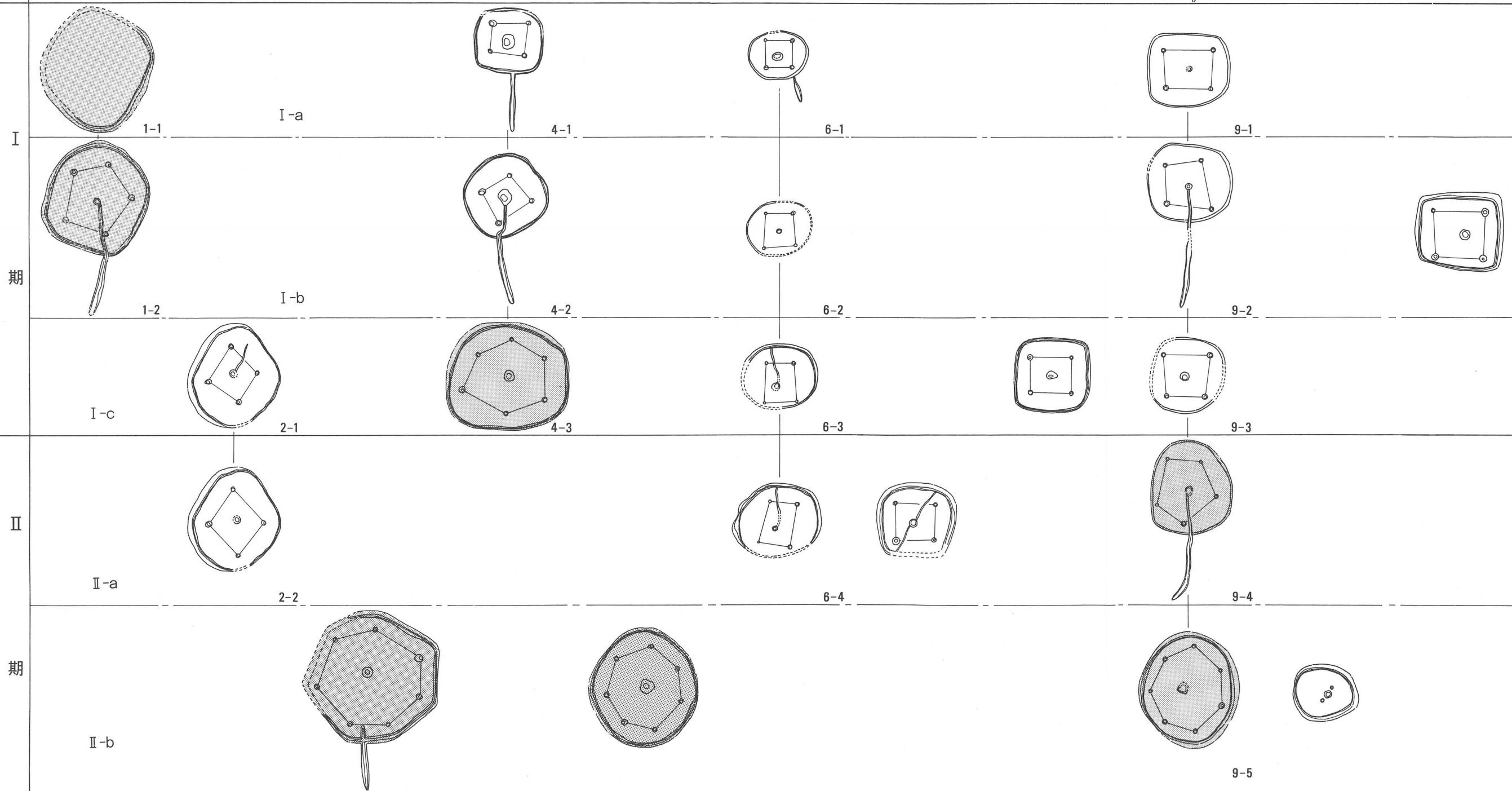
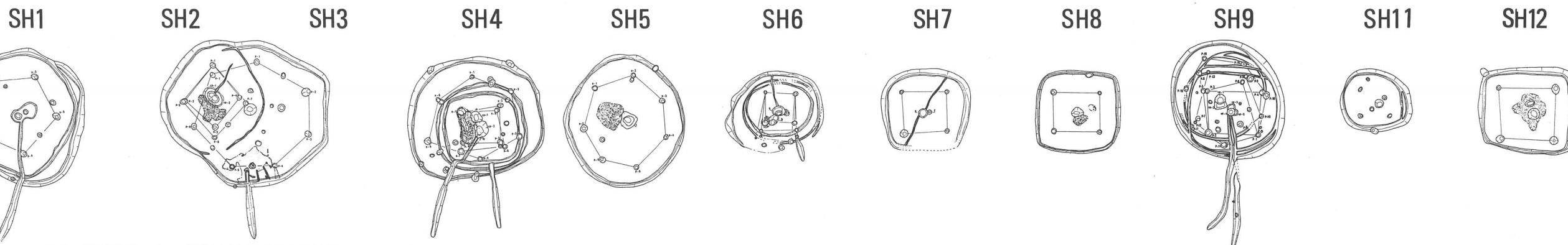
弥生住居の復元に関する研究は先学に優れたものが多いが、住居の床面積や収容人数の観点から、住居外方の周提帯の存在はほぼ確定的とされており（註9）、上屋を復元した場合に考えられる住居間の距離を20～30mと具体的な数値で示した見解もある（註10）。この数値は、実際の遺跡の範囲を考慮した場合、やや飛躍しすぎの感も否めないが、いずれにしてもこの場合、住居址5と住居址6の同時併存があり得ないことは一目瞭然である。以上のことからⅠ期は3時期、Ⅱ期はそれぞれ新・旧の2時期に区分でき、全体で5時期の集落構成が考えられる。さらにもう1例あげておく。住居址9では床面に検出された5本の壁体溝から、たび重なる拡張の様子を窺い知ることができる。そして、本住居では拡張に伴う5回もの中央穴の移動と、各時期に属する柱穴の組み合わせが確認されている。このことは、上



第187図 住居址2・3切り合い状況図



第188図 住居址5・6位置関係図



第189図 B地区住居変遷図